

久宝寺遺跡Ⅲ

—久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査—

令和7年3月

大阪府教育委員会

久宝寺遺跡Ⅲ

—久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序文

久宝寺遺跡は、八尾市、東大阪市にまたがる東西約 1.7km、南北約 1.5kmの縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡です。遺跡の発見は、昭和 10（1935）年にさかのぼります。

これまでに近畿自動車道の建設に伴う発掘調査をはじめ、久宝寺緑地の公園整備やＪＲ久宝寺駅周辺などで 200 次をこえる発掘調査が行われ、数々の成果が報告されています。中でも、近畿自動車道建設時の発掘調査において出土した、３世紀の準構造船は、対外交流の実態を考古学的に語るものとして注目されてきました。また、この時期に発展する久宝寺遺跡では、広く西日本から東海・関東に至る諸地域の土器が見つかっており、本遺跡に暮らす人びとが活発に交流していたことをうかがい知ることができます。

今回の調査は、久宝寺緑地の整備事業に伴う発掘調査で、令和 4 年 4 月から 6 月にかけて実施しました。その結果、古墳時代初頭および古墳時代中期から中世にかけての遺構を確認しました。

その中でも奈良時代の井戸は、同時期の瓦を井戸枠の周りに積んでおり、使用された瓦の中には「神亀五□」と記した瓦が含まれていました。久宝寺遺跡の周辺では、当該期の瓦はほとんど出土していません。また周辺の同時期の廃寺は渋川廃寺が知られていますが、調査地からは離れており、未知の廃寺が存在する可能性が指摘されています。これらは、地域の歴史の実態を知るうえで、特筆すべき成果と考えられます。

調査の実施にあたりましては、大阪府都市整備部公園課、八尾土木事務所都市みどり課、および関係各位に多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。

今後とも、府内の文化財保護行政に対し、より一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和 7 年 3 月

大阪府教育庁文化財保護課長
道上 正俊

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて令和4年度に実施した、久宝寺緑地整備事業に伴う、八尾市西久宝寺所在の久宝寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は文化財保護課調査事業グループ副主査 大澤 嶺を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、令和4年度から令和6年度に、文化財保護課調査管理グループ専門員 藤田 道子を担当者として実施した。
4. 調査の調査番号は22003である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の原色図版4、図版10～図版31は、イトーフォトに委託した。
6. 発掘調査にあたっては、基準点・水準点測量を株式会社イビソクに委託して実施した。
7. 年代測定、花粉分析、プラント・オパール分析、樹種同定については株式会社パレオ・ラボに、木製品の保存処理および樹種同定、年代測定については、一般社団法人文化財科学研究センターに委託し、その成果を第4章に掲載した。
8. 本書の執筆及び編集は、大澤が行った。
9. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
10. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただきました。
八尾市教育委員会、八尾土木事務所（順不同）
11. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

凡例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第Ⅵ系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値は T.P. 値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中では T.P. +○m と表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 / 2006 年度版）に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶器・磁器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 引用・参考文献は第 4 章については節末に記し、その他は巻末に一括した。

本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と調査方法.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法.....	2
第2章 地理的・歴史的環境.....	6
第1節 地理的環境.....	6
第2節 歴史的環境.....	8
第3節 久宝寺遺跡の既往の調査.....	10
第3章 調査成果.....	12
第1節 基本層序.....	12
第2節 1区の調査成果.....	12
第3節 2区・3区・4区の調査成果.....	19
第4節 5区・6区の調査成果.....	54
第4章 保存処理・自然科学分析.....	66
第1節 木製品保存処理および各種分析.....	66
第2節 各種分析.....	72
第5章 総括.....	96
遺構一覧表.....	99
遺物観察表.....	101

挿図目次

図 1	調査地位置図.....	1	図 35	3 区第 5 層出土遺物.....	45
図 2	調査区配置図.....	2	図 36	3 区包含層出土遺物.....	46
図 3	大阪府区割図.....	3	図 37	舷側板のほぞ穴に詰められた樹皮.....	46
図 4	調査区地区割図.....	4	図 38	第 4 層出土舷側板.....	47
図 5	調査地周辺土地条件図.....	6	図 39	4 区北・東壁土層断面図.....	48
図 6	久宝寺遺跡周辺遺跡分布図.....	8	図 40	4 区遺構平面図.....	49
図 7	久宝寺遺跡既往の調査位置図.....	10	図 41	溝 126・127・128 断面図.....	51
図 8	基本層序柱状図.....	13	図 42	井戸 103 断面図.....	51
図 9	1 区遺構 020・023 平面・断面図.....	14	図 43	4 区遺構出土土器.....	52
図 10	1 区平面図・南壁土層断面図.....	15	図 44	4 区第 5 層出土遺物.....	52
図 11	1 区土坑 019・溝 013 平面・断面図.....	17	図 45	4 区第 5 層出土遺物.....	53
図 12	1 区遺構出土遺物.....	17	図 46	5 区遺構平面図・東壁土層断面図.....	55
図 13	1 区第 5 層出土遺物.....	18	図 47	溝 140 平面図.....	57
図 14	2 区平面図・南壁土層断面図.....	21	図 48	溝 140 遺物出土状況図.....	58
図 15	2 区出土遺構平面・断面図.....	23	図 49	溝 140 出土遺物.....	59
図 16	2 区遺構出土遺物.....	24	図 50	溝 140 出土布留形甕復元図.....	60
図 17	2 区遺構出土遺物その 2.....	25	図 51	溝 140 出土木製品復元図.....	60
図 18	井戸 116 平面・断面図.....	26	図 52	溝 146 土層断面図.....	60
図 19	3 区平面図・南壁土層断面図.....	27	図 53	5 区遺構・包含層出土遺物.....	61
図 20	3 区出土遺構平面・断面図.....	29	図 54	6 区遺構平面図・東壁土層断面図.....	63
図 21	土坑 101 平面・断面図.....	30	図 55	6 区出土遺物.....	65
図 22	3 区出土遺構平面・断面図.....	31	図 56	保存処理木製品顕微鏡写真.....	69
図 23	井戸 110 平面・断面図.....	32	図 57	暦年較正年代グラフ.....	72
図 24	3 区遺構出土遺物.....	34	図 58	炭化物試料写真.....	74
図 25	井戸 110 出土文字瓦・平瓦.....	35	図 59	暦年較正結果.....	76
図 26	井戸 110 出土平瓦.....	36	図 60	花粉分布図.....	81
図 27	井戸 110 出土平瓦・丸瓦.....	37	図 61	植物珪酸体分布図.....	81
図 28	井戸 110 出土平瓦.....	38	図 62	No.1 から算出した花粉化石.....	82
図 29	3 区第 5 層出土遺物.....	39	図 63	No.2 から算出した植物珪酸体.....	83
図 30	3 区第 5 層出土遺物.....	40	図 64	久宝寺遺跡から出土した大型植物遺体.....	87
図 31	3 区第 5 層出土遺物.....	41	図 65	放射性炭素年代測定試料写真.....	90
図 32	3 区第 5 層出土遺物.....	42	図 66	暦年較正結果.....	91
図 33	3 区第 5 層出土遺物.....	43	図 67	マルチプロット図.....	92
図 34	3 区第 5 層出土遺物.....	44	図 68	久宝寺遺跡出土木材の光学顕微鏡写真.....	95

表目次

表 1	久宝寺遺跡出土木製品 保存処理工程.....67	表 8	産出花粉孢子一覧表.....80
表 2	樹種同定結果.....69	表 9	試料 1g 当りのプラント・オパール個数.....81
表 3	放射性炭素年代測定結果.....71	表 10	大型植物遺体.....85
表 4	放射性炭素年代測定結果.....71	表 11	測定試料および処理.....89
表 5	測定試料および処理.....73	表 12	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果.....91
表 6	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果.....75	表 13	久宝寺遺跡出土木製品の樹種同定結果.....94
表 7	分析試料一覧.....79		

図版目次

原色図版 1	井戸 110・舷側板出土状況	図版 15	井戸 110 出土瓦
原色図版 2	2 区・3 区土層断面	図版 16	井戸 110 出土瓦
原色図版 3	4 区・5 区土層断面	図版 17	井戸 110 出土瓦
原色図版 4	井戸 110 出土文字瓦	図版 18	井戸 110・3 区 5 層出土遺物
図版 1	1 区・6 区土層断面	図版 19	3 区 5 層出土遺物
図版 2	各区全景	図版 20	3 区 5 層出土遺物
図版 3	各区全景	図版 21	3 区 5 層出土遺物
図版 4	土坑 101・溝 140 遺物出土状況	図版 22	3 区 5 層・4 層出土遺物
図版 5	1 区・2 区遺構	図版 23	3 区包含層出土遺物
図版 6	2 区・3 区遺構	図版 24	3 区包含層出土舷側板
図版 7	3 区遺構	図版 25	3 区 5 層・4 区遺構・4 区 5 層出土遺物
図版 8	3 区遺物出土状況・4 区遺構	図版 26	4 区 5 層出土遺物
図版 9	4 区遺物出土状況・5 区遺構	図版 27	4 区 5 層出土遺物
図版 10	1 区出土遺物	図版 28	4 区 5 層・溝 140 出土遺物
図版 11	2 区 5 層出土遺物	図版 29	溝 140 出土遺物
図版 12	2 区 5 層・3 区遺構出土遺物	図版 30	溝 140 出土遺物
図版 13	3 区遺構出土遺物	図版 31	5 区遺構・包含層・6 区遺構出土遺物
図版 14	井戸 110 出土瓦		

第1章 調査に至る経緯と調査方法

第1節 調査に至る経緯

本調査は久宝寺緑地整備事業に伴うものである。平成27年度に大阪府都市整備部公園課により、久宝寺緑地事業認可区域の整備に関する事業計画が本府教育委員会に示された。整備範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「久宝寺遺跡」に含まれることから、整備内容とそれに伴う遺跡の取り扱いについて協議を重ね、整備工事に伴って遺跡が損壊される部分について、発掘調査を行うこととした。

第Ⅰ期整備工事では、展望広場において雨水貯留槽築造とそれに付随する埋設管設置工事に先立ち、平成30年から翌年まで、590㎡の発掘調査が実施された。続く第Ⅱ期整備工事では、雨水貯留槽の築造に先立ち、令和3年に1,080㎡の発掘調査を実施した。これらの調査成果についてはすでに刊行された報告書を参照いただきたい。

令和4年2月都市整備部長より発掘調査実施の依頼を受け、令和4年4月から6月まで発掘調査を実施した。発掘調査の対象としたのは、第Ⅱ期整備地区における雨水貯留槽に付随する埋設管設置部分で、調査面積は760㎡である。

また、これらの調査にかかわる遺物整理・報告書作成は令和4年から令和7年まで行った。

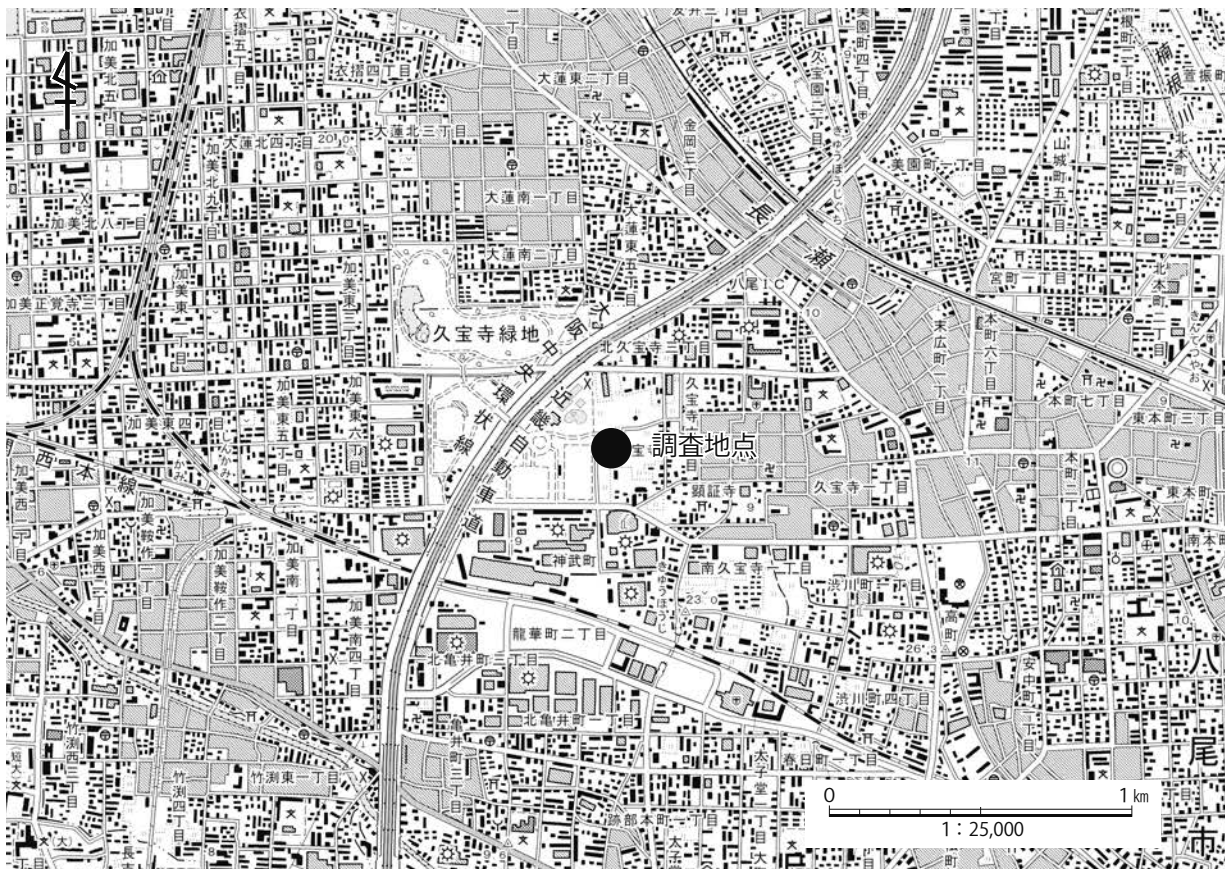


図1 調査地位置図

(国土地理院発行2万5000分の1地形図「大阪東南部」より作成)

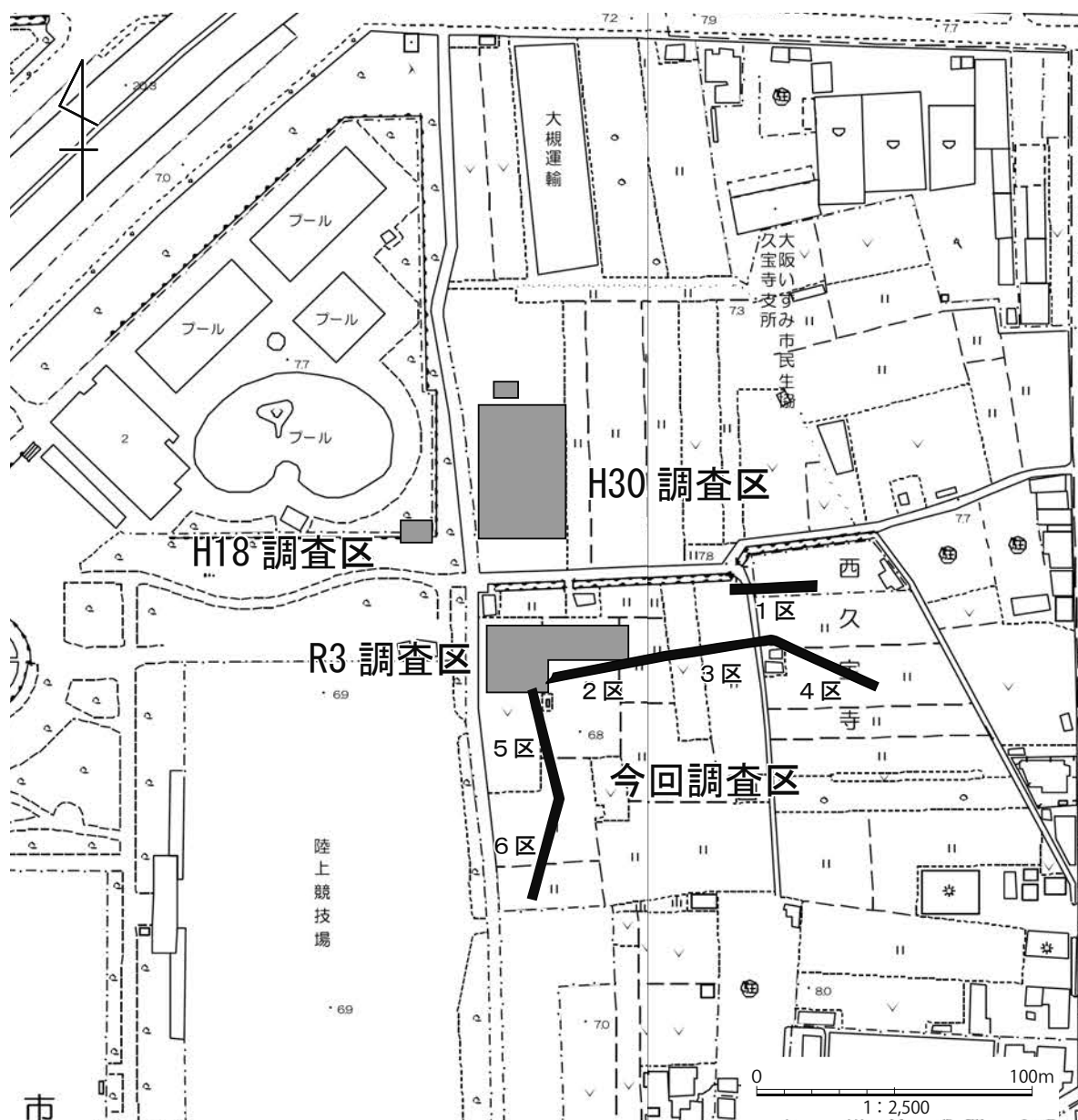


図2 調査区配置図

第2節 調査の方法

調査区分 調査区を複数かつ細長く設定したため、1区から6区の6つに地区割を行った。遺物の取り上げもこの地区割に基づいて行った（図4）。

発掘作業 調査区を設定し、令和4年4月から調査を開始した。調査はまず重機によって現代の盛土から近世の耕作土までを除去した。それ以下の遺物包含層を、スコップや鋤簾などを使用し人力によって掘削した。掘削した土はベルトコンベアと人力により調査区外へ搬出した。遺構の検出および掘削は主に草刈りおよび移植ゴテを使用した。遺構の検出は黄色系の砂層および黒色系粘性シルト層上面で行った。記録作業の終了後、重機によって搬出した土の埋戻しを行い、調査は6月下旬で終了した。

図面作成 遺構の平面図は遺構を完掘した後、平板測量を行い50分の1の図面を作成した。それに加え、土の堆積状況を示す土層断面図や各遺構の詳細図面をエスロンテープやメジャーを用いて作成し

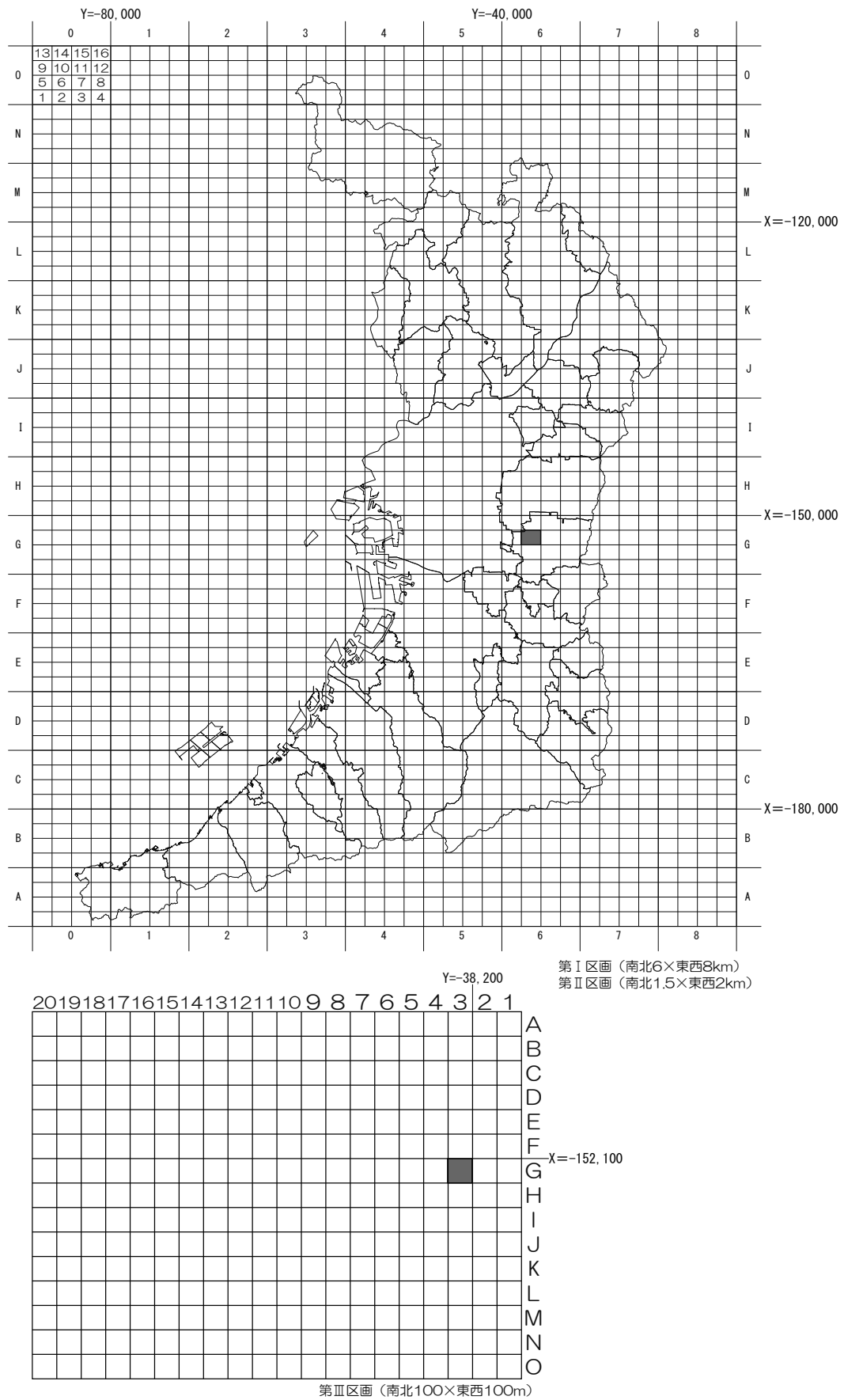


図3 大阪府区割図

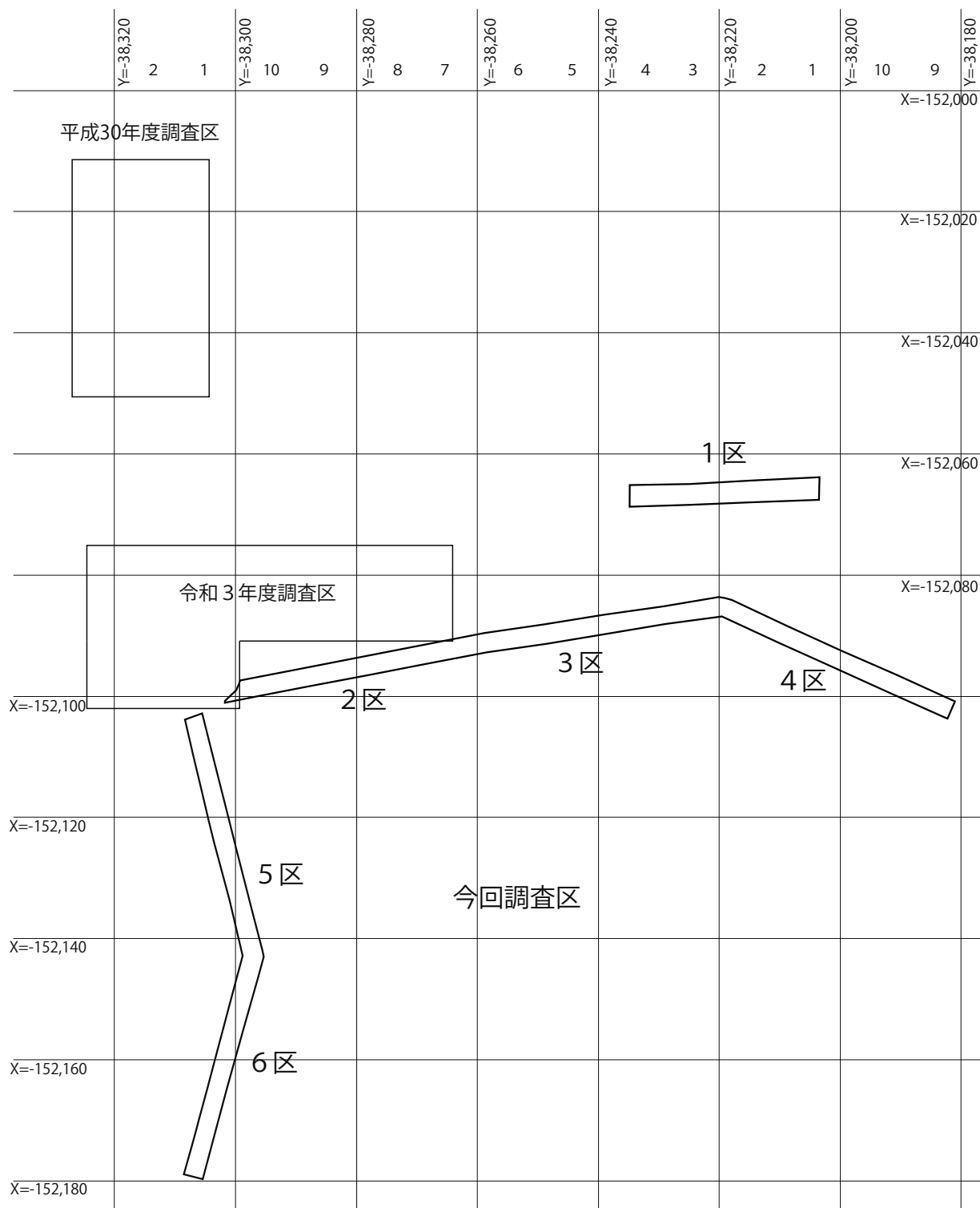


図4 調査区地区割図

た。

写真撮影 遺跡全体を撮影するため脚立を利用して全景写真を撮影するとともに、個別の遺構に対して半裁を行い堆積状況の確認や構造分析のための断面写真を撮影した。写真撮影はデジタルカメラ（APS-C センサー）を主に使用し、重要な遺構や全景についてはデジタルカメラ（フルサイズセンサー）を併用して撮影を行った。

自然科学分析 発掘調査を進めると、3区において炭化物の堆積を確認した。また3区と5区からは木製品が出土した。木製品の保存処理を行うとともに、これらの遺構・遺物の性格や時期、当該期の周辺環境を明らかにするため、年代測定、花粉分析、プラント・オパール分析、樹種同定など各種分析を行う必要が生じた。資料は発掘担当者が採取・梱包し、それを委託業者に渡し分析を行った。分析の結果は第4章において詳細に述べる。

整理等作業 報告書の作成は令和4年から実施した。現地で記録した図面・写真の整理を行うとともに、遺物の洗浄・復元、実測を行った。遺物の量はコンテナ30箱分であった。遺物実測図は、手トレースとデジタルトレースを併用して行い、必要に応じてデジタル化した拓本を貼り込み、挿図を作成した。遺構図面は原図の取り込みを外部に発注し、デジタルトレースを行って挿図を作成した。現地で撮影した写真に関しては、現像およびデジタルプリントを行いファイルに格納した。また、報告書に掲載する遺物については、委託によって写真撮影を行った。以上の作業と並行して報告文を作成し、報告書の編集作業を行った。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

久宝寺遺跡は八尾市域の西端に位置する。八尾市は東に標高 488m の高安山をはじめとする生駒山地が南北に走り、また現在の大和川を挟んで市の南には羽曳野丘陵が、また市の西側の大阪市内には上町台地が南北に延びる。本遺跡はこれらに囲まれた河内平野の南部に位置しており、土地条件としては旧大和川の主流であった平野川と長瀬川（久宝寺川）によって形成された自然堤防から低地にかけて分布している。長瀬川によって形成された自然堤防は、現在の八尾寺内町付近で東西に伸びており、この付近を含めて周辺では蛇行する旧流路の痕跡や破堤の様子が看守できる（図5）。

これらの旧河川における時代ごとの様相については、今回調査の主要成果である弥生時代後期後半～古墳時代後期も含め、縄文時代晩期から奈良時代まで、発掘調査成果等によりまとめられている（小倉 2023）。それによると、弥生時代後期前半に主流路であった萱振分流路は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて西側に移動して小阪合分流路となり、その左岸に排水流路である久宝寺分流路が存在したとされる。古墳時代中期には小阪合分流路が規模縮小し、代わって久宝寺分流路に主流路がシフトした可能性が指摘されている（小倉 2023）。この久宝寺分流路は久宝寺遺跡の東半部に位置する今回調査区付近を、北ないし北北西方向に流下している。またその周辺にも複数の排水流路が存在するようである。平成 28 年度実施の確認調査で検出した流路跡（大阪府教育委員会 2017）や、令和 3 年度調査で検出した河川 188（大阪府教育委員会 2024）は、それらの一部に該当するものと考えられ、これらの河川氾濫により形成された自然堤防上に各時期の集落が形成された。

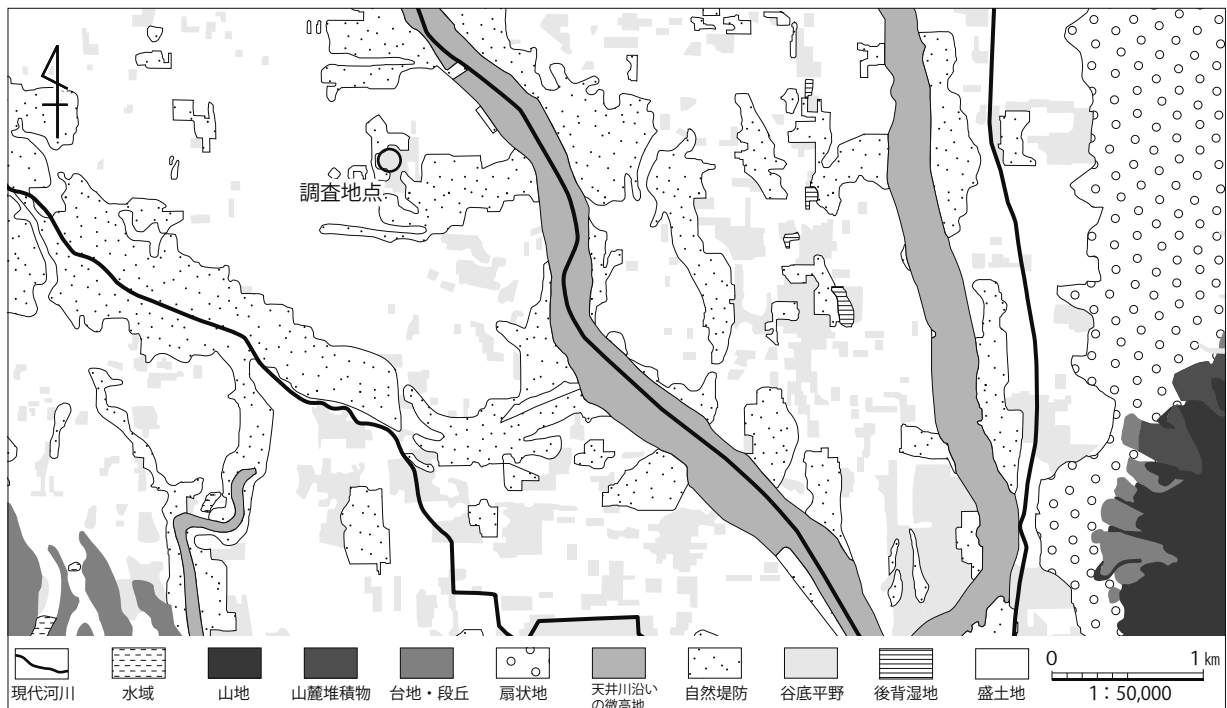


図5 調査地周辺土地条件図

（地理院地図「土地条件図（数値地図 25000（土地条件）」）をトレースして作成）

第2節 歴史的環境

本節では、今回の主な調査成果である、弥生時代から奈良時代に関する周辺の遺跡の状況について概観する（図6）。

弥生時代 河内平野においては縄文時代晩期に河内潟が形成され、当該期の集落跡が大阪市長原遺跡、東大阪市美園遺跡、若江北遺跡等で確認されている。弥生時代前期には河内潟内に旧河川の堆積作用によって自然堤防が発達し、安定したこれらの微高地上に集落が営まれ、後背湿地を生産域としたと考えられる。東大阪市山賀遺跡、八尾市八尾南遺跡が古く、八尾市亀井遺跡、田井中遺跡、跡部遺跡、大阪市瓜破遺跡、長原遺跡等でも集落域が形成される。久宝寺遺跡は弥生時代前期以降、弥生時代を通じてほぼ連続して弥生時代後期まで生産域を伴う集落が形成されていたとみられる。中期以降には、自然堤防や後背湿地が発達し、集落規模の拡大や水田耕作の規模も大きくなる。八尾市木の本遺跡、東郷遺跡、中田遺跡、小阪合遺跡、東弓削遺跡等で集落が営まれる。生産域と墓域を伴う集落が明確になるのはこの段階からである。久宝寺遺跡でも低地部に水田、微高地上に集落域、墓域が形成される。特に亀井遺跡、瓜生堂遺跡、恩智遺跡は拠点集落とよばれ、生産、流通、まつりの中心的な役割を果たしていたと考えられる。また東大阪市瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、大阪市加美遺跡では一辺20mを超える大型の墳丘墓が築かれ、地域の中で有力な集団の存在が想定されている。さらに八尾市跡部遺跡では横型流水文銅鐸が出土している他、生駒山の中腹でも外縁付紐式、扁平紐式の銅鐸が出土している。

後期になると河内潟の水域が淡水化し、河内湖が形成される。後期初頭から前半には中期後半に盛期を迎えた集落の多くが衰退している。亀井遺跡は後期にも継続する例外的な集落である。後期中頃から後半になると再び集落が増えるが、小規模で散在する傾向となる。八尾南遺跡では集落域と水田域が検出されている。後期後半には大規模な洪水が広域的に発生したと考えられ、東大阪市瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡のように、集落の上を厚い土砂で覆ってしまう例が久宝寺遺跡周辺で多数見つかっている。

古墳時代 前代の大規模な洪水による氾濫堆積物は、それまでの地形環境を一変させ、集落の再構成が行われた。八尾市東郷遺跡、中田遺跡、萱振遺跡、八尾南遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡、美園遺跡、大阪市加美遺跡、瓜破遺跡、長原遺跡等で集落やそれに伴う生産域、墓域が形成された。一方で短期間のうちに土地利用が激しく変化する例も認められる。また庄内式期には吉備、丹後、山陰、阿波、讃岐、東海などからの搬入土器が多く、遺跡で出土するほか、加美遺跡 Y1 号墓の朝鮮三国時代の陶質土器、久宝寺遺跡の炉型土器の出土など活発な交流が窺われる。久宝寺遺跡で発見された準構造船は交流の様相を示す遺物として特筆されるものである。中期になると久宝寺遺跡で韓式系土器が多く出土しており、渡来系集団との関係が示唆される。長原遺跡でも渡来系の遺物が多く出土しており、集落も形成されている。

また河内平野部では庄内式期から布留式期にかけての墳墓が多数検出されているが、平野部においては古墳時代を通して大規模な古墳が築造された例は認められない。周辺の古墳として、前期は生駒山地西麓の楽音寺古墳群、玉手山丘陵の玉手山古墳群、中期は羽曳野台地の古市古墳群、生駒山地西麓の心合寺山古墳等があげられる。いずれも台地や丘陵上に位置し、本調査区から最も近いと考えられる心合寺山古墳は約6kmの距離を測る。平野部では小型の方墳で構成される古墳群が造営され、八尾市亀井遺跡、美園遺跡、東郷遺跡、大阪市加美遺跡、長原古墳群等があげられる。後期前半以降には生駒山地西麓部に高安古墳群等の群集墳や横穴墓が築かれるようになる。

古代 調査地周辺で集落が確認されている遺跡は久宝寺遺跡の西部と東部、および亀井北遺跡の久宝寺遺跡と接する地域である。久宝寺遺跡を南東から北西に向けて河川が2本流れており、その流域と旧



図6 久宝寺遺跡周辺遺跡分布図（大阪府教育委員会 2020 を一部改変）

平野川を加えた3本の河川の流域にそれぞれ居住域が広がっている。古代寺院は東部居住域内に渋川廃寺が存在する。八尾市内で最初に創建された廃寺であり、7世紀前半にさかのぼる。創建期の軒丸瓦は、奈良県明日香村の豊浦寺で採用された軒丸瓦に系譜を持つ、単弁八弁蓮華文軒丸瓦が推定されている。その後7世紀後半から8世紀後葉に属する瓦がそれぞれ出土しており、11世紀前葉まで渋川廃寺は存続していたと考えられる。そのほかの廃寺としては「仮称神武町廃寺」があげられる。近畿自動車道の建設に先立ち行われた発掘調査で神武町に所在する調査区から重圏文軒丸瓦が出土した。瓦の出土量は多くないが、調査区周辺に既知の廃寺が無いことから、新たな廃寺の存在を示唆していると考えられる。

第3節 久宝寺遺跡の既往の調査

本調査区周辺における既往の調査成果について、今回の調査で確認した主な時期である、古墳時代を中心に、前後の時期を含めた概要を述べる（図7）。

弥生時代 『久宝寺北』の調査では、中期と後期の2面の遺構面が検出されている。また『久宝寺南（その1）』の調査でも弥生時代の遺構が検出され、微高地に集落、微高地の縁辺に墓域、低地に水田と、土地利用が区別されていたことが確認された。低地部の水田は幹線水路から分岐する支線水路、大畦畔とそれに伴う小畦畔により構成されていることが判明しているほか、水田域に隣接して方形周溝墓が検出されている。『久宝寺南（その2）』の調査でも水田域と方形周溝墓が検出されている（大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987c）。

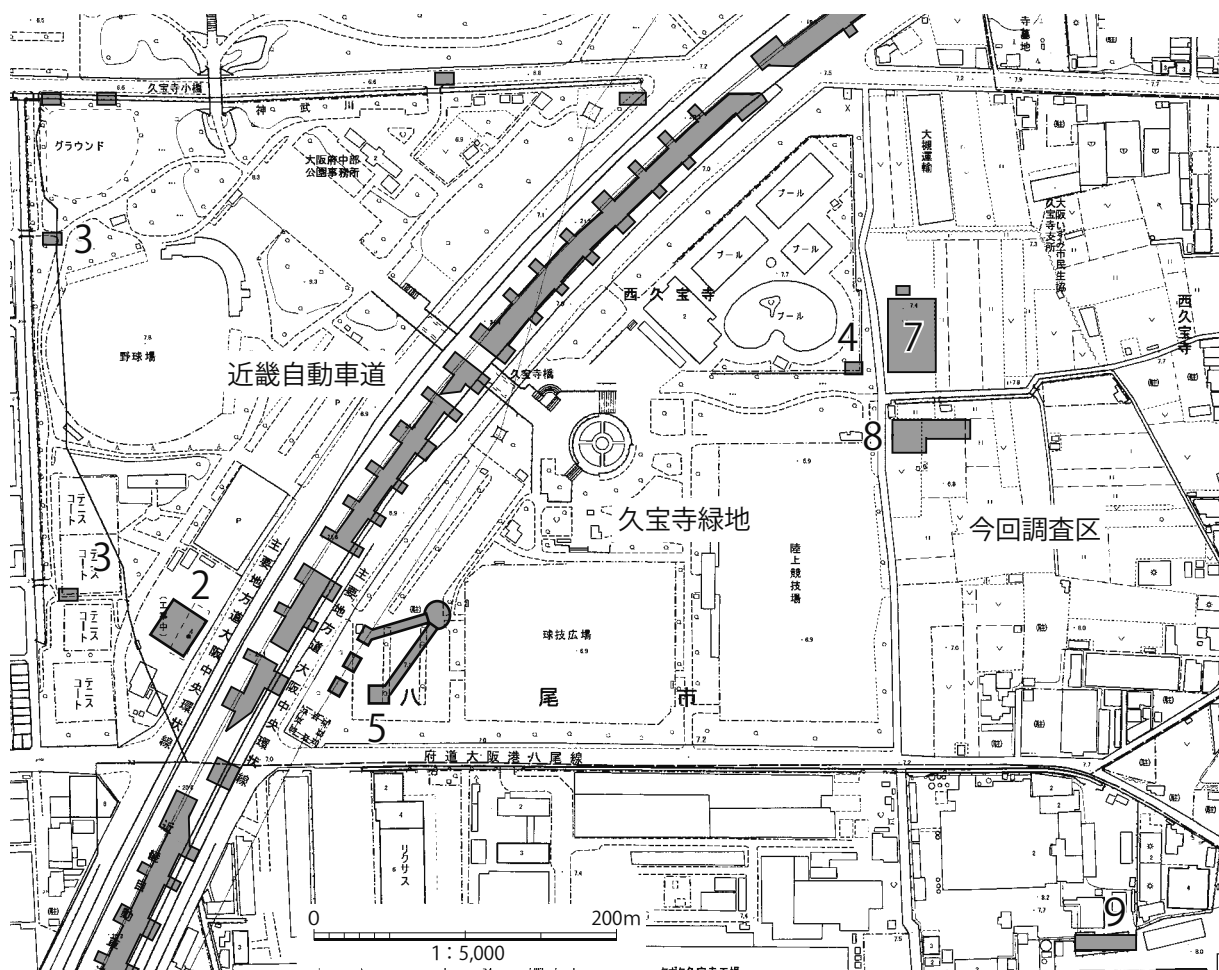
後期には繰り返される洪水による氾濫堆積物により限られた地点で集落や水田が営まれたとみられる。『久宝寺北』調査区に隣接する近畿自動車道パーキングエリア建設時の調査では後期前半に属する土坑や炉などを検出している（公益財団法人大阪府文化財センター 2013）。

古墳時代 『久宝寺北』では、長瀬川の前身河川と考えられる川幅約150mからなる「久宝寺分流路」が検出されている。その河川を挟んで両側に前期・中期の居住域が確認されている。前期の居住域からは、山陰系、西瀬戸内海系などの搬入土器が出土している。集落の様相としては弥生時代末から古墳時代初頭に複数の溝からなる畠と考えられる土地利用が、布留式期にかけて墓域に変化する様子も看守できる。『久宝寺南（その2）』調査区では、古墳時代前期にかけて居住域から耕作域に土地利用が変化し、その後居住域に利用される様相が確認されている。集落域、畠地と考えられる耕作域の範囲に墓域が隣接し、居住域間には溝が開削され、居住域を画している。その溝の1つから庄内式期に属する準構造船が検出された。このような溝は久宝寺緑地の西端における大阪府教育委員会の調査でも検出されており（大阪府教育委員会 2007）、いずれも布留式古段階には埋没している。

当該期の生産地は久宝寺分流路を中心に広がっており、分流路から導水した水路に沿って水田や畑を営んでいた。近畿自動車道の北西側は久宝寺緑地の北西端にかけて低地となり、水田が広がっていたと考えられる（大阪府教育委員会 2016）。また大阪府教育委員会が実施した平成30年度調査区では、古墳時代初頭と考えられる水田域を検出している（大阪府教育委員会 2020）。平成12年から16年にかけての大阪府文化財センターの調査では、水路に沿って水田や畑が確認されている。

墓域は久宝寺分流路の左岸を中心に約80基の古墳が確認されている。古墳時代前期初頭の久宝寺1号墳は、主体部に割竹形木棺を用い、墳丘四隅に壺形土器を配置した古墳である。また古墳時代前期前葉の久宝寺古墳は墳丘長約34mを測る前方後方墳であり、墳丘周縁部に壺形埴輪を配置させた当地域最古の首長墳である。

中期では依然として「久宝寺分流路」が河川としての機能を継続しており、集落は北部と南部に分か



地図	調査年次	調査原因	調査成果	参考文献
2	平成3	寝屋川地下放水路竪坑	墳墓群（3世紀） ・道路状遺構（7世紀）	大阪府教育委員会 1992 『久宝寺遺跡発掘調査概要』
3	平成16～17	橋梁建設	大溝（4世紀）	大阪府教育委員会 2007 『加美・久宝寺遺跡発掘調査概要』
4	平成18～19	公衆便所新設	建物群（10～11世紀）	
5	平成20～22	寝屋川地下放水路竪坑	大溝（4世紀）	
7	平成30～31	貯留槽建設	水田（3～4世紀）	大阪府教育委員会 2020 『久宝寺遺跡』
8	令和3	貯留槽建設	井戸（5世紀） ・土坑（5～6世紀）	大阪府教育委員会 2024 『久宝寺遺跡Ⅱ』
9	平成2	工場建設	井戸（3世紀） ・竪穴住居（4世紀）	八尾市文化財調査研究会 1993 『Ⅲ久宝寺遺跡＜第6次調査＞』

図7 久宝寺遺跡既往の調査位置図（大阪府教育委員会 2024 を一部改変）

れて営まれる。北部にあたる『久宝寺北』調査区では前期から継続して集落遺構が検出されている。特に出土遺物には土師器・須恵器のほかに韓式系土器の甗、器形が陶質土器に類似する黒色研磨土器の蓋などが出土しており、朝鮮半島南部を出自とした渡来系集落の存在が考えられる。南部居住域は高床式・平地式の掘立柱建物が密集した状態で確認されている。合掌型堰や護岸施設なども検出されており、大

規模な治水を行っていたことが明らかになっている。

後期になると南部居住域が中心となり、大型掘立柱建物を含む居住域が営まれている。遺跡全体で見れば南部でしか集落は見つかっておらず、やや縮小している。

奈良・平安時代 久宝寺分流路は機能を停止し、久宝寺遺跡内を南東から北西に向けて河川が2本流れており、その流域と旧平野川を加えた3本の河川の流域にそれぞれ居住域が広がっている。『久宝寺北』の調査では、7世紀から10世紀にかけての集落域を確認している。水田畦畔の方向は現地表面で観察される方向とほぼ一致することから、条里制施行が本時期までさかのぼる可能性が指摘されている。『久宝寺南（その1）』の調査では、平安時代の居住域や7世紀後半から8世紀にかけての居住域が検出されている。また、本調査区の西側約15mの位置で実施された大阪府による調査では、平安時代の掘立柱建物が確認されている。古代寺院については渋川廃寺や仮称神武町廃寺があげられる。概要は前節で述べたためここでは割愛する。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

久宝寺遺跡は大和川の主流であった平野川と長瀬川に挟まれた沖積地に位置している。調査地の現地表は旧耕作土が露出している部分と旧耕作土の上に盛土が行われている部分とが混在している。旧耕作土上面の標高は概ね T.P.+6.9m、盛土上面の標高は概ね T.P.+7.3m で若干の高低差がある。以下今回の調査全体の基本層序を記するとともに、各調査区の基本層序を柱状図により示す（図8）。

第1層 久宝寺緑地造成に伴う盛土およびそれ以前の現代耕作土層である。

第2層 近世耕作土層である。既往の調査で近世の島畠が検出されており、今回の調査でも全ての調査区で検出した。令和3年度調査の第2層に対応する。

第3層 中世耕作土層である。近世の耕作により削平を受けている。遺物は瓦器や瓦質羽釜が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。また古代の須恵器を包含しており、中世の耕作で古代の遺構面が削平を受けている可能性が高い。

第4層 古墳時代前期から中期の堆積土層である。上層は砂質土層で、上面で遺構を検出している。この遺構面は令和3年度調査の第2遺構面に対応する。ただし中世・古代・古墳時代の遺構を同一面で検出しており、中世の耕作による削平を受けている可能性が高い。下層は黄色および灰黄色のシルト層および砂層である。ラミナや葦痕跡が確認できることから、湿地および河川となり砂が堆積した層相を示す。なお5区では礫混じりの粗粒砂質土層を確認しており、流量の多い河川が存在したと考えられる。

第5層 弥生時代後期後葉以前の堆積土層である。黒色の砂層もしくは粘性砂質土層であり激しく湧水する。上面で弥生時代後期後葉から庄内式期に属する遺構を検出した。第5層上面の標高は概ね、北の1区で T.P.+6.0m、西の2区で T.P.+5.4m、東の4区で T.P.+6.0m を測る。一方で2区から3区にかけては T.P.+5.4m まで掘り下げても第5層は検出されなかった。また南の5区と6区では T.P.+6.0m で第5層を検出していない。このことから第5層は北および東に向けて標高が高くなり、西および南に向けて標高が低くなることが分かる。

第2節 1区の調査成果

第1項 層序

1区の層序は上層から順に盛土・現代耕作土層（第1層）、近代耕作土層（第2層）、中世耕作土層（第3層）、古墳時代堆積土層（第4層）、弥生時代以前堆積土層（第5層）である。第3層は極細粒砂の粘性砂質土およびシルトからなり、厚さ12cmから18cmを測る（土色番号6・12・13）。第4層は極細粒砂の粘性砂質土およびシルトからなり、厚さ31.3cmから35.6cmを測る（土色番号7・8・10）。上面で古墳時代後期および中世の遺構を検出している。遺構面の下には、調査区の西端を除いて褐色系の粘性シルト層（土色番号7）が堆積しており、有機質層と考えられる。なお褐色粘性砂質土の上面の標高は東側で T.P.+6.2m 前後、西側で T.P.+6.4m 前後を測り、西側がやや高い。このことから褐色系の粘性シルト層は自然地形の低い側に堆積していることが分かる。第5層は灰色粘性砂質土で構成されている。第5層上面の標高は西側で T.P.+6.0m 前後、東側で T.P.+5.9m 前後であり、第5層も第4層と同じく西側がやや高い。時期は第4層と第5層の境目から庄内式期古段階古相を中心とした土器が出土

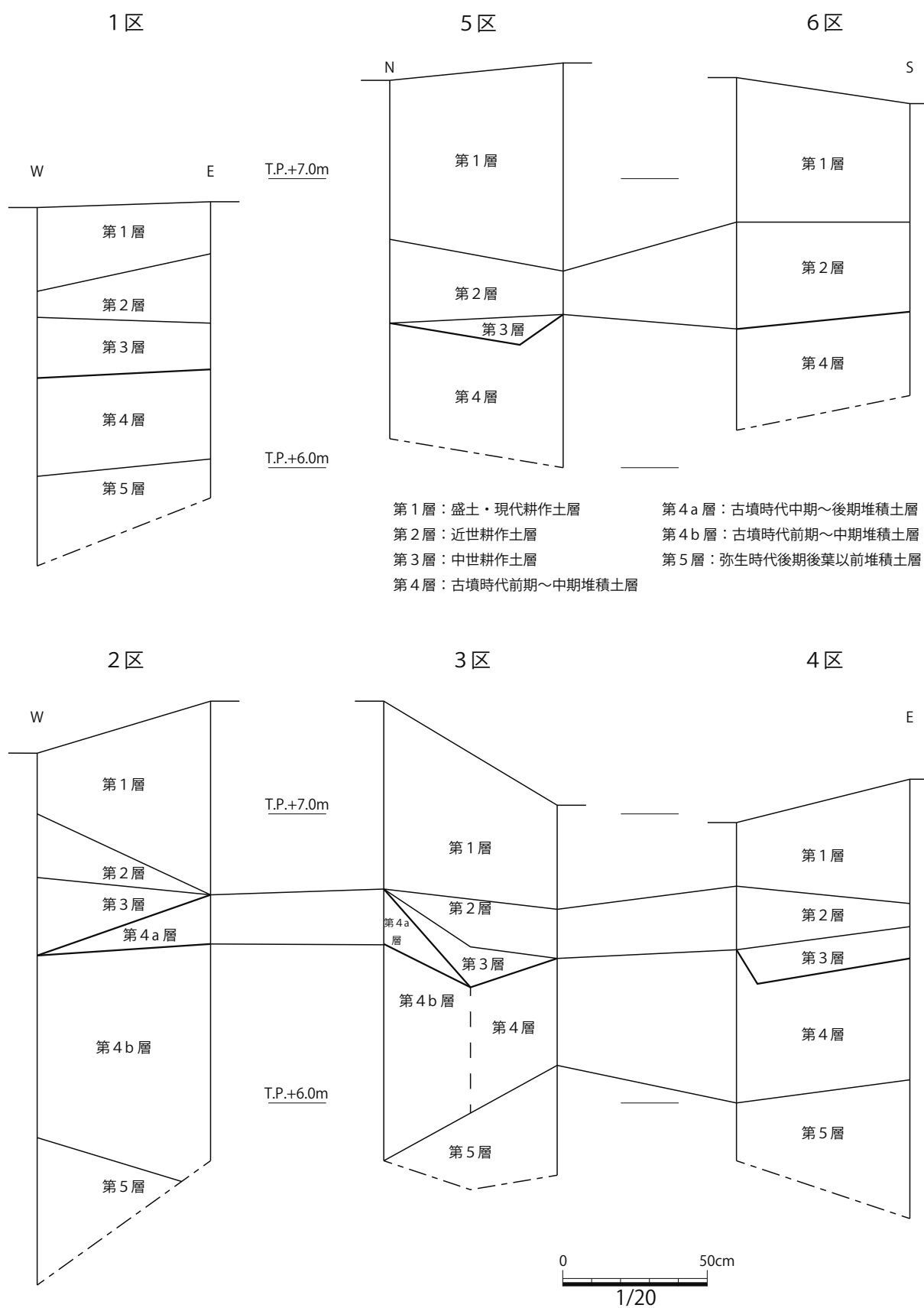


図8 基本層序柱状図

しており、第5層は弥生時代後期後葉以前に堆積した層と判断する。

第2項 検出した遺構

遺構は第4層上面で検出した。同一面で中世、古墳時代後期の遺構を検出しており、中世以降に削平を受けていると考えられる。

古墳時代後期 検出した遺構は土坑、溝である。土坑 023 は長さ 1.44m 以上、幅 2.58m、深さ 9cm を測る。北側は調査区外に延びており、全形は不明である。遺物は土師器が出土した。時期は TK23・47 型式並行期と考えられる。溝 020 は長さ 5.46m 以上、幅 0.26m 以上、深さ 34cm を測る。南側の際のみを検出しており、北半は調査区外である。また土坑 023 に切られており、全形は不明である。遺物は土師器、須恵器の坏蓋・高坏・器台が出土した。須恵器の特徴から時期は TK23・47 型式並行期に属すると判断する。

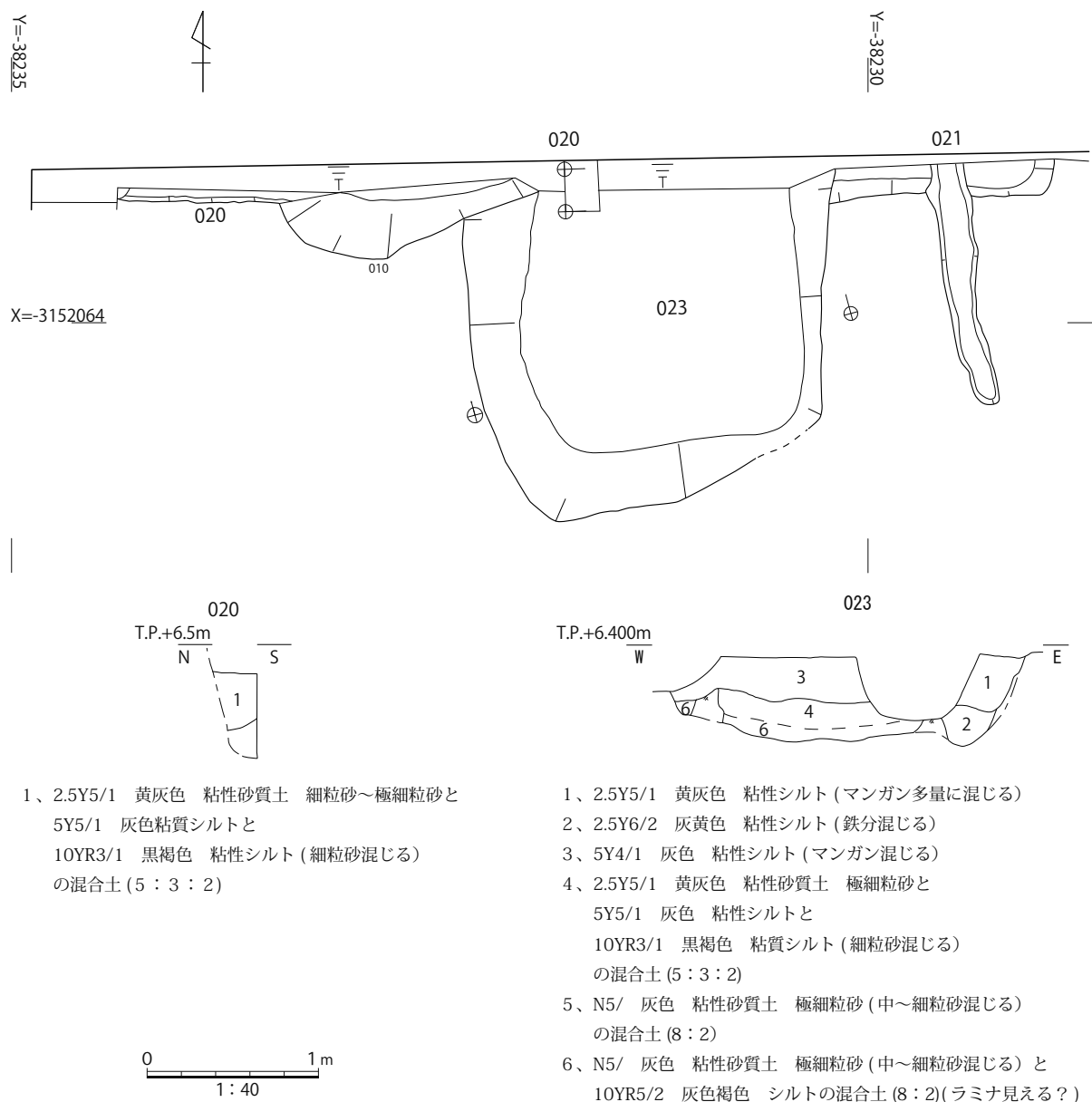


図9 1区遺構 020・023 平面・断面図

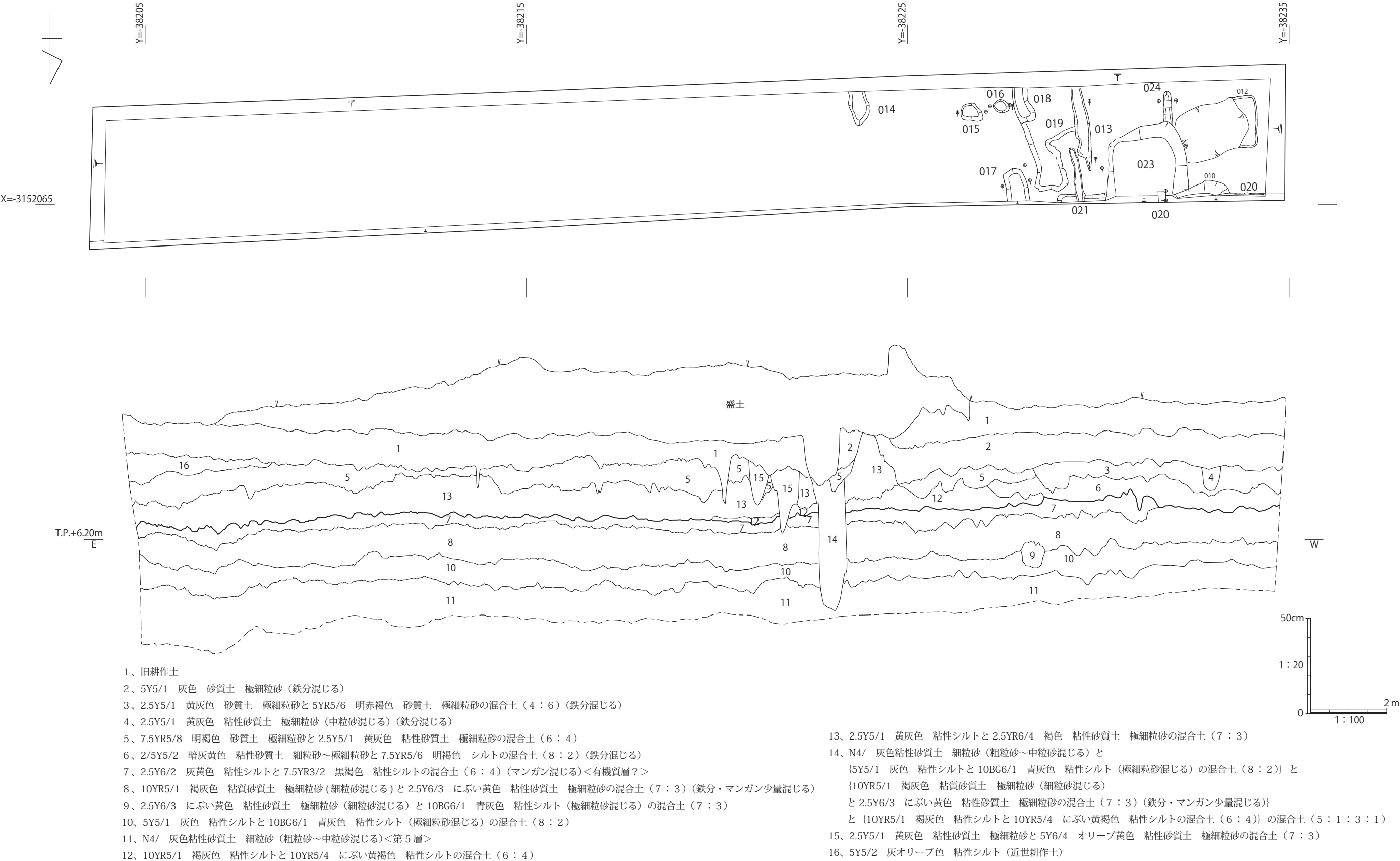


図 10 1区平面図・南壁土層断面図

中世 検出した遺構は土坑、溝である。土坑019は長さ2.74m以上、幅1.4m以上、深さ17cmを測る。南側は調査区外に延びており、全形は不明である。土坑019を切るように溝013および溝018は掘り込まれている。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。溝013は長さ2.24m以上、幅最大0.4m、深さ9cmを測る。南側は調査区外に延びており、全形は不明である。遺物は土師器、須恵器が出土した。溝018は長さ0.9m以上、幅0.44m、深さ19cmを測る。南側は調査区外に延びており、全形は不明である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

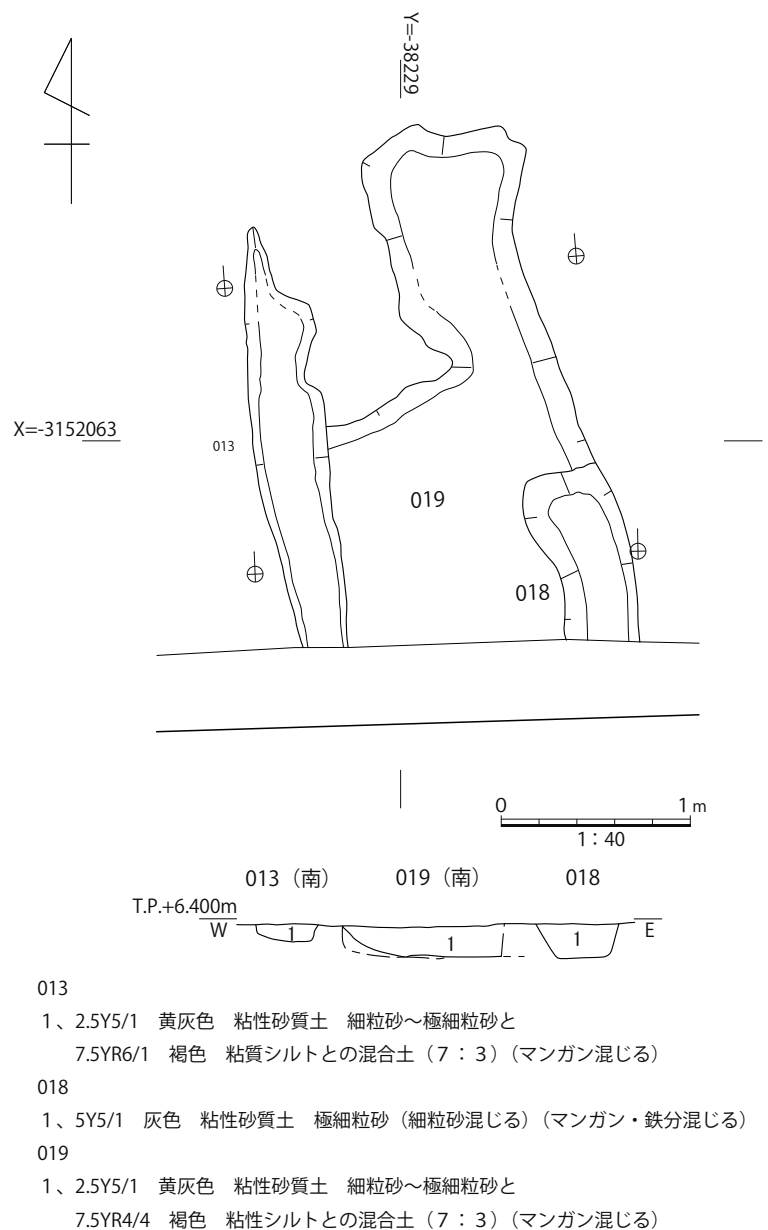


図11 1区土坑019・溝013平面・断面図

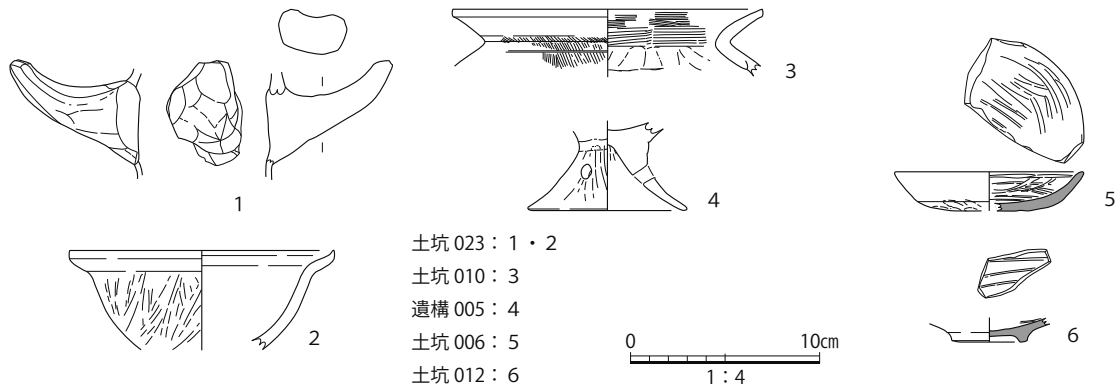


図12 1区遺構出土遺物

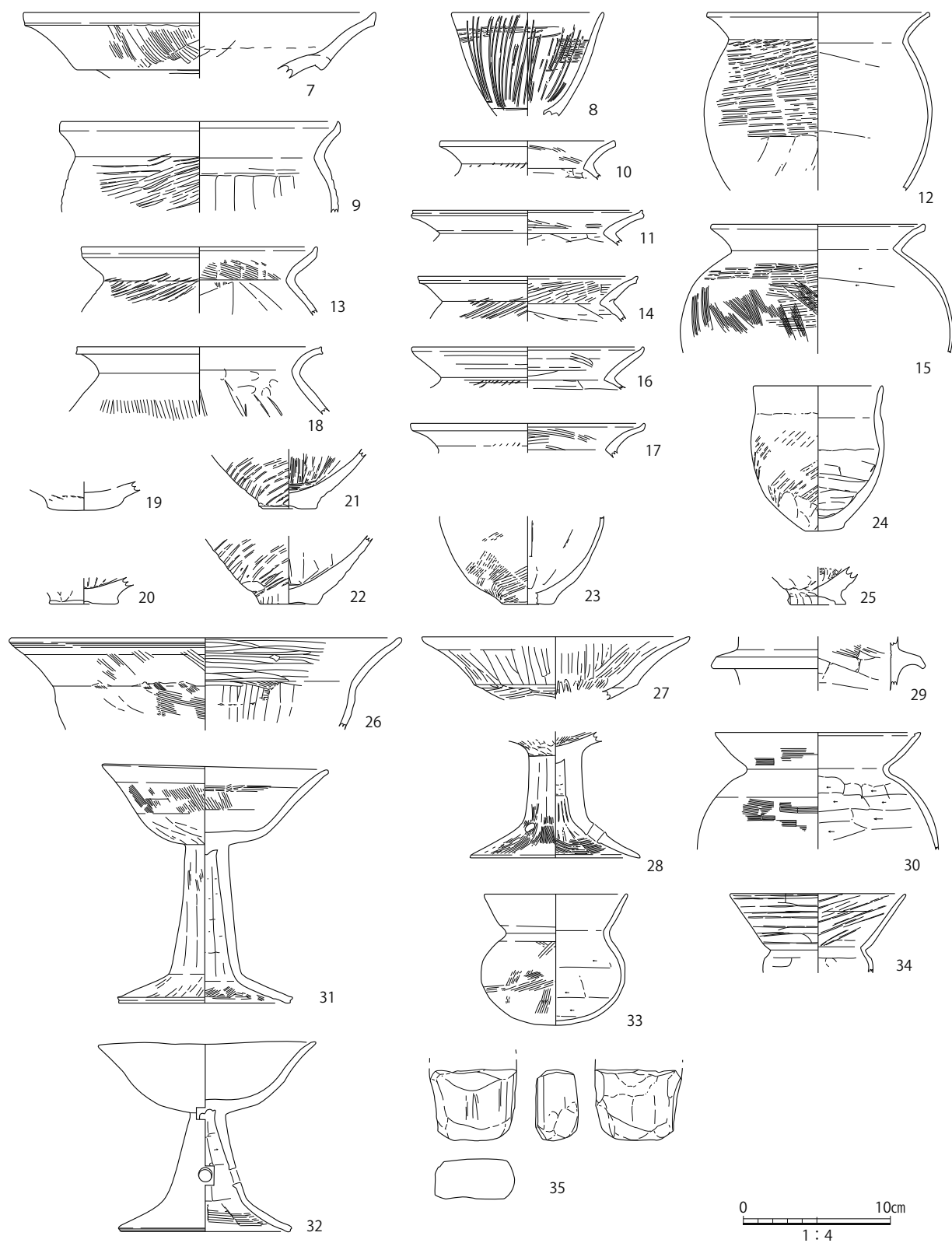


図13 1区第5層出土遺物

体部の内面調整は横方向のユビナデののち縦方向のミガキを施す。時期は庄内式期中段階に属すると考えられる。4は庄内系高坏Bの脚部である。3方向に円形の透孔を設ける。縦方向のケズリで成形したのち、同方向のミガキを施す。布留式期中段階に属する。5は瓦器の皿である。見込みにミガキを施

す。時期は12世紀後半から13世紀と考えられる。6は瓦器碗の高台部である。見込みにミガキを施す。時期は13世紀と考えられる。

第5層 7は複合口縁壺の口縁部である。1次口縁の端部は下方向に屈曲させ、端部内面に2次口縁を貼り付ける。調整が接合部付近で内外面とも変化している。接合部付近の内面調整は、右斜め上方向のユビナデを施して2次口縁を貼り付け、そのうち2次口縁部の内面に横方向のユビナデを施す。外面調整は1次口縁部には横方向のミガキを施すが、2次口縁部には左斜め上方向のハケを施す。口縁部の一部にススが付着している。詳細な時期は不明である。8は細頸直口壺の口縁部である。内面調整は横方向のハケのち縦方向のミガキを施す。庄内式期古段階に属すると考えられる。9は弥生形甕である。胴部径は約18.8cmで、中型である。胴部下半が欠損しているが、全体の器形はやや長胴気味に復元できる。庄内式期古段階に属すると考えられる。12・15は庄内形甕である。12の胴部径は約15.4cmであり、小型である。15の胴部径は約18.4cmで、中型である。庄内式期古段階に属する。13は庄内形甕である。口縁端部を摘み上げて拡張している。頸部内面に明確な角を持たない。庄内式期新段階に属すると考えられる。10・11・14・16・17は庄内形甕の口縁部である。10・11・14は庄内式期古段階、16・17は庄内式期新段階から布留式期古段階に属すると考えられる。18は異形甕である。外面調整はハケを施す。内面調整はタタキのちケズリを施す。19から22は壺または甕または鉢の底部である。いずれも庄内式期に属する。23・24は小型鉢Cである。23の内面調整はケズリを施す。24の外面・内面の上半部はタタキ・ケズリ後にナデが施されている。両方とも庄内式期古段階に属する。25は小型鉢の底部である。26は中型鉢Aである。外面調整は横方向のハケを施す。口縁部はハケ後ミガキを施している。内面調整はハケのちミガキを施す。胴部はミガキが縦方向だが口縁部はミガキが横方向である。粘土紐接合痕が残る。庄内式期古段階から中段階に属する。27は有稜高坏の坏部である。内外面とも調整はミガキを施す。口縁端部にススが付着する。庄内式期古段階に属する。28は高坏の脚部である。脚部の円孔は3つである。内外面とも調整はハケを施す。脚柱部の外面はハケのちケズリを施している。庄内式期古段階に属すると考えられる。29は山陰型の二重口縁壺の可能性がある破片である。30は布留形甕Aである。胴部径が約16.4cmで、中型である。布留式期中段階に属する。31・32は布留系高坏である。31は脚部に円孔がない。内外面の調整は全体にハケを施したあと、脚柱部はケズリ、坏部はナデやケズリを施している。布留式期中段階に属する。32は口縁端部がひずんでいる。脚柱部に円孔をあける。外面は摩滅しているが、脚部にミガキが一部残存する。坏部はヨコナデを施している。布留式期中段階に属する。33・34は小型丸底土器Bである。両方とも布留式期中段階に属する。35は砥石である。石材は白色の砂岩と考えられる。表裏とも使用痕がある。

第3節 2区・3区・4区の調査成果

第1項 層序

2区・3区・4区の層序は上から順に盛土・現代耕作土層（第1層）、近代耕作土層（第2層）、中世耕作土層（第3層）、古墳時代堆積土層（第4層）、弥生時代以前堆積土層（第5層）である。第3層は細粒砂から極細粒砂の砂質土を中心に構成されており、厚さは概ね20cmを測る（土色番号2区－7・8・25・26・27・39、3区－2・11・21、4区－3・4・10）。近世および近現代の耕作により、第3層が削平され、第1層もしくは第2層の直下で第4層を検出した箇所が部分的に存在する。第4層はシルトを中心に構成されている。厚さは2区で70cm前後、3区で30～50cm、4区で30cm前後とばらつきがある。一方で2区の東側から3区にかけては第5層を確認できず、第4層の厚さは1mに達するところも存在する（土色番号2区－9・10・12～19・29～33・37・38、3区－3・6・7・

12～14・19・22・23・26、4区－5～7)。また2区の東側および3区の西側では、第4層をa層とb層に分層した。第4a層はT.P.+6.6～6.7mで検出しており、厚さは10cm程度である（土色番号2区－13、3区－3・12）。第4b層はT.P.+6.5m前後で検出しており、厚さは10から20cmである（土色番号2区－37、3区－6・13）。第4層の下層はラミナが確認できる層もあり、水性堆積層と考えられる。時期は第4層上面で中世、古代、古墳時代後期、古墳時代中期の遺構を検出している。また第4a層上面では中世、古代、古墳時代後期の遺構を、第4b層上面では古墳時代後期の遺構をそれぞれ検出している。第5層は黒色もしくは暗灰色の粘性シルト・砂質土である。第5層上面の標高は、2区の西側でT.P.+5.8m前後、3区の東側でT.P.+5.7から5.8m、4区の東側でT.P.+6.0m前後であり、東側がやや高い。ただし、前述の通り2区の東側から3区にかけてはT.P.+5.5mまで掘削しても第5層を確認できなかった。このことから2区と3区の間には谷もしくは流路のような落ち込みがあり、3区から4区にかけて僅かに標高が上がっていく地形が復元できる。遺構は3区と4区で庄内式期古段階古相から新相にかけての溝や井戸（土坑）を検出している。また第4層との境界付近から布留式期中段階の土器が、第5層中から庄内式期古段階古相の土器が出土している。

第2項 2区

（1）検出した遺構

遺構は第4層上面で検出した。同一面で中世、古墳時代後期、古墳時代中期の遺構を検出しており、中世以降に削平を受けていると考えられる。

古墳時代中期 検出した遺構は土坑である。土坑059は長さ0.52m以上、幅0.48m以上、深さ21cmを測る。土坑058に削平されているが、平面形は角丸方形と考えられる。遺物は土師器、須恵器の坏身が出土している。須恵器の特徴から概ねTK208からTK23・47型式並行期に属すると判断する。また平面形から土坑059は柱穴となる可能性がある。

古墳時代後期 検出した遺構はピット、溝、土坑である。ピット029は長さ0.42m、幅0.3m以上、深さ5.5cmを測る。平面形は楕円で、西側は溝035に削平されている。遺物は土師器、須恵器の坏身が出土している。須恵器の特徴から古墳時代後期に属すると判断する。ピット060は長さ0.68m、幅0.49m以上、深さ25cmを測る。平面形は角丸方形である。遺物は土師器、須恵器の坏身、甕が出土している。須恵器の特徴から時期はTK23・47型式並行期に属すると判断する。溝033は長さ2.4m以上、幅1.04m、深さ18.7cmを測る。南北方向に延びており、両端は調査区外のため全形は不明である。遺物は土師器、須恵器の坏身、高坏、甕が出土している。須恵器の特徴からMT15型式並行期からTK10型式併行期に属すると判断する。溝043は長さ2.2m以上、幅0.26m、深さ7cmを測る。調査区内で途切れている箇所があるが、南北方向に延びる溝と考えられる。遺物は土師器、須恵器の坏身が出土している。須恵器の特徴からTK10型式併行期に属すると判断する。土坑056は長さ0.57m、幅0.4m、深さ10.5cmを測る。平面形はリング形である。遺物は土師器、須恵器の坏蓋、把手付き鉢が出土している。須恵器や把手付き鉢の特徴から古墳時代後期に属すると判断する。土坑064は長さ3.0m以上、幅0.7m以上、深さ36.5cmを測る。東西を溝033・035およびカクラン001に削平されており、北側は調査区外に続くため全形は不明である。遺物は土師器の甕、須恵器の坏身が出土している。遺物の特徴から古墳時代後期に属すると判断する。

中世以降 検出した遺構は溝である。溝061は長さ1.54m以上、幅0.42m、深さ5cmを測る。北側は調査区外に延びており、全長は不明である。遺物は瓦器が出土している。溝049は長さ2.5m以上、幅4.16m以上、深さ27cmを測る。溝035は長さ2.4m以上、幅5.76m、深さ15.5cmを測る。

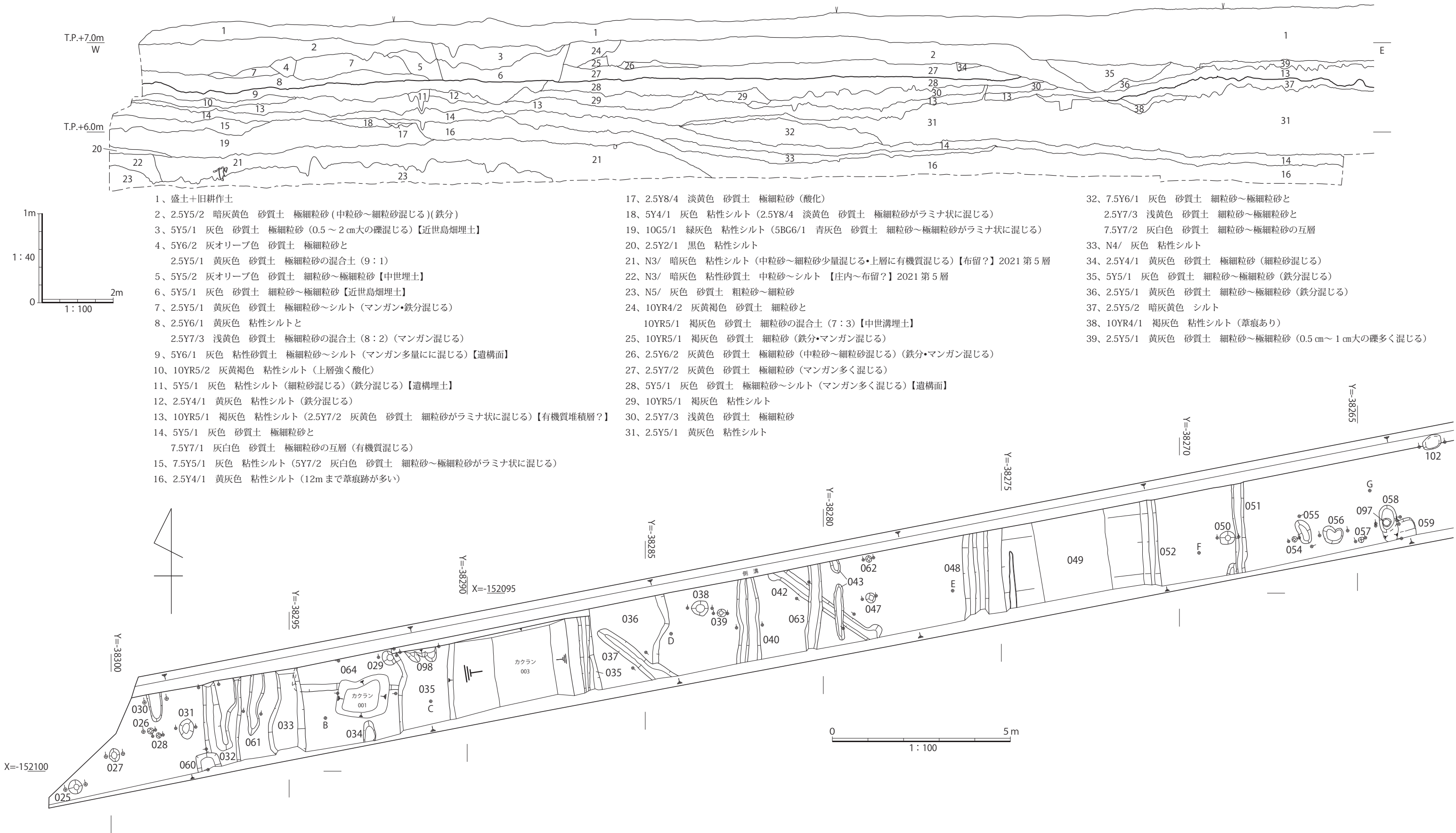


図 14 2区平面図・南壁土層断面図

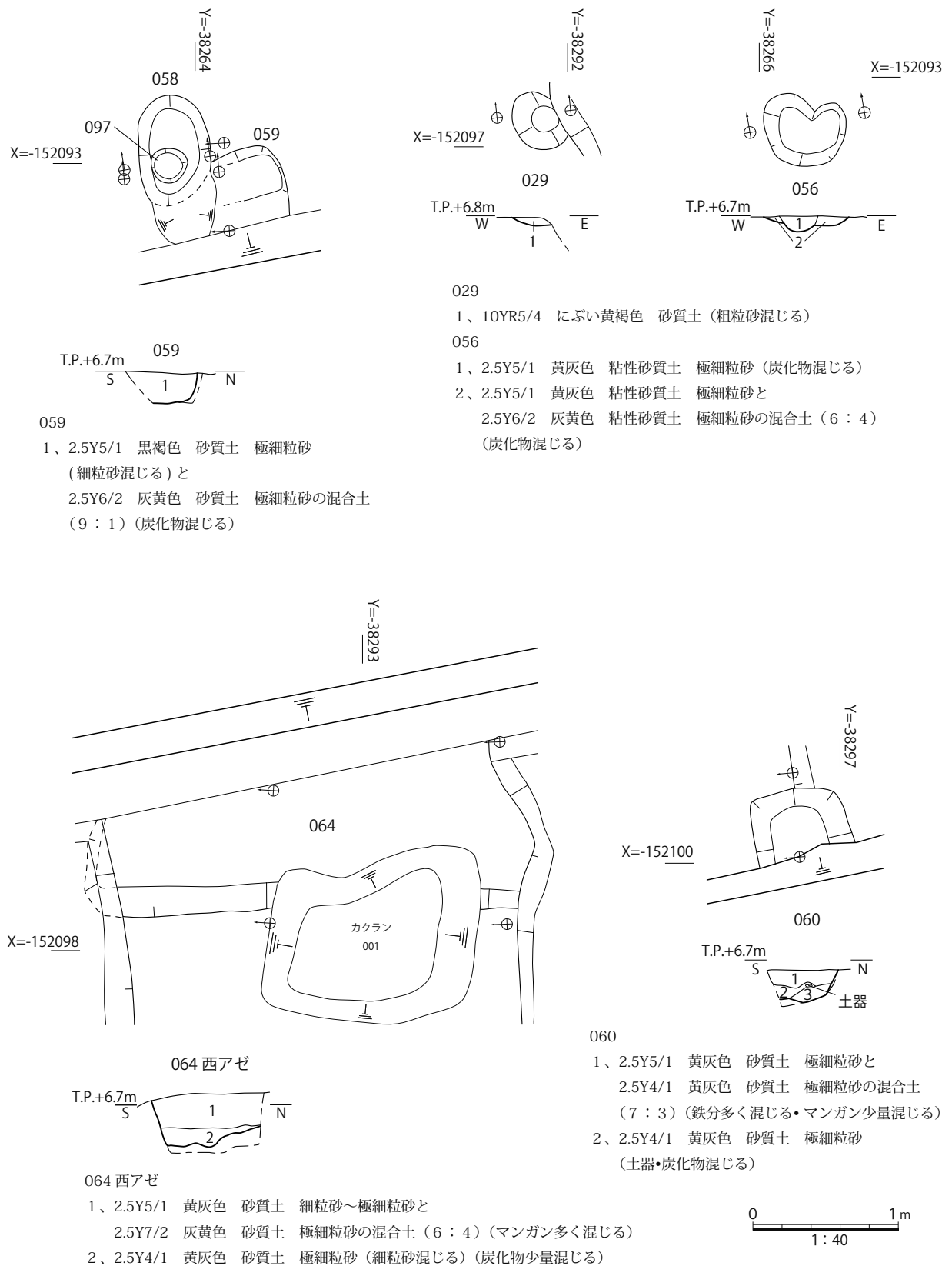


図15 2区出土遺構平面・断面図

溝 036 は長さ 2.4m 以上、幅 2.2m 以上、深さ 6 cm を測る。いずれも大型の溝であり、既往の調査もふまえると近世の島畑耕作に伴うものである可能性が高い。溝 048 は長さ 2.5m 以上、幅 0.7m、深さ 31.6cm を測る。遺物は土師器、須恵器の甕、瓦が出土している。溝 048 はカクラン 003 および溝 049・035・036 と平行に検出しており、同じく近世の島畑耕作に伴うものである可能性がある。

(2) 出土遺物

遺構出土 36 は土師器の坏である。口縁端部を外側に屈曲させている。外面に強いナデ調整を施す。内面の底部付近にススが付着する。TK208 から TK23・47 型式併行期に属する。37 は外反口縁甕である。頸部は直立させ、口縁端部を外に屈曲させている。胴部の外面調整はタタキを施す。時期は古墳時代中期から後期に属すると考えられる。38 は土師器の把手である。甗の可能性もある。ユビオサエで成形している。時期は古墳時代中期に属すると考えられる。39 は須恵器の坏身である。TK23・47 型式併行期に属する。

第 5 層出土 40 は広口壺である。胴部径は約 15.3cm を測る。口縁部と胴部の外面の一部にススが付着する。外面調整はハケのちミガキを施す。庄内式期古段階に属する。41 は細頸直口壺の胴部である。胴部径は約 15.2cm を測る。胴部下半に黒斑がつく。胴部の外面調整はハケのちミガキを施す。庄内式期古段階に属する。42 は壺の胴部である。胴部径は 17.4cm を測る。頸部の内面に粘土の貼り付け痕跡がある。頸部を製作する際に粘土を念入りに引き伸ばし、接合を強固にしようとしたのだろうか。頸部の外面にタタキのような痕跡が確認できるが、これも接合を強固にするためにタタキを再度施した可能性がある。庄内式期古段階に属すると考えられる。43 は長頸壺 A と考えられる。胴部径は 19.3cm を測る。胴部の外面の一部と口縁部の内面に黒斑がある。外面調整はハケのちミガキを施す。時期は弥生時代後期後半に属する可能性がある。44 は土師器の壺の口縁部である。時期は不明である。45・46・47 は土師器の壺の底部である。47 の底部外面には植物と考えられる圧痕がある。46・47 は底部外面の一部に黒斑がある。いずれも庄内式期に属する。48 から 51 は弥生形甕である。48 の外面調整のタタキは一部左上がりである。外面にススが付着する。49 の器形はやや長胴である。口縁部の外面に粘土の貼り足し痕がある。口縁端部に刻み目をいれる。50 の器形はやや長胴である。口縁端部に刻み目をいれる。内面調整はハケを施す。51 の胴部径は 18.2cm を測る。外面調整はタタキのち縦方向のナデを施す。口縁部の内面の一部にススが付着する。いずれも庄内式期古段階に属する。52 は小型鉢 B の底部と考えられる。時期は庄内式期古段階に属すると考えられる。53 は小型鉢 C である。底部外面にタタキ板と考えられる押圧痕がある。内面調整は時計回りにケズリを施す。外面にススが付着する。

第 4 層上面出土 54 は土師器の高坏の脚部である。脚柱部は面取りをしている。辻 4 期（TK208 から MT15 型式期）に属すると考えられる。

第 3 層出土 55 は土師器の大型有段高坏である。坏部の外面調整はミガキを施す。見込み部にスス

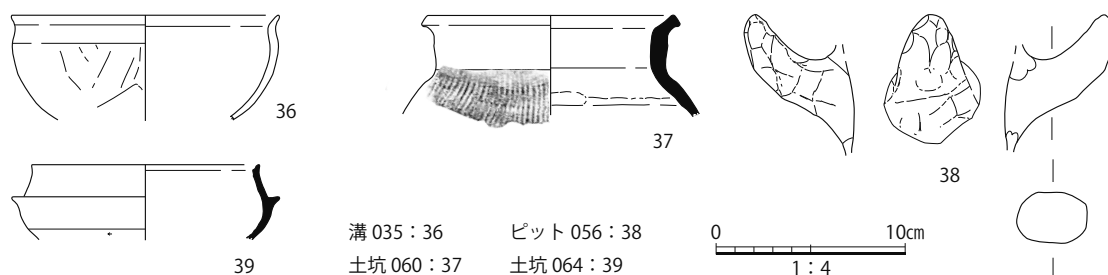


図 16 2区遺構出土遺物

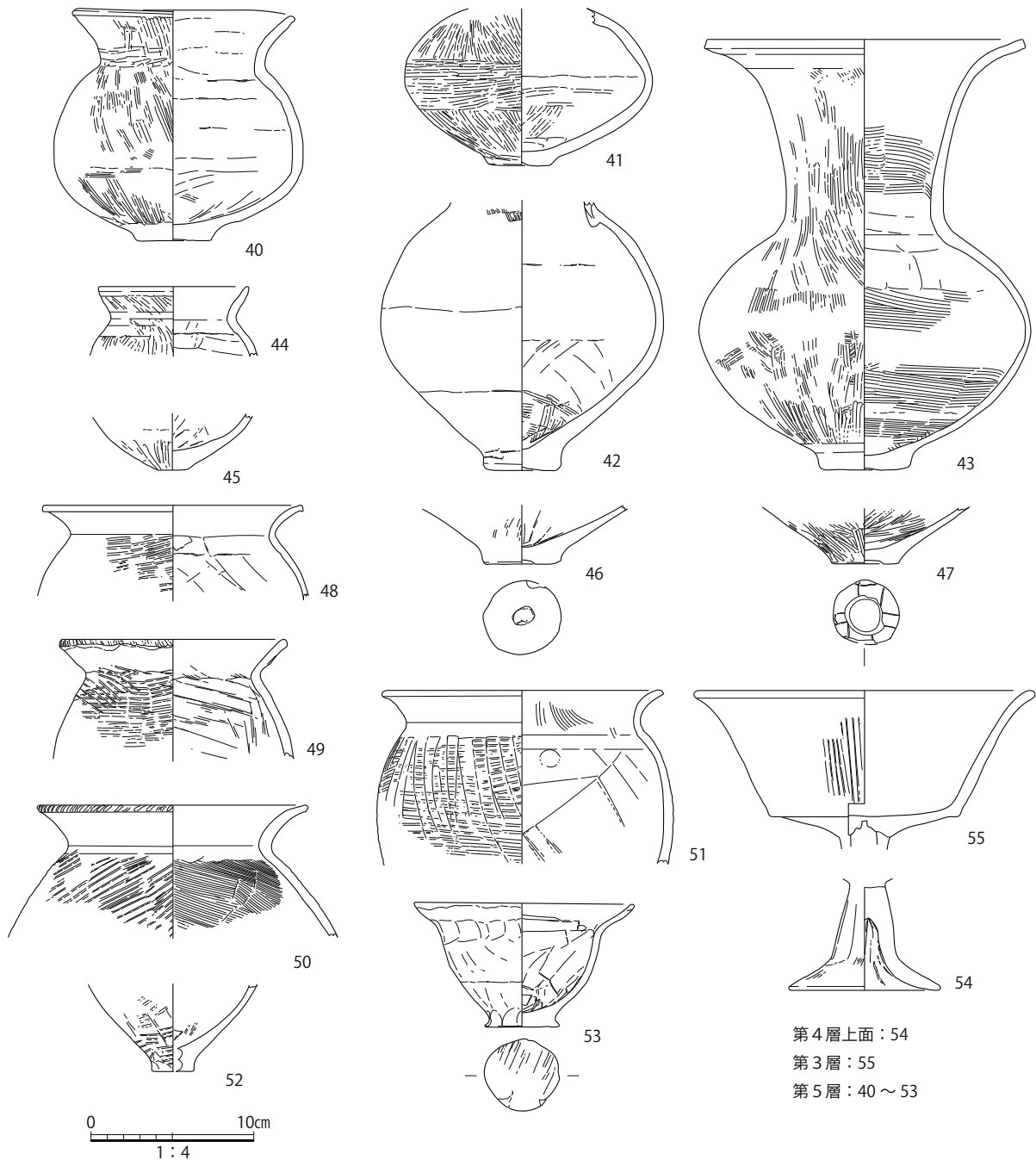


図17 2区遺構出土遺物その2

が付着している。辻4期に属する。

第3項 3区

(1) 検出した遺構

第5層上面 検出した遺構は井戸である。井戸116は長さ2.3m、幅2.2m、深さ62cm以上を測る。平面形は正円形である。T.P.+5.5m付近まで掘り下げたが、底は検出できず、水が湧き出した。遺物は土師器の甕が出土している。遺物の特徴から、時期は庄内式古段階から新段階に属すると判断する。

第4層上面 第4層上面では、同一面で中世、古墳時代後期、古墳時代中期の遺構を検出しており、

中世以降に削平を受けていると考えられる。

古墳時代中期 検出した遺構はピット、土坑、溝である。ピット 068 は長さ 0.2m、幅 0.2m、深さ 4 cm を測る。平面形は円形である。遺物は土師器の高坏が出土している。特徴から時期は TK208 型式併行期と考えられる。土坑 071 は長さ 0.76m 以上、幅 0.36m、深さ 3 cm を測る。北側は調査区外に延びているため全形は不明であり、溝となる可能性がある。遺物は土師器の甕、有稜高坏、椀形高坏が出土している。有稜高坏の特徴から、時期は TK73 から TK216 型式並行期に属すると判断する。土坑 101 は長さ 2.05m 以上、幅 2.98m、深さ 15cm を測る。南側が調査区の外に広がるが、平面形は方形に近いと考えられる。掘方は垂直ではなく緩やかであり、遺構の底に平らな面は作られていない。また遺構の断面観察から南側の上がりには調査区外にあたる。遺構の南東区画には炭化物が多く堆積している。この炭化物の自然科学分析を行ったところ、大量のイネの炭化種実やプラントオパールが検出された。このことからこの炭化物はイネの籾殻や葉身を燃やして生成され、土坑 101 内の一部にまとめて廃棄されたものと考えられる。遺物は土師器の椀形高坏、小型壺、甕、須恵器の坏身や高坏が出土している。遺物の量は多くなく、遺存状態も良くなかった。また土器を意図的に遺構内に設置したような痕跡は認められなかった。遺物の特徴や炭化物の年代測定結果から、時期は TK73 から TK216 型式併行期と判断する。溝 066 は長さ 3.36m 以上、幅 0.54m、深さ 12cm を測る。調査区内で蛇行するが概ね南北方向に走る溝である。遺物は土師器の高坏、甕、須恵器が出土している。遺物の特徴から、時期は TK73 から TK216 型式並行期と判断する。

古墳時代後期 検出した遺構は土坑、溝である。土坑 069 は長さ 0.56m、幅 0.42m、深さ 7 cm を測る、やや歪んだ角丸方形の土坑である。遺物は土師器の高坏・甕が出土している。遺物の特徴から古墳時代後期に属すると考えられる。土坑 080 は長さ 0.46m、幅 0.22m、深さ 10cm を測る。調査区外に延びる溝となる可能性もある。遺物は土師器、須恵器の坏蓋、甕が出土している。須恵器の特徴から時期は TK10 型式併行期に属すると考えられる。溝 081 は長さ 2.14m 以上、幅 0.38m、深さ 22cm を測る。北側は調査区外に延びており、全長は不明である。遺物は土師器の高坏、須恵器の坏蓋が出土している。須恵器の特徴から時期は TK43 型式並行期に属すると考えられる。溝 084 は長さ 2.1m 以上、幅 0.64m、

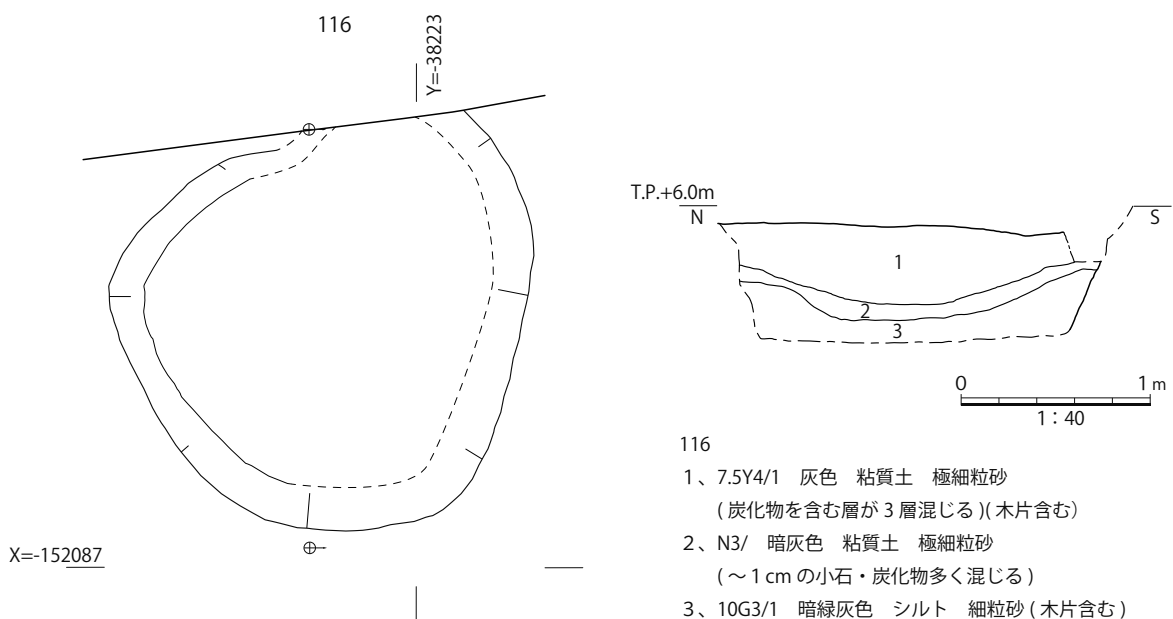


図 18 井戸 116 平面・断面図

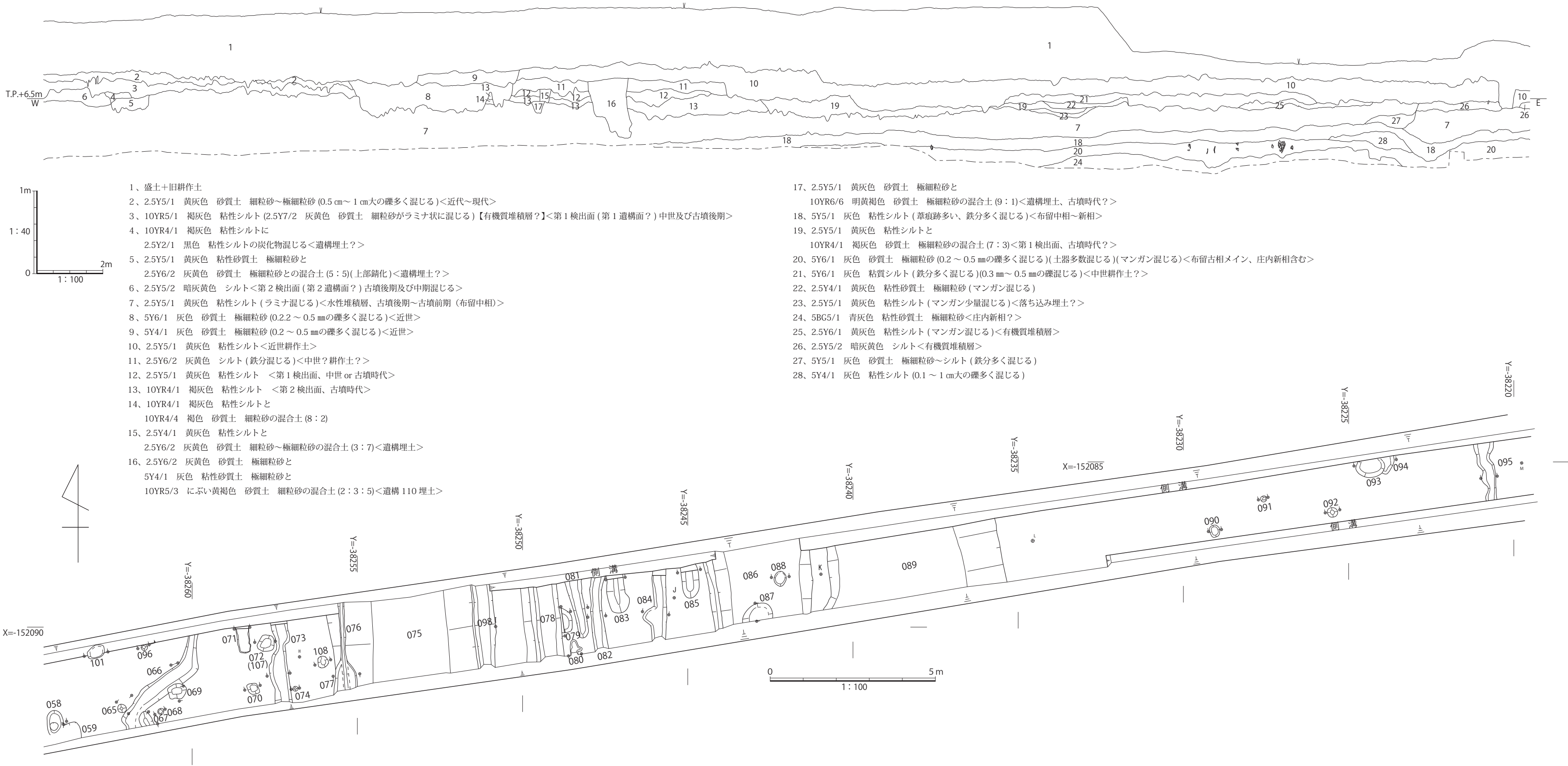


図 19 3区平面図・南壁土層断面図

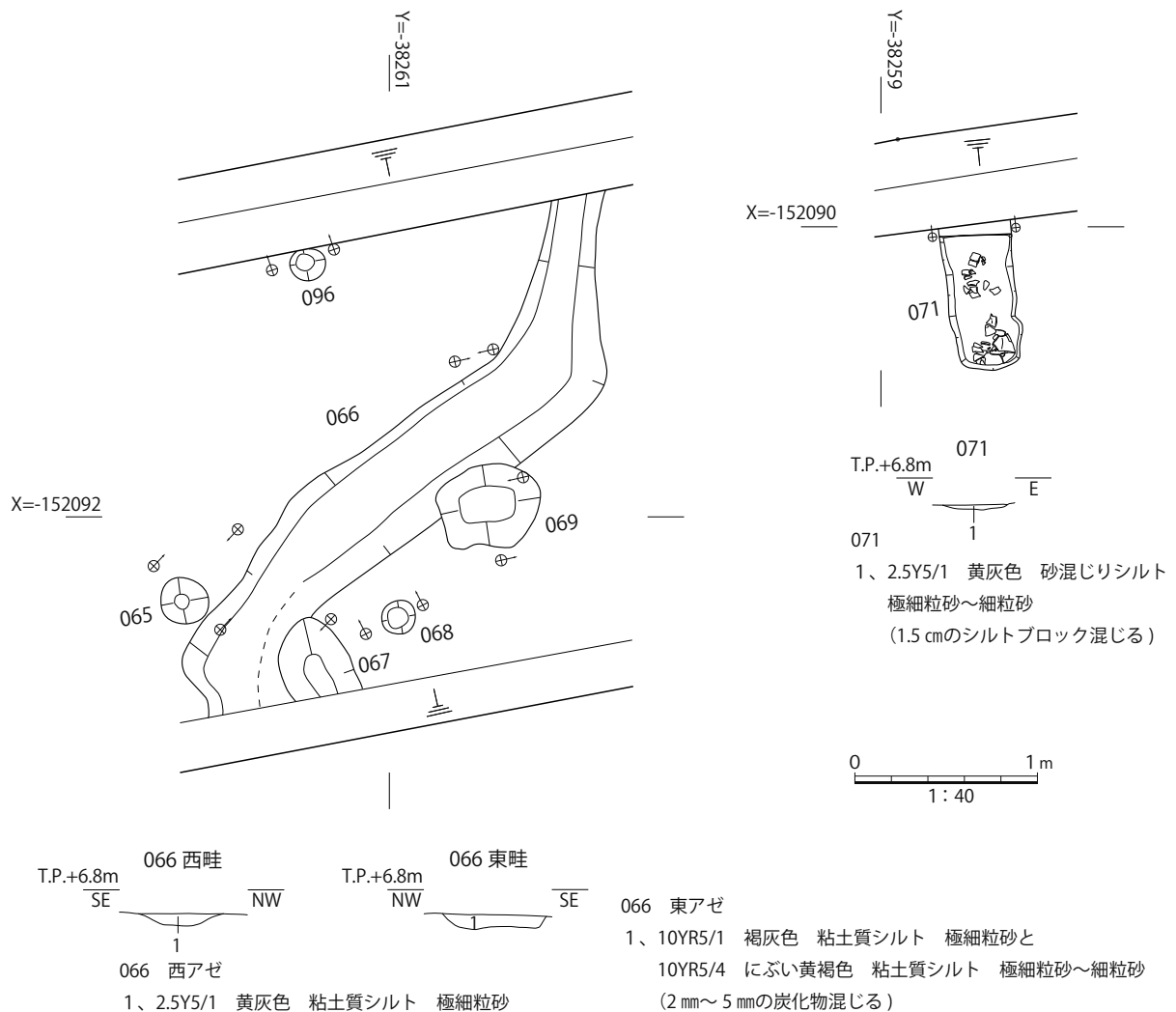


図20 3区出土遺構平面・断面図(古墳時代前期・中期)

深さ 15cm を測る。調査区外に延びており全長は不明である。遺物は土師器の高坏、須恵器の坏蓋、高坏が出土している。須恵器の特徴から時期は TK23・47 型式並行期に属すると判断する。溝 109 は長さ 2.1m 以上、幅 1.16m、深さ 12cm を測る。溝 082 の直下にあたり、溝 081 および井戸 110 によって削平されている。遺物は土師器の甕、須恵器の坏蓋、坏身、高坏、甕、甕が出土している。須恵器の特徴から時期は古墳時代後期に属すると判断する。

古代 検出した遺構は井戸である。井戸 110 は長さ 1.66m、幅 1.16m、深さ 66cm 以上を測る。検出時の掘方は楕円形であったが、掘削を進めるとほぼ正円に近い平面形となった。井戸枠には曲物が使用され、瓦が曲物の周囲に積まれていたが、曲物は遺存状態が悪く、僅かな高さしか残存していなかった。瓦は T.P.+6.25m 付近から T.P.+5.91m 付近までの間で出土した。完形のものではなく、不揃いの破片が使用されていることから、別の場所で使用していた瓦を転用し、打ち割って使用している可能性が高い。瓦片は井戸の周囲でも出土しており、井戸は放棄された際には大きく破損していたと考えられる。遺物は井戸枠に使用されていた瓦のほか、須恵器の坏 B や土師質の羽釜、把手付き鍋などが出土している。平瓦は桶巻造りで製作されており、うち 1 点は「神亀五□」銘の文字瓦である。井戸から瓦器は出土しておらず、8 世紀から 10 世紀の範疇で収まる土器が出土していることから、井戸 110 は 8 世紀前葉

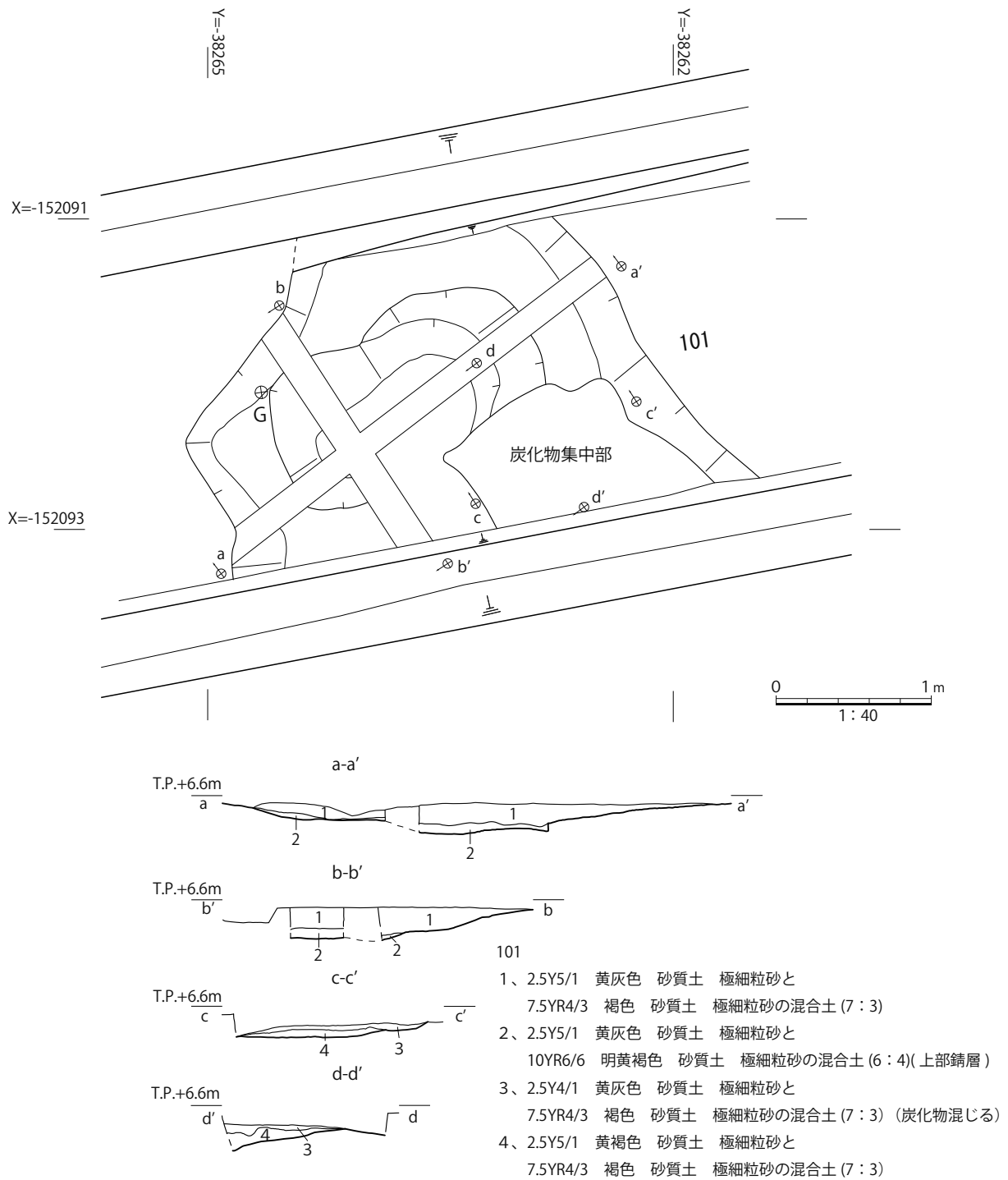


図 21 土坑 101 平面・断面図

に構築され、中世に入る前に放棄されていると判断する。

中世以降 検出した遺構は溝である。溝 075 は長さ 2.64m 以上、幅 4.28m、深さ 17cm を測る。南北とも調査区外に延びており、全長は不明である。遺物はすり鉢、土師器、須恵器が出土している。大型の溝であり、2 区と同様に近世の島畑耕作に伴うものである可能性が高い。溝 082 は長さ 2.25m 以上、幅 0.38m、深さ 17cm を測る。遺物は磁器、土師器の甕、須恵器が出土している。

(2) 出土遺物

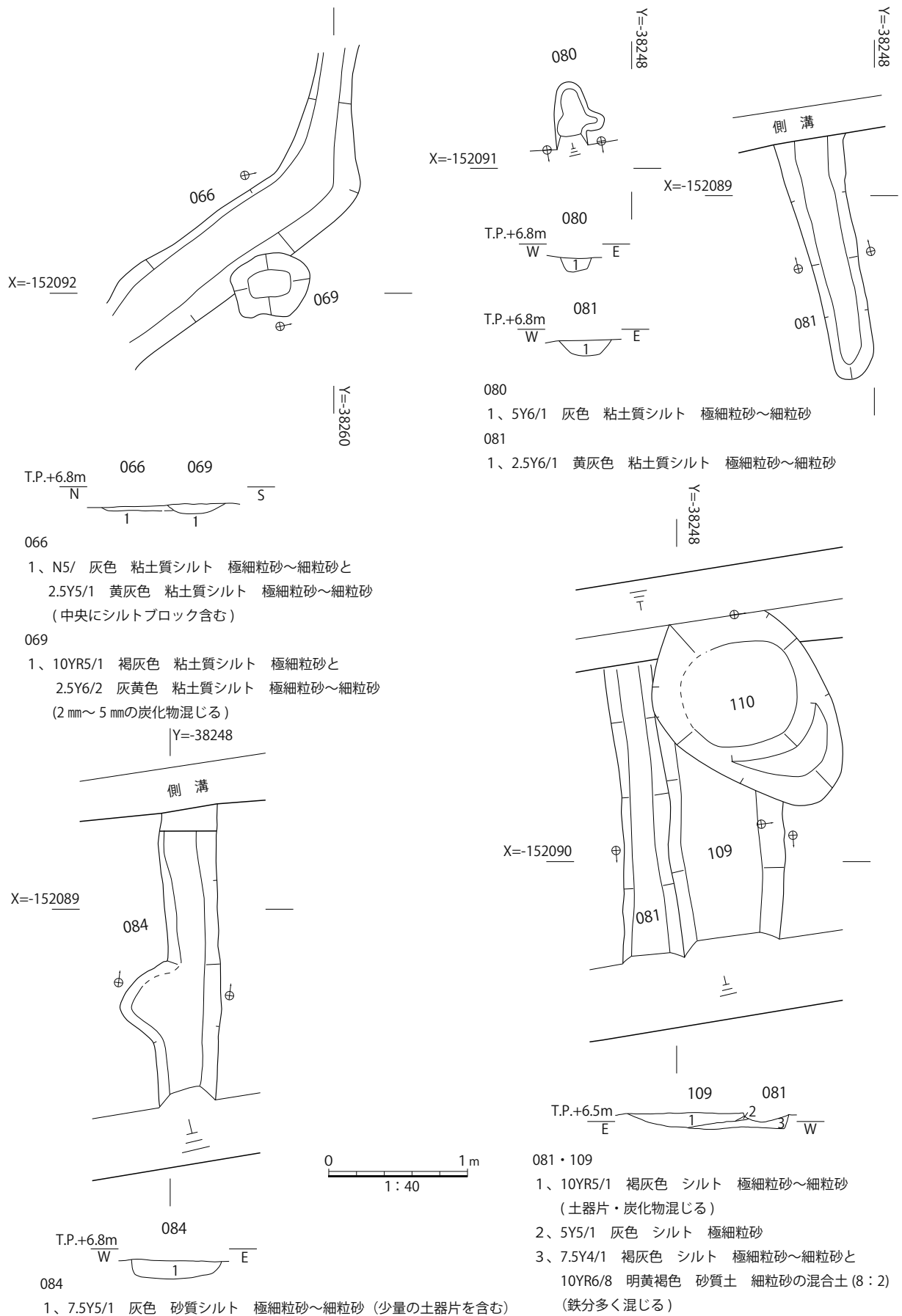
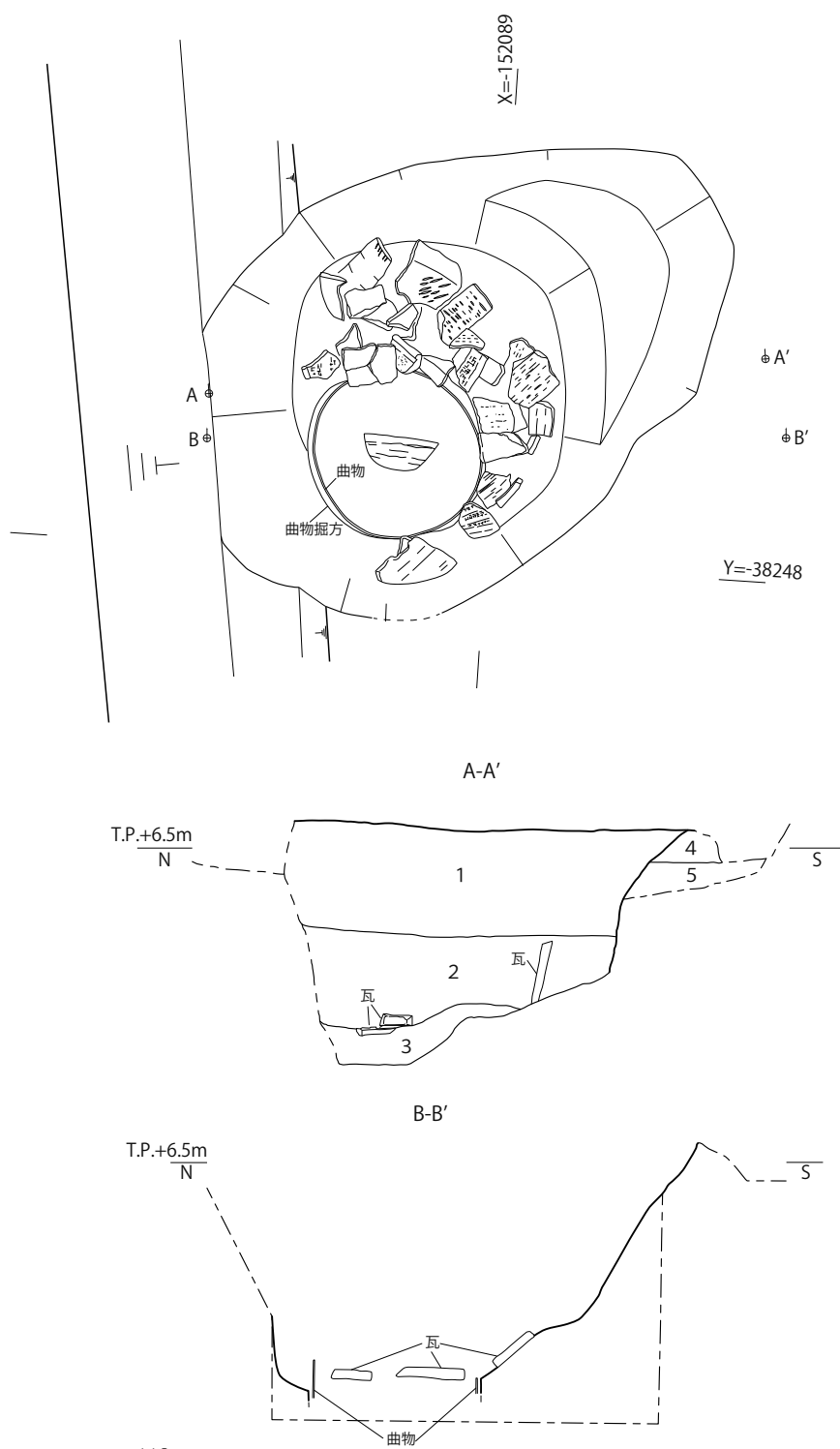


図 22 3区出土遺構平面・断面図 (古墳時代後期)



110

- 1 10YR5/1 褐灰色 シルト 極細粒砂～細粒砂と
N6/ 灰色 シルト 極細粒砂～細粒砂の混合土 (鉄分・炭化物混じる) (6:4)
- 2 2.5Y5/1 黄灰色 シルト 極細粒砂～細粒砂と
2.5Y7/6 明黄褐色 砂質土 細粒砂の混合土 (8:2) (鉄分多く混じる)
- 3 10YR4/1 褐灰色 シルト 極細粒砂～細粒砂
- 4 7.5YR5/1 褐灰色 砂質土 細粒砂～中粒砂
- 5 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 極細粒砂～細粒砂 (鉄分・炭化物混じる)

図 23 井戸 110 平面・断面図

遺構出土 56は無稜外反高坏である。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。笹栗中3b期（TK208型式併行期）に属する。57は有稜外反高坏である。脚部の外面調整はハケのちミガキを施す。笹栗中1b期（TG232型式並行期）に属する。59は高坏の脚部である。内外面とも摩滅しているが、外面調整は工具ナデを施しているようである。時期は不明である。58は中型直口壺である。胴部の内面調整はケズリを施す。笹栗中1b期に属する。60は土師器の甕である。笹栗中2期から中3a期、TK73からTK216型式並行期に属すると考えられる。61は韓式系土器の破片である。器種や時期は不明である。62は須恵器の無蓋高坏である。笹栗中3b期に属すると考えられる。63は椀型高坏である。内外面とも摩滅している。笹栗中3bから中4期に属すると考えられる。64は土師器の甕の口縁である。時期は不明である。65は弥生形甕である。庄内式期古段階に属する。66・67は須恵器の坏蓋である。両方とも笹栗中4期に属する。71・72は須恵器の坏身である。両方とも笹栗中4期（TK23・47型式併行期）に属する。68・69は土師器の甕の口縁である。68は難波宮Ⅳ期、69は難波宮Ⅴ期に属すると考えられる。70は土師器の坏Bと考えられる破片である。詳細は不明だが、難波宮Ⅴ期に属すると考えられる。73はミニチュア高坏である。外面は面取りしている。時期は不明である。74は土師器の鍋の把手である。時期は不明である。75は須恵器の有蓋高坏と考えられる破片である。時期は古墳時代後期と考えられる。76は土師器の小皿である。時期は古代から中世と考えられる。77・78は白玉である。滑石製と考えられる。77は算盤玉のような形状をしている。78は小さい管玉のような形状である。79は土師器の椀である。外面調整はハケのちナデを施す。時期は中世と考えられる。80は把手付鉢の把手である。時期は古墳時代後期と考えられる。81は須恵器の壺の口縁と考えられる破片である。時期は不明である。82は布留形甕である。笹栗中2期から中3a期に属する。83は椀形高坏である。外面調整はハケ、内面調整はハケのちミガキを施す。笹栗中2期から中3a期に属する。84は無稜外反高坏である。内面は摩滅しているが、調整はハケのちミガキを施す。笹栗中2期から中3a期に属する。84・85は高坏の脚部である。85の外面は面取りしたのちミガキを施す。両方とも時期は古墳時代中期である。87は小型壺である。内外面とも摩滅している。時期は古墳時代中期である。88は甗の底部である。中央とその周囲の3孔の一部が残存する。外面調整はハケを施す。時期は古墳時代中期である。

井戸110出土瓦 89は文字瓦である。凸面の端部は盛り上がっている。また盛り上がった部分から幅2cmほどにケズリもしくは板ナデを施している。凹面には布目痕跡があるが、ナデ消されている。文字は凹面に刻まれており、「神亀五□（□内に年）」の4文字が判読できる。「年」は半分以上欠損しているが、「年」の残滓と考えて違和感はないと判断した。また左にも線刻が2本確認できるが、文字であるかも含め判別はできない。90から95は平瓦である。いずれも桶板痕跡が確認できることから桶巻作りで製作されている。凸面は布目タタキで成形されている。凹面には布目痕跡が残る。90は凸面に縄目タタキの痕跡と格子タタキの痕跡が確認できる。両者の切り合いから成形は縄目タタキで行い、格子タタキで歪みの補正を行ったと考えられる。凹面には布目と糸切り痕跡が確認できる。端面はケズリを施しているが、広端面の隅に藁座圧痕が残る。91は凸面に歪みを補正するユビオサエが確認できる。92は凸面に一部布目がつく。凹面は左側に4cmほどの幅でケズリを施している。ケズリは狭端から10cmほどのところで向きが変わっている。狭端面に藁座圧痕が残る。94は凸面の状況から凹形台に乗せた調整を行っていない。凹面の左側に5cmほどの幅でケズリを施す。95は凸面に凹形台の痕跡が残る。凹面の一部にユビナデを施す。96から98は丸瓦である。凸面は縄目タタキで成形したのちユビナデを施す。凹面には布目が残る。96・98は各辺に沿ってケズリを施す。97は凹面に布目が残る。ほつれたあて布を使用した痕跡がある。出土した瓦の時期は桶巻作りであることや成形、調整技法から8世紀に属すると考えられる。瓦に刻まれた「神亀五年」は728年にあたり、瓦の年代観とは矛盾し

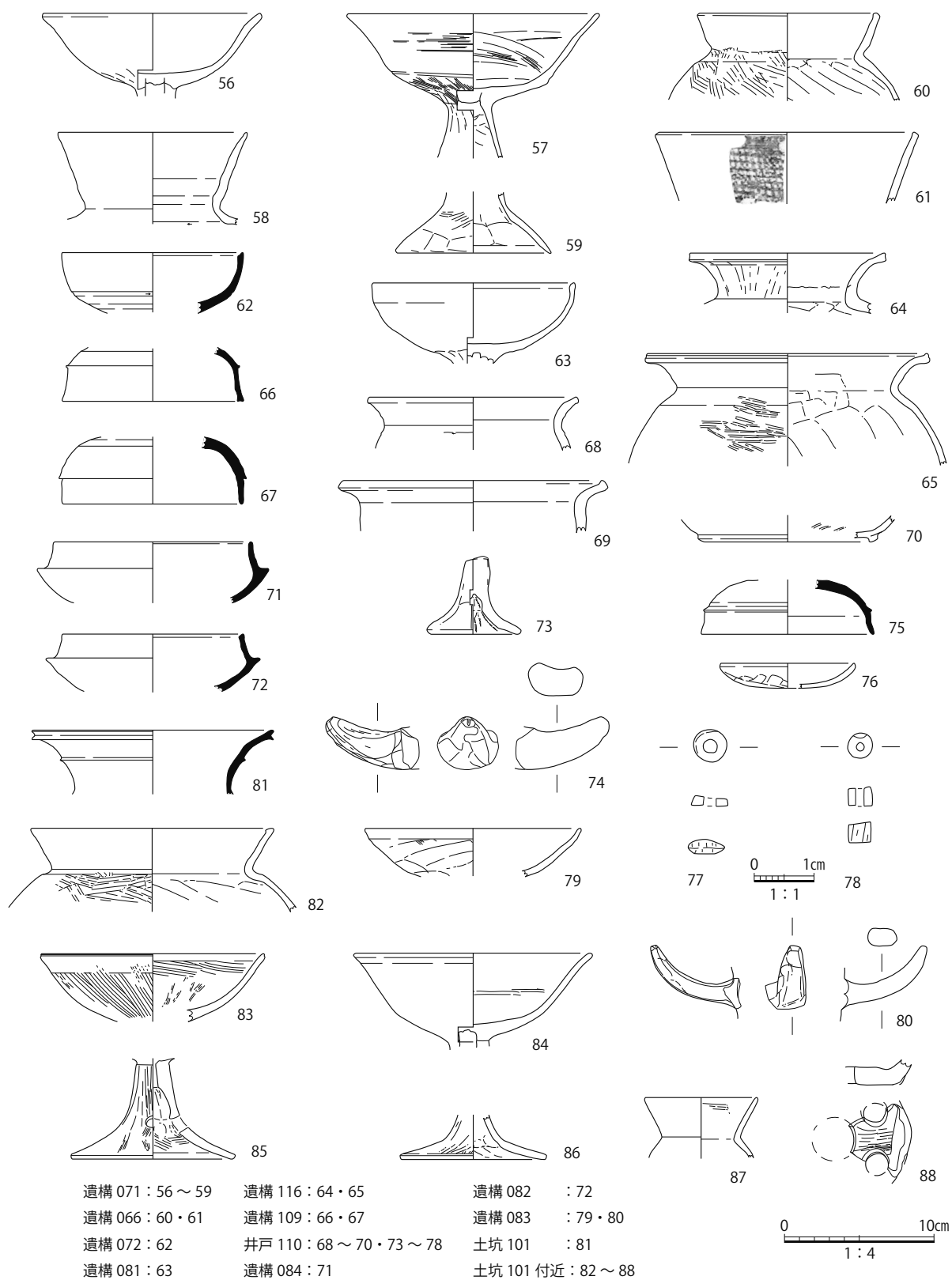


図 24 3区遺構出土遺物

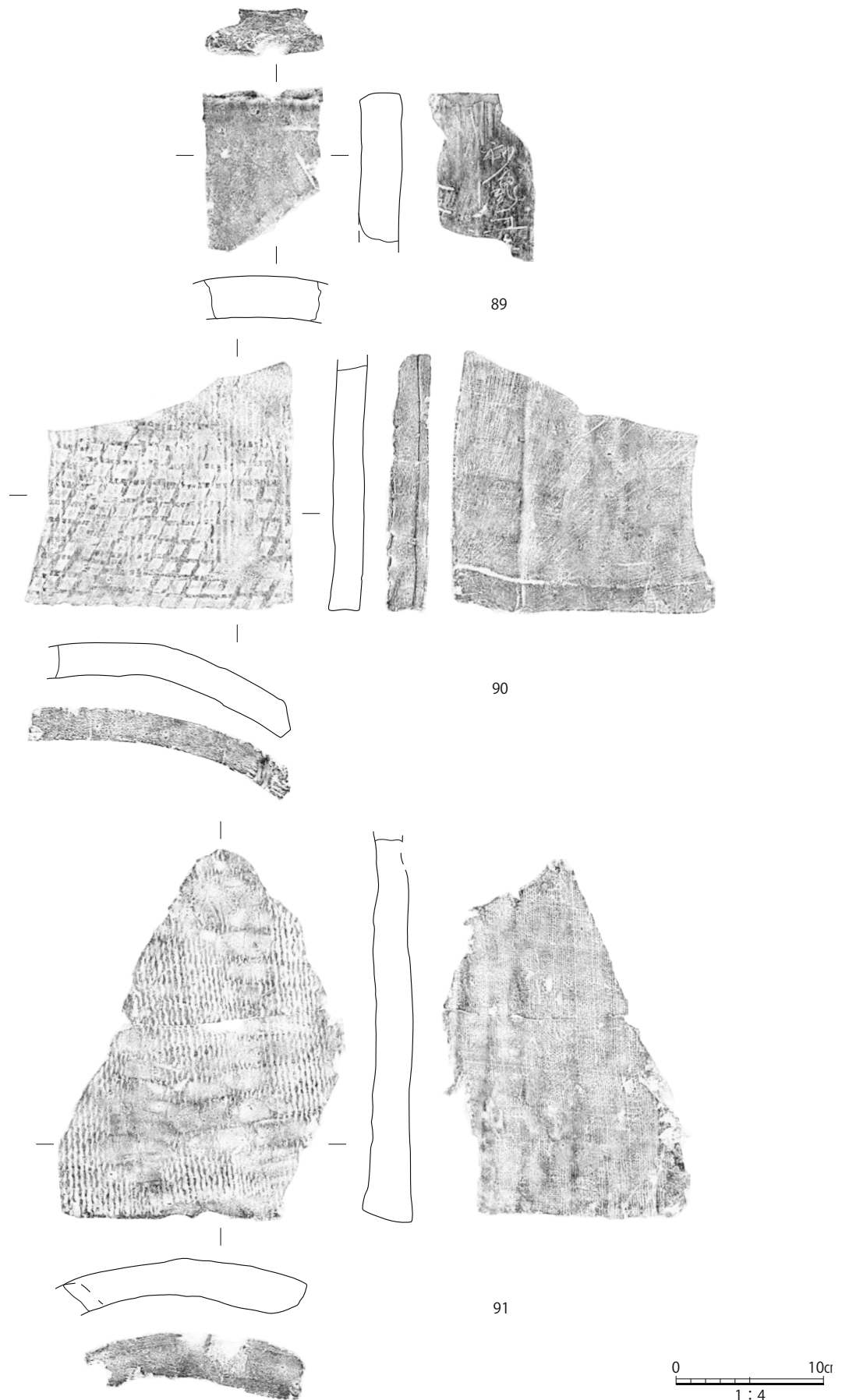


図 25 井戸 110 出土文字瓦・平瓦

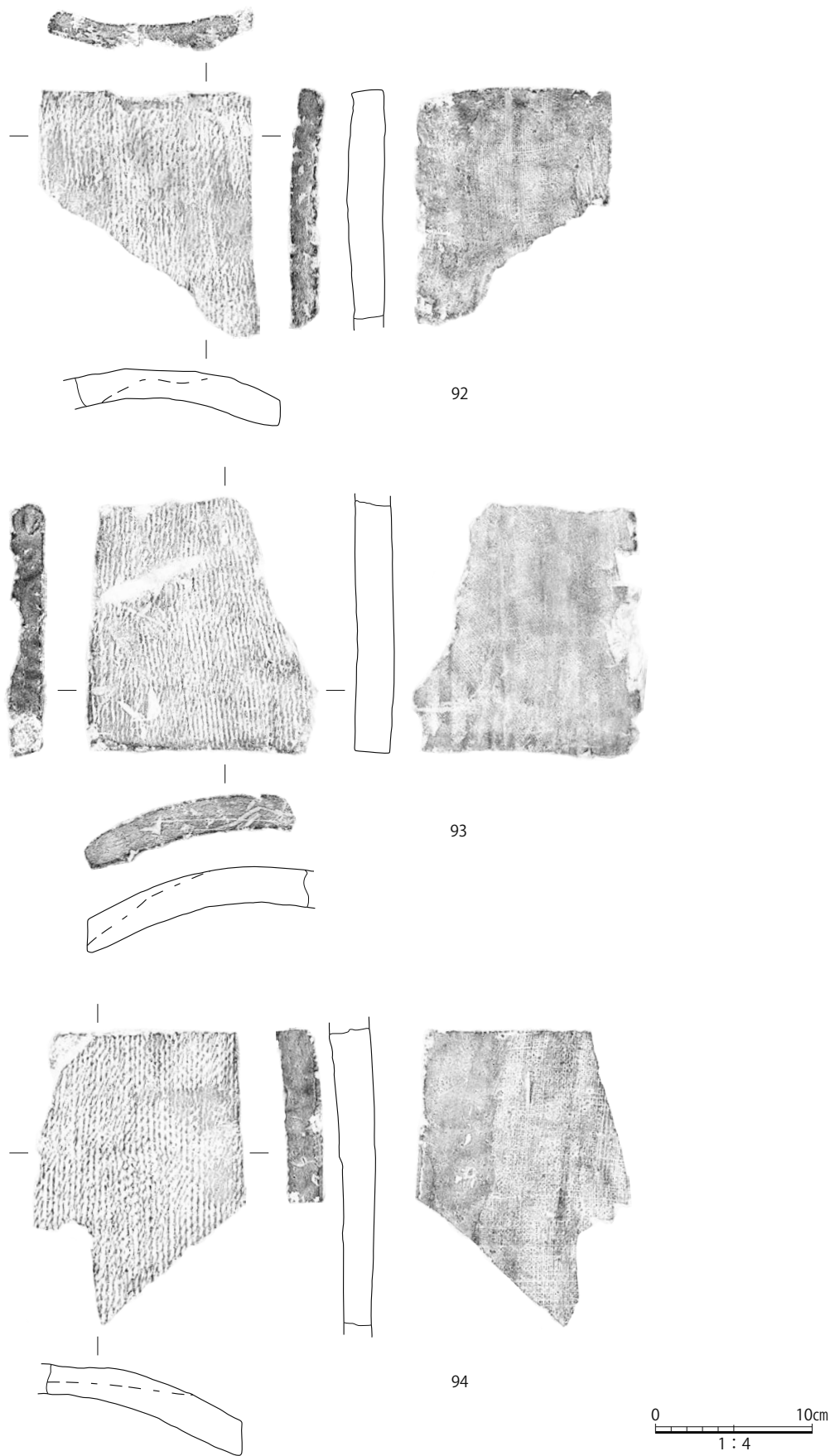


図 26 井戸 110 出土平瓦

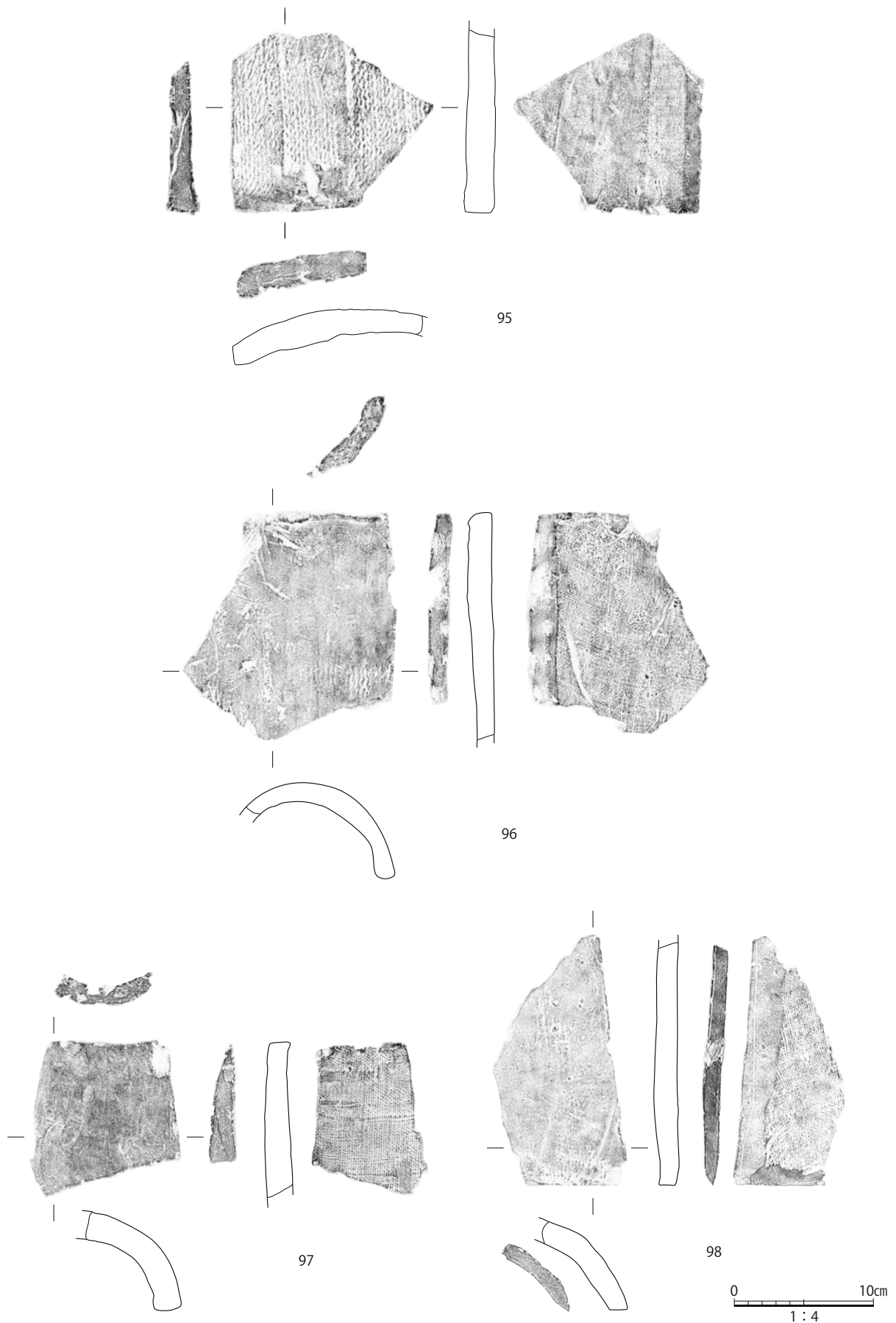


図27 井戸110出土平瓦・丸瓦

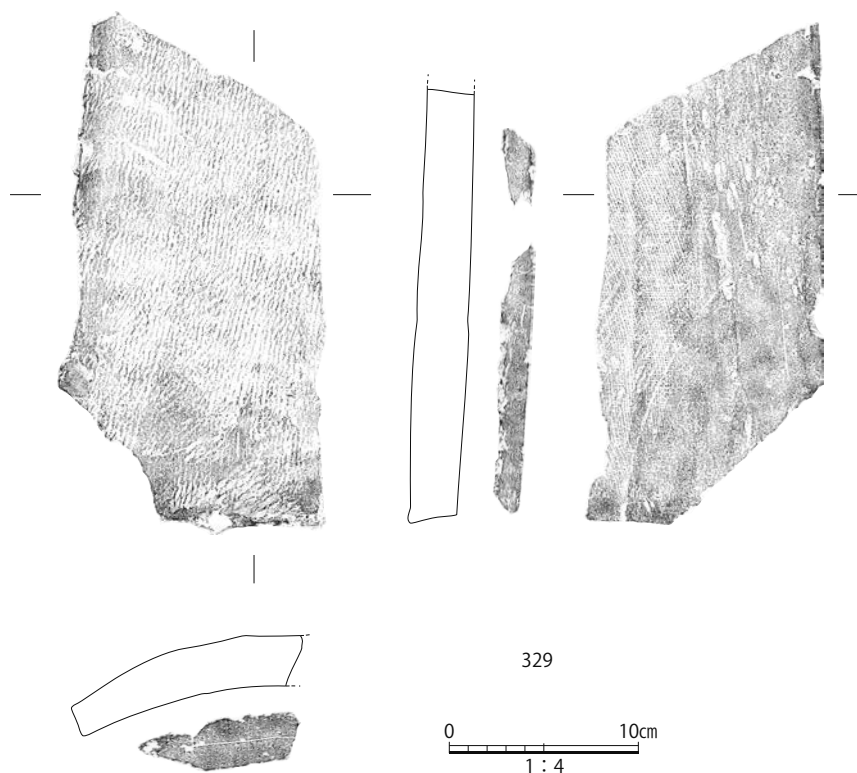


図28 井戸110出土平瓦

ない。

第5層 99は加飾性垂下口縁壺である。胴部の頸部付近に列点文を施す。刺突は矢羽根のような文様を意識しているようである。垂下口縁部には流水文を施したのち、円形浮文を接着する。胴部の内面は全体的にススが付着している。庄内式期古段階に属する。100は加飾性複合口縁壺である。頸部内面にハケを施す。複合口縁の一次口縁部には円形浮文を接着する。庄内式期古段階に属する。101は広口壺である。口縁部に刻み目をいれる。庄内式期古段階に属する。102は加飾性複合口縁壺の口縁部である。波状文を2条施す。施文ののち口縁端部付近に小円孔を2つセットで開ける。庄内式期古段階に属する。103は加飾性垂下口縁壺の口縁端部である。凹線を施文したのち、円形浮文を接着する。104から106は細頸直口壺である。106のみ外面調整はハケを施す。いずれも庄内式期古段階に属する。107は土師器の壺である。口縁部は直立気味であり、あまり開かない。頸部に接合痕が残る。調整は内外面ともハケのちミガキを施す。庄内式期に属する。108は土師器の壺である。胴部径は16.4cmを測る。細頸直口壺とするには頸部が太く口縁が短い。外面調整は工具によるナデを施す。弥生時代後期後半新段階に属する。109は広口壺か複合口縁壺の口縁部である。110は広口壺である。庄内式期古段階に属する。111・112は細頸直口壺の胴部と考えられる。111は胴部径13.4cmを測る。ケズリにより成形する。外面の一部にススが付着する。112は胴部径11.0cmを測る。外面調整はミガキおよびナデを施す。どちらも庄内式期古段階に属する。113から117は壺の底部である。113はタタキで成形したのちナデとミガキでタタキ痕を消している。115はミガキが横方向である。116は摩滅しているが縦方向のミガキもしくはナデを施す。いずれも庄内式期に属する。

118から129は大型から中型の弥生形甕である。119は口縁端部に刻み目をいれる。120は口縁端部を摘み上げ、受口状にしている。頸部から口縁部にかけて左斜め上方向の板ナデを施している。126は胴部径21.4cmを測る。127は胴部径23.4cmを測る。128は胴部径21.2cmを測る。時期はいずれ

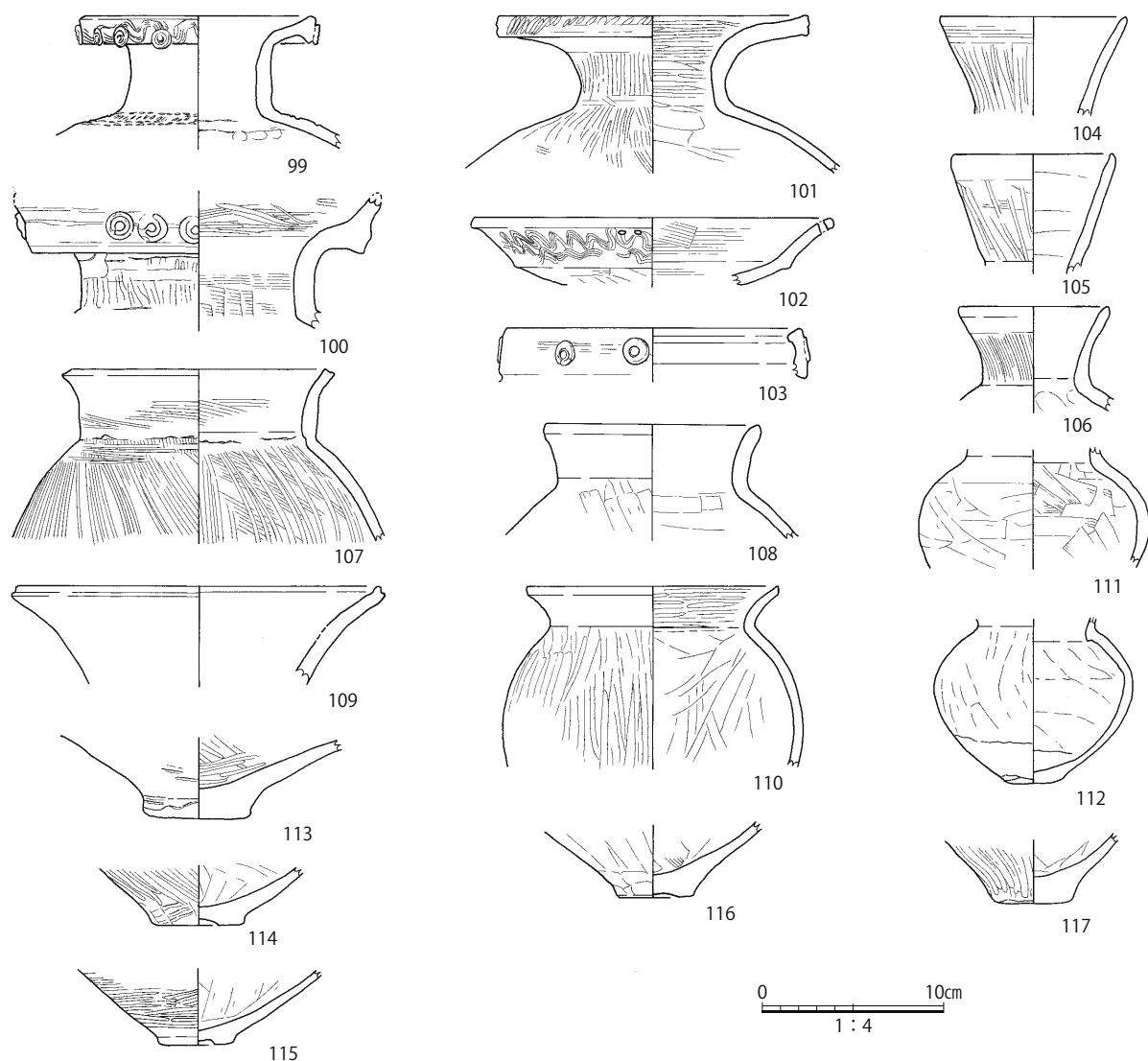


図29 3区第5層出土遺物（壺）

も庄内式期古段階に属する。130・131は形態を見れば甕に属するが、外面調整がミガキであり、壺に属する可能性もある。本報告では弥生形甕としておく。130は口縁部内面にもミガキを施す。131は胴部径21.6cmを測る。内面調整はコビナデを施す。

132～139は小型の弥生形甕である。132は胴部径12.0cmを測る。外面調整のタタキがほぼ横方向に施される。133は胴部径10.1cmを測る。136は胴部径14.6cmを測る。内面調整は板ナデを施す。137は胴部径16.2cmを測る。138は胴部径15.2cmを測る。外面にはタタキのちユビオサエやユビナデを施した痕跡が随所にある。内面調整はケズリを施す。胴部の外面と底部付近の内面にススが付着する。135は胴部径12.4cmを測る。いずれも庄内式期古段階に属する。140・141は弥生形甕か小型鉢の底部である。140は外面の一部にユビオサエを施す。142・143は小型鉢Cである。どちらも内面調整は板ナデを施す。庄内式期古段階に属する。144から147は小型鉢の胴部から底部である。144は胴部外面にナデを施す。内面にはミガキを施している。147は胴部径7.9cmを測る。内面調整はナデを施す。いずれも庄内式期古段階に属する。148は小型鉢Bである。外面調整はミガキ、内面調整はケズリのちナデを施す。庄内式期古段階に属する。149・150は小型鉢の底部である。150は内面にススが付着する。151・152は小型鉢の底部である。外面調整はミガキ、内面調整は板ナデを施す。

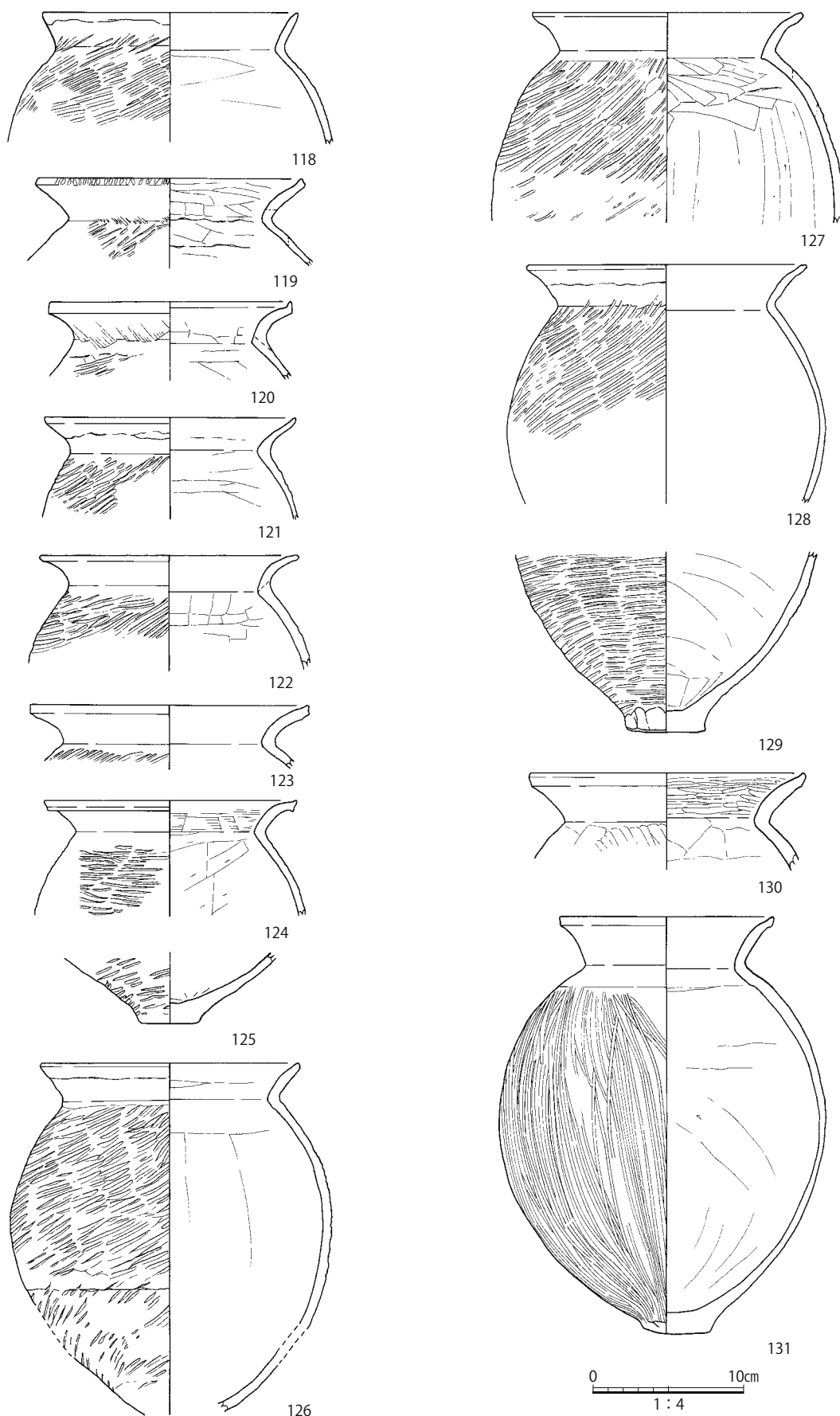


図30 3区第5層出土遺物（甕その1）

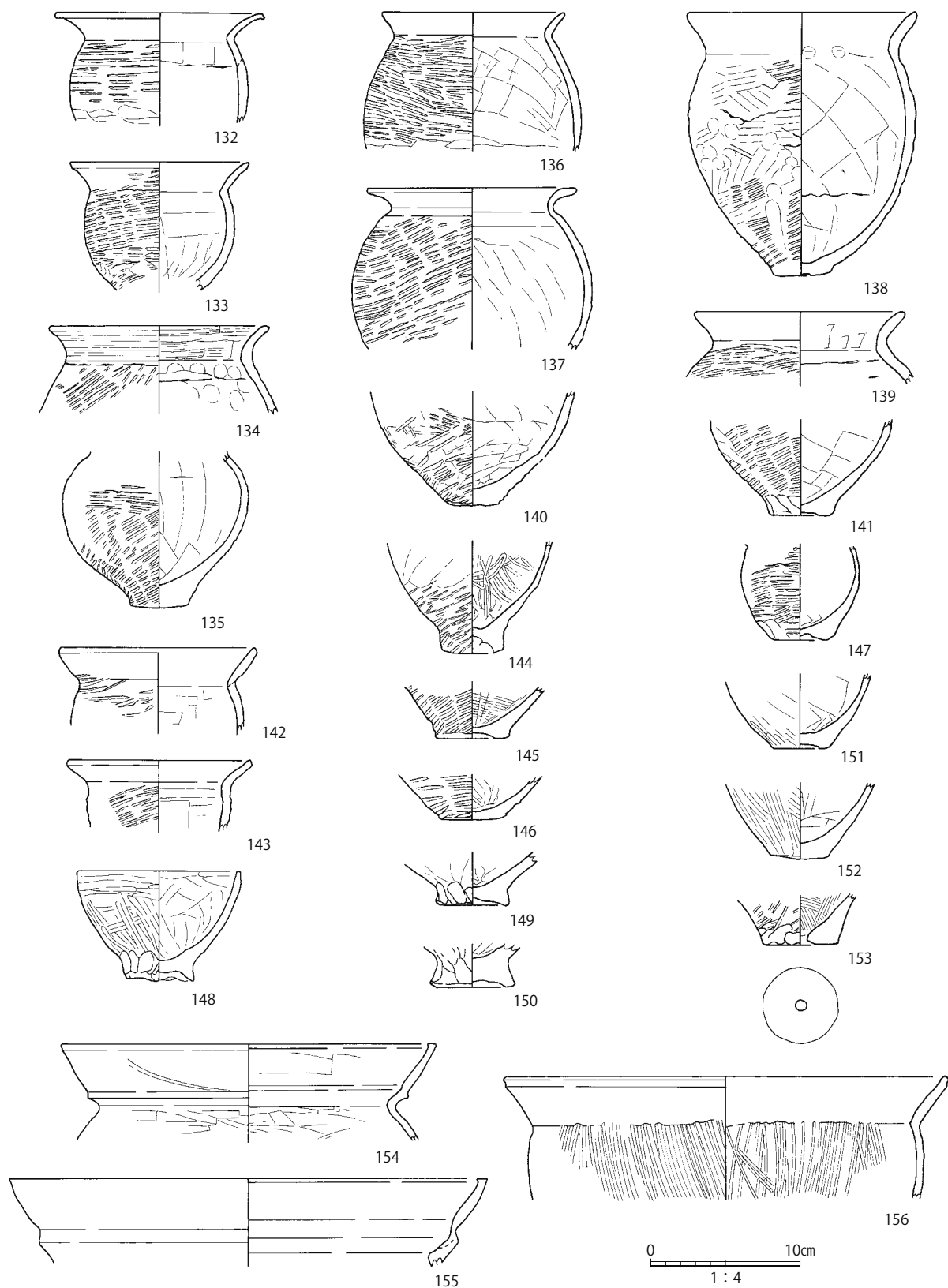


図31 3区第5層出土遺物（甕その2・鉢）

153は有孔鉢である。156は中型鉢Aである。口縁端部の外面に沈線をいれる。胴部の外面調整はミガキ、内面調整は板ナデのちミガキを施す。内面にススが付着する。庄内式期古段階に属する。154・

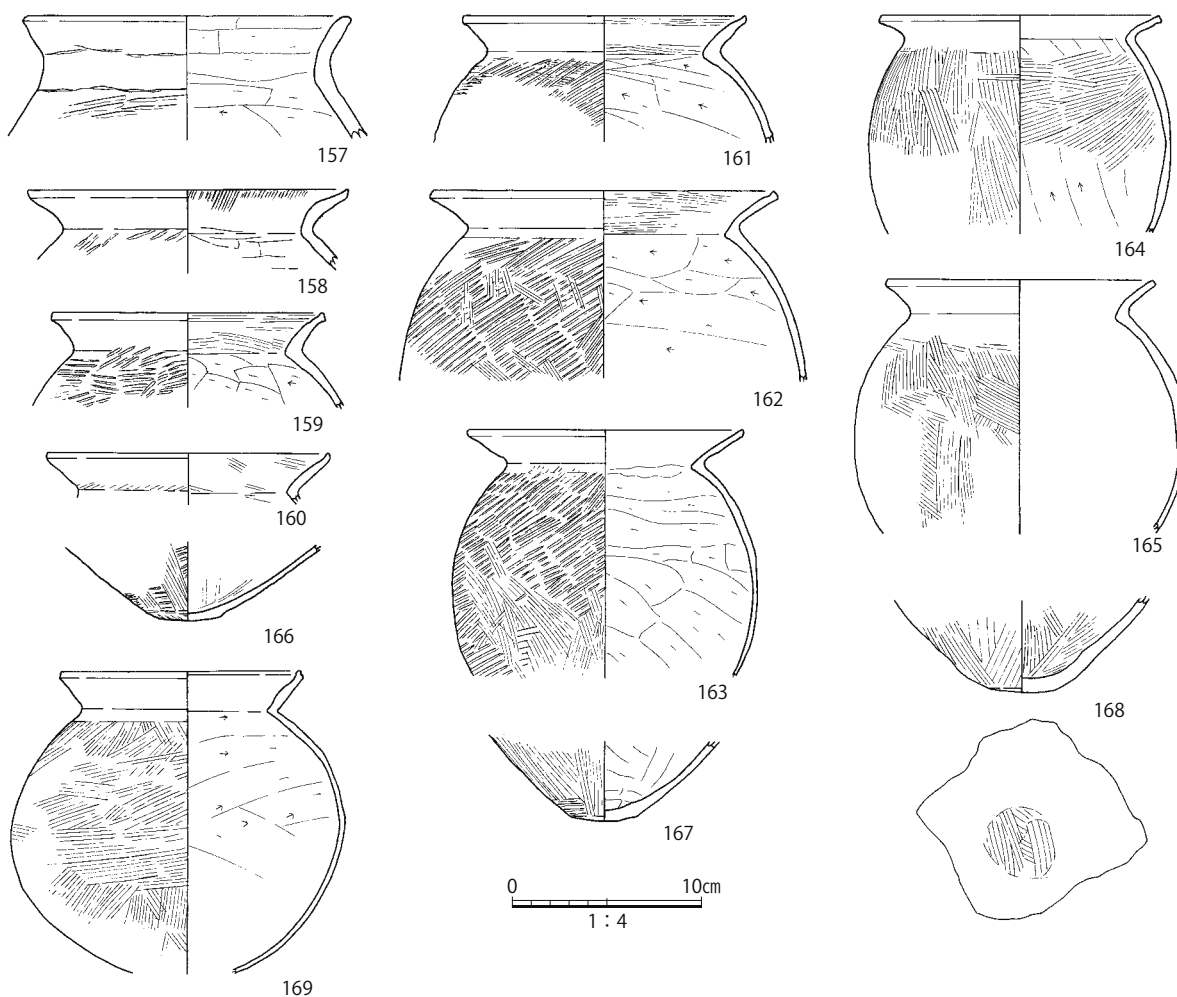


図32 3区第5層出土遺物（甕その3）

155 は庄内形甕の口縁部である。口縁部の形状と口径から規格は特大と考えられる。154 は外面調整に横方向の板ナデ、内面調整に不定方向のケズリを施す。布留式期古段階に属する。

157・158 は弥生形甕の異形甕である。158 は口縁部内面に櫛描文をいれる。胴部の内面調整は横方向の板ナデを施す。159 から 163 は庄内形甕である。162 は胴部径 21.6cm、163 は胴部径 16.2cm を測る。いずれも庄内式期古段階に属する。164・165 は布留祖型甕である。164 は胴部径 16.0cm を測る。外面調整は荒いハケを施す。165 は胴部径 17.4cm を測る。外面調整はハケ、内面調整はケズリを施す。庄内式期古段階から中段階に属する。166 から 168 は庄内形甕の底部である。169 は庄内形甕である。胴部径は 17.5cm を測る。布留式期古段階に属する。

170・171 は有稜高坏の坏部である。171 は外面の一部にミガキ前のハケが残る。172 は有稜高坏の脚部である。脚部に円形透孔を四方に開ける。脚部と坏部の接続部付近に工具か爪の当たった痕跡がある。いずれも庄内式期古段階に属する。173 は椀形高坏の坏部である。脚部に円形透孔を三方に開ける。174 は椀形高坏の脚部である。内面と底部外面の一部にススが付着する。外面は摩滅している。いずれも庄内式期古段階に属する。175 は椀形高坏と思われる。坏部に段を設け、横方向のミガキを施す。庄内式期古段階に属すると考えられる。176 から 183 は高坏の脚部である。176 は椀形高坏の可能性はある。脚部にハケの痕跡がある。177 は脚部に円形透孔を四方に開ける。178 は摩滅しているが、外面にハケがわずかに確認できる。179 は有稜高坏と思われる。円形透孔を四方に開ける。外

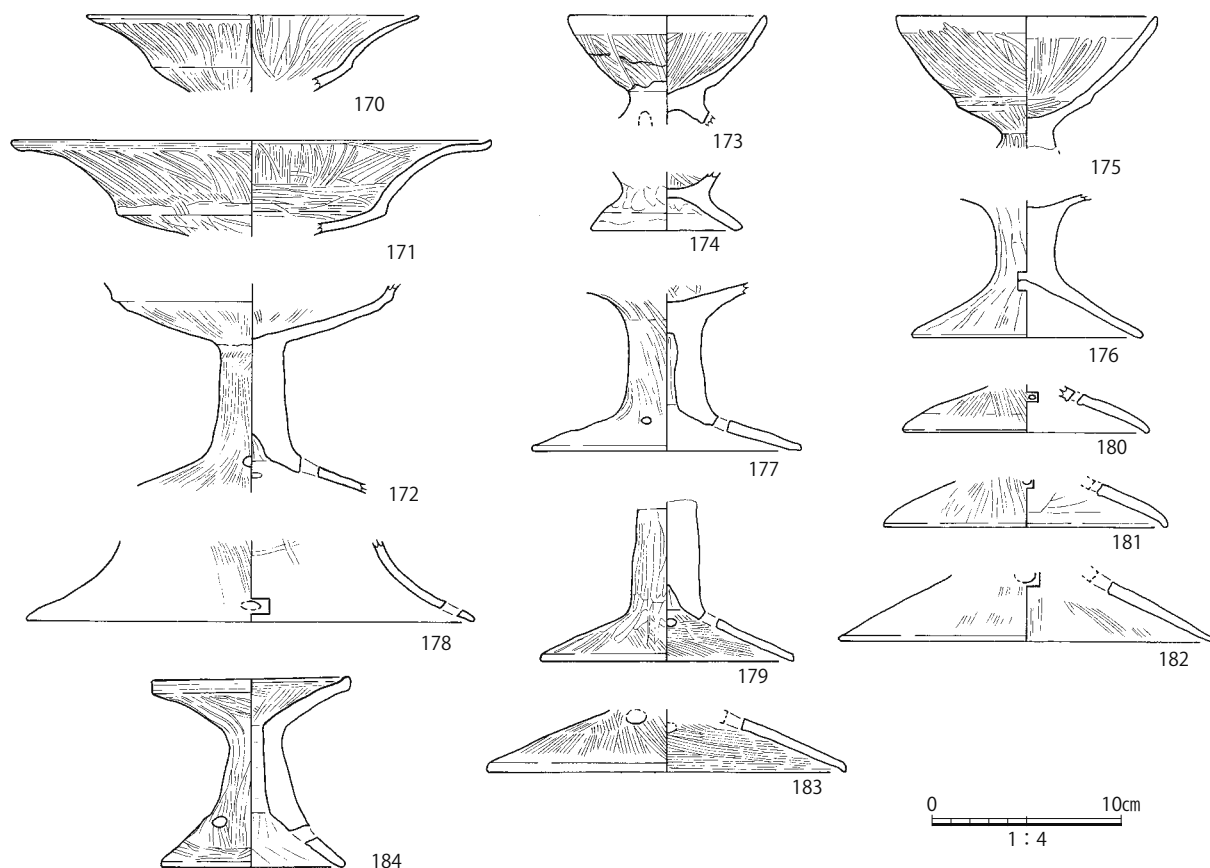


図33 3区第5層出土遺物（高坏・器台）

面にハケのちミガキ、内面にハケを施す。176・177・179は庄内式期古段階に属する。180から182は椀形高坏と思われる。180は円形透孔を四方に開ける。いずれも外面調整はミガキを施す。183は脚端部を内側にわずかに屈曲させる。外面はユビオサエで成形したのちハケを施す。内面調整はハケを施す。184は小型器台Aである。脚部に円形透孔を三方に開ける。脚部の内面調整は板ナデと思われる。

185は複合口縁壺Aである。胴部径は約27.0cmを測る。胴部の内面調整は下半にケズリ、上半にタテ・右斜め上方向のユビナデを施す。布留式期中段階に属する。186から188は直口壺B2である。188の口縁端部はわずかに外反している。胴部の内面調整は186・188がケズリを施すのに対し、187はユビナデとハケを併用している。布留式期中段階に属する。189から191は布留形甕Aである。布留式期古段階に属する。192から194は布留形甕である。192は胴部内面にケズリおよびユビナデを施す。内外面の一部にススが付着する。194は胴部内面にケズリを施す。外面には全体的にススが付着する。布留式中段階に属する。

195は庄内系高坏Aである。見込みに放射状のミガキを施す。196・197は庄内系高坏Bである。197は脚部に円形透孔を開ける。坏部内面のミガキは横方向に密に施したのち、縦方向に疎らに施す。脚柱部は縦方向のケズリを施したのち、横方向のミガキを密に施す。脚部と脚柱部の境目にタテハケが残存する。198・199は庄内系高坏Aである。どちらも脚部内面にハケを施す。いずれも布留式期古段階に属する。200から202は庄内系高坏Aである。基本的に外面調整は縦方向のミガキのち横方向のミガキを施す。201のみ脚部の内面調整がヨコナデである。いずれも布留式期中段階に属する。203・204は小型丸底土器Bである。どちらも外面調整はケズリを施したのち、横方向のミガキを施す。ただし底部付近にはミガキが施されていない。204の底部に線刻のようなものがある。どちらも布留式

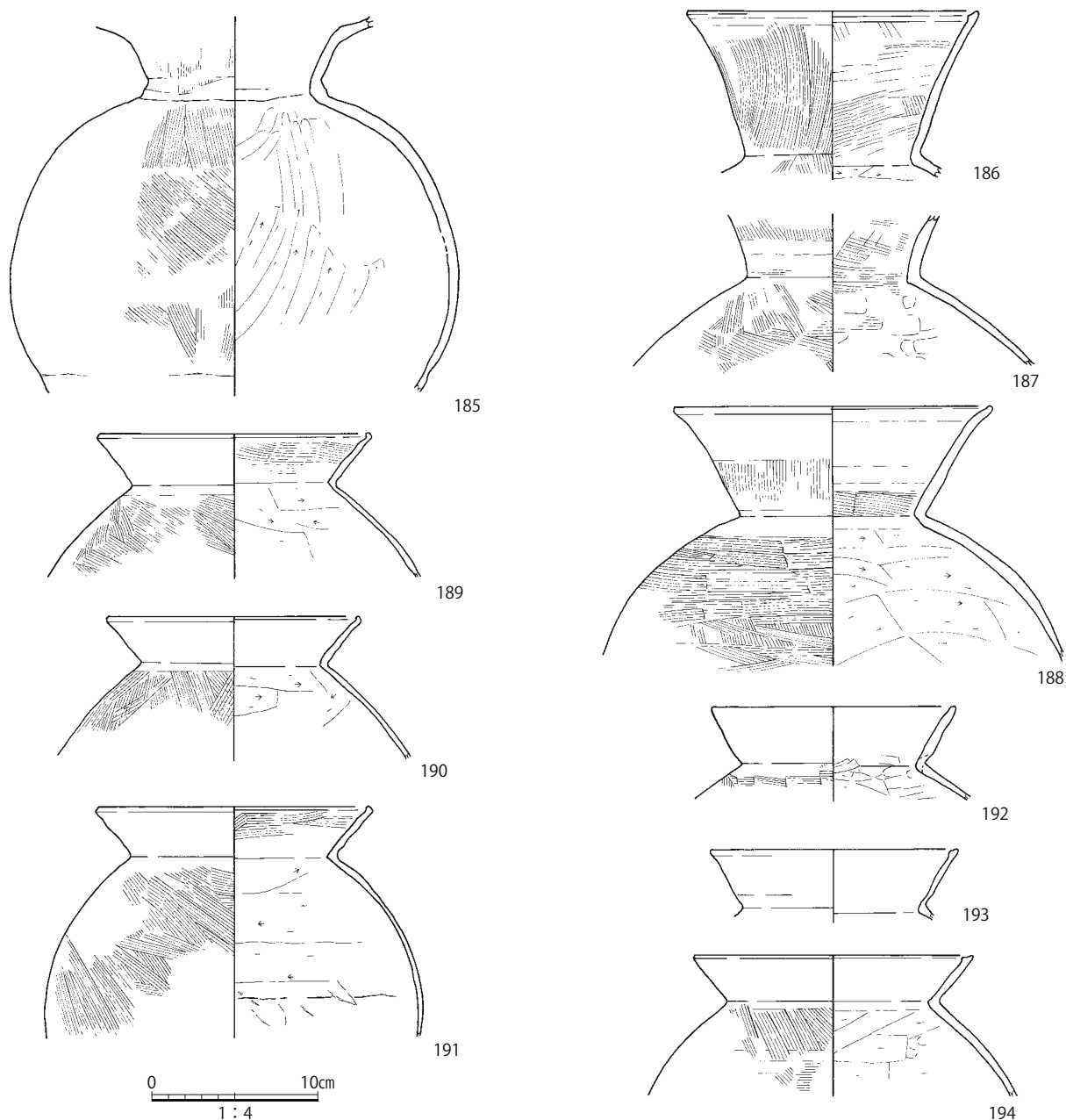


図 34 3区第5層出土遺物（壺・甕）

期中段階に属する。205 から 209 は小型器台 C である。205 のみ他と比べて小型である。205・209 は外面調整が横方向のミガキ、内面調整がハケを施すのに対し、206 から 208 は内外面とも縦方向のミガキを施す。いずれも布留式期中段階に属する。220 は石製品である。先端に使用面がある。反対側は破断面があり、本来はもう少し長かったと考えられる。

第4層 210 は有稜高坏の坏部である。庄内式期古段階に属する。211 は庄内形甕の口縁部である。212 は弥生形甕である。異形甕の類と考えられる。内外面とも調整はユビナデと一部に板ナデを施す。庄内式期古段階に属する。213 は布留形甕の口縁部である。214 は大型有段口縁高坏の坏部である。笹栗中 3a 期（TK216 型式併行期）に属すると考えられる。215 は無稜外反高坏である。脚柱部の下部に円形透孔を二方に開ける。外面調整はハケを施す。笹栗中 3a 期に属する。216 は甕の胴部と考えられる。格子タタキのようなタタキを施す。217 は須恵器の坏蓋である。口縁端部の外面にカキメを

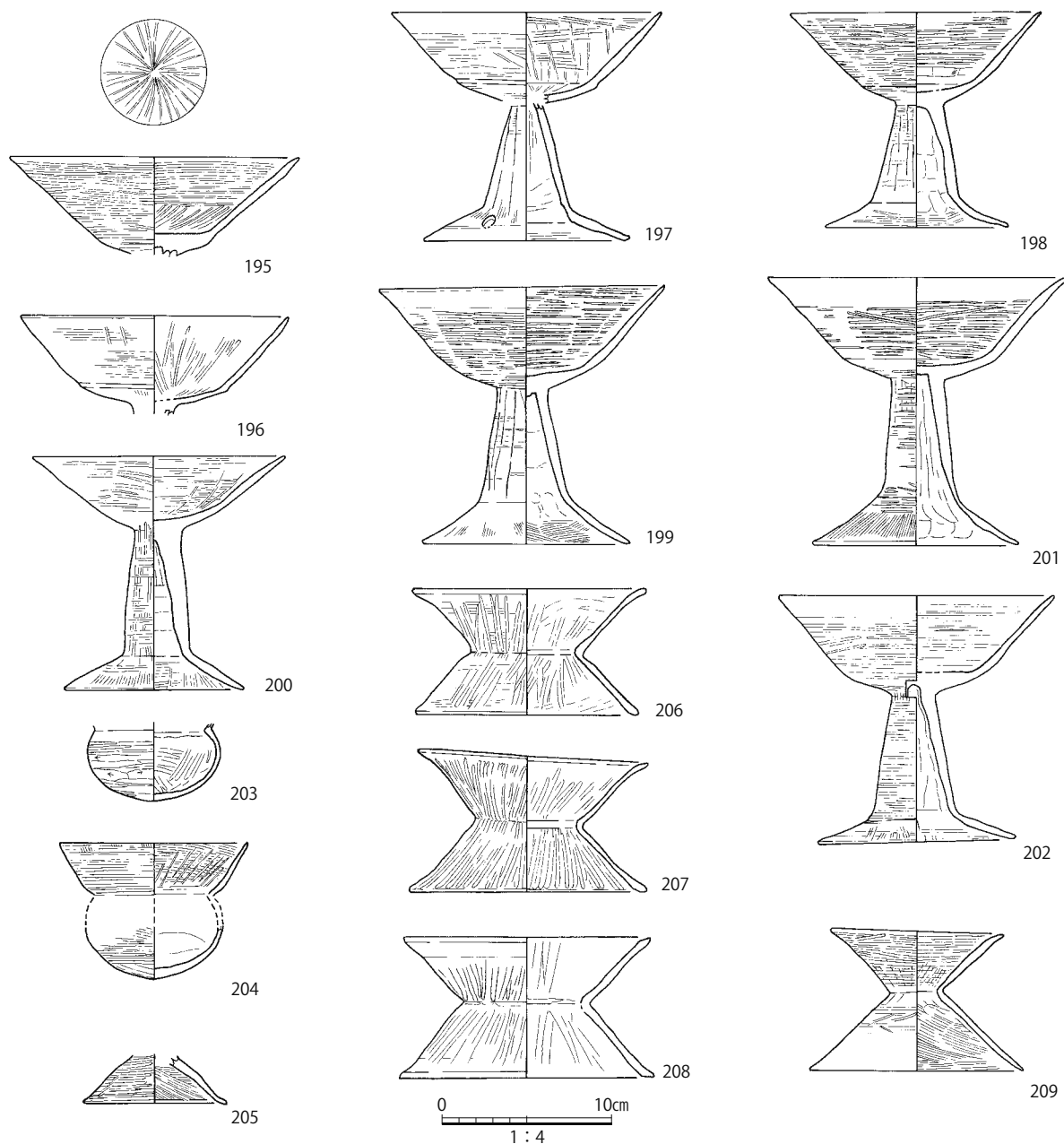


図35 3区第5層出土遺物（高坏・小型壺・器台）

施す。辻5期（TK10からTK43型式併行期）に属する。218は土師器の甕の口縁部である。難波宮IV期に属すると考えられる。221は第4層中から出土した準構造船の舷側板である。残存長78.6cm、残存幅12cm、残存厚3.8cmを測る。ほぞ穴が2つ穿孔されている。図面上側のほぞ穴は長さ9.8cm前後、幅2.4cm、下側のほぞ穴は長さ7.8cm、幅2.2cmを測る。上側のほぞ穴の中には樹皮が詰められていた。この樹皮は舷側板同土を束ねる際に使用したものと考えられる。樹種同定の結果、舷側板はスギ、樹皮はサクラの皮であることが判明した。古墳時代前期の層を対象として行った花粉分析ではスギ属の花粉が目立つため、遺跡周辺にはスギ属の林が存在していた可能性が指摘できる。舷側板に使用したスギも周辺から切り出してきたのであろう。

第3層 219は瓦質土器の底部である。時期は中世から近世である。

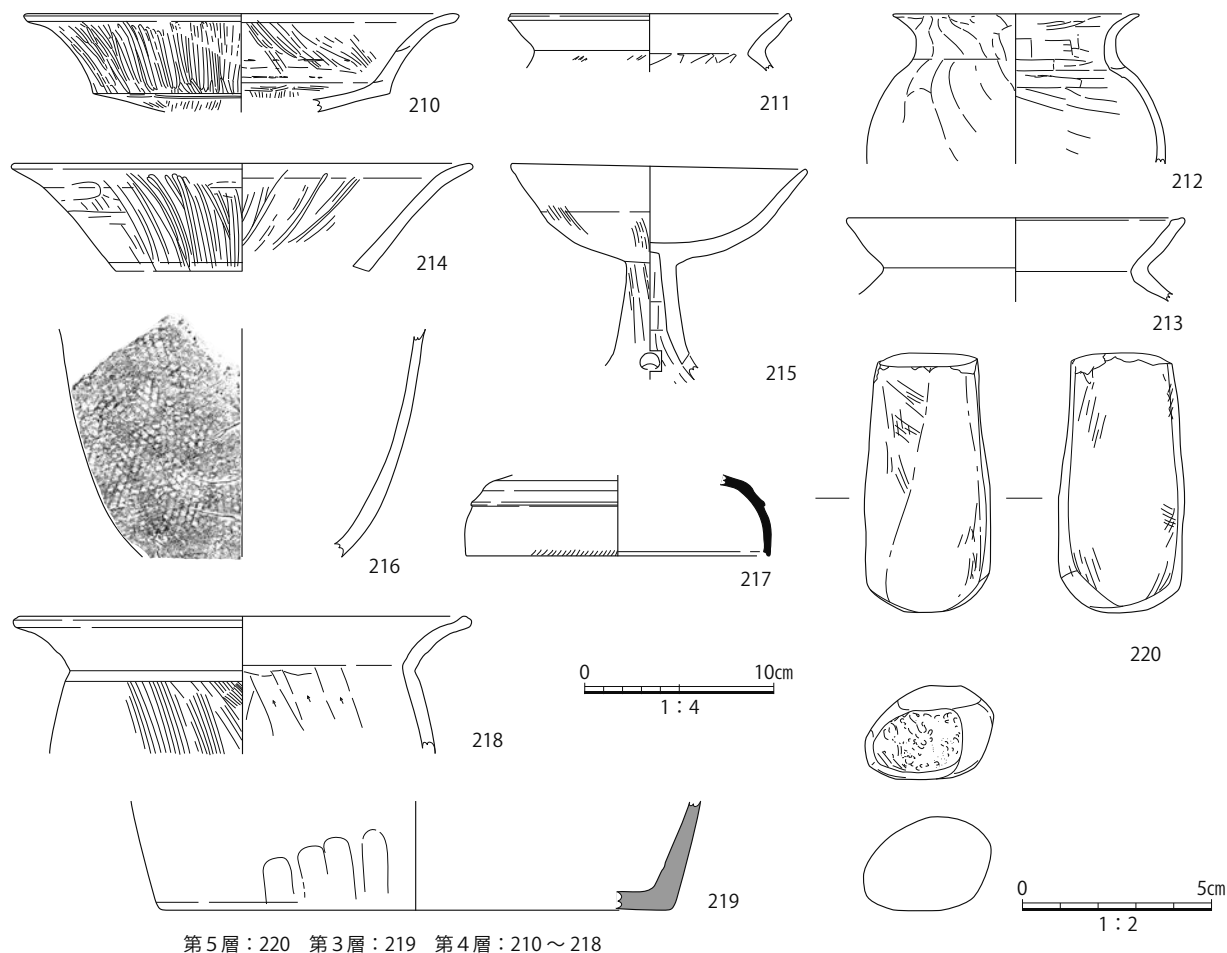


図36 3区包含層出土遺物

第4項 4区

(1) 検出した遺構

第5層上面 検出した遺構は土坑、溝である。土坑 138 は長さ 2.2m 以上、幅 1.2m 以上、深さ 8.1cm を測る。調査区外に続くため、全形は不明である。遺物は土師器の甕が出土している。土師器の特徴から時期は庄内式期古段階と判断する。溝 126 は長さ 2.36m 以上、幅 0.22m、深さ 7 cm を測る。北東から南西に向けて延びる溝で、両端は調査区外のため全形は不明である。遺物は土師器の甕が出土している。土師器の特徴から時期は庄内式期と判断する。溝 128 は長さ 2.26m 以上、幅 0.31m、深さ 15cm を測る。北西から南東に向けて延びる溝で、両端は調査区外のため全形は不明である。遺物は土師器の甕、鉢が出土している。土師器の特徴から庄内式期古段階に属すると判断する。

第4層上面 第4層上面の遺構は2区や3区に比べて希薄であり、また近世の攪乱を多く検出している。このことから4区は

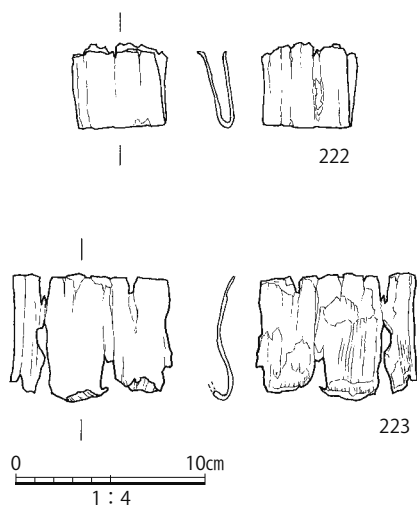


図37 舷側板のほぞ穴に詰められた樹皮

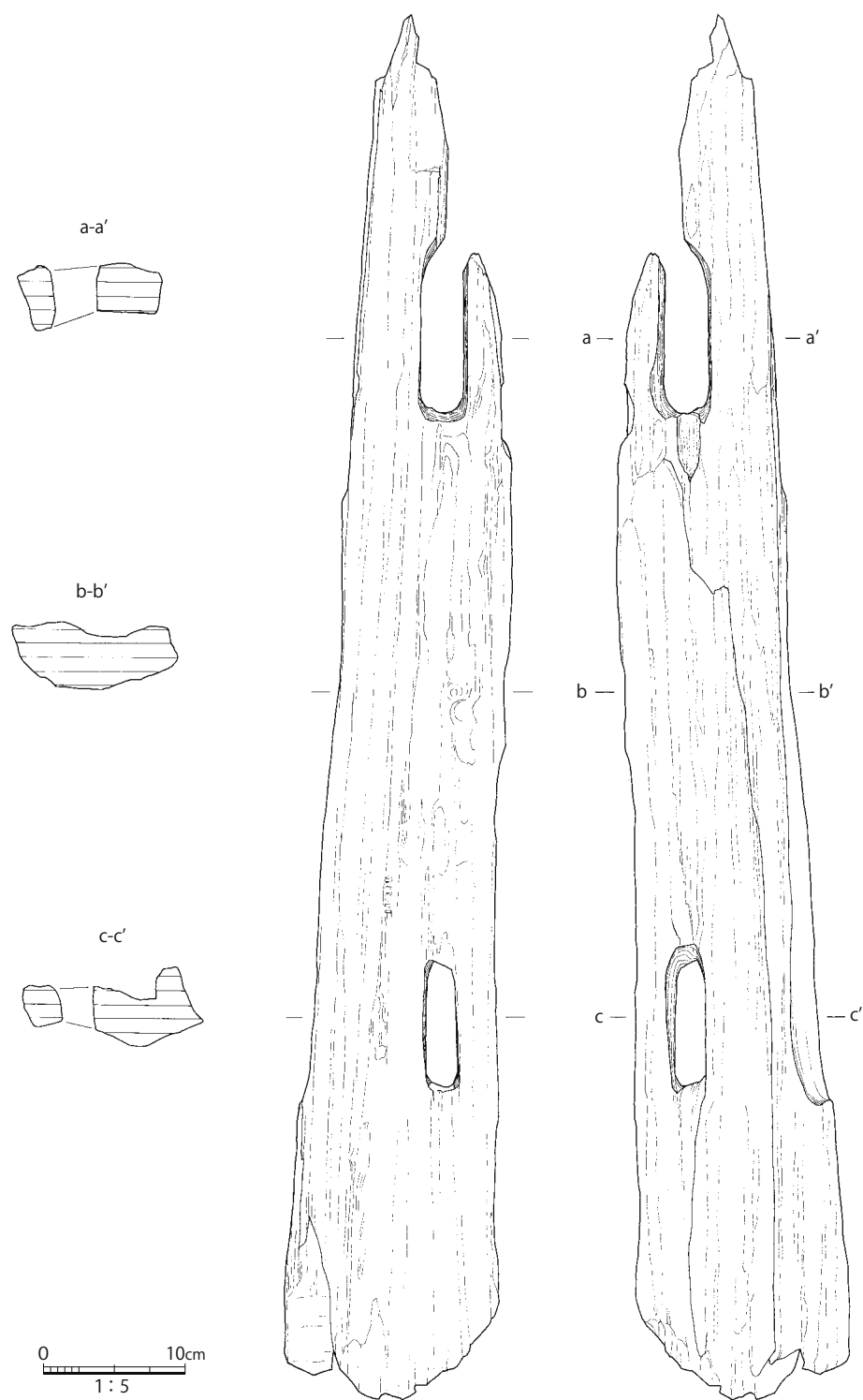


図38 第4層出土舷側板

221

近世の耕作により大きく改変を受けていると考えられる。

古代以降 検出した遺構は井戸である。井戸 103 は長さ 1.25m 以上、幅 2.10m、深さ 1.05m 以上を測る。近世に攪乱されているほか、遺構が調査区外にまたがるため全形は不明である。埋土から井戸枠に使用されたと考えられる曲物が出土した。遺物は土師器の高坏、甕、須恵器の坏身が出土している。須恵器は TK43 型式並行期のものであるが、曲物が出土していることから、この井戸の時期は古代以降

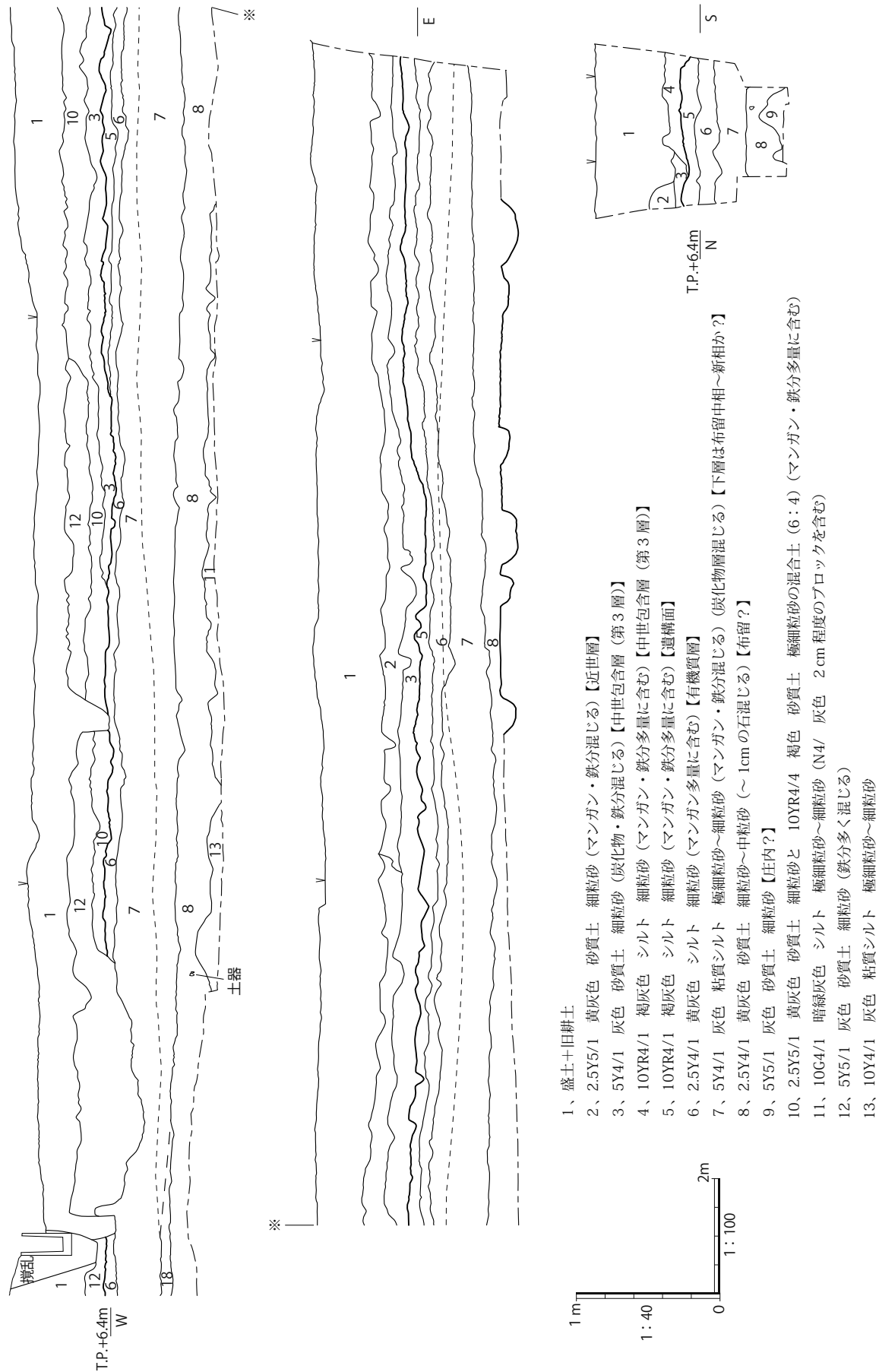


図 39 4区北・東壁土層断面図

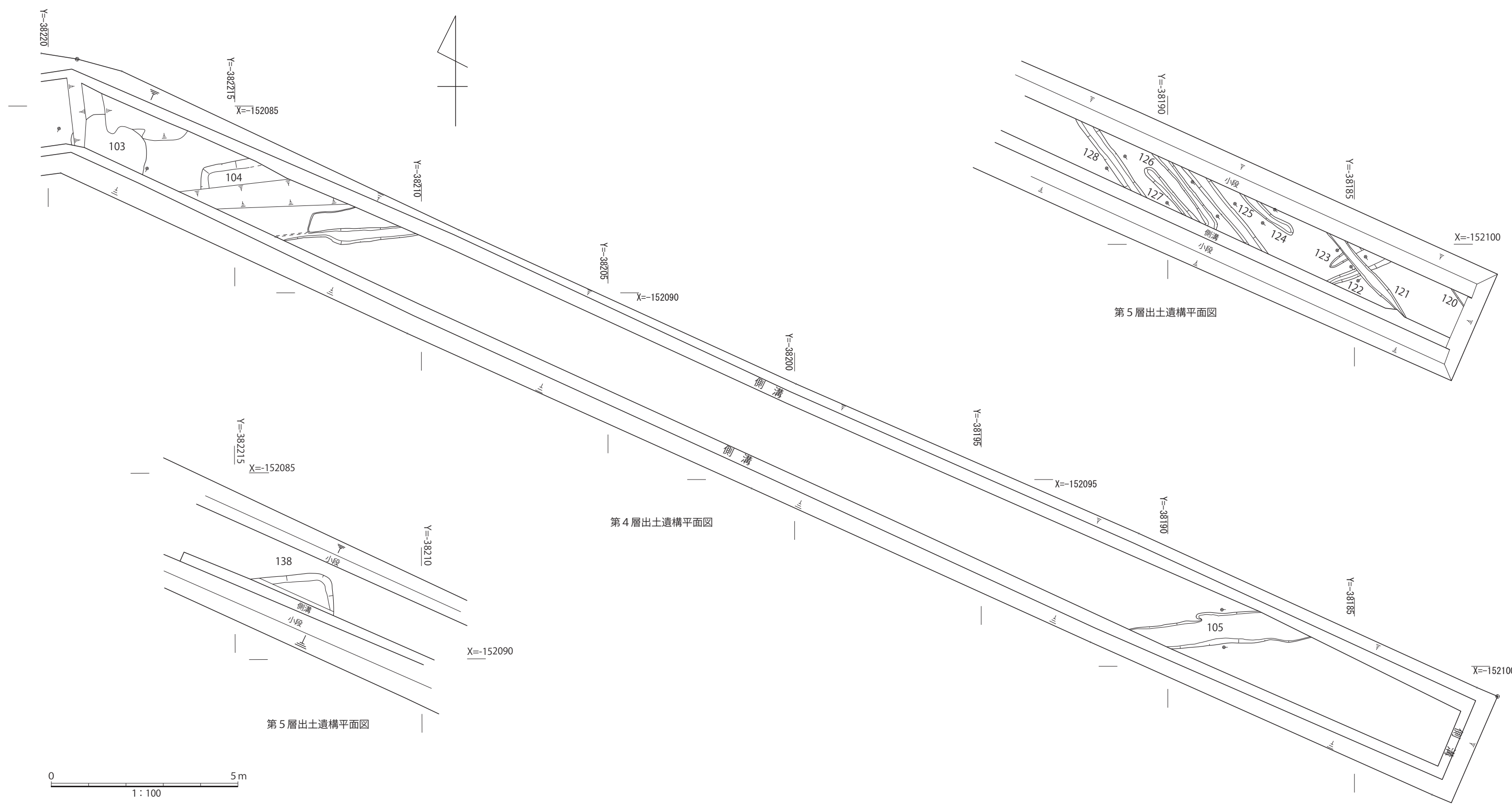


図40 4区遺構平面図

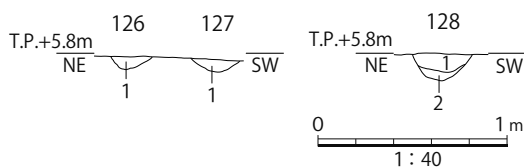
に降ると考えられる。

(2) 出土遺物

遺構出土 224 は弥生形甕の口縁部である。225 は壺の底部と考えられる。226 は小型鉢の底部である。227 は直口壺の口縁部と考えられる。228 は弥生形甕の底部である。いずれも小片であるが、時期は庄内式期に属すると考えられる。

第5層 229・230 は加飾性複合口縁壺の口縁部である。229 の外面調整はヨコナデ、内面調整はミガキを施す。文様は波状文を施したのち、円形浮文を2つ1組で接着する。口縁端部には刻み目を施す。230 は1次口縁の端部をわずかに垂下させる。調整は内外面ともミガキを施す。ユビオサエの痕跡が規則的に並ぶ。文様は円形浮文を接着するほか、口縁端部に竹管文を施す。両方とも庄内式期古段階に属する。231 は加飾壺の装飾部である。胴部の破片と考えられる。文様は波状文を施し、沈線で上下を挟む。232 は壺の底部と考えられる。233 は弥生形甕の口縁部である。胴部の内面調整はケズリを施す。234 は異形甕の口縁部である。胴部が膨らまず長胴気味である。胴部の内面調整はケズリのちミガキを施す。235 は弥生形甕である。胴部径は13.8cmを測る。庄内式期古段階に属する。236 から238 は弥生形甕の口縁部である。237 は口縁端部を摘み上げている。239 は弥生形甕の底部である。240 は高坏の脚部である。円形透孔を開ける。241 は椀形高坏の脚部である。内外面とも調整はハケである。円形透孔を四方に開ける。脚柱部の中心には直径1mm程の小さい穴が貫通している。庄内式期古段階に属する。242 は小型丸底土器Aである。全体的に摩滅している。胴部径は8.4cmを測る。外面調整はハケ、内面調整はケズリを施す。庄内式期新段階から布留式期古段階に属する。243 は有孔鉢である。内側から工具を差し込み、時計回りに切除して孔を開けている。244 は小型鉢Dである。胴部と口縁部の境目のみ横方向のミガキを施している。庄内式期古段階に属する。245 は大型鉢Aである。注口部を設ける。庄内式期古段階に属すると考えられる。246 は異形甕か鉢の口縁部である。胴部の内面は強いナデを施す。247 は手焙形土器である。胴部中央に突帯の剥離痕がある。剥離痕を境にして内外面とも調整が変化している。外面調整は上部に荒いハケ、下部にナデを施す。内面調整は上部にナデ、下部にハケを施す。庄内式期古段階に属する。

248 は細頸丸底壺である。胴部径9.1cmを測る。胴部の外面調整はナデ、口縁部の外面調整はハケ



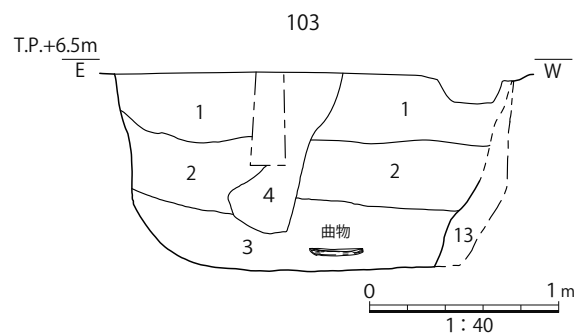
126・127

- 1、10Y4/1 灰色 シルト 粗砂～細粒砂と
5Y4/1 灰色 砂混じりシルト 粗砂～中粒砂の混合土
(鉄分含む)(6:4)

128

- 1、2.5Y3/1 黒褐色 シルト 細粒砂(鉄分含む)
2、7.5Y4/1 灰色 砂質土 中粒砂～細粒砂

図41 溝126・127・128断面図



- 1、10BG5/1 青灰色 シルトと
2.5Y8/1 灰白色 砂質土 細粒砂と
7/5YR6/6 橙色 砂質土 細粒砂の混合土(5:3:2)
2、N4/ 灰色 シルト(細粒砂混じる)と
2.5Y3/1 黒褐色 シルト(中粒砂～細粒砂多く混じる)
の混合土(6:4)
3、10BG5/1 青灰色 シルトと
2.5Y8/1 灰白色 砂質土 細粒砂の混合土(8:2)
4、2.5Y3/1 黒褐色 シルトと
2.5Y8/1 灰白色 砂質土 細粒砂の混合土(6:4)
(中粒砂～細粒砂多く混じる)

図42 井戸103断面図

を施す。布留式期古段階に属する。249 は底部穿孔壺である。胴部径は 13.8cm を測る。胴部下半の外面調整はケズリ、胴部上半はケズリのちナデを施す。内面調整は板ナデである。250 は布留形甕である。胴部の外面調整はハケを施す。251 は布留形甕 A である。胴部径は約 22.6cm である。胴部内面調整はケズリを施す。外面にススが付着する。布留式期古段階に属する。252 は布留祖形甕と考えられる。外面と内面の一部にススが付着する。253 は布留祖形甕と考えられる。器壁がやや厚い。胴部の調整

は外面にハケ、内面に板ナデを施す。254 は庄内形甕である。胴部の外面調整はタタキを施す。布留式期古段階に属する。255 は庄内形甕の口縁部である。256 は庄内形甕である。胴部の外面調整はタタキで一部にハケを施す。257 は庄内形甕である。胴部径は 20.4cm を測る。胴部の外面調整はハケである。内面の一部にススが付着する。庄内式期新段階から布留式期古段階に属する。258・259 は庄内系高坏 A である。258 は口縁部がひずんでいる。脚柱部はナデを施して面取りをしている。両方とも布留式

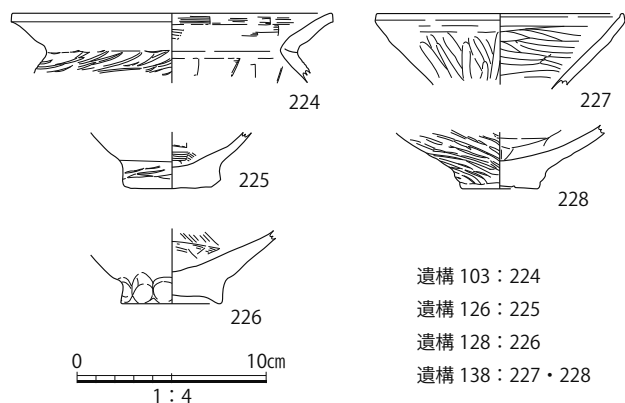


図 43 4区遺構出土土器

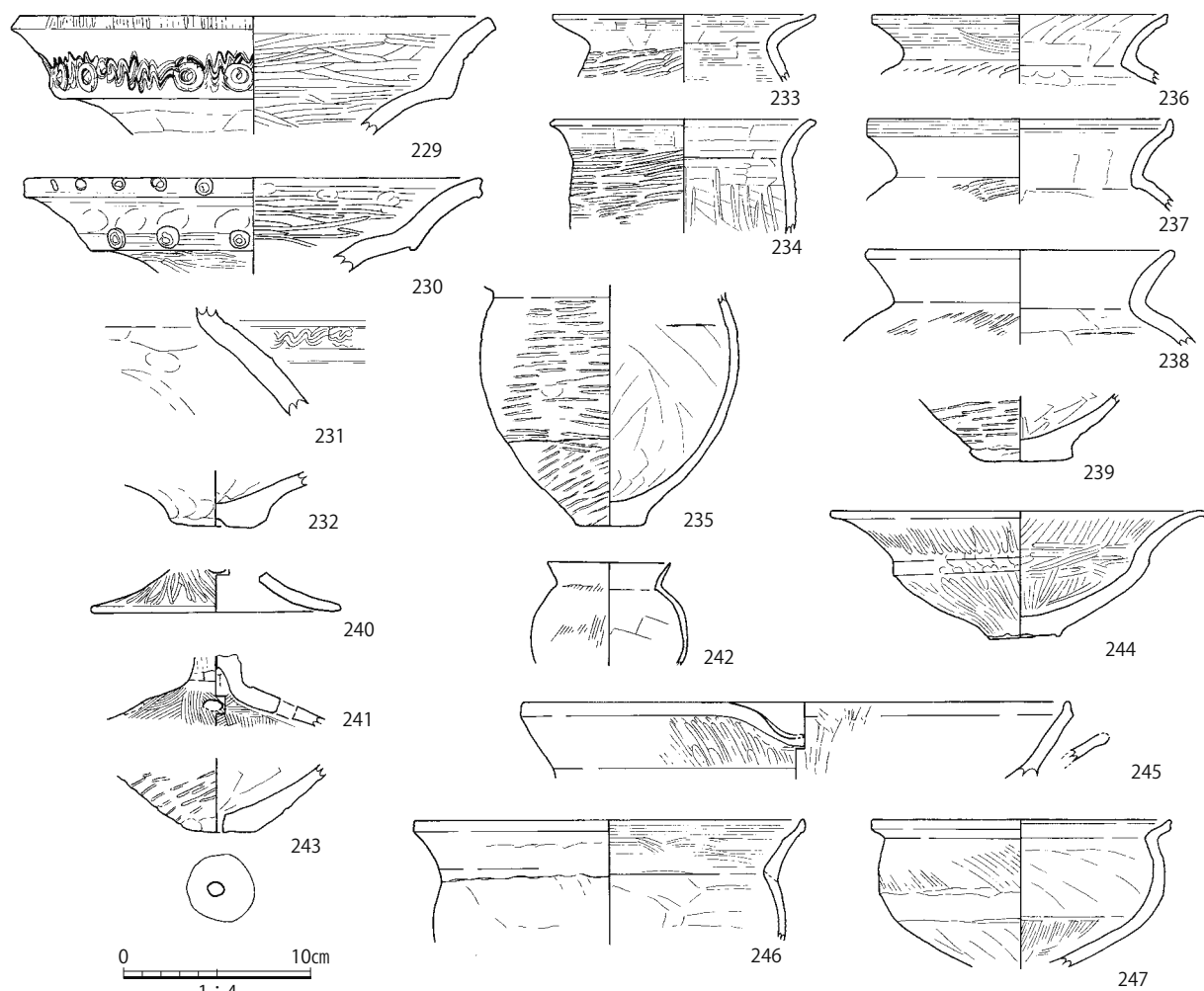


図 44 4区第5層出土遺物

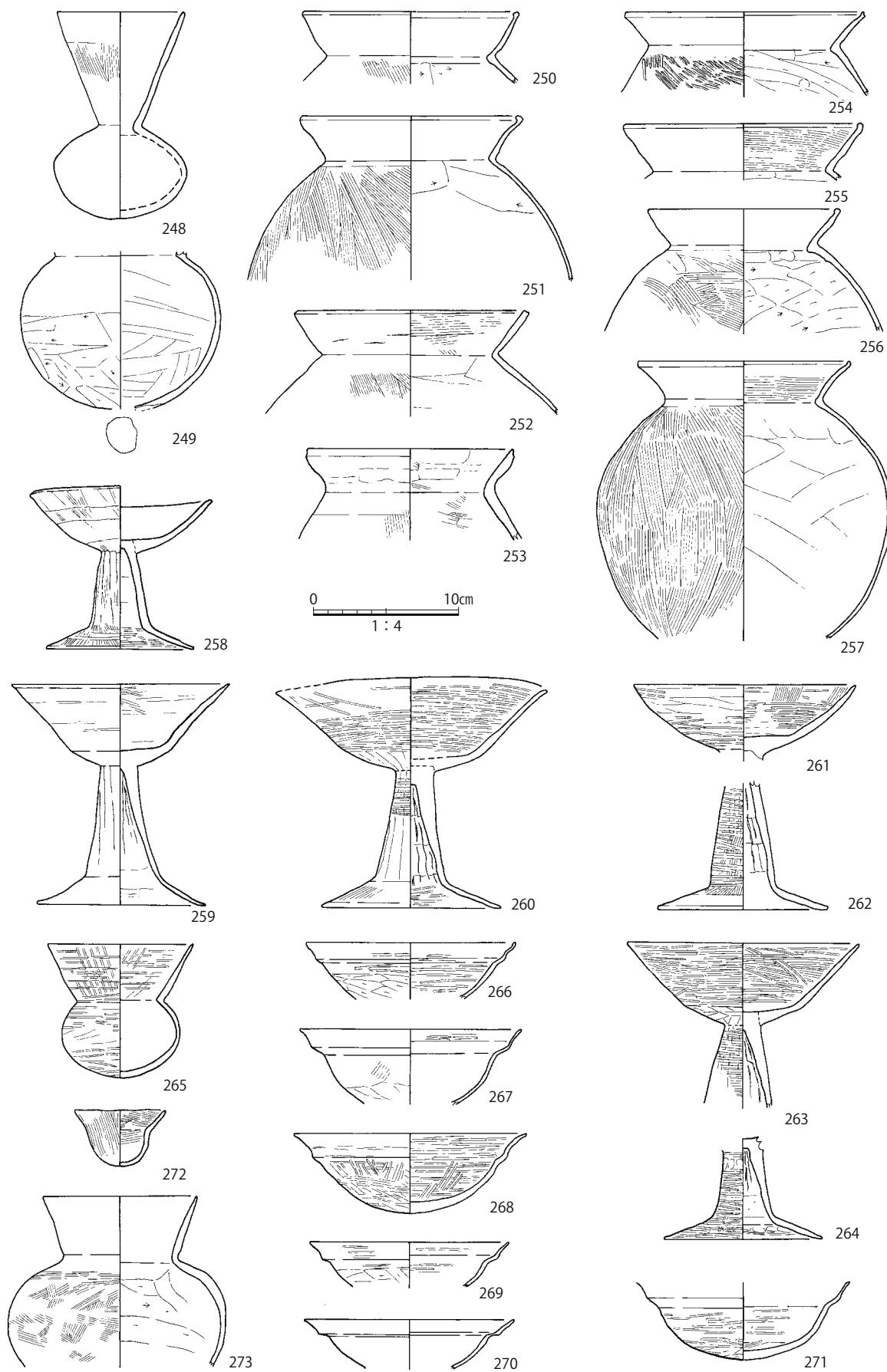


図45 4区第5層出土遺物（その2）

期古段階に属する。260 は庄内系高坏 A である。口縁部がひずんでいる。坏部の外面調整はハケのちミガキを施す。脚柱部は面取りしている。脚部の外面調整はハケのちナデを施す。布留式期中段階に属する。261 は庄内系高坏 B の坏部である。内外面とも調整はハケのちミガキを施す。262 から 264 は庄内系高坏 A である。262 は脚部である。脚柱部は縦方向のミガキで面取りしたのち、縦方向のハケのち横方向のミガキを施す。263 は坏部から脚柱部にかけてである。坏部は内外面ともミガキを密に施す。脚柱部の特徴は 262 と同じである。264 は脚部である。脚柱部は横方向のミガキを施している。ユビオサエの痕跡がある。脚部はハケのちミガキを施す。いずれも布留式期中段階に属する。265 は小型丸底土器 B である。外面調整と口縁部の内面調整はミガキ、胴部の内面調整は丁寧なユビナデを施す。口縁部のみ縦方向のミガキのち横方向のミガキを施している。布留式期中段階に属する。266 から 271 は有段口縁鉢である。外面調整はケズリのちミガキを施しているが、底部付近はミガキが荒いもしくは施しておらず、ケズリが消えていない。いずれも布留式期中段階に属する。272 はミニチュアの小型丸底土器である。胴部に黒斑がつく。内外面とも調整はハケを施す。布留式期の土器と同じ場所から出土している。

第4層 273 は直口壺である。内面調整は横方向のケズリのち縦方向のユビナデを施す。笹栗中 1b 期に属すると思われる。

第4節 5区・6区の調査成果

第1項 層序

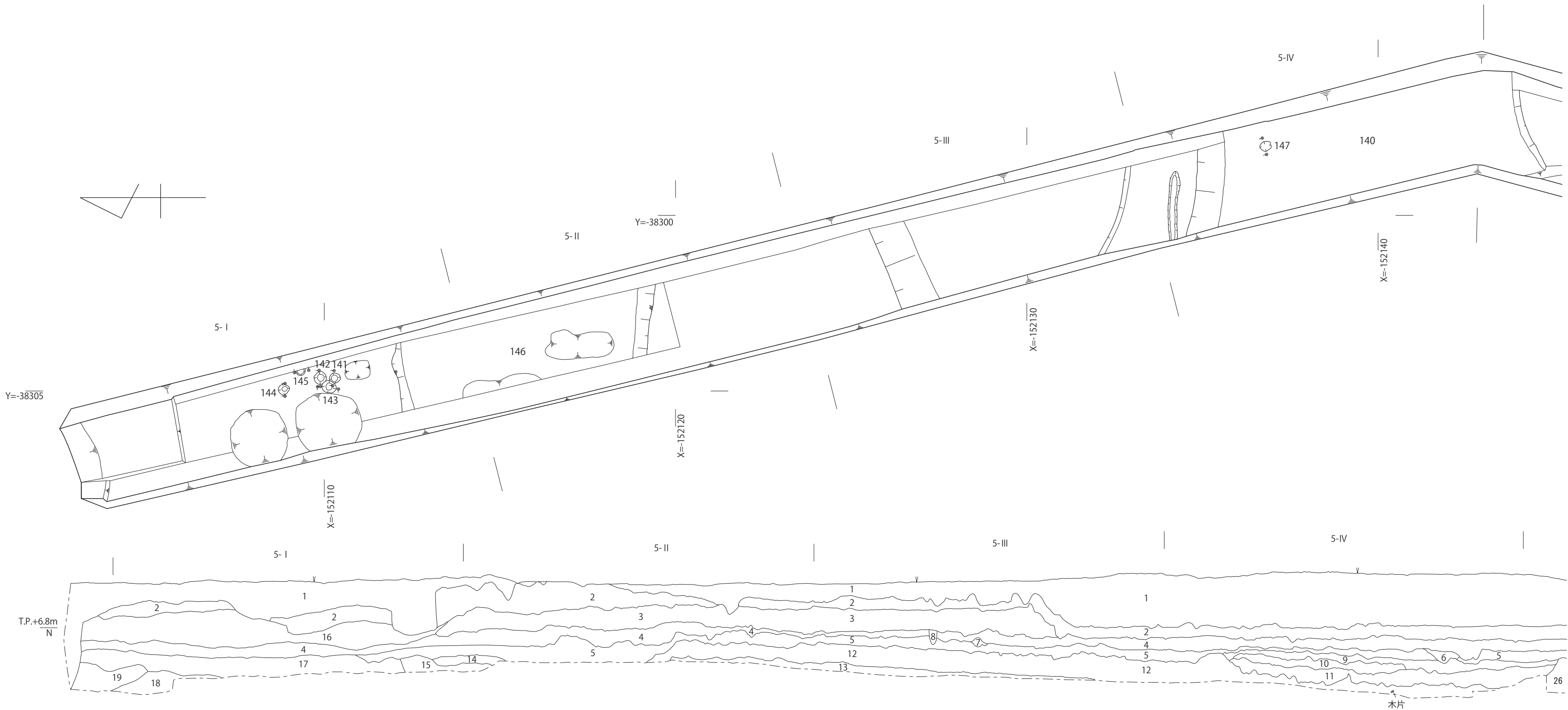
5区および6区の層序は上から順に盛土・現代耕作土層（第1層）、近代および近世耕作土層（第2層）、古墳時代堆積土層（第4層）である。中世から近世の層である第3層は確認できなかった。第4層は黄灰色の極細粒砂の砂質土およびシルトと、その下層の中粒砂の混じる灰色の細粒砂の砂質土およびシルトで構成されている。第5層との境を確認していないため全体の層厚は不明だが、確認できた厚さでおよそ 30cm から 40cm を測る（土色番号 13・15）。上面で近世の攪乱および中世、古墳時代の遺構を検出している。第4層上面の標高は5区で T.P.+6.5m 前後、6区で T.P.+6.5m 前後を測り、高低差はほとんどない。

第2項 5区

（1）検出した遺構

5区で検出した遺構はピット、溝である。他の調査区に比べて遺構は希薄であり、また近世の攪乱を多く確認している。このことから5区は近世の耕作により大きく改変を受けていると考えられる。

古墳時代中期 溝 140 は長さ 2.6m、幅 10.0m、深さ 33cm を測る、東西方向に走る溝である。両端は調査区外に延びる。埋土は細粒砂の灰色砂質土と、細粒砂混じりの黄灰色シルトである。土層断面の観察から自然流路か人為的に掘削した溝かを判別することはできなかった。溝の底からは土師器の平底鉢や韓式系土器、須恵器の坏身、高坏、木製品が出土した。出土状況から土器や木製品が意図的に設置された痕跡は認められなかった。木製品は板材やさしば形のものが出土している。板材にほぞ穴などは確認できない。複数の木製品で一部が炭化しており、被熱の痕跡が認められる。このことから、これらの木製品は火災に遭った木材を投棄したか、廃材を燃料として使用しその燃え殻を投棄した可能性が考えられる。自然科学分析から樹種はスギやマツ、コナラを使用しているほか、さしば形木製品はコウヤマキであることが判明した。また放射性炭素年代測定により、古墳時代中期頃の年代を示している。



- | | | | |
|---------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 1、盛土 | 6、10BG5/1 青灰色 粘質シルト 極細粒砂～細粒砂と | 10、2.5Y5/1 黄灰色 粘性シルト 細粒砂（0.2～0.5 cm大の礫がラミナ状に入る）＜遺構 140 埋土＞ | 15、2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト（中粒砂～細粒砂混じる）＜遺構埋土＞ |
| 2、旧耕地 | 2.5Y5/1 黄灰色 シルト 極細粒砂～細粒砂と | 11、2.5Y5/1 黄灰色 シルト 細粒砂＜遺構 140 埋土＞ | 16、5Y7/2 灰白色 砂質土 極細粒砂～細粒砂（鉄分少量混じる）＜近代？＞ |
| 3、5Y5/1 灰色 砂質土 極細粒砂～細粒砂と | 7/5YR4/4 褐色シルト 細粒砂の混合土（4：4：2） | 12、N4/ 灰色 砂質土 粗粒砂～中粒砂（0.3～3 cmの礫多く混じる）＜第1 検出面＞ | 17、2.5Y7/3 浅黄色 砂質土 中粒砂～細粒砂（マンガン混じる）＜第2 検出面（遺構面）＞ |
| N5/ 砂質土 細粒砂の混合土（7：3）（0.2～0.5 cm大の礫混じる）（鉄分・土器片多く混じる）＜近代＞ | 7、2.5Y6/2 灰黄色 砂質シルト 中粒砂～細粒砂（中粒砂がラミナ状に入る）＜近世？＞ | 13、2.5Y6/2 灰黄色 砂質土 粗粒砂～中粒砂＜河川堆積＞ | 18、2.5Y8/2 灰白色 砂質土 細粒砂＜河川堆積砂層＞ |
| 4、5Y5/1 灰色 砂質土 細粒砂（～1 cmの小礫混じる）＜近世＞ | 8、10YR4/1 褐灰色 砂質土 砂質土（鉄分・炭化物混じる）＜近世＞ | 14、5Y6/1 灰色 砂質土 砂質土～極細粒砂に | 19、2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土 中粒砂～細粒砂＜河川堆積砂層＞ |
| 5、5Y5/1 灰色 粘質シルト 細粒砂（鉄分混じる）＜中世＞ | 9、5Y5/1 灰色 砂質シルト 細粒砂＜中世？＞ | 10YR4/1 褐灰色 砂質土 極細粒砂のブロック混じる）＜遺構埋土＞ | 26、7.5Y5/1 灰色 砂質土 中粒砂～細粒砂（炭化物混じる）＜第1 検出面（6 I 区北）（古墳？）＞ |

図 46 5 区遺構平面図・東壁土層断面図

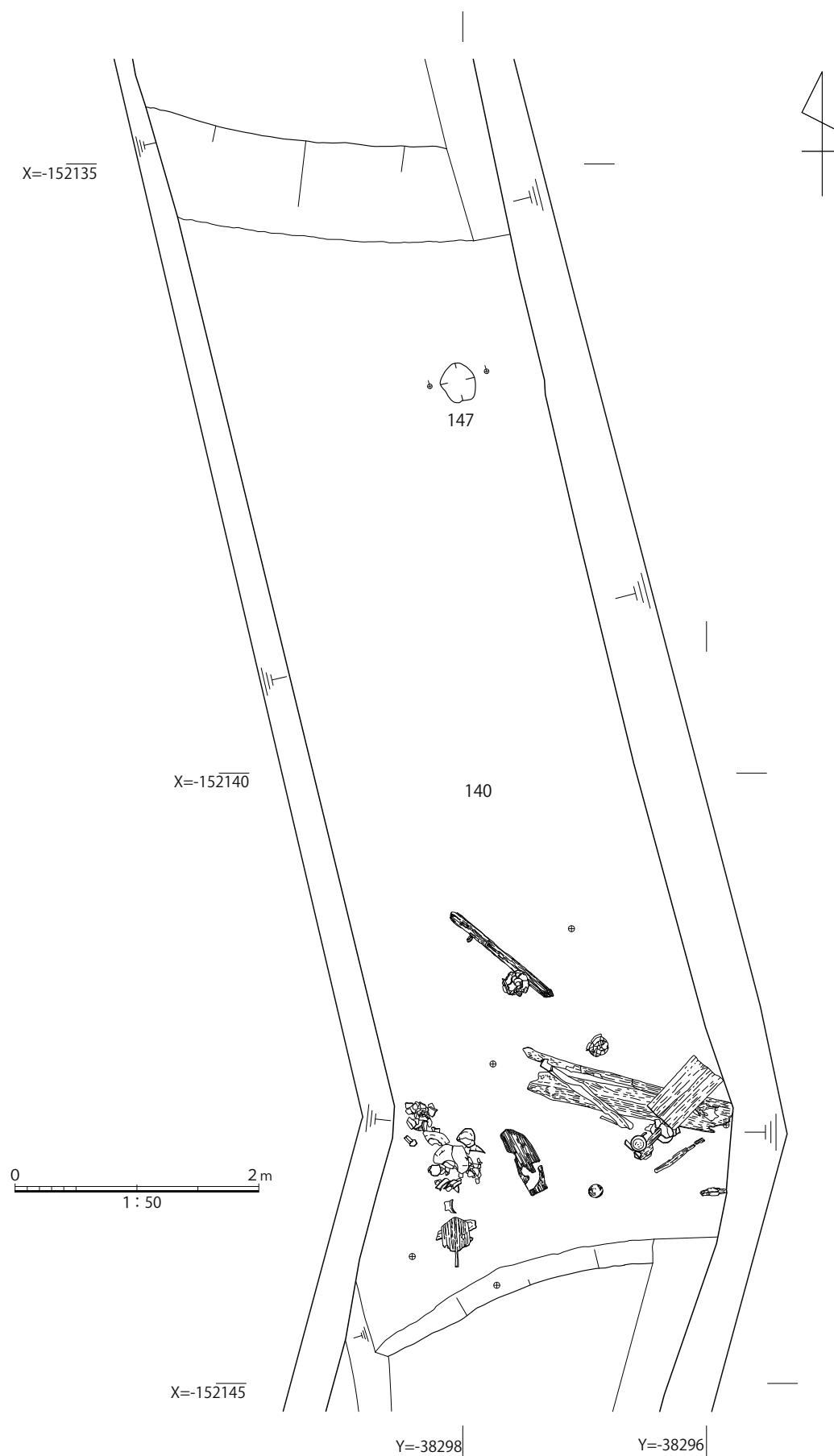


図 47 溝 140 平面図

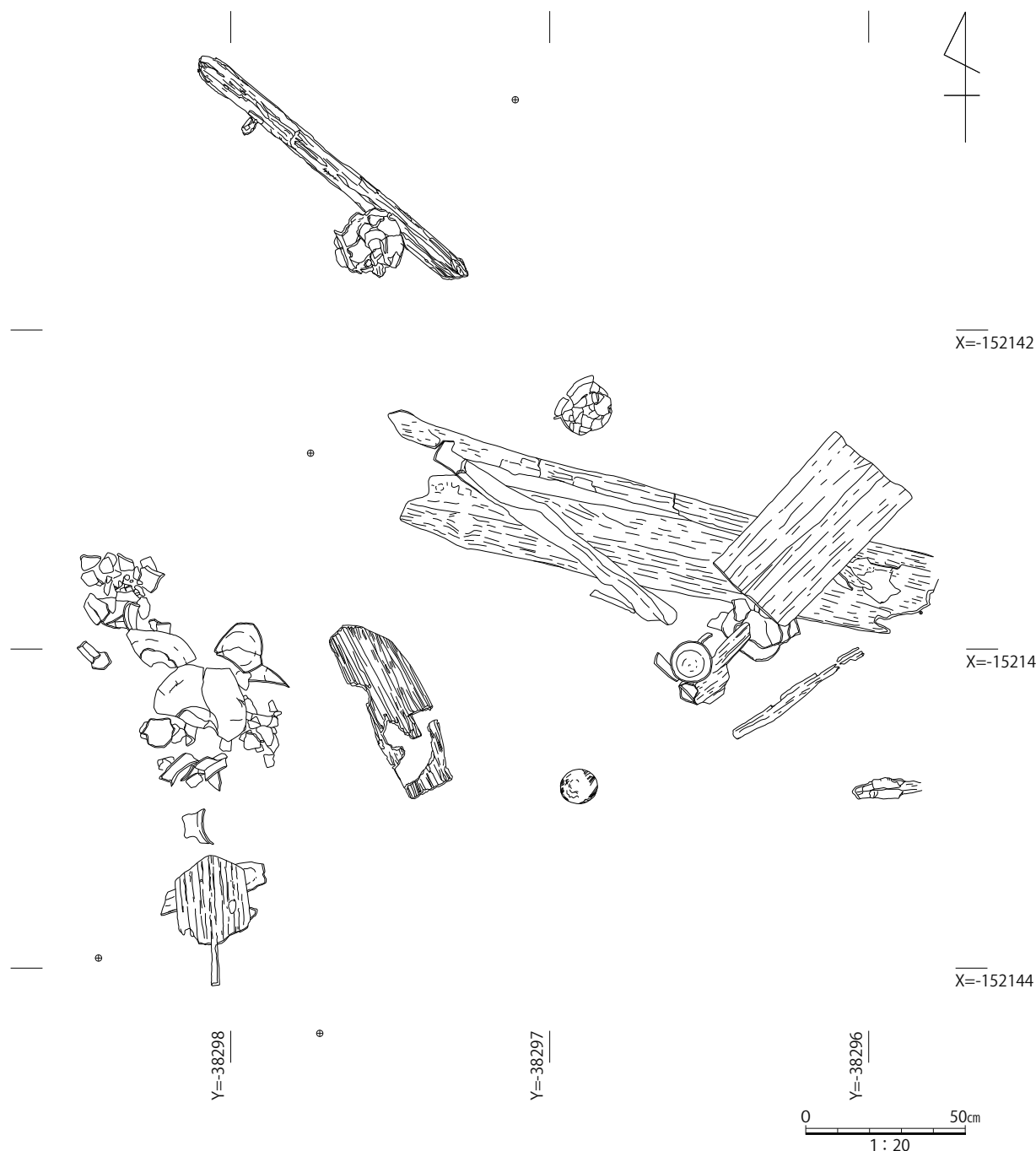


図 48 溝 140 遺物出土状況図

詳細は第4章で報告する。須恵器の特徴や年代測定の結果から時期は古墳時代中期（TK73 から TK216 型式並行期）と判断する。

中世 溝 146 は長さ 2.0m 以上、幅 7.1m、深さ 16cm を測る、東西方向に走る溝である。埋土は細粒砂から極細粒砂の暗灰黄色砂質土と、粗粒砂の混じる極細粒砂の灰色砂質土である。土層断面の観察から自然流路か人為的に掘削した溝かを判別することはできなかった。遺物は土師器、須恵器の大甕、瓦器碗、土師質の羽釜、瓦が出土している。遺物から時期は中世に属すると判断する。

(2) 出土遺物

遺構出土 274 は二重口縁壺の口縁部である。外面は摩滅している。内外面とも調整はヨコナデを施

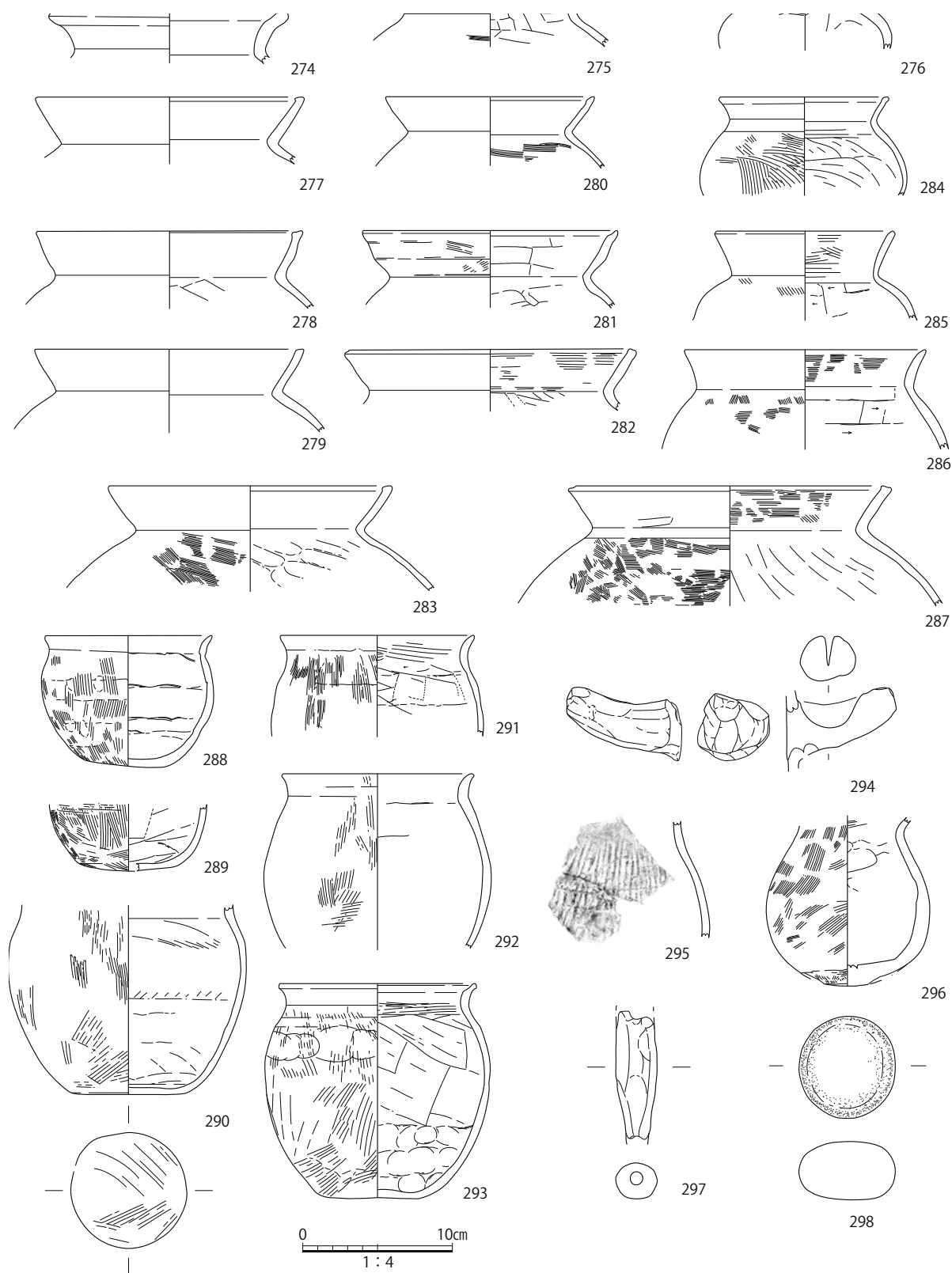


図 49 溝 140 出土遺物

す。笹栗中 1b から中 2 期（TG232 型式から TK73 型式期）に属する。275 は外反口縁壺である。外面は摩滅している。胴部の一部に横方向のハケが確認できる。胴部の内面調整は不定方向のナデを施す。

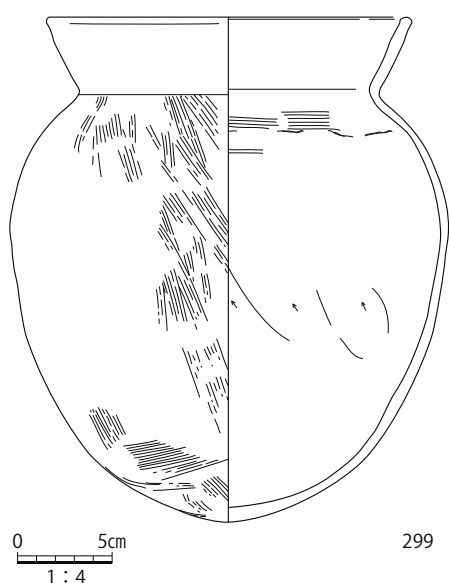


図 50 溝 140 出土布留形甕復元図

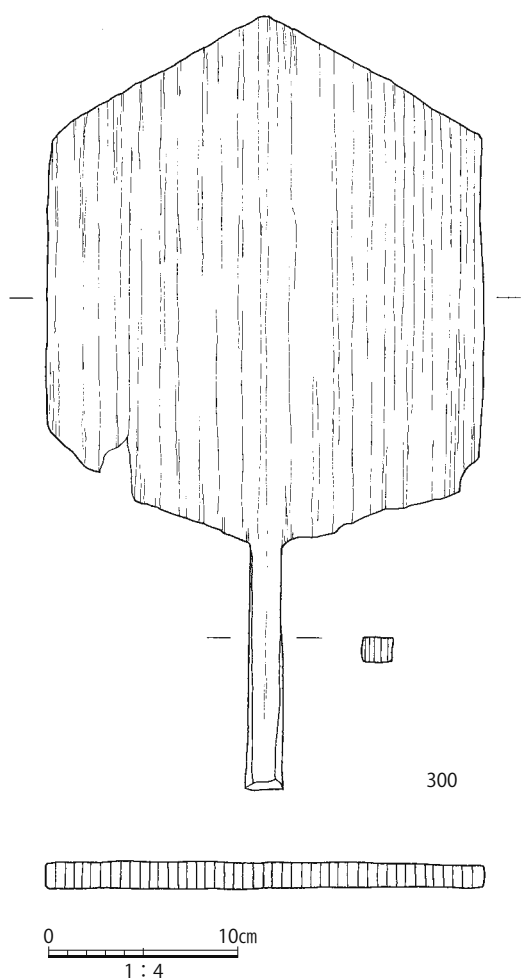


図 51 溝 140 出土木製品復元図

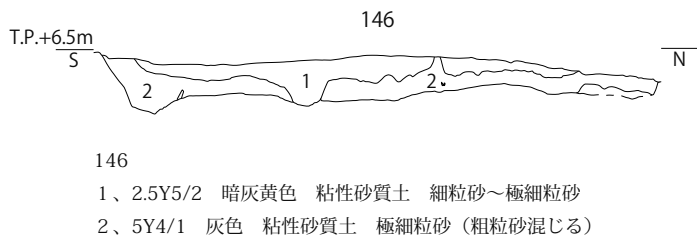


図 52 溝 146 土層断面図

276 は壺の肩部である。外面は摩滅している。277 から 283・287 は布留形甕の口縁部である。277 は全体的に摩滅している。外面にススが付着する。278 は胴部の内面調整に板ナデを施す。279 は内面にススが付着する。280 は外面が磨滅している。胴部の内面調整は横方向のハケを施す。281 は口縁部の外面の一部にハケを施す。282 は胴部内面に板ナデを施す。内外面とも頸部付近にススが付着する。283 は外面の全体にススが付着する。287 は口縁部の内面に横方向のハケを施す。外面の一部にススが付着する。時期はいずれも笹栗中 2 から中 3a 期（TK73 型式から TK216 型式併行期）に属すると考えられる。284 は布留・外反口縁折衷甕と考えられる。胴部径は 13.9cm を測る。笹栗中 3a 期に属する。285 は甕の口縁部である。外面は摩滅している。胴部の内面調整はケズリ、口縁部の内面調整はハケを施す。286 は外反口縁甕である。口縁部内面にススが付着する。288 から 293 は平底鉢である。288 は胴部径 11.5cm を測る。器高は 8.5cm で 290・292・293 より小型である。外面全体にススが付着する。290 は胴部径 15.9cm を測る。底面に板ナデを施す。291 は胴部径 14.2cm を測る。内外面ともススが付着する。292 は胴部径 15.2cm を測る。内外面ともに摩滅している。293 は胴部径 15.0cm、器高 14.5cm を測る。胴部上半にユビオサエを施す。平底鉢の調整はどの個体も概ね共通しており、外面はハケ、胴部内面はケズリ、口縁部内面はハケを施している。290 など一部はハケメが荒く、タタキのような個所も存在する。また全体的に調整が粗雑で、粘土紐の接合痕が随所に残る。294 は鍋もしくは甑の把手である。上面に 2 cm ほどの切り込みが入っている。全体的にススが付着する。295 は韓式系土器の破片である。崩れた鳥足

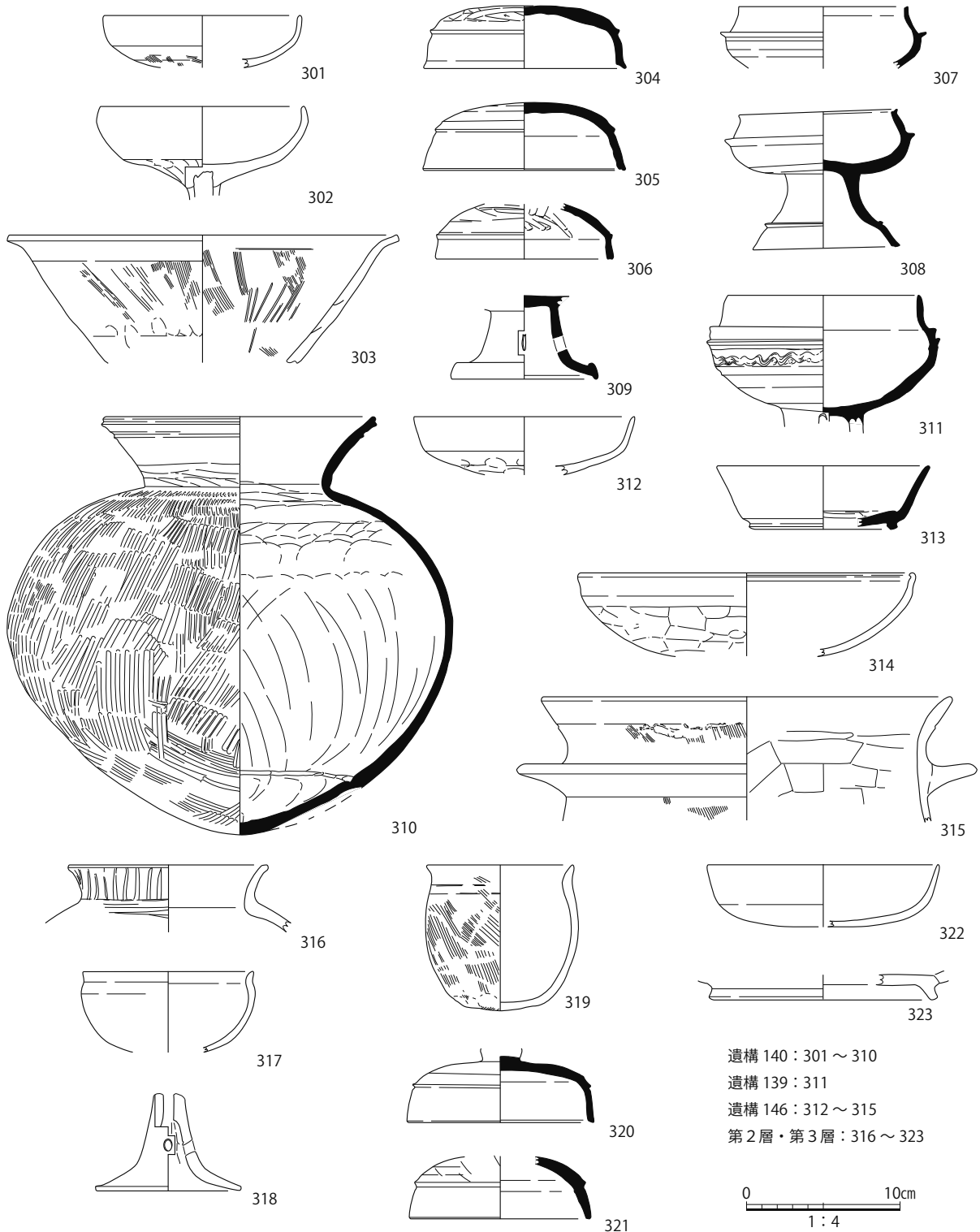


図53 5区遺構・包含層出土遺物

文タタキが確認できる。296 は長胴壺である。胴部径 10.9cm を測る。底部にドーナツ状の剥離痕跡があり、脚がついていた可能性がある。297 は土錘である。摩滅のため調整は不明である。298 は石製品である。用途は不明である。

299 は布留形甕である。胴部径は 23.4cm、器高は 26.7cm に復元できる。胴部の内面調整はケズリ

を施す。また肩部の内面にハケを施している。笹栗中3a期に属する。

301・302は無稜外反高坏の坏部である。両方とも全体的に摩滅している。301は外面にうっすらとハケが残る。内外面ともススが付着する。笹栗中3a期に属すると考えられる。303は大型有段高坏の坏部である。内面に部分的にミガキを施している。笹栗中3a期に属すると考えられる。304・305は須恵器の坏蓋である。304は上面に不定方向のケズリを施す。305は自然釉がかかる。笹栗中3a期に属する。306は須恵器の坏蓋または有蓋高坏の蓋である。内面に不定方向のケズリを施す。307は須恵器の高坏の坏部である。308は須恵器の高坏である。外面に自然釉がかかる。脚部に透孔は開いていない。笹栗中2から中3a期に属する。309は須恵器の高坏の脚部である。縦に細長い楕円の透孔を四方に開ける。310は須恵器の甕である。底部内面に継ぎ目がある。外面調整のタタキは一部ナデ消されている。笹栗中3a期に属すると考えられる。300は不明木製品である。うちわ形をしていることから、さしばの可能性はある。復元全長41.0cm、本体復元長27.8cm、本体復元幅23.0cm、柄復元長13.2cm、柄復元幅1.9cmを測る。樹種同定の結果コウヤマキで製作されていることが明らかとなった。311は須恵器の装飾高坏である。脚部に四方向の透孔を開ける。坏部には波状文を施すが、粗雑である。笹栗中3a期に属すると考えられる。312は土師器の坏である。難波宮V期新段階に属すると考えられる。313は須恵器の坏Bである。難波宮IV期古段階に属すると考えられる。314は土師器の坏である。外面調整は丁寧なヘラケズリを施す。口縁端部の内面に沈線を設ける。難波宮V期中段階に属すると考えられる。315は土師質の羽釜である。内面調整は板ナデを施す。難波宮V期古段階に属すると考えられる。

第2層・第3層 316は土師器の甕である。口縁部の外面に縦方向のミガキを施す。317は土師器の坏である。全体的に摩滅している。笹栗中3a期に属すると考えられる。318は土師器の高坏の脚部である。円形透孔を2方に開ける。全体的に摩滅している。319は平底の鉢と考えられる。口縁部にススが付着する。320は須恵器の高坏の蓋である。つまみが欠損している。TK23・47型式併行期に属する。321は須恵器の坏蓋である。TK47型式併行期に属する。322は土師器の坏である。323は器種不明の高台部である。

第3項 6区

(1) 検出した遺構

6区で検出した遺構は溝である。5区と同じく遺構は希薄であり、また近世の攪乱を多く確認している。このことから6区も近世の耕作により大きく改変を受けていると考えられる。

古墳時代後期 溝132は東西方向に走る溝である。長さ2.3m以上、幅2.07m、深さ16cmを測る。土師器および須恵器の杯身が出土している。溝136は東西方向に走る溝である。長さ2.4m以上、幅3.9m、深さ42cmを測る。土師器の甕、須恵器の杯蓋・甕が出土している。

中世 溝131は南東から北西方向に走る溝である。長さ2.4m以上、幅0.74m、深さ34cmを測る。遺物は古代の羽釜が出土しているが、土層断面の観察から中世以降の溝と考えられる。

(2) 出土遺物

遺構 324から326は土師質の羽釜である。324は口縁部から鰐部付近にかけての破片である。鰐は欠損している。鰐の剥離部分にはハケが残る。325は口縁部である。外面にハケの痕跡がある。326は鰐部である。325と同じく外面にハケの痕跡がある。難波宮V期古段階に属すると考えられる。

遺構面直上 327は須恵器の坏身である。TK208型式併行期に属する。

側溝 328は布留形甕の口縁部である。

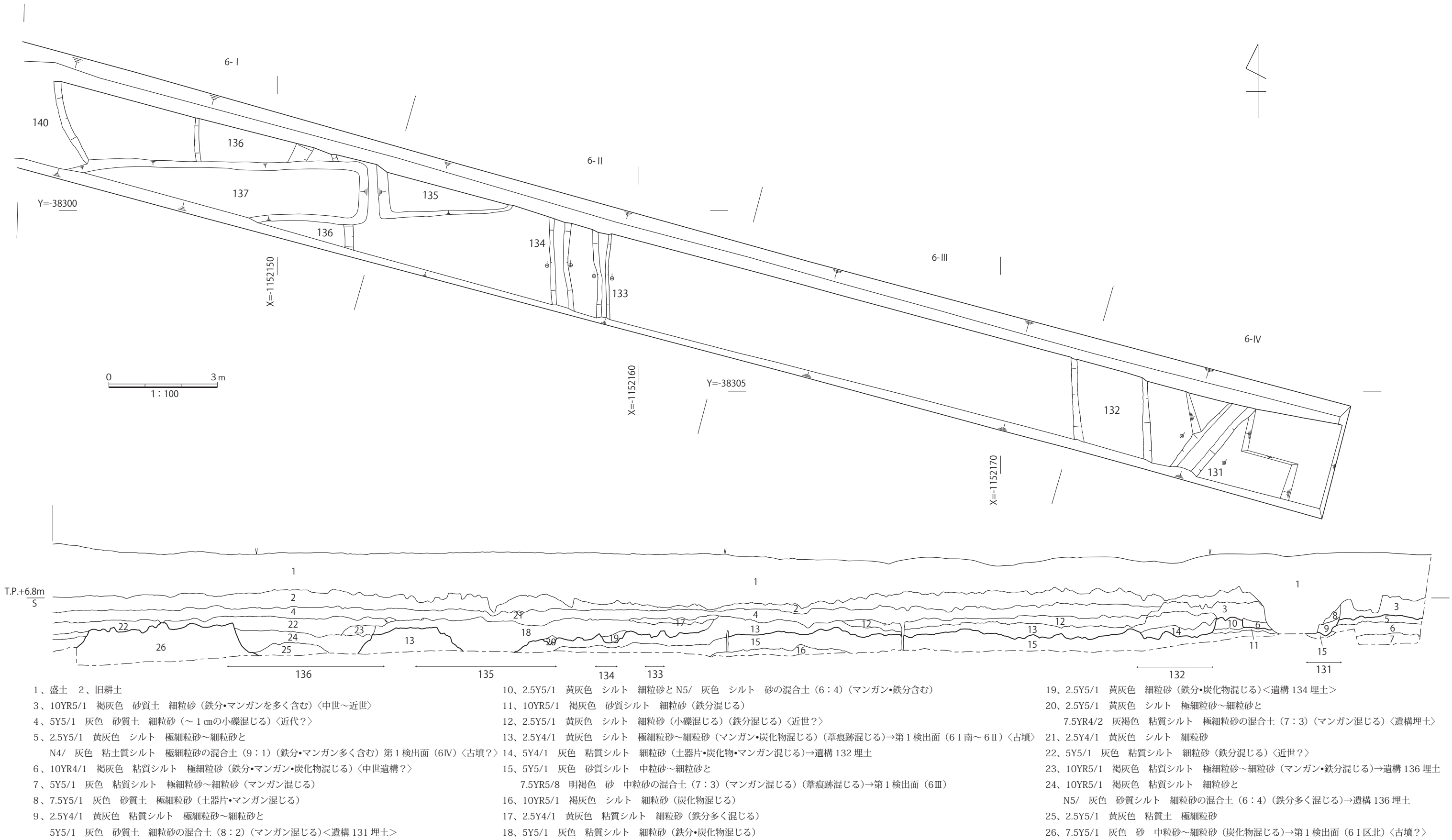
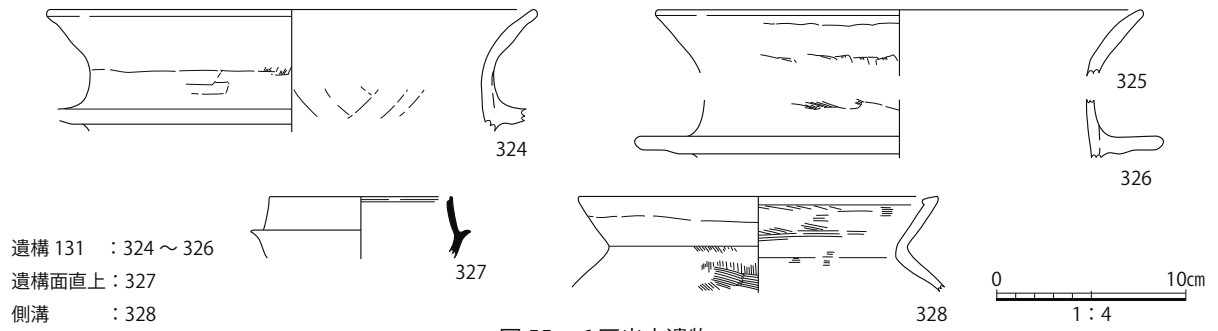


図 54 6区遺構平面図・東壁土層断面図



第4章 保存処理・自然科学分析

今回の調査で出土した木製品の状態を保つため保存処理を行った。また遺構の性格や年代、調査地周辺の環境をより明確にすべく、各種自然科学分析を行った。本章ではその成果を記載する。

第1節 木製品保存処理および各種分析

第1項 木製品保存処理の概要

久宝寺遺跡より出土した木製品のうち、今回対象とした遺物は準構造船部材1点、樹皮4点、板材2点、不明1点であり、これらについて保存処理および各種分析を行った。番号1：準構造船部材、番号2：樹皮については保存処理と樹種同定を、番号3：板材については樹種同定を、番号4：板材、番号5：不明木製品については放射性炭素年代測定を行った。

第2項 トレハロース含浸処理法による木製品保存処理

(1) はじめに

遺跡などから出土した木製品を保存・展示するためには、木材の細胞内に侵入した過剰な水分を除去しながら破壊された細胞を強化する必要がある。近年、ヨーロッパでは PEG（ポリエチレングリコール）に代わって、木材の構成要素でもある糖類を含浸させる方法が実用化されている。日本の高温多湿の環境や生物被害を考え、ヨーロッパで多用されているスクロース（蔗糖）に代わりラクチトールやトレハロースを用いることにした。これらの糖は低吸湿性であり、非腐朽性の性質を持ち、アリなどに食べられる生物被害も少なく、比較的安価である。通常食品にも使用されるように人体においても安全である。

(2) 方法

トレハロース含浸処理法は、基本的には今津節生（奈良大学）および伊藤幸司（東北芸術工科大学）の方法を参考にして、試料に以下の処理を施した。なお、保存処理工程は表1に示す。

- 1) 処理前記録を写真等で行う。
- 2) 遺物を静かに水に浸け、刷毛や筆などで表面の砂粒や汚れを落とす。
- 3) 0.02% ケーソン水溶液に浸漬後、水洗する。
- 4) 1% EDTA 水溶液に浸漬後、2・3日を目安に色が出なくなるまで水洗する。（遺物の大きさ、状態により浸漬の時間は変動する）
- 5) 20% Bx トレハロース水溶液に浸漬し、温度をかけながら 10% Bx ずつ濃度を上昇させる。なお、濃度に合わせて温度を恒温機（EPZ-316S:ISUZU 製、STERILIZER KPV-231:ESPEC 製）、投げ込み式ヒーター（YDS10.5:日本ヒーター）で調整しながら行う。（最終濃度約 70% Bx、遺物の大きさ、状態により浸漬の時間は変動する）
- 6) 含浸の様子をみながら糖液より取り上げる。必要に応じて 70% Bx トレハロース水溶液を塗布する。粗熱を冷風扇（スポットエアコン SA-250Y:ナカトミ製）で取る。
- 7) 扇風機で風乾し結晶化を促す。遺物の状態をみながら扇風機の風が当たらない涼しく乾いた場所に静置する。
- 8) スチームクリーナー（PRO JET PLUS:金丸事務機製）やスチーマー（SteamyPR-1:販売元 PAReT）、半田コテで遺物表面にこびりついた糖を除去し、仕上げる。
- 9) 接合にはエポキシ樹脂を使用する。エポキシ樹脂の彩色にはアクリル絵の具を使用する。

表1 久宝寺遺跡出土木製品 保存処理工程

作業期間	工程	処理条件・回数	使用薬品および機材
2023/08/16	搬入 打合せ		
2023/08/16 ～ 2023/09/01	防腐処理	0.02% ケーソン水溶液に浸漬 2・3日流水による水洗	ケーソン
2023/08/31 ～ 2023/09/19	処理前記録	処理前の写真撮影、法量の計測	
2023/09/05	EDTA 処理	1% EDTA 水溶液に浸漬 2・3日流水による水洗	EDTA
2023/09/07 ～ 2023/09/19	クリーニング	刷毛や筆などで表面の砂粒や 汚れを落とす	
2023/09/15	樹 種 同 定 サンプリング	樹種同定用試料の採取	
2023/9/19 ～ 2023/12/18	含浸	20%のトレハロース水溶液をおよ そ 15 日ごとに 10%濃度を上げる 2023/09 /19-20% 2023/10/02-30% 2023/10/13-40% 2023/10/25-50% 2023/11/20-60% 2023/12/08-68%	トレハロース 恒温機
2023/12/18	取上	トレハロース水溶液から遺物を 取り上げる	スポットエアコン
2023/12/18 ～ 2024/02/08	風乾	扇風機で風を当て結晶化を促す	扇風機
2024/02/08 ～ 2024/02/16	表面処理	風乾開始 1 カ月後から蒸気等を使っ て表面の糖を溶かす	スチームクリーナー スチーマー 半田コテ
2024/02/08 ～ 2024/03/21	風乾	再結晶および湿気の除去を促す	扇風機
2024/03/04	接合	エポキシ樹脂の接着剤と充填補填剤 で接合補填を行う	エポキシ樹脂
2024/03/05	接合部着色	アクリル絵の具で充填部分の樹脂に 彩色する	アクリル絵の具
2024/03/12 ～ 2024/03/18	処理後記録	処理後の写真撮影、法量の計測	
2024/03/21	梱包		

10) 処理後記録を写真等で行う。

11) 高温多湿を避けて保管する。

(3) 取扱および保管上の注意

1) 取扱は、手袋を使用し、乱暴に扱わない。

※手から発せられる水分により表面に色の違いが表れる可能性がある。その場合は素早く水分を取り除き、風通しの良い日陰で乾燥させる。

2) 遺物は梱包せずに湿気を帯びにくく空気の流れがあるような場所で保管する。

例) コンテナの底に気泡緩衝材の凹凸を上向きに敷き、その上に薄葉紙を敷き、遺物を静置し、埃がかぶらないように薄葉紙を1枚かぶせる。

※木材本来の持つ水分が残存する遺物が多いため、密封および嚴重な梱包を行うと湿気がたまり適さない。糖が表面に析出する、カビが発生するなどの問題が起こることがあるので、水分が抜けきらない状態での密封保管は厳禁。

3) 保管場所は、室内および通常の保管庫で良いが、高温多湿は避ける。

※換気等が難しい場合、多湿の時期には遺物の様子を見て湿度が溜まらないように扇風機などで空気を流す。

4) 長期保管は、直射日光、高温多湿、過乾燥、低温環境下にならぬよう定期的に管理する。

5) 水が付着した場合は、素早く水分を取り除き、風通しの良い日陰で乾燥させる。

6) 接合箇所には負荷をかける置き方を避ける。

7) 破損箇所の接着は、ニトロセルロース接着剤やエポキシ樹脂など、ほとんどの接着剤が使用可能である。ただし、水溶性の接着剤（木工ボンドなど）は、結晶化した木材断面の糖が溶出するので不適切である。また、欠損部分は、エポキシ樹脂のパテなどで補う。

(4) 特に注意する遺物

・番号1：準構造船部材：木材が本来もつ水分が抜ける過程であるため、密封や嚴重な梱包は避ける。

第3項 樹種同定

(1) 原理

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

(2) 試料と方法

試料は、遺跡出土の準構造船部材と付属した樹皮、板材の3点である。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス（Mount-Quick “Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって40～1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

表2に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図56に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ45 m、径1.5 mに達する。

2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急

表2 樹種同定結果

番号	名称	結果（学名／和名）
1	木製品 準構造船部材	Cryptomeria japonica D.Don スギ
2	木製品 樹皮	Prunus サクラ属
3	木製品 板材	Abies モミ属

木材写真

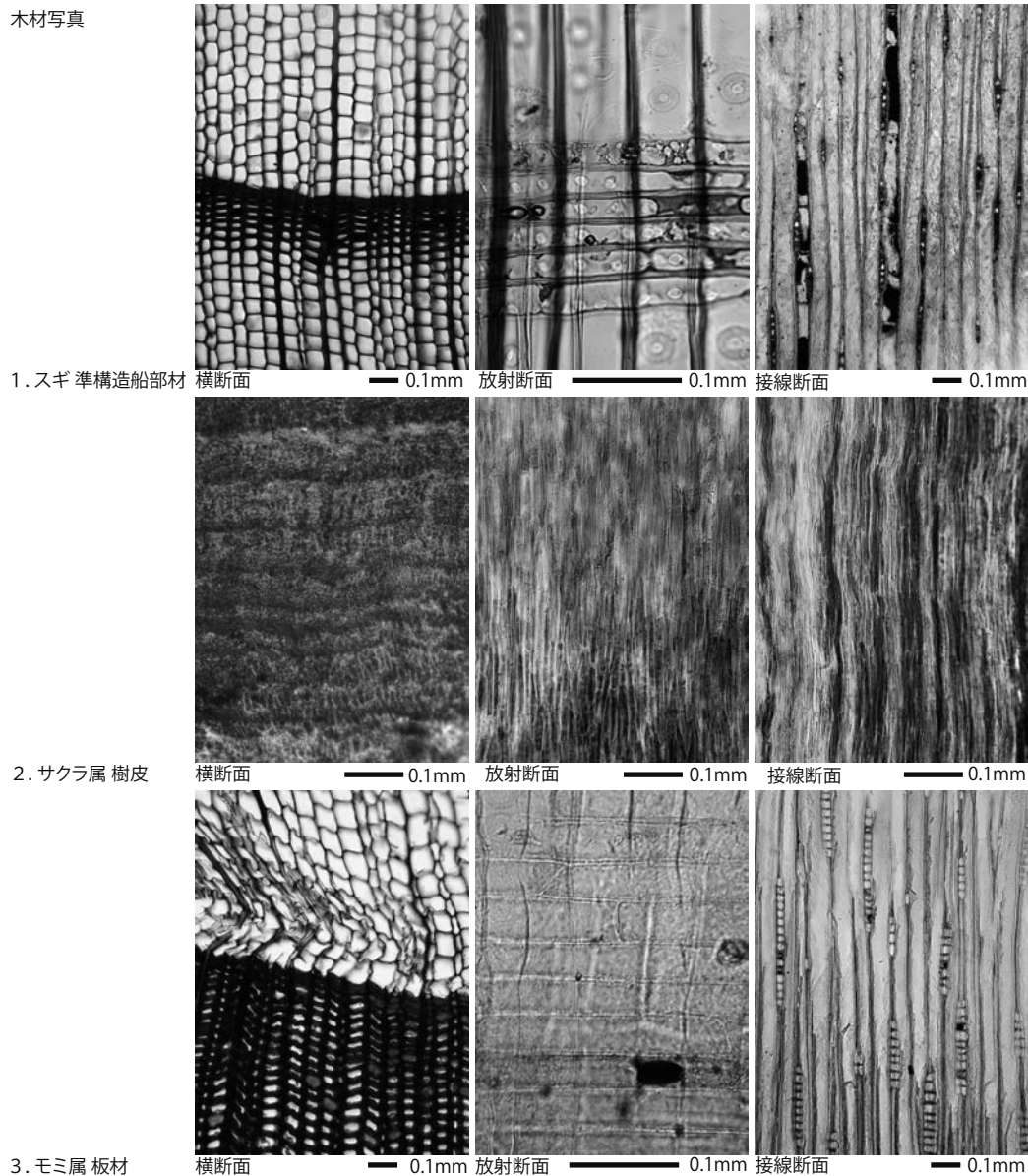


図56 保存処理木製品顕微鏡写真

で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

3) サクラ属 Prunus バラ科

樹皮であり、暗褐色を呈し、やや赤みを帯び、肌目が横に延びる。

以上の特徴からサクラ属の樹皮に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。

(4) 所見

同定の結果、久宝寺遺跡の木製品はモミ属1点、スギ1点、サクラ属（樹皮）1点であった。

モミ属は板材に利用されている。モミ属は耐朽・保存性は低いが、軽軟なため加工が容易な材で、建物の内装や建具によく利用される。また、高い防虫効果を期待され食品などの保管箱に利用されることもある。板材としての用途は広汎で、器種の考察には至れなかった。スギは準構造船部材に利用されている。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。準構造船部材としては久宝寺南遺跡、讃良郡条里遺跡などで舷側板や堅板の報告例があり、弥生時代後期以降に見られる。サクラ属は樹皮である。サクラ属は耐久・保存性が高い材であり、切削・加工の難度は中庸である。樹皮はなめしたのちに薄くしてから利用する。なお、本試料もなめしてある程度まで薄くなった樹皮を用いている。現在ではサクラ属の中ではヤマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラの樹皮が利用される。サクラ属の樹皮は丈夫で光沢があり、曲物の綴じや茶筒などの容器の装飾として用いられる。本試料は準構造船部材のほぞ穴に残存していたこともあり、船材の一部と考えられる。ほぞ穴に樹皮が残存する板材としては讃良郡条里遺跡の船材と考えられる木製品があげられる。

同定された樹種は温帯に分布する樹木である。モミ属は谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好み、スギは肥沃で湿潤な環境を好み温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する。サクラ属はやや乾燥した排水の良い斜面地に分布する。いずれの樹種も本遺跡周辺にも分布する樹木であり、当時遺跡周辺からか、または流通によって近隣地域よりもたらされたと推定される。

第4項 放射性炭素年代測定

(1) 原理

放射性炭素年代測定は物質に含まれる炭素同位体のひとつである ^{14}C を利用して年代を測定する方法である。動植物は生きていく上で ^{14}C を取り込み続けており、生命が終えると ^{14}C の取り込みが終了し、その時点から ^{14}C は放出されてゆくようになる。そのため遺跡から出土した遺存体に残存する ^{14}C を測定することによって、その生物の死後の経過時間が判明する。放射性炭素年代測定は木材、炭化材、種実、骨、土壌堆積物中の炭化物などの炭素を含むあらゆる遺存体に適応される。

(2) 試料

分析試料は、久宝寺遺跡より出土した番号4:板材(井戸110出土)、番号5:不明木製品の2点である。

(3) 方法

(1) 化学処理工程

1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と表3に記載する。

3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。

4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(3) 算出方法

1) δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 3)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

2) 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は δ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 3 に、補正していない値を参考値として表 4 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい (14C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (14C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も δ 13C によって補正する必要があるため、補正した値を表 3 に、補正していない値を参考値として表 4 に示した。

4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する

表 3 放射性炭素年代測定結果 (δ 13C 補正值)

測定番号	試料名	試料形態	処理方法	δ 13C (‰)			δ 13C 補正あり					
				(AMS)			Libby Age (yrBP)			pMC (%)		
IAAA-230579	4	木片 (ヒノキ)	AAA	-26.32	\pm	0.17	1,300	\pm	20	85.1	\pm	0.23
IAAA-230580	5	木炭 (ヒノキ)	AAA	-27.23	\pm	0.27	1,730	\pm	20	80.63	\pm	0.22

表 4 放射性炭素年代測定結果 (δ 13C 未補正值、暦年較正用 14C 年代、較正年代)

測定番号	δ 13C 補正なし						暦 年 較 正 用 (yrBP)			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)			pMC (%)							
IAAA-230579	1,320	\pm	20	84.88	\pm	0.23	1,295	\pm	21	673calAD - 702calAD (30.6%)	664calAD - 775calAD (95.4%)
										741calAD - 772calAD (37.7%)	
IAAA-230580	1,770	\pm	20	80.26	\pm	0.21	1,729	\pm	21	257calAD - 283calAD (24.5%)	250calAD - 295calAD (32.5%)
										327calAD - 375calAD (43.8%)	

較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

（4）測定結果

久宝寺遺跡における年代測定の結果、番号4：板材が7～8世紀、番号5：不明木製品は3～4世紀の年代が得られた。番号4：板材は曲物底板状であり、また番号5：不明木製品は強く炭化している。これらは加工等で樹木の年輪の最外層が得られたとは言い難く、伐採年代を必ずしも反映しているとは言及できない。

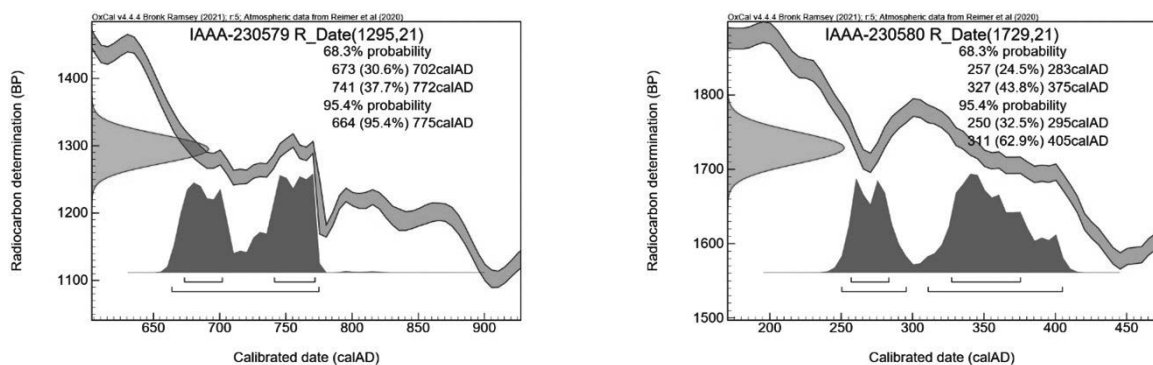


図 57 暦年較正年代グラフ（参考）

参考文献

- 伊東隆夫（1995）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料 第31号，京都大学木材研究所・京都大学木質科学研究所，p.81-181.
- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，449p.
- 大阪府教育委員会（1991）木器．都市計画道路国守・黒原線建設工事に伴う讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ - 寝屋川市出雲町所在 -，p.41-44.
- （財）大阪府文化財センター（2004）木製品．讃良郡条里遺跡（その3） - 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -，大阪府文化財センター調査報告書載114集，p.25-26.
- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
- 島地謙（1987）出土船材並びに杭材の樹種．久宝寺南（その2）久宝寺・加美遺跡の調査 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告，大阪府教育委員会・大阪文化財センター，p.243 - 250，p.577-579.

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，176p.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), p.337-360.

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62 (4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), p.355-363.

作業従事者・執筆者

木製品保存処理：金原裕美子、田中友貴恵（一般社団法人文化財科学研究センター）

樹種同定：金原美奈子、金原裕美子（一般社団法人文化財科学研究センター）

第2節 各種分析

第1項 放射性炭素年代測定

（1）はじめに

発掘調査によって出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

（2）試料と方法

測定試料の情報、調製データは表5のとおりである。測定試料を写真1～5に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表5 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-47640	試料 No.1 層位：黒色粘性砂質土層 採取日：20220520	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-47641	試料 No.2 層位：黒色シルト層 採取日：20220523	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-47642	試料 No.3 遺構：遺構 101 層位：埋土 採取日：20220516	種類：不明炭化物 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-47643	試料 No.4 遺構：遺構 101 層位：炭化物集中部 採取日：20220523	種類：不明炭化物 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-47644	試料 No.5 遺構：遺構 101 層位：炭化物集中部 採取日：20220524	種類：不明炭化物 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

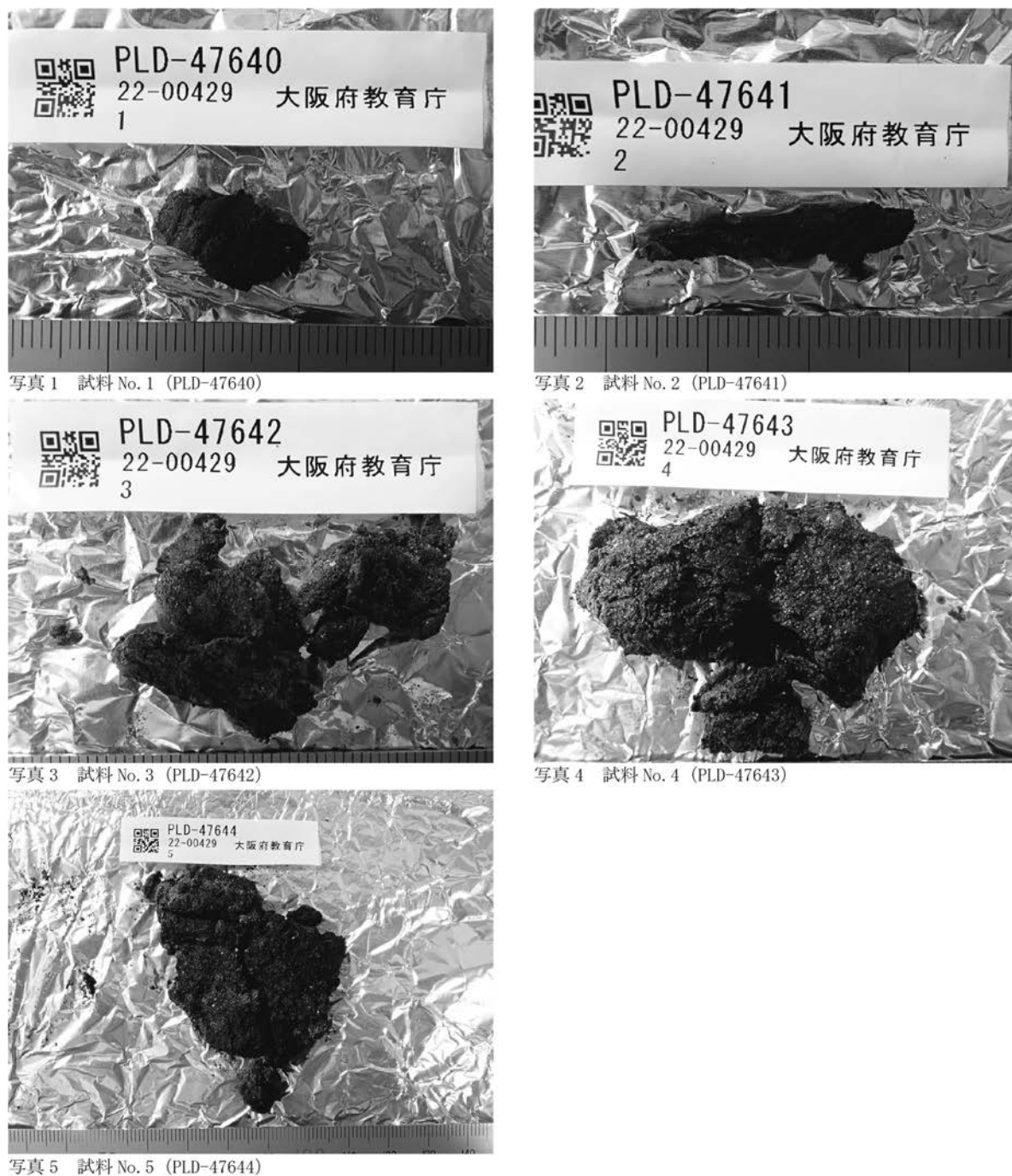


図 58 炭化物試料写真

(3) 結果

表 6 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 57 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、

表6 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-47640 試料 No.1	-27.22 \pm 0.27	2031 \pm 22	2030 \pm 20	47 cal BC- 8 cal AD (68.27%)	96-72 cal BC (6.40%) 56 cal BC-30 cal AD (85.66%) 42-59 cal AD (3.39%)
PLD-47641 試料 No.2	-13.11 \pm 0.23	1790 \pm 20	1790 \pm 20	237-253 cal AD (23.82%) 290-320 cal AD (44.45%)	218-258 cal AD (36.29%) 280-330 cal AD (59.16%)
PLD-47642 試料 No.3	-18.84 \pm 0.46	1941 \pm 21	1940 \pm 20	62-122 cal AD (68.27%)	17-130 cal AD (92.69%) 142-157 cal AD (1.72%) 191-201 cal AD (1.04%)
PLD-47643 試料 No.4	-25.85 \pm 0.36	1701 \pm 20	1700 \pm 20	265-272 cal AD (7.83%) 350-358 cal AD (7.99%) 359-404 cal AD (52.45%)	259-280 cal AD (17.35%) 334-413 cal AD (78.10%)
PLD-47644 試料 No.5	-25.24 \pm 0.31	1729 \pm 19	1730 \pm 20	257-283 cal AD (25.90%) 327-364 cal AD (38.73%) 370-375 cal AD (3.64%)	251-293 cal AD (32.62%) 316-404 cal AD (62.83%)

測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 \pm 40 年）を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年校正には OxCal4.4（校正曲線データ: IntCal20）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

（4）考察

測定の結果（以下の校正年代は 2 σ の値）は、以下のとおりである。

黒色粘性砂質土層の No.1（PLD-47640）は、14C 年代が 2030 \pm 20 BP、校正年代が 96-72 cal BC (6.40%)、56 cal BC-30 cal AD (85.66%)、42-59 cal AD (3.39%) で、紀元前 1 世紀初頭～紀元後 1 世紀中頃の暦年代を示す。黒色シルト層の試料 No.2（PLD-47641）は、14C 年代が 1790 \pm 20 BP、校正年代が 218-258 cal AD (36.29%) および 280-330 cal AD (59.16%) で、紀元後 3 世紀前半～4 世紀前半の暦年代を示す。

遺構 101 の測定試料については、埋土の試料 No.3（PLD-47642）の 14C 年代が 1940 \pm 20 BP、校正年代が 17-130 cal AD (92.69%)、142-157 cal AD (1.72%)、191-201 cal AD (1.04%) で、紀元後 1 世紀前半～3 世紀初頭の暦年代を示す。炭化物集中部の試料 No.4（PLD-47643）は、14C 年代が 1700 \pm 20 BP、校正年代が 259-280 cal AD (17.35%) および 334-413 cal AD (78.10%) で、紀元後 3 世紀中頃～5 世紀前半の暦年代を示す。同じく炭化物集中部の試料 No.5（PLD-47644）は、14C 年代が 1730 \pm 20 BP、校正年代が 251-293 cal AD (32.62%) および 316-404 cal AD (62.83%) で、紀

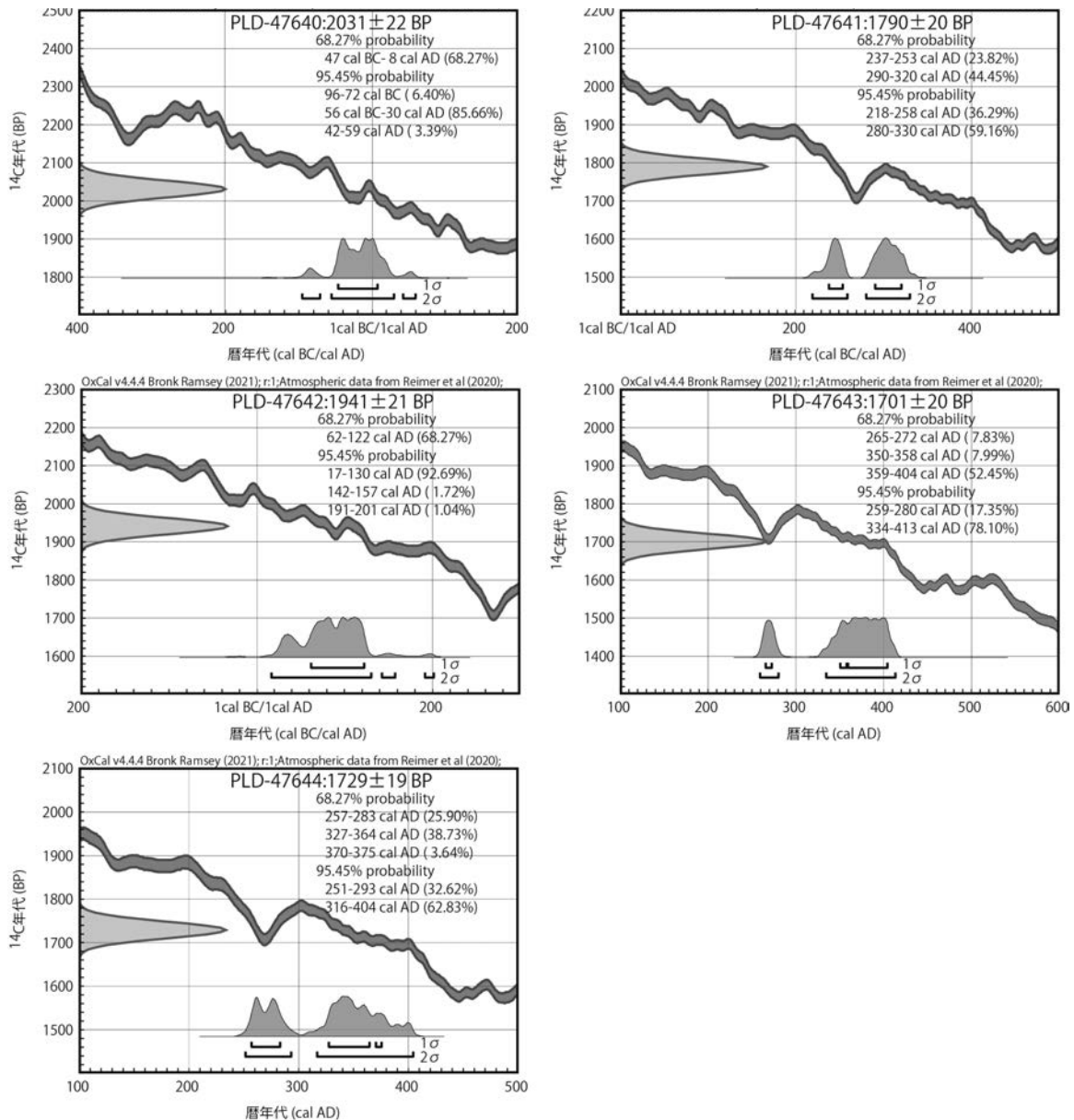


図 59 暦年較正結果

元後 3 世紀中頃～ 5 世紀初頭の暦年代を示す。

上記の結果に概ね対応する時期の土器付着炭化物の測定例としては、奈良県桜井市を中心とした遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の試料に対して集中的に実施された放射性炭素年代測定がある（春成ほか, 2011）。この測定結果によれば、 ^{14}C 年代と土器型式の関係は、大和 V -1 様式が 2000 ^{14}C BP 台、大和 VI-2 様式が 1970 ^{14}C BP 台、VI-3 様式が 1920 ～ 1960 ^{14}C BP 台、庄内式 0 式期と 1 式期が 1920 ^{14}C BP 台、庄内式 3 式期が 1880 ^{14}C BP 台、布留 0 式期が 1800 ～ 1840 ^{14}C BP 台、布留 1 式期が 1790 ～ 1715 ^{14}C BP 台となる。また、桜井市の纏向遺跡では、庄内 3 式期の遺構（大形土坑 SK-3001）において集中的な放射性炭素年代測定が実施されており、壺形土器の体部外面の煤に由来する付着炭化物で 1852 ± 20 ^{14}C BP と 1860 ± 20 ^{14}C BP、出土したウリ類とモモの核で $1803 \sim 1837$ ^{14}C BP 台（近藤, 2022）、モモの核のみの 12 点から 1806 ± 23 ^{14}C BP ～ 1865 ± 17 ^{14}C BP（中村, 2022）の年代値が得られている。近藤（2022）と中村（2022）によって得られた年代値は、上

述の春成ほか（2011）で示された 14C 年代よりもやや新しい測定値を示す。

黒色粘性砂質土層の No.1 (PLD-47640) は、上記の春成ほか（2011）、近藤（2022）、中村（2022）と、今村・設楽（2011）、森岡ほか（2016）、若林（2018）、荒木（2022）の土器型式および時期区分と年代観の考察結果にもとづくと、弥生時代後期初頭～前半に相当すると考えられる。また、黒色シルト層の試料 No.2 (PLD-47641) は庄内式 0 式期～1 式期、遺構 101 埋土の試料 No.3 (PLD-47642) は大和 VI -3 様式～庄内式 1 式期に対比できる。

1700 14C BP を示す遺構 101 の炭化物集中部の試料 No.4 (PLD-47643) については、現段階において布留 1 式期以降から古墳時代の土器型式と放射性炭素年代の測定例が非常に乏しいため、詳細な時期を絞り込めない。出土状況や試料の質に関する検討が不十分なため、参考値に留まるとともに $\delta^{13}C$ 未補正の年代値ではあるが、陶邑窯跡群の大庭寺窯跡で測定された炭化材では、TG231 号窯で 1630 14C BP 台および 1630 14C BP 台、TG232 号窯で 1620 14C BP 台および 1540 14C BP 台の測定値が得られている（川崎地質，1995）。また、鹿児島県下での事例になるが、TK216 型式併行する土師器甕の土器付着炭化物の年代値としては、4C 年代で 1634 ± 23 BP、2 σ の較正年代で 400-540 cal AD の結果が報告されている（坂本，2021）。

なお、布留式期と布留式期以降に併行する時期の土器付着物の測定例は東海地方で蓄積されており、鬼頭・赤塚（2005）による検討結果がある。鬼頭・赤塚（2005）に示された放射性炭素年代を、早野（2011）に示された編年にもとづいて参照すると、本川遺跡で測定された松河戸 I 式と II 式の 14C 年代（佐藤・樋上編，2003）は、1780～1700 14C BP 台を示す。さらに、鬼頭・赤塚（2005）によると、松河戸 II 式に後続する宇田 I 式では、1650 14C BP の 14C 年代（佐藤・樋上編，2003）を示す。

以上、上記で述べてきた弥生時代終末期もしくは古墳時代初頭から古墳時代中期前半までの測定事例について、畿内との併行関係を早野（2011）、摂津、河内、大和での併行関係を笹栗（2022）にもとづくと、遺構 101 の炭化物集中部の測定試料のうち、1700 14C BP を示す試料 No.4 (PLD-47643) は、布留式中段階から新段階に相当する可能性が高いと考えられる。また、1730 14C BP を示す試料 No.5 (PLD-47644) については、春成ほか（2011）を参照すると布留 1 式期に対比できるが、上述の布留式期および併行期段階の測定結果を考慮すると、測定結果に関して布留式古段階～中段階までの時期と広く捉えた方が良いと評価できる。布留式中段階から新段階の土師器および TG232 型式以降の須恵器に伴う放射性炭素年代測定事例の乏しさから、放射性炭素年代値による古墳時代前期後半以降の年代観の言及は、非常に難しい。そのようななかではあるが、放射性炭素年代値からは、遺構 101 の炭化物集中部について、試料 No.4 (PLD-47643) が古墳時代前期後半～古墳時代中期前半、試料 No.5 (PLD-47644) が古墳時代前期後半に相当すると、現状において認識される。

ところで、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち試料 No.1 (PLD-47640) と No.2 (PLD-47641) は、最終形成年輪を確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

引用・参考文献

- 荒木幸治（2022）炭素 14 年代を用いた弥生土器編年の検証—兵庫県と岡山県の事例から—。有年考古，9，68-95，赤穂市教育委員会。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

第4章 自然科学分析

- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘（2011）古墳出現期の炭素 14 年代測定。国立歴史民俗博物館研究報告，163，133-176.
- 早野浩二（2011）土師器の編年 ④東海。一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編「古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み」：95-108，同成社。
- 今村峯雄・設楽博己（2011）炭素 14 年の記録から見た自然環境―弥生中期―。設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編「弥生時代の考古学 3 多様化する弥生分析」：48-69，同成社。
- 川崎地質（1995）14C 年代測定。藤田憲司・奥 和之・岡戸哲紀編「陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ」：359-362，大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会。
- 鬼頭 剛・赤塚次郎（2005）AMS14C 年代と考古編年。愛知県埋蔵文化財センター研究紀要，6，1-11.
- 近藤 玲（2022）纏向遺跡出土の桃核ほかと土器付着炭化物の炭素 14 年代法による年代測定について 2 ― IntCal20 による暦年較正結果について ―。纏向学研究センター研究紀要 纏向学研究，10，77-84.
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩（2016）総括。古代学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」：335-398，六一書房。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」：3-20，日本第四紀学会。
- 中村俊夫（2022）纏向遺跡出土モモ核の AMS14C 年代の最新版較正データ IntCal20 による暦年較正。纏向学研究センター研究紀要 纏向学研究，10，67-73.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . Radiocarbon, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- 坂本 稔（2021）神領 10 号墳出土土器付着炭化物の炭素 14 年代測定。橋本達也編「大隅大崎 神領 10 号墳 II」：99-100，鹿児島大学総合研究博物館。
- 佐藤公保・樋上 昇編（2003）本川遺跡。160p，愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター。
- 笹栗 拓（2022）摂津東部・上牧遺跡と周辺の外来系土器。古墳出現期土器研究，9，67-90.
- 若林邦彦（2018）近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代―石川県八日市地方遺跡の研究結果との対比―。同志社大学考古学研究室編「同志社大学考古学シリーズⅡ 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集」：119-129，同志社大学考古学研究室。
- 執筆者
パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男）

第2項 花粉分析・プラントオパール分析

（1）はじめに

調査区周辺の古環境と植物利用の復元を目的として、調査区の壁面を構成する堆積層と遺構埋土が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生および対象試料の由来について検討した。

（2）試料と方法

表7 分析試料一覧

試料 No.	土色	岩質	時期	地区	層位	備考
1	7.5Y2/1 黒色	粗粒砂混じりの腐植質シルト	古墳時代前期	I 区	黒色粘性砂質土層	木材が多く混じる
2	7.5Y2/1 黒色	腐植質シルト	古墳時代前期	II 区	黒色シルト層	植物質サンプル
5	7.5Y3/1 オリーブ黒色	腐植質極細粒砂 ～細粒砂を多く含むシルト	古墳時代中期 ～後期	I 区	遺構 101 内 炭化物集中部	—

分析試料は、I 区と II 区から採取された計 3 試料である（表 7）。

（3）方法

1）花粉分析

試料（湿重量約 3～4g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え、1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、主要な分類群の単体標本（PLC.3699～3705）を作製し、写真を図 62 に載せた。

2）プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20～30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図 63 に載せた。

（4）結果

1）花粉分析

検鏡の結果、No.5 からは花粉石が検出されなかった。No.1 と No.2 からは花粉化石が検出されており、2 試料から検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉 19、草本花粉 13、形態分類のシダ植物胞子 2 の、総計 34 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表 8 に、花粉分布図を図 59 に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図および表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

花粉化石が得られた No.1 と No.2 は類似した樹木組成を示しており、マツ属複雑管束亜属やスギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属 - マテバシイ属などの産出率が目立つ。草本花粉では、No.2 でイネ科やヨモギ属の産出が目立つ。

2）プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（表 9）、分布図に示した（図 60）。

3 試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、メダケ節型機動細胞珪酸

第4章 自然科学分析

表8 産出花粉孢子一覧表

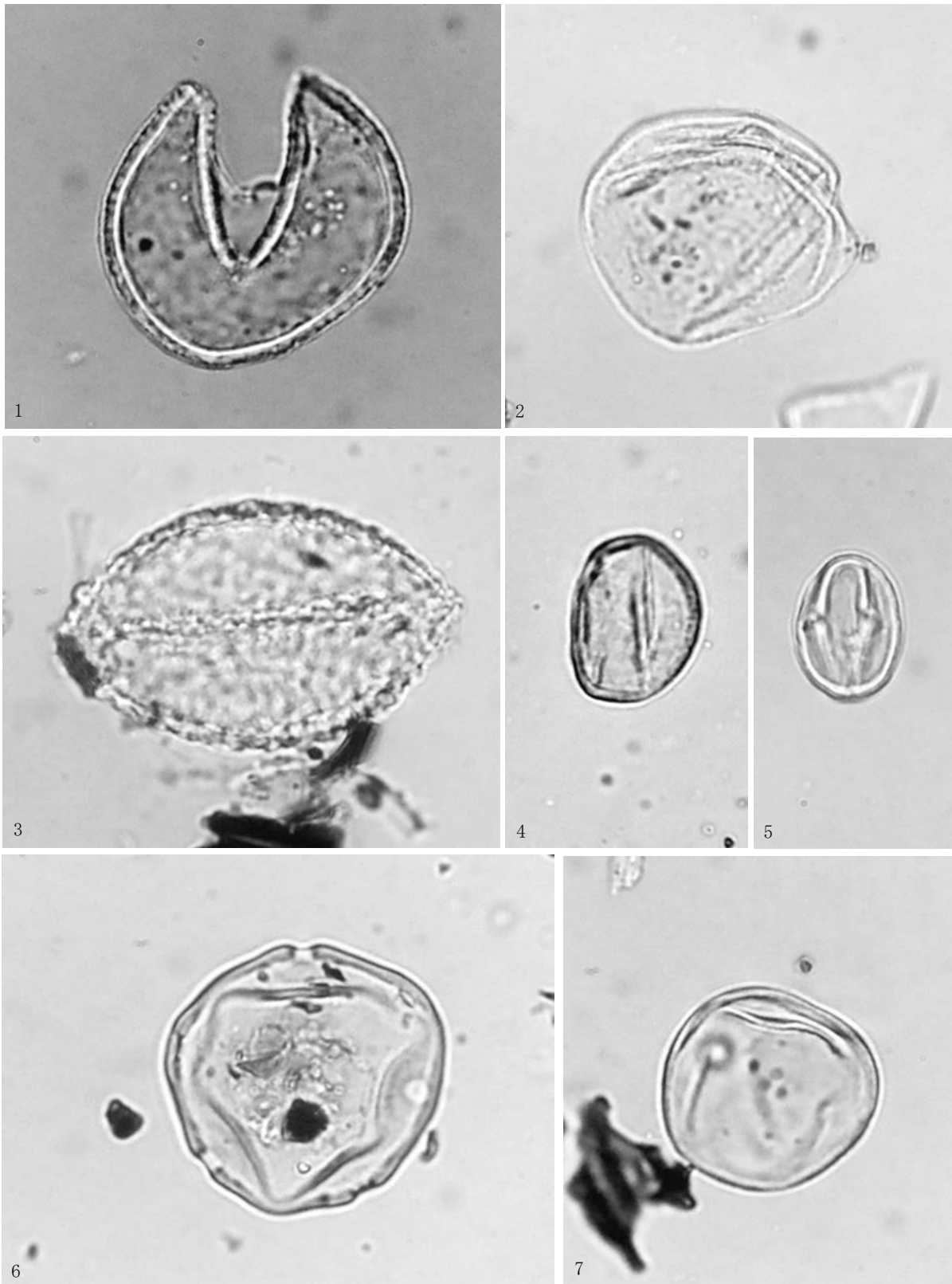
学名	和名	No.1	No.2	No.5
樹木				
Podocarpus	マキ属	1	-	-
Abies	モミ属	5	2	-
Tsuga	ツガ属	4	2	-
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	15	11	-
Sciadopitys	コウヤマキ属	7	8	-
Cryptomeria	スギ属	45	64	-
Taxaceae — Cephalotaxaceae — Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	2	12	-
Salix	ヤナギ属	1	1	-
Pterocarya — Juglans	サワグルミ属—クルミ属	1	1	-
Carpinus — Ostrya	クマシデ属—アサダ属	2	2	-
Betula	カバノキ属	1	1	-
Alnus	ハンノキ属	-	1	-
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	10	15	-
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	57	45	-
Castanea	クリ属	33	28	-
Castanopsis — Pasania	シイノキ属—マテバシイ属	13	5	-
Ulmus — Zelkova	ニレ属—ケヤキ属	1	-	-
Celtis — Aphananthe	エノキ属—ムクノキ属	1	1	-
Aesculus	トチノキ属	2	2	-
草本				
Typha	ガマ属	-	1	-
Sagittaria	オモダカ属	1	-	-
Gramineae	イネ科	13	59	-
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	7	-
Aneilema	イボクサ属	-	1	-
Polygonum sect. Persicaria — Echinocaulon	サナエタデ節—ウナギツカミ節	1	1	-
Chenopodiaceae — Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	5	2	-
Ranunculaceae	キンポウゲ科	1	-	-
Macleaya	タケニグサ属	-	-	-
Leguminosae	マメ科	-	4	-
Apiaceae	セリ科	2	-	-
Actinostemma — Gynostemma	ゴキヅル属—アマチャヅル属	1	-	-
Artemisia	ヨモギ属	3	89	-
シダ植物				
monolete type spore	単条溝孢子	15	10	-
trilete type spore	三条溝孢子	7	11	-
Arboreal pollen	樹木花粉	201	201	-
Nonarboreal pollen	草本花粉	28	164	-
Spores	シダ植物孢子	22	21	-
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	251	386	-
unknown	不明	4	3	-

体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の8種類の産出が確認できた。いずれの分類群も No.2 で産出量が多い。また、No.5 ではイネの籾殻に形成される珪酸体（イネ穎破片）が 140,300 個 /g 産出している。

(5) 考察

1) 古植生について

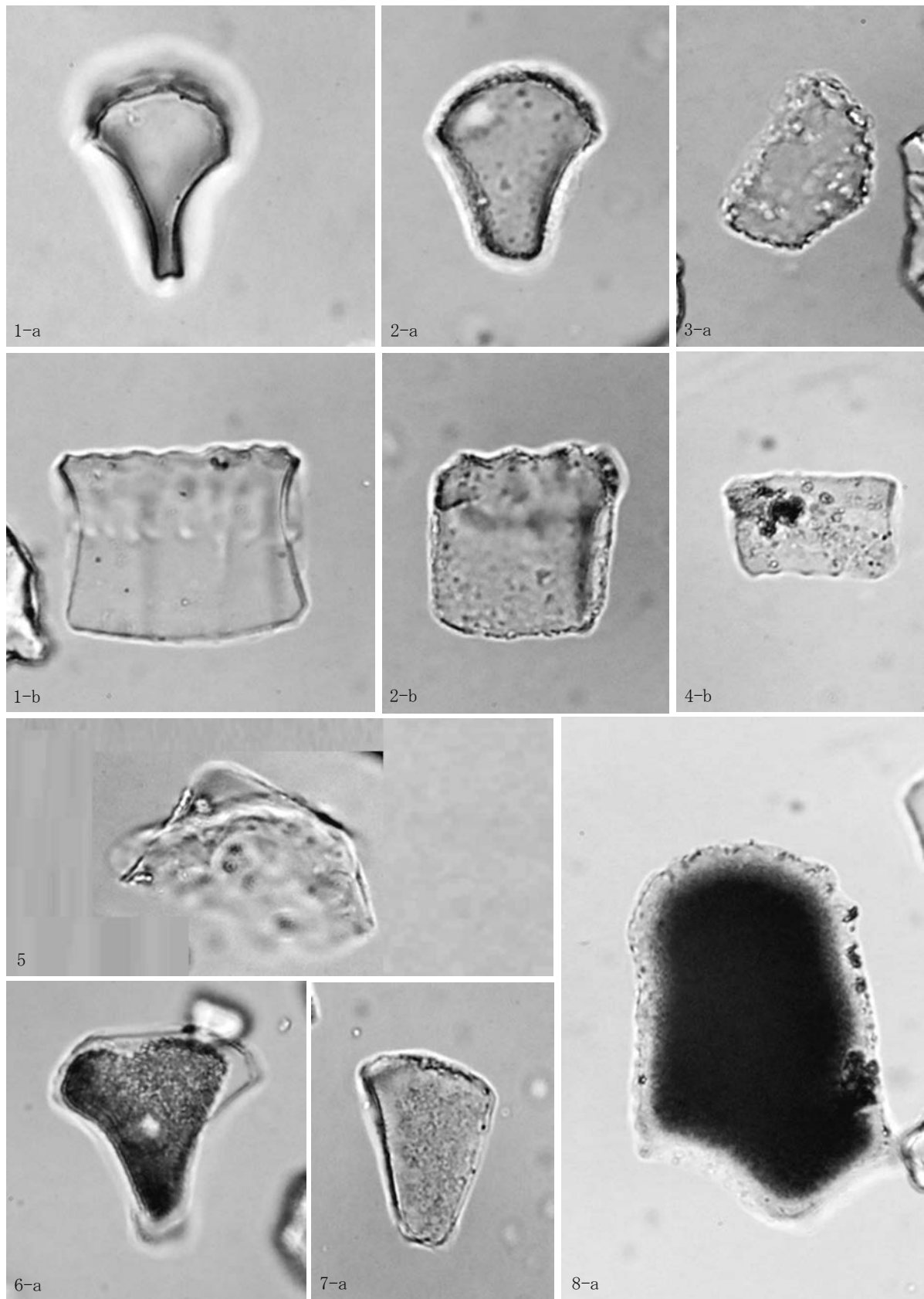
古墳時代前期と考えられる基本層序から採取された黒色粘性砂質土層の No.1 と、黒色シルト層の No.2 の花粉分析の結果では、スギ属の産出が目立つため、遺跡周辺の台地などにはスギ林が分布して



- | | |
|-----------------------|--------------------------------|
| 1. スギ属 (PLC. 3699) | 2. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (PLC. 3700) |
| 3. コウヤマキ属 (PLC. 3701) | 4. コナラ属アカガシ亜属 (PLC. 3702) |
| 5. クリ属 (PLC. 3703) | 6. サワグルミ属-クルミ属 (PLC. 3704) |
| 7. イネ科 (PLC. 3705) | |

0.03mm

図 62 No.1 から算出した花粉化石



1. イネ機動細胞珪酸体 2. ネザサ節型機動細胞珪酸体 3. ササ属型機動細胞珪酸体
 4. キビ族機動細胞珪酸体 5. イネ穎破片 6. シバ属機動細胞珪酸体
 7. ウシクサ族機動細胞珪酸体 8. ヨシ属機動細胞珪酸体
 a:断面 b:側面

図63 No.2から算出した植物珪酸体

た可能性がある。また、黒色粘性砂質土層（No.1）と黒色シルト層（No.2）からはヨシ属機動細胞珪酸体の産出も確認され、水田周辺の湿潤な場所にヨシ属が生育していたと考えられる。

その他にも、黒色粘性砂質土層（No.1）と黒色シルト層（No.2）ではネザサ節型機動細胞珪酸体やメダケ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体などが検出されており、水田周辺などにこれらのイネ科植物が生育していたと考えられる。特に、黒色シルト層（No.2）では産出する分類群の数も多く、産出量も多いため、黒色シルト層（No.2）の堆積時期はイネ科植物の葉身が集積しやすかったか、イネ科植物の分布がⅠ区とⅡ区で異なっていた可能性がある。

2) 遺構 101 内の炭化物について

プラント・オパール分析の結果、古墳時代中期～後期と考えられる遺構 101 内炭化物集中部（No.5）にはイネ穎破片が大量に検出された。よって、遺構 101 にはイネの粃殻が燃やされて投棄されたと考えられる。その他にもイネやネザサ節型の機動細胞珪酸体の産出も目立つ。人為的関与があったか、自然堆積したかは不明であるが、遺構 101 にはイネやネザサ節型のササ類の葉身も堆積していたと考えられる。

なお、遺構 101 内炭化物集中部（No.5）では花粉化石は検出されなかった。プラント・オパール分析の結果から人為的関与が認められ、炭などを一気に投棄したため、堆積速度が速く、花粉が堆積する時間がなかった可能性がある。

執筆者

森 将志（パレオ・ラボ）

第3項 大型植物遺体

（1）はじめに

久宝寺遺跡の調査区の堆積物より抽出した大型植物遺体について、同定結果を報告し、周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析とプラント・オパール分析も行われている（別項参照）。

（2）試料と方法

試料は、大阪府教育庁によって採取された堆積物 5 試料で、Ⅰ区の黒色粘性砂質土層と遺構 101 埋土から採取された各 1 試料、遺構 101 内の炭化物集中部から採取された 2 試料、Ⅱ区の黒色シルト層から採取された 1 試料である。

試料の水洗は、パレオ・ラボにて、最小 0.5mm 目の篩を用いて 100 ～ 300cc を水洗した。大型植物遺体の抽出および同定、計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。イネの粃殻は、小穂軸が残っている場合に 1 個体とした。その他の同定困難な微細な破片、小穂軸以外の粃殻、昆虫遺体の破片は、おおよその数を記号（+）で示した。同定された試料は、大阪府教育庁に保管されている。

（3）結果

同定した結果、草本植物のヘラオモダカ果実・種子とオモダカ属果実、ツユクサ種子、イボクサ種子、スゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属 A 果実、スゲ属 B 果実、ハリイ属果実、ホタルイ属果実、ヒエ属炭化種子（穎果）、イネ炭化殻・炭化粃殻・炭化種子（穎果）、アワ炭化有ふ果・炭化種子（穎果）、キンポウゲ属果実、ノブドウ種子、ダイズ属炭化種子、マメ科 A 炭化種子、エノキグサ属種子・炭化種子、イヌタデ果実、イヌタデ属果実、シロネ属果実、イヌコウジュ属果実、シソ属果実・炭化果実、セリ果実の 23 分類群

が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明 A 炭化種実、残存状態が悪く微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な種実の一群を同定不能炭化種実とした。また、大型植物遺体以外に、炭化した子嚢菌が得られた。さらに、不明昆虫遺体の破片も得られたが、同定の対象外とした（表 10）。

以下に、産出した炭化種実について採取位置別に記載する。

I 区 遺構 101 内炭化物集中部：イネが非常に多く、アワが多く、ヒエ属とエノキグサ属がわずかに得られた。

I 区 遺構 101 埋土：イネがわずかに得られた。

I 区 黒色粘性砂質土層：ノブドウとシソ属が少量、ヘラオモダカとオモダカ属、スゲ属アゼスゲ節、イネ、キンポウゲ属、ダイズ属、マメ科 A、エノキグサ属、イヌタデ、イヌタデ属、シロネ属、イヌコ

表 10 大型植物遺体（括弧内は破片数）

	地区	I 区	II 区	I 区		
	試料 No.	1	2	3	4	5
	層位	黒色粘性 砂質土層	黒色シルト層	遺構 101 埋土	遺構 101 内 炭化物集中部	
分類群	水洗量 (cc)	300		100	300	
ヘラオモダカ	果実	2	14	(1)		
	種子		11			
オモダカ属	果実	1				
ツユクサ	種子		3			
イボクサ	種子		130			
スゲ属アゼスゲ節	果実	7 (1)	53 (2)			
スゲ属 A	果実		3 (1)			
スゲ属 B	果実		1			
ハリイ属	果実		60			
ホタルイ属	果実		(1)			
ヒエ属	炭化種子				2	
イネ	炭化粃				1	1
	炭化粃殻			1	2502 (++++)	3412 (++++)
	炭化種子	1			28 (212)	49 (105)
アワ	炭化有ふ果				1	
	炭化種子				42	86 (2)
キンポウゲ属	果実	1				
ノブドウ	種子	(20)	(14)			
ダイズ属	炭化種子	(1)				
マメ科 A	炭化種子	1				
エノキグサ属	種子	1	1 (4)			
	炭化種子				1	
イヌタデ	果実	1	4 (1)			
イヌタデ属	果実	1	58 (15)			
シロネ属	果実	1				
イヌコウジュ属	果実	1	1			
シソ属	果実	6 (8)				
	炭化果実	1				
セリ	果実	3	9 (3)			
不明 A	炭化種実			(1)		
同定不能	炭化種実	(2)				
子嚢菌	炭化子嚢	6				
不明	昆虫遺体	(++)	(++)			

+:1-9,++:10-49,+++:50-99,++++:100 以上

ウジュ属、セリがわずかに得られた。

Ⅱ区 黒色シルト層：イボクサが多く、スゲ属アゼスゲ節とハリイ属、イヌタデ属がやや多く、ヘラオモダカとノブドウ、セリが少量、ツクサとスゲ属 A、スゲ属 B、ホタルイ属、エノキグサ属、イヌタデ、イヌコウジュ属がわずかに得られた。

次に、主な分類群について大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

1) ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A.Braun et C.D.Bouché 果実・種子 オモダカ科

果実は赤褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。周囲が肥厚し、中央は薄く種子が透けて見える。長さ 2.0mm、幅 1.4mm。種子は暗褐色で、上面観は扁平、側面観は歪んだ長楕円形。着点が突出する。長さ 1.5mm、幅 0.6mm。

2) イボクサ *Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz. 種子 ツクサ科

水色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。腹面の中央部には隆線状の臍がある。側面に丸く窪んだ珠孔がある。長さ 1.1mm、幅 1.3mm。

3) スゲ属アゼスゲ節 *Carex sect. Carex* sp. 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は下端が窄まる楕円形。表面には微細な網目状隆線があり、先端は明瞭に突出する。長さ 2.1mm、幅 1.4mm。

4) スゲ属 A *Carex* spp. A 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は三稜形、側面観は倒卵形。頂部に突起があり、表面には微細な網目状隆線がある。長さ 1.6mm、幅 1.0mm。

5) スゲ属 B *Carex* sp. B 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は三稜形、側面観はやや下端が窄まる倒卵形。三面はややくぼむ。表面には微細な網目状隆線がある。先端に円形の穴がある。長さ 1.5mm、幅 1.1mm。

6) ハリイ属 *Eleocharis* spp. 果実 カヤツリグサ科

赤褐色で、上面観は円形、側面観は卵形。基部が肥厚する。表面には微細な網目状隆線がある。長さ 1.1mm、幅 0.5mm。

7) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 炭化種子（穎果） イネ科

側面観は倒卵形、断面は片凸レンズ形。厚みは薄く、やや扁平。胚は幅が広く、長さは全長の 2/3 程度と長い。長さ 1.6mm、幅 1.0mm。那須（2017）に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエやイヌビエに近い。

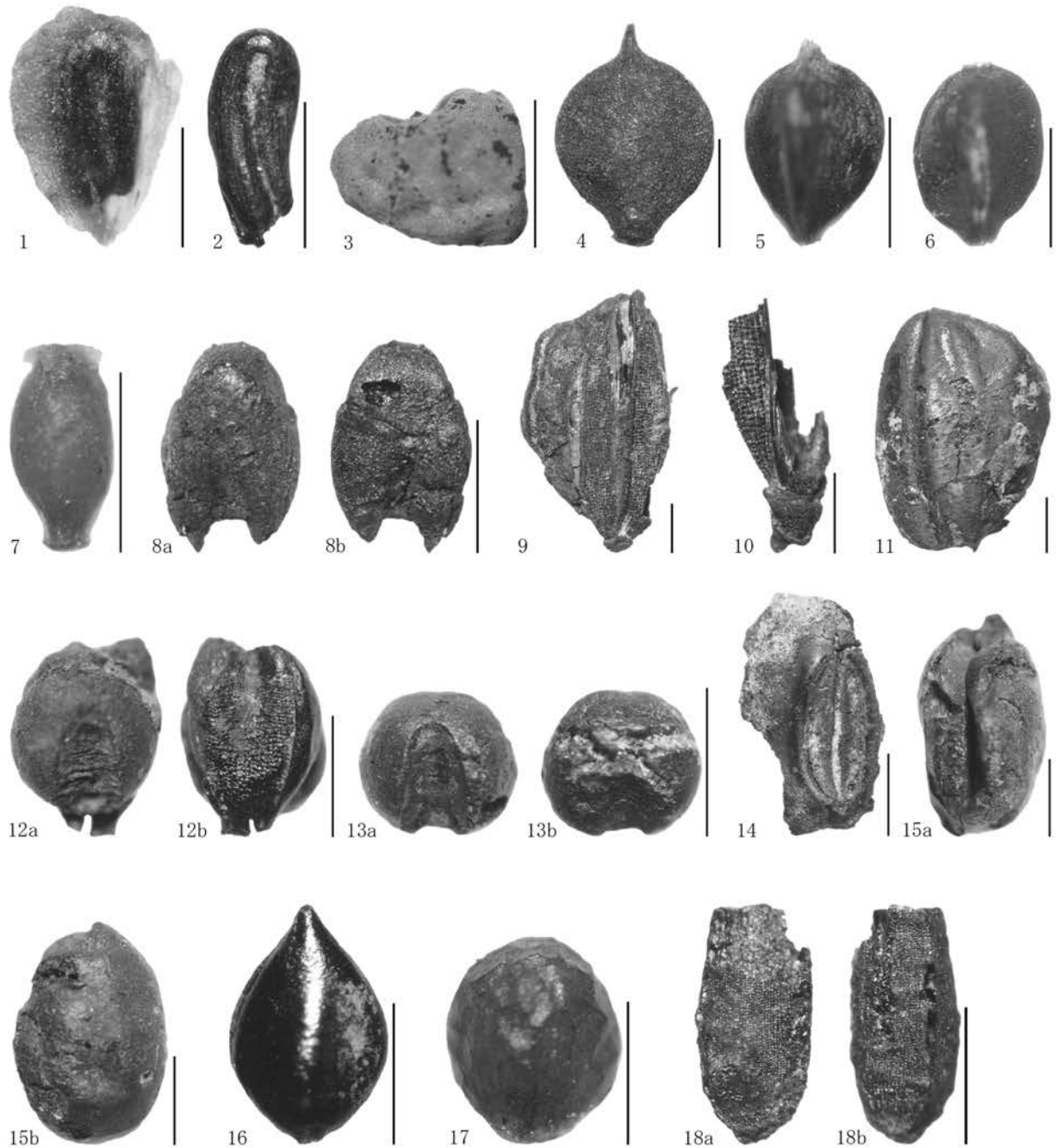
8) イネ *Oryza sativa* L. 炭化粃・炭化粃殻・炭化種子（穎果） イネ科

粃は、上面観が楕円形、側面観が長楕円形。2 条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線状の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。長さ 5.2mm、幅 3.0mm（図 64-9）。粃殻の大きさは、残存長 3.2mm、残存幅 1.3mm（図 63-10）。種子（穎果）の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚があり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。種子の大きさは、長さ 4.3mm、幅 2.9mm（図 64-11）。

9) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化有ふ果・炭化種子（穎果） イネ科

有ふ果は、完形ならば楕円体。内穎と外穎に独立した微細な乳頭状突起があるが、外穎は残存していない。残存長 1.6mm、残存幅 1.2mm（図 64-12）。炭化種子（穎果）の上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、胚の長さは全長の 2/3 程度。種子の大きさは、長さ 1.0mm、幅 1.0mm（図 64-13）。

10) ダイズ属 *Glycine* sp. 炭化種子 マメ科



スケール 1-18:1mm

1. ヘラオモダカ果実（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、2. ヘラオモダカ種子（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、3. イボクサ種子（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、4. スゲ属アゼスゲ節果実（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、5. スゲ属A果実（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、6. スゲ属B果実（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、7. ハリイ属果実（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、8. ヒエ属炭化種子（Ⅰ区、遺構101内炭化物集中部、No.4）、9. イネ炭化籾（Ⅰ区、遺構101内炭化物集中部、No.5）、10. イネ炭化籾殻（Ⅰ区、遺構101内炭化物集中部、No.4）、11. イネ炭化種子（Ⅰ区、遺構101内炭化物集中部、No.4）、12. アワ炭化有ふ果（Ⅰ区、遺構101内炭化物集中部、No.4）、13. アワ炭化種子（Ⅰ区、遺構101内炭化物集中部、No.5）、14. ダイズ属炭化種子（Ⅰ区、黒色粘性砂質土層、No.1）、15. マメ科A炭化種子（Ⅰ区、黒色粘性砂質土層、No.1）、16. イヌタデ属果実（Ⅱ区、黒色シルト層、No.2）、17. シソ属果実（Ⅰ区、黒色粘性砂質土層、No.1）、18. 不明A炭化種実（Ⅰ区、遺構101埋土、No.3）

図64 久宝寺遺跡から出土した大型植物遺体

完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。へそは全長のほぼ中央にあり、長楕円形で全長の1/3未満。臍は、全長の1/3未満の長さの長楕円形で、側面のほぼ中央にあったと推定される。残存長3.0mm、残存幅1.6mm。

11) マメ科 A Fabaceae sp. A 炭化種子 マメ科

状態が悪いが、上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形。臍は、側面の1/3程度の長さで中央部に付くが、残存していない。表面は平滑。長さ2.8mm、幅1.9mm。

12) イヌタデ属 Persicaria spp. 果実 タデ科

黒色。上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で、先端が尖る。表面は平滑で、やや光沢がある。長さ1.7mm、幅1.1mm。

13) シソ属 Perilla spp. 果実・炭化果実 シソ科

赤褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。長さ1.4mm、幅1.2mm。

14) 不明 A Unknown A 炭化種実

破片のため全体形は不明であるが、復元形状は、側面観が披針形、断面が狭卵形。表面には細かい顆粒状の模様がある。残存長1.8mm、幅0.8mm。

(4) 考察

I 区の遺構 101 内炭化物集中部からは、栽培植物で水田作物のイネと、畑作物のアワが得られた。特にイネがおびただしい量で得られ、イネ炭化籾・炭化籾殻・炭化種子が個体数で合計約 6308 点ほどであった。

遺構 101 内炭化物集中部では、植物珪酸体分析も併せて実施しており、イネの籾殻に形成される珪酸体（イネ穎破片）が多量に産出するとともに、葉身が含まれるイネ機動細胞珪酸体も多産する（花粉・植物珪酸体分析の項参照）。種実遺体分析と植物珪酸体分析の結果にもとづくと、イネの籾殻・種子および稲藁とアワの有ふ果・種子が何らかの理由で土坑内において燃焼されたと考えられる。また、種実遺体の産状からは、イネについては、籾摺り後に籾殻がゴミとして燃やされ、廃棄された可能性も考えられる。

なお、アワについては、葉身が含まれていたかどうか、プラント・オパール分析で同定できないため、土坑内で、アワの葉や茎、穂と一緒に燃焼されていたかどうか不明である。したがって、アワの種子が、脱穀された状態で、火を受けて炭化したかどうかについても不明である。

I 区の黒色粘性砂質土層からは、栽培植物のイネ、野生植物で食用として利用可能なダイズ属やマメ科 A、シソ属が得られた。野生植物では、湿地性植物のヘラオモダカやオモダカ属、スゲ属アゼスゲ節、シロネ属、セリが産出しており、周辺の湿潤な場所に生育していた可能性がある。ほかにも、キンポウゲ属やエノキグサ属、イヌタデ、イヌタデ属、イヌコウジュ属などが得られており、周辺の乾燥した場所に生育していた可能性がある。

II 区の黒色シルト層からは、野生植物で抽水～湿地性植物のヘラオモダカやイボクサ、湿地性植物のスゲ属アゼスゲ節やスゲ属 A、スゲ属 B、ハリイ属、ホタルイ属、セリが産出しており、周辺に湿地が存在した可能性がある。また、乾いた草地や荒れ地、畑などに生育するツユクサやノブドウ、エノキグサ属、イヌタデ、イヌタデ属、イヌコウジュ属が得られ、周辺に生育していたと考えられる。

引用文献

那須浩郎（2017）縄文時代にヒエは栽培化されたのか？ SEEDS CONTACT, 4, 27-29.

米倉浩司・梶田 忠（2003-）BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

執筆者

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

第4項 放射性炭素年代測定（木質遺物）

（1）はじめに

大阪府八尾市の久宝寺遺跡から出土した木質遺物について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第5項参照）。

（2）試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 11 のとおりである。試料を図 65 に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

（3）結果

表 11 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-52294	試料 No.1 調査区：5 区IV 遺構：140 遺物 No.13 登録番号：420	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水 酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-52295	試料 No.2 調査区：5 区IV 遺構：140 遺物 No.19 登録番号：429	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水 酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-52296	試料 No.3 調査区：5 区IV 遺構：140 遺物 No.3 登録番号：410	種類：生材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水 酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-52297	試料 No.4 調査区：5 区IV 遺構：140 遺物 No.3	種類：生材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水 酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-52298	試料 No.5 調査区：3 区IV 層位：灰白色砂層 登録番号：278	種類：生材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水 酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-52299	試料 No.6 調査区：5 区IV 遺構：140 遺物 No.14	種類：生材（コウヤマキ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水 酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）



写真1 試料 No. 1 (PLD-52294)

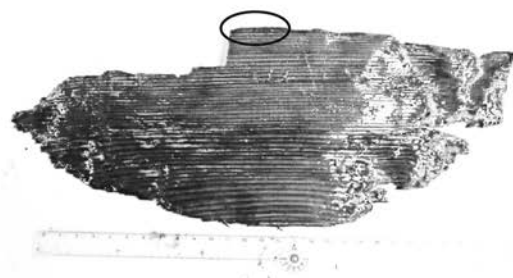


写真2 試料 No. 2 (PLD-52295)

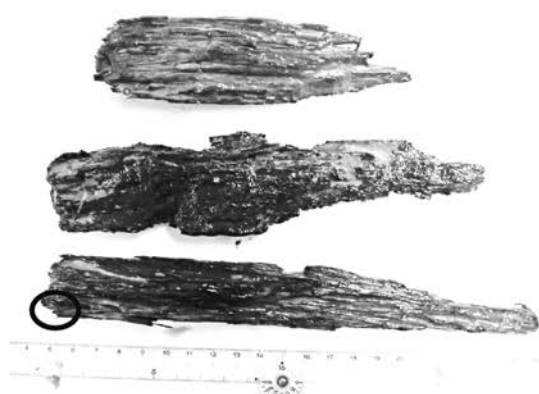


写真3 試料 No. 3 (PLD-52296)



写真4 試料 No. 4 (PLD-52297)



写真5 試料 No. 5 (PLD-52298)

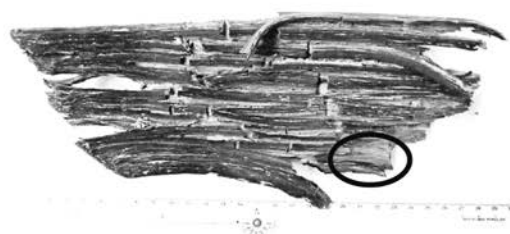


写真6 試料 No. 6 (PLD-52299)

・写真中の楕円は、年代測定と樹種同定の試料採取位置

図65 放射性炭素年代測定試料写真

表12に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代、図66に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 14C 年代 (yrBP) の算出には、 14C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、

表 12 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-52294 試料 No.1	-26.47 \pm 0.20	1707 \pm 23	1705 \pm 25	263-274 cal AD (11.51%) 348-402 cal AD (56.76%)	256-283 cal AD (20.46%) 327-413 cal AD (74.98%)
PLD-52295 試料 No.2	-25.10 \pm 0.18	1654 \pm 22	1655 \pm 20	381-429 cal AD (68.27%)	264-274 cal AD (2.63%) 349-436 cal AD (81.25%) 464-476 cal AD (3.29%) 499-532 cal AD (8.29%)
PLD-52296 試料 No.3	-27.69 \pm 0.11	1706 \pm 20	1705 \pm 20	264-274 cal AD (11.22%) 349-402 cal AD (57.05%)	258-281 cal AD (19.34%) 329-410 cal AD (76.11%)
PLD-52297 試料 No.4	-28.35 \pm 0.11	1610 \pm 21	1610 \pm 20	419-438 cal AD (19.18%) 462-477 cal AD (15.08%) 497-533 cal AD (34.01%)	416-483 cal AD (53.63%) 488-538 cal AD (41.82%)
PLD-52298 試料 No.5	-26.16 \pm 0.11	1679 \pm 21	1680 \pm 20	364-415 cal AD (68.27%)	261-277 cal AD (9.77%) 343-419 cal AD (85.68%)
PLD-52299 試料 No.6	-23.98 \pm 0.14	1604 \pm 21	1605 \pm 20	423-439 cal AD (15.00%) 451-454 cal AD (2.25%) 460-478 cal AD (16.51%) 496-534 cal AD (34.51%)	418-538 cal AD (95.45%)

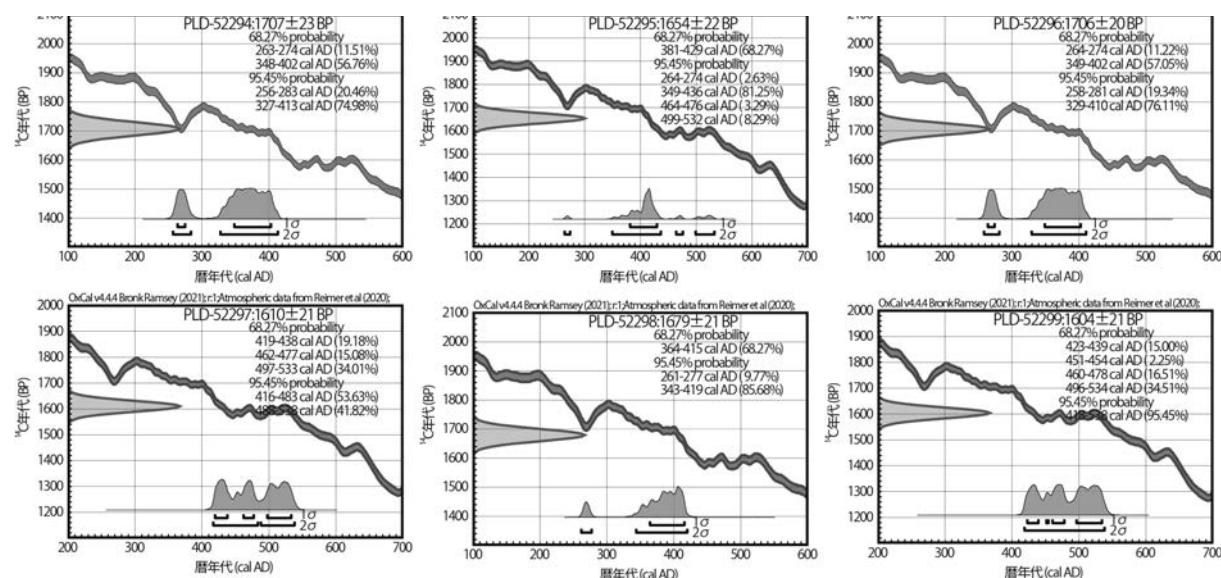


図 66 暦年較正結果

測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ: IntCal20）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内

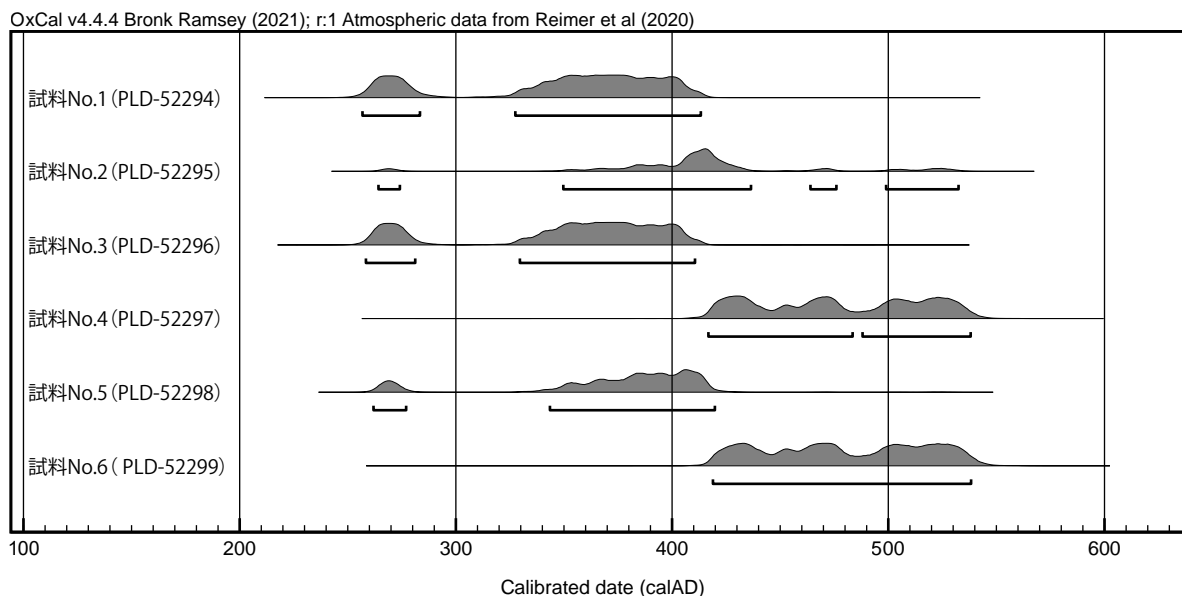


図 67 マルチプロット図

に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

測定結果（以下の較正年代は 2 σ の値）は、以下のとおりである（図 67）。

試料 No.1 (PLD-52294) は、14C 年代が 1705 ± 25 BP、較正年代が 256-283 cal AD (20.46%) および 327-413 cal AD (74.98%) で、3 世紀中頃～5 世紀前半の暦年代を示した。試料 No.2 (PLD-52295) は、14C 年代が 1655 ± 20 BP、較正年代が 264-274 cal AD (2.63%)、349-436 cal AD (81.25%)、464-476 cal AD (3.29%)、499-532 cal AD (8.29%) で、3 世紀後半～6 世紀前半の暦年代を示した。試料 No.3 (PLD-52296) は、14C 年代が 1705 ± 20 BP、較正年代が 258-281 cal AD (19.34%) および 329-410 cal AD (76.11%) で、3 世紀中頃～5 世紀前半の暦年代を示した。試料 No.4 (PLD-52297) は、14C 年代が 1610 ± 20 BP、較正年代が 416-483 cal AD (53.63%) および 488-538 cal AD (41.82%) で、5 世紀前半～6 世紀前半の暦年代を示した。試料 No.5 (PLD-52298) は、14C 年代が 1680 ± 20 BP、較正年代が 261-277 cal AD (9.77%) および 343-419 cal AD (85.68%) で、3 世紀後半～5 世紀前半の暦年代を示した。試料 No.6 (PLD-52299) は、14C 年代が 1605 ± 20 BP、較正年代が 418-538 cal AD (95.45%) で、5 世紀前半～6 世紀前半の暦年代を示した。

上記の年代値に該当する時期の年代観について、森岡ほか（2016）および岸本（2011）を参照すると、試料 No.1 (PLD-52294) は古墳時代前期前半～中期、試料 No.2 (PLD-52295) は古墳時代前期前半～後期前半、試料 No.3 (PLD-52296) は古墳時代前期前半～中期、試料 No.4 (PLD-52297) は古墳時代中期～後期前半、試料 No.5 (PLD-52298) は古墳時代前期前半～中期、試料 No.6 (PLD-52299) は古墳時代中期～後期前半に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、すべて最終形成年輪を確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.
- 岸本直文 (2011) 古墳編年と時期区分. 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編「古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み」: 34-44, 同成社.
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩 (2016) 総括. 古代学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」: 335-398, 六一書房.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

執筆者

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

(伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男)

第5項 樹種同定(木質遺物)

(1) はじめに

大阪府八尾市の久宝寺遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(第4項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、5区Ⅳ地区の遺構番号 140 などから出土した木質遺物 6 点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柁目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

(3) 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属とコウヤマキ、スギの 3 分類群と、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)が 1 分類群の、計 5 分類群がみられた。スギが 3 点で、マツ属複維管束亜属とコウヤマキ、アカガシ亜属は各 1 点みられた。同定結果を表 13 に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図 68 1a-1c (No.3)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

表 13 久宝寺遺跡出土木製品の樹種同定結果

試料 No.	遺物 No.	登録 No.	調査区	地区	遺構番号	層位	樹種	木取り	年代測定番号
1	13	420	5 区	IV	140		スギ	柾目	PLD-52294
2	19	429	5 区	IV	140		スギ	柾目	PLD-52295
3	3	410	5 区	IV	140		マツ属複維管束亜属	芯去削出	PLD-52296
4	3		5 区	IV	140		コナラ属アカガシ亜属	柾目	PLD-52297
5		278	5 区	IV		灰白色砂層	スギ	柾目	PLD-52298
6	14	421	5 区	IV	140		コウヤマキ	板目	PLD-52299

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

2) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図68 2a-2c(No.6)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～5列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

3) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図68 3a-3c (No.2)、4a-4c (No.5)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

4) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図68 5a-5c (No.4)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(4) 考察

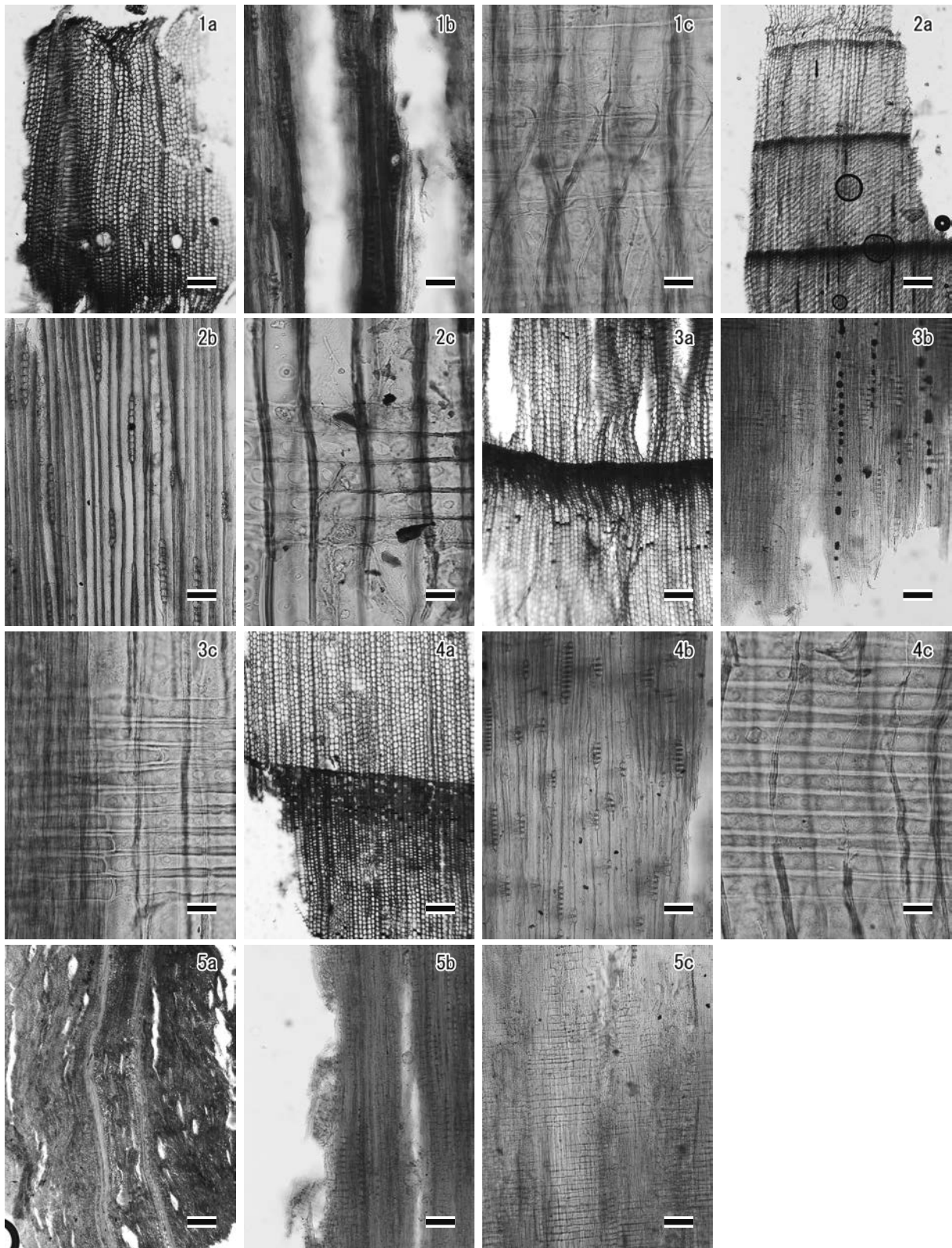
出土した木質遺物は、マツ属複維管束亜属とコウヤマキ、スギ、アカガシ亜属であった。マツ属複維管束亜属とコウヤマキ、スギは木理通直で加工性が良い樹種であり、マツ属複維管束亜属とコウヤマキは特に耐水性が高い樹種である。またアカガシ亜属は、とても堅硬な樹種である。(伊東ほか, 2011)。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011) 日本有用樹木誌. 238p, 海青社.

執筆者

小林克也(パレオ・ラボ)



1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 3)、2a-2c. コウヤマキ (No. 6)、3a-3c. スギ (No. 2)、4a-4c. スギ (No. 5)、5a-5c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 4)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=1-4: 25 μm ・5: 100 μm)

図 68 久宝寺遺跡出土木材の光学顕微鏡写真

第5章 総括

今回の調査では、古墳時代初頭、古墳時代中期、古墳時代後期、古代、中世の遺構、遺物を検出した。本章では今回の調査成果から想定できる各時期の様相について述べる。

(1) 古墳時代初頭

今回の調査で確認した当該期の遺構は溝と井戸である。いずれも3区の東端から4区にかけて、黒色のシルト層もしくは粘性砂質土層の上面（T.P.+6.0m 付近）で検出している。この黒色土から多くの古式土師器が出土した。古式土師器の出土場所はいくつかの箇所にも固まる傾向があったが、土器を意図的に設置した痕跡は確認できず、遺構と考えられる輪郭は確認できなかった。激しく摩耗している土器は少ないが、完形に復元できる個体も少ない。これらの状況から、集落で使用していた土器の廃棄を想定している。黒色土の花粉分析やプラント・オパール分析ではイネ科やヨモギ属の産出が目立っており、湿潤な場所に生息する植物も見られることから、周辺に水田が存在した可能性がある。ただし土器の出土量からこの黒色土自体が水田の耕作土とは考えづらいため、黒色土は周辺の水田が水没して沼地状態となった際に堆積した土であろうか。なお黒色土が堆積した時期は、土器の特徴や放射性炭素年代測定から、庄内式期古段階から布留式期中段階までを想定している。

(2) 古墳時代中期から後期

古墳時代初頭の黒色土が形成されたのち、T.P.+6.5m 付近まで幾層もの砂質土層が堆積する。これらは河川氾濫によるものと考えられ、層中にラミナも確認できる。令和3年度調査においてもこの砂層は確認しており、西側からの砂の流入が推測されていた。今回の調査で2区と3区の間にも5層が確認できなかった箇所があり、谷状地形の存在を指摘したが、この谷を流れる河川から排出された砂により形成された砂層であることを想定したい。またこの層中から準構造船の舷側板が出土している。これらの堆積は古墳時代前期の布留式期中段階から新段階にかけてと考えられる。一連の砂質土層の堆積が落ち着いたところに、古墳時代中期から後期にかけての遺構が形成された。今回の調査で確認した当該期の遺構はピット、土坑、溝である。第3章第3項で記載のとおり、明確に柱穴と判断できるピットは確認できなかった。一方で、土坑やその周辺、溝からは古墳時代中期を中心とする土器や木製品が出土しており、当時の生活の痕跡が認められる。3区の土坑101には埋土に炭化したイネが大量に含まれていたほか、5区の溝140から出土した木材には炭化などの被熱痕が認められた。これらの状況を踏まえると、当地からそう遠くない場所に古墳時代中期から後期にかけての集落が営まれており、当時の人々が生活していたものと推測できる。

(3) 古代

今回の調査で確認した古代に属する遺構は井戸のみであり、他の時代に比べると数は少ない。遺物も井戸出土のもの以外は全て後世の遺構もしくは包含層からの出土であり、当地での古代の人々の痕跡は希薄である。検出した井戸は井戸枠に曲物を使用されており、外側に瓦を1段から3段程度積んでいる。古代の瓦のみで構成されており、完形のままで使用された瓦は確認できなかった。井戸に使用されていることから転用瓦であることはほぼ確実である。瓦の特徴や文字瓦の紀年が728年と推定されること、井戸から出土した曲物を年代測定した結果7世紀から8世紀の年代が示されたことから、瓦が製作されたのとそう遠くない時期に井戸を構築している可能性がある。周辺で同時期の瓦が出土しているのは渋川廃寺と近畿自動車道建設時に調査した久宝寺遺跡（赤木・一瀬ほか1989）であり、近畿道建設時の調査区では重圈文軒丸瓦が出土している。『八尾市史』では「仮称神武町廃寺」として想定されており、

今回の調査地から最も距離が近い廃寺である。今後の調査により、近隣で寺院関係の遺構もしくは官衙の存在が明らかになることを願いたい。

(4) 中世以降

中世以降はピットや土坑が少なくなり、溝などの遺構がほとんどを占める。遺物も包含層からの出土で、土層観察からも耕作土層が確認できる。当該地での耕作は近世になっても継続し、大規模な島畑耕作を行っていた。久宝寺緑地が整備される前も調査地は耕作地であり、中世以降連綿と耕作が行われていたことが確認できる。

【参考文献】

- 笹栗 拓 2022 「摂津東部・上牧遺跡における古墳時代の土器編年」『大阪文化財研究』第55号 公益財団法人大阪府文化財センター
- 鋤柄俊夫 1997 「中世食器の地域性 6—畿内周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 土井和幸・岩宮末地子 2000 『大野寺跡発掘調査概要報告—OOT-5 地点・土塔町—』堺市文化財調査概要報告第84冊 堺市教育委員会
- 西村 歩 2008 「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」ふたかみ邪馬台国シンポジウム8シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』資料集 香芝市教育委員会
- 原田昌則 2003 「第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う—』財団法人八尾市文化財調査研究会報告74
- (財)八尾市文化財調査研究会編 2006 八尾市立埋蔵文化財調査センター平成18年度秋季企画展展示案内『やおの古墳時代—古式土師器のうつりかわり—』(平成18年度埋蔵文化財保存活用整備事業) 八尾市教育委員会
- (財)八尾市文化財調査研究会編 2012 八尾市立埋蔵文化財調査センター平成24年度秋季企画展展示案内『やおの弥生時代Ⅱ—弥生時代から邪馬台国時代へ—』 八尾市教育委員会
- 大阪府教育委員会 1992 『久宝寺遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 2007 『加美・久宝寺遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 2010 『都屋北遺跡発掘調査報告書』大阪府埋蔵文化財調査報告2010-1
- 大阪府教育委員会 2016 『久宝寺遺跡発掘調査報告書』大阪府埋蔵文化財調査報告2015-6
- 大阪府教育委員会 2017 『大阪府教育庁文化財調査事務所年報21』
- 大阪府教育委員会 2020 『久宝寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2019-3
- 大阪府教育委員会 2024 『久宝寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2023-3
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987a 『久宝寺北(その1～その3)』
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987b 『久宝寺南(その1)』
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987c 『久宝寺南(その2)』
- 財団法人大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』
- 財団法人大阪府文化財センター 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ—』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第156集
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2013 『久宝寺遺跡2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第239集
- 八尾市史編纂委員会編 2017 『新版八尾市史 考古編1—遺跡からみた八尾の歩み—』 八尾市
- 八尾市史編纂委員会編 2020 「(3) 市内の飛鳥時代から奈良時代の寺院の年代別推移」『新版八尾市史 考古編2—

第5章 総括

考古学からみた八尾の歴史―』 八尾市

原田昌則 1993 「Ⅲ久宝寺遺跡＜第6次調査＞」『Ⅰ東弓削遺跡＜第4次調査＞Ⅱ久宝寺遺跡＜第1次調査＞Ⅲ久宝寺遺跡＜第6次調査＞Ⅳ萱振遺跡＜第4次調査＞Ⅴ萱振遺跡＜第5次調査＞Ⅵ萱振遺跡＜第8次調査＞』
(財)八尾市文化財調査研究会報告 37 財団法人八尾市文化財調査研究会

遺構一覧表

遺構 番号	地区	種別	平面図 No.	断面図 No.	遺物登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
001	1-Ⅲ	ビット	001 003	003		80	68	5	
002	1-Ⅲ	ビット	001 005	005		27	24	6.5	
003	1-Ⅲ	ビット	001 005	005		73	40～	8	
004	1-Ⅲ	溝	001	003		260	40 (最大)	9	
005	1-Ⅲ	土坑	001	004	021～023、029、032	151	70	43	中世
006	1-Ⅲ	ビット	001	003	028	34	約 30	14	中世
007	1-Ⅲ	ビット	001 003	003		56	42	3	
008	1-Ⅲ	土坑	001	003		142	25～	13	
009	1-Ⅲ	土坑	001	005	018	272～	210	5	古代 or 中世
010	1-Ⅲ	土坑		005	017	82	60～	22	古墳？
011	1-Ⅲ	土坑	001	005		50	36	17	
012	1-Ⅲ	土坑	001	005	019、024、030、047	220	140	28	中世
013	1-Ⅲ	溝	010	008	049、054	224～	40 (最大)	9	中世？
014	1-Ⅱ	溝？	010	008		80～	54 (最大)	4	
015	1-Ⅲ	ビット	010	008		56	46	15	
016	1-Ⅲ	ビット	010	008		40	32	13	
017	1-Ⅲ	土坑	010	008		86～	50	4	
018	1-Ⅲ	溝	010	008	044、052	90～	44	19	中世
019	1-Ⅲ	土坑	010	008	048、053	274～	140～	17	中世
020	1-Ⅲ	溝	010	007	043、051	546～	26～	34	TK23・47？
021	1-Ⅲ	溝	010	008		144～	26 (最大)	9	古代？
023	1-Ⅲ	土坑	010	007	055	210～	258	54	古代 or 中世
024	1-Ⅲ	溝	010	007	050	90～	22	9	
025	2-Ⅰ	ビット	015	018		40	40	9	
026	2-Ⅰ	ビット	015	018		18	16	14	
027	2-Ⅰ	ビット	015	018	158	38	32	5	
028	2-Ⅰ	ビット	015	018		15	15	5	
029	2-Ⅰ	ビット	015	018	120、127	42	30～	5.5	古墳後期前葉
030	2-Ⅰ	溝？	015	無し		80～	40	6.5	
031	2-Ⅰ	土坑	015	018		58	40	10	
032	2-Ⅰ	溝	015	018	102、128	240～	110	6.5	古墳 or 古代？
033	2-Ⅰ	溝	015	北壁	103	240～	104	18.7	古墳 (MT15～TK10)
034	2-Ⅰ	土坑	015	無し		60～	34	5.4	
035	2-Ⅰ・Ⅱ	大溝	015	北壁	104、123、129、159	240～	576	15.5	中世
036	2-Ⅱ	大溝	015	北壁	105	240～	220～	6	中世？
037	2-Ⅱ	溝	015	018	149	260～	50	12	古墳
038	2-Ⅱ	ビット	015	018		48	44	19	
039	2-Ⅱ	ビット	016	018		26	22	6.5	
040	2-Ⅱ	溝	016	018	106、189	230～	55	3.5	古代？
042	2-Ⅱ	溝	016	018	150	330～	38	6.3	古墳？
043	2-Ⅱ	溝	016	北壁	107、151	220～	26	7	TK10？
047	2-Ⅱ	ビット	016	018		30	26	4	
048	2-Ⅲ	溝	016	北壁	108、130	250～	70	31.6	古代 or 中世？
049	2-Ⅲ	大溝	016	北壁	109、110	250～	416～	27	中世
050	2-Ⅲ・Ⅳ	ビット	017	018		40	36	5.5	
051	2-Ⅲ・Ⅳ	溝	017	北壁	131	250～	34	8	古墳
052	2-Ⅲ	溝	016	北壁		240～	26～	16	
054	2-Ⅳ	ビット	017	018		16	16	2.5	
055	2-Ⅳ	土坑	017	018	133、174	70	35	7	古墳？
056	2-Ⅳ	土坑	017	018	132、173	57	40	10.5	古墳後期
057	2-Ⅳ	ビット	17	018	134	16	15	14.5	
058	2-Ⅳ	土坑	017	018	135、172	76	47～	17	古墳？
059	2-Ⅳ	土坑	017	018	136、152	52～	48～	21	TK208？
060	2-Ⅰ	ビット	015	019	124、160	68	49～	25	古墳中期末～後期前葉
061	2-Ⅰ	溝	015	018	137	174～	42	5	中世
062	2-Ⅱ	ビット	016	018		20	20	8	
063	2-Ⅱ	溝	016	北壁	153	240～	40	12	
064	2-Ⅰ	土坑？	015	018 西アゼ、 019 東アゼ	121、122、154、161	300～	70～	36.5	018 西アゼ、古墳後期
065	3-Ⅰ	ビット	017	024		28	26	7	
066	3-Ⅰ	溝	017	024	125、169、197、207	336～	54	12	古墳中期 (TK73～216)
067	3-Ⅰ	土坑	017	024	170	45	38	18	
068	3-Ⅰ	ビット	017	026	199	20	20	4	TK208？
069	3-Ⅰ	土坑	017	024	171、198	56	42	7	古墳後期
070	3-Ⅰ	ビット	017	024	201	32	31	13	
071	3-Ⅰ	土坑	017	024	202、203、204	76～	36	3	TK73～TK26
072	3-Ⅰ	ビット	017	024	205	48	46	60	107 と同じか？
073	3-Ⅰ	溝	017	024	175	240～	55	8	
074	3-Ⅰ	ビット	017	024		14	12	5	
075	3-Ⅱ	大溝	027	北壁	195	264～	428	17	中世

遺構 番号	地区	種別	平面図 No.	断面図 No.	遺物登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
076	3-Ⅱ	溝	027	北壁	176	170～	16	8	古墳後期
077	3-Ⅱ	土坑?	027	024		110～	70	20	
078	3-Ⅱ	溝	027	北壁		228～	85	18	
079	3-Ⅱ・Ⅲ	土坑	027	026	182	70	34～	15	
080	3-Ⅲ	土坑	027	026	181	46	22	10	TK10?
081	3-Ⅲ	溝	027、048	026	214、237、263、271	214～	38	22	TK208orTK43
082	3-Ⅲ	溝	027	026	184、215、264	225～	38	17	109と重複する?、中世
083	3-Ⅲ	土坑	027	026	180	116～	49	27	井戸110と重複する、古代
084	3-Ⅲ	溝	027	026	179、216	210～	64	15	TK23・47
085	3-Ⅲ	土坑	027	026	178、238	95～	50	16.5	112とおおよそ重複する
086	3-Ⅲ	大溝	027	北壁	239	234～	314	13	
087	3-Ⅲ	土坑	027	034	217	92	49～	15	
088	3-Ⅲ	ピット or土坑	027	034	183、218	44	36	15	古墳?
089	3-Ⅲ・Ⅳ	大溝	027	北壁		186～	525	16	
090	3-Ⅳ・Ⅴ	ピット	028	034		35	32	10	
091	3-Ⅴ	ピット	028	034		21	20	5	
092	3-Ⅴ	ピット	028	034		35	30	5	
093	3-Ⅴ	土坑	028	034		81	58～	16	
094	3-Ⅴ	土坑	028	034		54～	44～	9	
095	3-Ⅴ	溝	028	034		176～	62	7	
096	3-Ⅰ	ピット	017	026	168	20	20	4	古墳
097	2-Ⅳ	ピット	017	020		26	26	7	
098	2-Ⅰ	ピット ?	015	019	186(2-Ⅰ)	40～	90	31	
099	3-Ⅱ	溝	027		193	253～	62	9～12	
100	2-Ⅱ	ピット	030	030		27	18～	41	
101	2-Ⅳ 3-Ⅰ	竪穴?	031	036	200、226～228、242、243?	205～	298	15	TC232～TK216
102	3-Ⅰ	土坑	017	030		54	40	12	
103	4-Ⅰ	井戸	037	056	219、231、313、322	125～	210	105～	TK43か
104	4-Ⅰ	溝	037	無し	220	/	/	/	近世スキ溝
105	4-Ⅳ	溝	039	056		380～	80	12	
106	4-Ⅰ	溝	037	無し		/	/	/	近世スキ溝
107	3-Ⅰ		036	036	213、229	48	45	46	072と同じ
108	3-Ⅰ		036	036	236	35	32	35	
109	3-Ⅲ	溝		051	265、272、(273)、280	210～	116	12	古墳後期
110	3-Ⅲ	井戸	048、050	050、051	266、(273)、274、281、300、 301、383、431、432	166	116	66～	古代(8C)
111	3-Ⅲ	ピット	048	051	295	32	30	11	
112	3-Ⅲ	土坑	048	047	277	60～	67	23	
113	3-Ⅲ	溝	048	051		90～	22	14	
115	3-Ⅲ	溝	048	051		250～	30	7	
116	3-Ⅴ	井戸?	057	058	366	230	220	62～	庄内古～新?
117	3-Ⅲ	ピット	052	053		54	30	18	112の輪郭と重複する
118	3-Ⅲ	ピット	052	053		70	56	18	
119	3-Ⅲ	ピット	052	053		40	40	22	
120	4-Ⅴ	溝	054	北壁		54～	24～	3	
121	4-Ⅴ	溝	054	060	335	260～	29	8	
122	4-Ⅴ	溝	054	060	336	160～	25	5	庄内～布留?
123	4-Ⅴ	溝	054	060		100～	19	6	
124	4-Ⅴ	溝	054	060		138～	23	4.5	
125	4-Ⅴ	溝	054	060	337	250～	25	9	
126	4-Ⅴ	溝	054	060	338	236～	22	7	庄内?
127	4-Ⅴ	溝	054	060	339	204～	26	7	
128	4-Ⅳ・Ⅴ	溝	054	060	334	226～	31	15	弥生後期後葉(b)
131	6-Ⅳ	溝	067	070	347	240～	74	34	古代
132	6-Ⅳ	溝	067	070	348	230～	207	16	
133	6-Ⅱ	溝	067	070		240～	31	10	
134	6-Ⅱ	溝	067	070	344	240～	46	7	近世
135	6-Ⅱ	土坑	067	無し	343、358	370～	150～	23	中世以降
136	6-Ⅲ	土坑	067	無し	340、356	240～	390	42	TK10
137	6-Ⅲ	土坑	067	無し	341、357	850～	164	21	近世
138	4-Ⅰ	土坑	059	無し	333	220～	120～	8.1	庄内古段階古相
139	5-Ⅳ	土坑		無し	388、404、405				TK73
140	5-Ⅳ	溝?	079	081	389、395、396、402、403、 407～426、429、433、434	260～	1000	33	TK73
141	5-Ⅰ	ピット	078	081		32	20	9	
142	5-Ⅰ	ピット	078	081		36	30	21	
143	5-Ⅰ	ピット	078	081		45	26	20	
144	5-Ⅰ	ピット	078	081		32	25	20	
145	5-Ⅰ	ピット	078	081		/	25	15	
146	5-Ⅳ	溝?	078	082	400、401、427	200～	710	16	中世
147	5-Ⅳ	ピット	079	082	428	30	30	6	TK73?

遺物観察表

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
1	042	1 区Ⅲ	023	土師器	把手				残存長 6.7 残存幅 4.0	(内) 7.5YR4/6 褐 (外) 7.5YR4/6 褐 (断) 7.5YR8/3 浅黄橙	密(細砂ごく少量含む)	良	把手のみ	
2	055	1 区Ⅲ	023	土師器	鉢	(14.0)	残 5.3			(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR8/3 浅黄橙 ・ 7.5YR7/6 橙 (断) 10YR8/2 灰白 ・ 7.5YR7/6 橙	やや密(径 5mm 以下の白色の礫、径 2mm 以下の白・灰色粗砂を多く含む)	良	口縁～胴部	
3	017	1 区Ⅲ	010	土師器	甕 (口縁部)	(16.4)	残 3.6		頸部径 (13.0)	(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR4/1 褐灰	密(径 3mm の茶色の礫 1 個、径 2mm 以下の白・灰色の粗砂を含む)	良	口縁～頸部・20%	
4	023	1 区Ⅲ	005 北東	土師器	高坏 (脚部)		残 4.7	底径 (8.0)		(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR7/6 橙 (断) 10YR5/1 褐灰	やや粗(径 4mm 以下の白・灰色の礫、径 2mm 以下の白色の粗砂を多く含む)	良	底部～脚部 60%	
5	028	1 区Ⅱ	006	瓦器	皿	(10.0)	2.1			(内) N5/0 灰 (外) N5/0 灰 (断) N8/0 灰白	密	良	25%	
6	019	1 区Ⅲ	012	瓦器	碗 (底部)		残 1.3	底径 (4.0)		(内) N3/0 暗灰 (外) N4/0 灰 ・ 5Y7/1 灰白 (断) 5Y7/1 灰白	密(径 2mm 以下の白色の粗砂少量、白色の細砂を含む)	良	底部 25%	遺構面 2 面
7	66	1 区Ⅰ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	複合口縁 壺 (口縁)	(23.8)	残 4.5			(内) 10YR8/2 灰黄褐 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR7/3 にぶい橙	やや密(径 5mm、3mm の白色の礫・径 2mm 以下の白色の粗砂を含む・雲母含む)	良	口縁部 15%	
8	155・ 1 4 4 (2/2)	1 区Ⅲ	黒色砂層 (第 5 層) ・ 黒色砂層 (第 5 層) 掘り下げ	土師器	細頸直口 壺(口縁)	(10.0)	残 7.1			(内) 7.5YR6/3 にぶい褐 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 (断) 7.5YR6/3 にぶい褐	密(雲母を含む)	良	口縁部 30%	
9	1 4 4 (2/2)	1 区Ⅲ	黒色砂層 (5 層) 掘り下げ	土師器	甕	(18.8)	残 6.2		頸部径 (17.0)	(内) 5YR7/6 橙 (外) 5YR7/6 橙 (断) 5YR7/4 にぶい橙	密(径 4mm 以下の灰色・茶色の礫数個、径 2mm 以下の白色の粗砂を含む・雲母も含む)	良	口縁～頸部 15%	
10	067	1 区Ⅰ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	甕(口縁)	(11.8)	残 2.7		頸部径 (9.0)	(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR5/1 褐灰 (断) 10YR5/1 褐灰	密(白色の細砂含む)	良	口縁部 20%	
11	067	1 区Ⅰ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	庄内・甕 (口縁部)	(15.6)	残 2.4		頸部径 (12.0)	(内) 5YR6/4 にぶい橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙 (断) 5YR6/4 にぶい橙	密(径 2mm 以下の白色の粗砂を含む)	良	口縁部 20%	
12	155	1 区Ⅲ	黒色砂層 (第 5 層)	土師器	庄内・甕	(15.0)	残 12.2			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR4/1 褐灰 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗(3mm 以下の長石、2mm 以下の灰色砂粒・褐色砂粒・雲母を含む)	良	口縁部 25%	
13	144 (2/2)	1 区Ⅲ	黒色砂層(5 層)掘り下げ	土師器	甕 (口縁部)	(16.0)	残 4.7		頸部径 (13.0)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙 ・ 2.5Y4/1 黄灰	密(径 1mm 以下の白、灰色の粗砂を含む)	良	口縁部 15%	
14	067	1 区Ⅰ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	庄内・甕 (口縁部)	(14.8)	残 2.9		頸部径 (10.7)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR7/1 灰白	密(径 3mm の白色の礫 1 個、白色の細砂・雲母含む)	良	口縁部 25%	
15	155	1 区Ⅲ	黒色砂層 (第 5 層)	土師器	庄内・甕	14.3	残 8.8			(内) 5YR7/4 にぶい橙 ・ N3/ 暗灰 (外) 5YR6/6 橙 ・ N3/ 暗灰 (断) 5YR7/2 明褐灰	やや粗(2mm 以下の長石・石英含む)	良	口縁部 60%	
16	067	1 区Ⅰ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	庄内・甕 (口縁部)	(15.6)	残 2.9			(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y5/1 黄灰 (断) 2.5Y6/1 黄灰	密(白色の細砂、雲母を含む)	良	口縁部 15%	
17	068	1 区Ⅲ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	甕 (口縁部)	(15.8)	残 2.35			(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰 (断) 2.5Y6/1 黄灰	密(径 2mm 以下の白色の粗砂 1 個、雲母を含む)	良	口縁部 20%	
18	071	1 区Ⅱ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	甕	(16.6)	残 4.6		頸部径 (12.6)	(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	密(径 2mm 以下の白色の粗砂を含む)	良	頸部～体部 20% (口縁は一部)	
19	071	1 区Ⅰ	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	壺 (底部)		残 2.0	底 径 5.1		(内) N4/0 灰 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR5/1 褐灰	密(径 4mm 以下の白色の礫・径 2mm 以下の白色の粗砂を多く含む)	良	底部のみ (100%)	
20	004	1 区	灰色シルト ・ 黒褐色砂質土	土師器	甕 (底部)		残 1.8	底径 4.4		(内) 2.5Y3/1 黒褐 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR5/1 褐灰	やや密(径 3mm の白色の礫・径 2mm 以下の白色の粗砂を多く含む)	良	底部のみ	東側溝

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
21	067	1 区 I	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	甕 (底部)		残 4.1	底径 3.6		(内) N3/0 暗灰 (外) 2.5Y4/1 黄灰 ・ 2.5Y3/1 黒褐 (断) 7.5YR7/4 にぶい橙	密 (径 2mm 以下の白色の粗 砂)	良	底部のみ	
22	067	1 区 I	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	甕 (底部)		残 4.7	底径 3.9		(内) 2.5Y7/1 灰白 (外) 2.5Y4/1 黄灰 (断) 10YR8/2 灰白	密 (径 3mm の白色の礫 2 個・ 径 2mm 以下の白色の粗砂を 含む)	良	底部のみ	
23	155	1 区 III	黒色砂層 (第 5 層)	製塩土 器?	鉢		残 6.1	底径 3.6		(内) 7.5YR6/3 にぶい褐 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 ・ 7.5YR4/1 褐灰 (断) 7.5YR7/3 にぶい橙	やや密 (2mm 以下の長石含 む)	良	底部 60%	
24	155・ 1 4 4 (2/2)	1 区 III	黒色砂層 (第 5 層) ・ 黒色砂層 (第 5 層) 掘 り下げ	製塩土 器?	鉢	8.7	10.0	底径 2.8		(内) 7.5YR7/2 明褐灰 (外) 7.5YR7/2 明褐灰 (断) 7.5YR6/1 褐灰	やや密 (2mm 以下の褐色砂 粒、1mm 以下の長石・雲母 含む)	良	60%	
25	155	1 区 III	黒色砂層 (第 5 層)	土師器	鉢(底部)		残 2.6	底径 3.7		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 (径 6mm 以下の白、 灰色の礫・径 2mm 以下の白、 灰色の粗砂を多く含む)	良	底部のみ	
26	1 4 4 (2/2)	1 区 III	黒色砂層 (5 層) 掘り下 げ	土師器	鉢 (口縁部)	(26.6)	残 6.3			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 ・ 5YR6/6 橙 (断) 10YR5/1 褐灰	やや密 (径 3mm 以下の白・ 灰色の礫、径 2mm 以下の白・ 灰色の粗砂を多く含む)	良	口縁 ～頸部 15%	
27	67	1 区 I	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	高坏 (杯部)	(18.2)	残 4.3			(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 10YR5/1 褐灰	密 (径 3mm 以下の白色の礫、 径 2mm 以下の白色の粗砂を 含む)	良	口縁部 20%	
28	072	1 区 III	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	高坏 (脚部)		残 8.6	底径 (11.6)		(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR6/1 褐灰	密 (径 4・3mm の白色の礫・ 径 2mm 以下の白・灰色の粗 砂を含む)	良	底部 ～脚部	
29	1 4 4 (2/2)	1 区 III	黒色砂層 (5 層) 掘り下げ	土師器	二重口縁 壺?		残 3.7		頸部 (14.6)	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	密 (径 2mm 以下の白色の粗 砂を含む)	良	頸部分 小片	
30	072	1 区 III	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	甕 (口縁部)	(14.0)	残 8.0		頸部径 (9.6)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) N1.5/0 黒 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	密 (径 2mm 以下の白色の粗 砂を含む)	良	口縁 ～体部 20%	
31	071	1 区 III	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	高坏	15.2	16.0 ～ 16.4	底径 11.6		(内) 2.5Y7/1 灰白 ・ 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 2.5Y8/1 灰白 (断) 2.5Y5/2 暗灰黄	やや密 (径 2mm 以下の白・灰・ 茶色の粗砂を含む)	良	80%	
32	074	1 区 III	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	高坏	14.6	13.0	底径 11.8		(内) 5YR7/6 橙 (外) 5YR7/6 橙 (断) 7.5YR8/4 浅黄橙	粗 (5mm 以下の長石・石英 含む)	良	80%	
33	073	1 区 III	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	小型丸底 土器	9.6	9.0			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 ・ 7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR8/1 灰白 ・ 7.5YR4/1 褐灰 (断) 7.5YR8/2 灰白	やや粗 (2mm 以下の長石・ 石英・クサリ礫・雲母含む)	良	70%	
34	070	1 区 II	黒色砂層上面 (第 5 層)	土師器	小型丸底 土器	(11.8)	残 5.4			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 7.5YR7/3 にぶい橙 (断) 10YR4/1 褐灰 ・ 7.5YR4/4 褐	密 (径 5mm の茶色の礫 1 個・ 径 2mm 以下の白・灰色の粗 砂をごく少量含む、雲母も含 む)	良好	口縁部 15%	
35	071	1 区 II	黒色砂層上面 (第 5 層)	石製品	砥石				最大幅 5.9 最大長 4.9 厚 2.6 ～ 2.9	記入なし				
36	123	2 区 I	035	土師器	坏	(14.0)	残 5.6			(内) 5YR7/6 橙 ・ 7.5YR4/2 灰褐 (外) 5YR7/6 橙 (断) 5YR7/6 橙 ・ 7.5YR4/2 灰褐	やや密 (1mm 以下の褐色橙 色砂粒、雲母、含む)	良	口縁部 10%以下	
37	160	2 区 I	060	土師器	甕 (口縁部)	(13.0)	残 5.4			(内) 10YR8/1 灰白 (外) 10YR7/1 灰白 (断) 10YR7/1 灰白	粗 (3mm 以下の長石、石英、 雲母、含む)	良		
38	173	2 区 IV	056	土師器	把手 (甕?)				残存長 6.9 残存幅 5.1	(内) 7.5YR5/4 にぶい褐 (外) 7.5YR5/4 にぶい褐 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 (6mm 灰色小石粒 1 ヶ・2mm 以下の長石、褐色 砂粒、クサリ礫、雲母、含む)	良	把手部 完形	
39	154	2 区 I	064	須恵器	杯身	(12.0)	残 4.0			(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰 (断) 2.5Y7/1 灰白	密 (1mm 以下の長石、含む)	良	口縁部 15%	
40	256	2 区 I	5 層 (黒色砂層)	土師器	広口壺	(13.0)	14.4	底部径 4.6		(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 ・ 7.5YR2/1 黒 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 (5mm 以下の長石、2 ～ 3mm の褐色砂粒、雲母含 む)	良	60%	
41	256	2 区 I	5 層 (黒色砂層)	土師器	壺 (底体部)		残 9.7	底径 3.8		(内) N4/ 灰 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 ・ N3/ 暗灰 (断) 記入なし	やや粗 (3mm 以下の長石、 褐色小石粒、雲母含む)	良	底部完形	
42	256	2 区 I	5 層 (黒色砂層)	土師器	壺		残 16.6	底部径 4.8		(内) 2.5Y5/1 黄灰 ・ 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 5YR7/4 にぶい橙	粗 (3 ～ 6mm の灰・褐色小 石粒、2mm 以下の灰・褐色 砂粒、長石、含む)	良	底部完形	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
43	256	2区Ⅰ	5層 (黒色砂層)	土師器	長頸壺	(19.3)	(26.6)	高台径 5.6	体部最大径 (20.4)	(内) 5Y4/1 灰 ・ 2.5YR5/4 にぶい赤褐 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 ・ N3/ 暗灰 (断) 7.5YR7/3 にぶい橙	やや粗 (3～5mm の灰色・ 橙色小石粒少量、2mm 以下 の長石、石英、褐色砂粒、雲 母含む)	良	口縁部 10% 以下 高台部 完形	
44	233	2区Ⅱ	5層 (黒色粘質土)	土師器	壺	(9.0)	残 4.3		口頸部径 (6.6)	(内) 7.5YR7/2 明褐灰 (外) 7.5YR7/2 明褐灰 (断) 7.5YR7/2 明褐灰	やや粗 (3mm 以下の長石・ 2mm 以下の灰色砂粒、含む)	良	口縁部 20%	
45	233	2区Ⅰ	5層 (黒色粘質土)	土師器	壺 (底部)		残 3.5	底部径 1.8		(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 (3mm 以下の長石、 雲母、含む)	良	底部完形	
46	256	2区Ⅰ	5層 (黒色砂層)	土師器	壺 (底部)		残 3.7	底部径 4.8		(内) N 4/ 灰 (外) 10YR6/2 灰 黄 褐・ N3/ 暗灰 (断) 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 (5mm 以下の石英・ 2mm 以下の灰色砂粒、長石、 雲母、含む)	良	底部完形	
47	256	2区Ⅰ	5層 (黒色砂層)	土師器	壺 (底部)		残 3.5	底部径 4.1		(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 5YR6/3 にぶい橙・ 10YR3/1 黒褐 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	粗 (3mm 以下の長石、石英・ 2mm 以下の褐色、橙色砂粒、 角閃石含む)	良	底部 80%	
48	269	2区Ⅲ	5層	土師器	甕 (口縁部)	(15.8)	残 5.9			(内) 2.5YR6/6 橙 (外) 2.5YR6/4 にぶい橙・ 10YR2/1 黒 (断) 5YR6/4 にぶい橙	やや密 (2mm 以下の灰色砂 粒、長石、雲母、含む)	良	口縁部 10%	
49	257	2区Ⅱ	5層 (黒色シルト)	土師器	甕 (口縁部)	(13.6)	残 7.5		口頸部径 (10.8)	(内) 10YR6/1 褐灰・N3/ 暗灰・ 5YR5/4 にぶい赤褐 (外) 10YR6/1 褐灰・N3/ 暗灰・ 5YR5/4 にぶい赤褐 (断) 2.5YR6/4 にぶい橙	粗 (4mm の灰色小石粒・ 3mm 以下の長石、含む)	良	口縁部 25%	
50	327・ 359	2区Ⅰ ・ 3区Ⅱ	暗灰色粘質シルト (5層) ・ 黒色シルト (5層)	須恵器	甕	(16.3)	残 8.2			(内) 7.5YR5/3 にぶい褐 (外) 7.5YR5/2 灰褐 (断) N4/ 灰	密 (2mm 以下の白・灰色砂 粒を少量含む)	良好 堅緻	口縁部 90%	
51	257	2区Ⅱ	5層 (黒色シルト)	須恵器	甕	16.7	残 10.8			(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 2.5Y5/2 暗灰黄 (断) 2.5Y5/2 暗灰黄	密 (2mm 以下の白・灰色砂 粒を少量含む)	良	口縁部 完形	
52	235	2区	4層 (緑灰シルト) 5層 (黒色粘質土)	土師器	小型鉢 B (底部)		残 5.4	底部径 (2.6)		(内) 7.5YR6/2 灰褐・2.5Y4/1 黄灰 (外) 2.5YR6/3 にぶい橙 (断) 5YR5/2 灰褐	やや密 (5mm 以下の長石・ 1mm 以下の角閃石、雲母、 含む)	良	底部 40%	
53	256	2区Ⅰ	5層 (黒色砂層)	土師器	小型鉢 C	13.3	5.7	底部径 4.6		(内) 7.5YR8/2 灰白・7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR8/2 灰白・7.5YR3/1 黒褐 (断) 7.5YR8/2 灰白	やや密 (6mm 白色小石粒 1 個・2mm 以下灰色砂粒、長石、 石英、雲母、少量含む)	良	70%	
54	097	2区Ⅲ	4層上面精査	土師器	高坏 (脚部)		残 5.4	底部径 (9.4)		(内) 7.5YR7/4 にぶい橙・ 5YR6/6 橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙・ 5YR6/6 橙 (断) 7.5YR7/4 にぶい橙・ 5YR8/2 灰白	密 (1mm 以下の長石、雲母、 含む)	良	脚部 40%	
55	085	2区Ⅲ	3層	土師器	高坏	(21.0)	残 9.1			(内) 5YR7/4 にぶい橙・ 5YR4/1 褐灰 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 5YR7/4 にぶい橙	密 (1mm 以下の長石、チャート、 雲母を僅かに含む)	良	口縁部 8%	
56	202	3区Ⅱ	071 (取上 No.1)	土師器	高坏 (杯部)	(14.7)	残 5.15			(内) 5YR7/8 橙 (外) 5YR7/8 橙 (断) 5YR7/8 橙	やや粗 (2.5mm の白色砂粒少量・ 1mm の白色砂粒少量、白・ 灰色微細粒多量含む)	良好	20%	
57	202	3区Ⅱ	071 (取上 No.1)	土師器	高坏	16.7	残 9.7			(内) 5YR7/4 にぶい橙 (外) 5YR7/4 にぶい橙・N4/ 灰 (断) 5YR7/4 にぶい橙	やや密 (2mm 以下の長石、 灰色砂粒、雲母含む)	良	杯部 80%	
58	204	3区Ⅱ	071	土師器	壺 (口縁部)	(12.6)	残 6.2			(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙 (断) 5YR6/4 にぶい橙	密 (1mm 以下の長石、雲母 含む)	良	口縁部付 近 25%	
59	202	3区Ⅱ	071・取上 1	土師器	高坏 (脚部)		残 4.1	底部径 10.4		(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 (5mm 以下、長石、 2mm 以下、褐色砂粒、雲母 含む)	良		
60	207	3区Ⅰ	066	土師器	甕 (口縁部)	11.8	残 5.9			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 (断) 10YR7/1 灰白	やや密 (2mm 以下、長石、 灰色砂粒、雲母、含む)	良	ほぼ完形	
61	125	3区Ⅰ	066	韓式系	不明	(17.0)	残 4.8			(内) 10YR4/1 褐 灰・ 10YR6/2 灰黄褐 (外) N3/ 暗灰 (断) 10YR6/2 灰黄褐	やや密 (2mm 以下、長石、 褐色砂粒、橙色砂粒、雲母、 含む)	良		
62	205	3区Ⅱ	072	須恵器	無蓋高坏	(12.0)	残 4.1			(内) N5/ 灰 (外) N4/ 灰 (断) N6/ 灰	密 (2mm 以下、長石、雲母 含む)	良	口縁部 15%	
63	263	3区Ⅲ	081	土師器	高坏 (坏部)	(13.4)	残 5.4			(内) 5YR7/6 橙 (外) 5YR7/6 橙・10YR8/2 灰 白 (断) 10YR8/3 浅黄橙	やや粗 (4mm 褐色小石粒 1 ヶ・2mm 以下の長石、石英、 褐色砂粒、雲母、含む)	良	杯部 40%	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
64	366	3 区Ⅳ	116	土師器	甕 (口縁部)	13	残 4.1			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙(外) 10YR7/2 にぶい黄橙(断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密(2mm 以下、長石、角閃石含む)	良	口縁部 10%	
65	366	3 区Ⅳ	116	土師器	甕 (口縁部)	18.6	残 7.6			(内) 7.5YR5/3 にぶい褐(外) 7.5YR5/3 にぶい褐(断) 7.5YR5/3 にぶい褐	やや密(2mm 以下の灰色砂粒、角閃石含む)	良	口縁部 25%	
66	272	3 区Ⅲ	109	須恵器	蓋	12	残 3.6			(内) N6/ 灰(外) N5/ 灰(断) N6/ 灰	密(2mm 以下、長石、雲母少量含む)	良	口縁部・10%	
67	272	3 区Ⅲ	109	須恵器	蓋	12	残 4.5			(内) N5/ 灰(外) N4/ 灰・2.5YR5/1 赤灰(断) N5/ 灰	密(1mm 以下、長石含む)	良	口縁部・10%以下	
68	300	3 区Ⅲ	110	土師器	甕 (口縁部)	14.1	残 3.6			(内) 2.5YR5/8 明赤褐・10YR5/1 褐灰(外) 2.5YR5/8 明赤褐・2.5Y5/1 黄灰(断) 2.5YR5/8 明赤褐	粗(2.5mm の淡灰色砂粒少量・1mm の白・灰色砂粒少量、白色微細粒多量含む)	良好	小片	
69	274	3 区Ⅲ	110	土師器	甕 (口縁)	18	残 3.5			(内) 5YR7/6 橙(外) 5YR7/6 橙(断) 5YR7/6 橙	やや密(1.5mm の白色砂粒1 個、白・黒色微細粒多量含む)	良好	小片	
70	274	3 区Ⅲ	110	土師器	坏 B ? (底部)		残 1.8	高台径 (12.0)		(内) 7.5YR6/4 にぶい橙(外) 7.5YR6/4 にぶい橙(断) 7.5YR6/4 にぶい橙	密(0.5mm 以下、長石、雲母含む)	良	高台部・10%	
71	179	3 区Ⅲ	084	須恵器	杯身	(13.0)	残 4.1		受部径 (15.5)	(内) 2.5Y7/1 灰白(外) 2.5Y7/1 灰白(断) 2.5Y7/1 灰白	密(0.5mm 以下、褐色砂粒、雲母含む)	良	口縁部 10%以下	
72	215	3 区Ⅲ	082	須恵器	杯身	12	残 3.9		受部径 (14.4)	(内) 5Y7/1 灰白(外) N6/ 灰(断) 5Y7/1 灰白	密(1mm 以下の灰色砂粒、少量含む)	良	口縁部 10%以下	
73	281	3 区Ⅲ	110	土師器	ミニチュア高杯 (脚部)		残 5.1	底部径 6.3		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙・10YR4/1 褐灰(外) 10YR7/2 にぶい黄橙・10YR4/1 褐灰(断) 10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	脚部 90%	
74	274	3 区Ⅲ	110	土師器	把手				最大長 6.25 最大厚 2.8 最大幅 5.0	(内) 10YR8/3 浅黄橙(断) 2.5Y6/1 黄灰	粗(2.5mm の白色砂粒ごく僅か・1mm の灰・褐色砂粒少量、白・灰色、雲母微細粒多量含む)	良好	把手のみ	
75	266	3 区Ⅲ	110	須恵器	有蓋高坏 杯蓋	11.6	残 3.7			(内) N5/ 灰(外) N5/ 灰(断) N6/ 灰	密(1mm 以下、長石含む)	良	口縁部・10%以下	
76	300	3 区Ⅲ	110	土師器	小皿	9	残 1.7			(内) 10YR5/2 灰黄褐・2.5Y7/4 浅黄(付着物)(外) 10YR5/1 褐灰(断) 7.5YR5/6 明褐	やや粗(白・褐・赤褐色、雲母微細粒多量含む)	良好	20%	
77	430	3 区Ⅲ	黄灰色シルトと灰色砂の混合土層 (第 4 層)	白玉					外径 0.6 内径 0.2 厚 0.1 ~ 0.2	(内)(外)(断)			玉 (滑石)	
78	431	3 区Ⅲ	110	白玉					外径 0.4 内径 0.15 厚 0.3 ~ 0.35	(内)(外)(断)			玉 (滑石?)	
79	180	3 区Ⅲ	083	土師器	碗	(14.2)	残 3.3			(内) 5YR6/4 にぶい橙(外) 10YR7/2 にぶい黄橙(断) 5YR6/4 にぶい橙	密(0.1mm 以下、白色砂粒、雲母、含む)	良	口縁部・50%	
80	180	3 区Ⅲ	083	土師器	把手 (把手付鉢)		4.3		残存幅 1.9	(内) 2.5YR6/8 橙(外) 2.5YR6/8 橙(断) 2.5YR7/6 橙	密	良	把手部・ほぼ完形	
81	227	3 区Ⅰ	101	須恵器	壺 (口縁部)	16	残 4.3			(内) N5/ 灰(外) N5/ 灰(断) 2.5YR5/2 灰赤	粗(4mm の長石1 欠、1mm 以下の長石、少量含む)	良	口縁部・15%	
82	208	3 区Ⅰ	101 付近・灰黄色砂質土層 (第 4 層)	土師器	甕 (口縁部)	16	残 5.7			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙(外) 10YR7/3 にぶい黄橙(断) 2.5Y4/1 黄灰	やや密(2mm 以下、長石、石英、褐色砂粒、雲母含む)	良	口縁部・25%	遺構検出 スキ取り 中
83	208	3 区Ⅰ	101 付近・灰黄色砂質土層 (第 4 層)	土師器	高坏 (杯部)	14.8	残 4.6			(内) 10YR6/2 灰黄褐(外) 10YR6/2 灰黄褐(断) 10YR6/2 灰黄褐	密	良	口縁部・25%	遺構検出 スキ取り 中
84	209	3 区Ⅰ	灰黄色砂質土層(第 4 層)・ 遺構 101 付近	土師器	高坏 (坏部)	15.6	残 6.1			(内) 5YR7/4 にぶい橙(外) 5YR7/4 にぶい橙(断) 5YR7/4 にぶい橙	やや密(2mm 以下の長石、石英、褐色砂粒、雲母含む)	良	杯部・80%	遺構検出 スキ取り 中、土器 集中部
85	210	3 区Ⅱ	101 付近・灰黄色砂質土層 (第 4 層)	土師器	高坏 (脚部)		残 6.8	底部径 (10.8)		(内) 2.5YR6/6 橙(外) 2.5YR6/6 橙(断) 2.5YR7/3 淡赤橙	やや粗(4mm 以下の長石・2mm 以下の灰色砂粒、雲母含む)	良	脚部・30%	遺構検出 スキ取り 中
86	209	3 区Ⅰ	101 付近・灰黄色砂質土層 (第 4 層)	土師器	高坏 (脚部)		残 3.0	底部径 (9.8)		(内) 7.5YR5/1 褐灰(外) 7.5YR6/3 にぶい褐(断) 7.5YR7/2 明褐灰	密(1mm 以下、長石少量含む)	良	脚部・40%	遺構検出 スキ取り 中、土器 集中部
87	209	3 区Ⅰ	101 付近・灰黄色砂質土層 (第 4 層)	土師器	小型壺 (口縁部)	(7.4)	残 4.1			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙(外) 10YR7/3 にぶい黄橙(断) 10YR7/3 にぶい黄橙	密(2mm 以下の褐色砂粒少量、雲母含む)	良	口縁部・25%	遺構検出 スキ取り 中、土器 集中部

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
88	208	3区Ⅰ	101 付近・灰 黄色砂質土層 (第4層)	土師器	甕 (底部)		残 1.7			(内) 5YR6/6 橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 5YR5/6 明赤褐	やや密 (1mm 以下の灰色砂 粒、雲母含む)	良	小片	遺 構 検 出 ス キ 取 り 中
89	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 12.3 残存幅 8.2 残存厚 3.3	(内) 5Y5/1 灰、2.5Y7/1 灰白 (外) 5Y5/1 灰、2.5Y7/1 灰白 (断) 2.5Y8/2 灰白、10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 (1mm 以下の白・灰・ 光る粒を含む)	良	20%	文字瓦 「神 亀 五 □」
90	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 18.1 残存幅 18.3 残存厚 2.3	(内) 7.5Y6/1 灰 (外) 7.5Y6/1 灰 (断) N6/0 灰	密 (2mm 以下の白い粒含む)	良	30%	
91	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 26.1 残存幅 18.9 残存厚 3.8	(内) 10YR7/4 にぶい黄橙、 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙、 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR7/4 にぶい黄橙、 2.5Y7/1 灰白	やや密 (2mm 以下の白い粒、 微細な白・灰・光る粒を含む)	良	40%	
92	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 16.2 残存幅 14.0 残存厚 2.2	(内) N4/0 灰、7.5Y7/1 灰白 (外) N4/0 灰、7.5Y7/1 灰白 (断) 7.5Y8/1 灰白	密 (3mm 以下の白い粒、微 細な白・灰の粒含む)	良	30%	
93	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 16.9 残存幅 15.2 残存厚 2.3	(内) 2.5Y7/3 浅黄、2.5Y4/1 黄灰 (外) 2.5Y7/2 灰黄 (断) 2.5Y7/2 灰黄	やや密 (3mm 程の灰の粒 1 個、微細な灰・光る粒を含む)	良	40%	
94	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 19.1 残存幅 14.0 残存厚 2.7	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 2.5Y5/1 黄灰 (断) 2.5Y7/1 灰白	密 (微細な光る粒を含む)	良	40%	
95	300	3区Ⅲ	110	瓦	平瓦				残存長 13.8 残存幅 14.4 残存厚 2.3	(内) 2.5Y7/2 灰黄、5Y5/1 灰 (外) 7.5Y4/1 灰 (断) 2.5Y7/1 灰白	やや密 (1mm 以下の白・灰 の粒を含む)	良	20%	
96	300	3区Ⅲ	110	瓦	丸瓦				残存長 16.8 残存幅 12.0 残存厚 1.7	(内) 2.5Y7/2 灰黄、10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 2.5Y7/2 灰黄、10YR6/4 にぶい黄橙 (断) 2.5Y7/1 灰	密 (2mm 以下の白い粒、微 細な灰・光る粒を含む)	良	30%	
97	300	3区Ⅲ	110	瓦	丸瓦				残存長 11.7 残存幅 9.9 残存厚 2.1	(内) 10YR5/1 褐灰 (外) 10YR6/1 褐灰 (断) 10YR7/1 灰白	密 (1mm 以下の白・灰の粒 を含む)	良	20%	
98	300	3区Ⅲ	110	瓦	丸瓦				残存長 18.1 残存幅 8.6 残存厚 1.7	(内) N5/0 灰 (外) N7/0 灰白 (断) 5Y7/1 灰白	密 (4mm の白い粒 1 個、1 mm 以下の白・灰の粒を含む)	良	30%	
99	318	3区Ⅱ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺	(12.4)	残 7.3			(内) 5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR8/2 灰白	密 (径 3mm 以下の白色の礫、 径 2mm 以下の白色の粗砂、 雲母含む)	良好	口縁～体 部 60%	
100	304	3区Ⅴ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺 (口縁)		残 7.2		頸部径 (12.9)	(内) 2.5Y8/3 淡黄・2.5Y4/1 黄灰 (外) 10YR8/2 灰白・7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR5/1 褐灰	粗 (6.5mm の淡橙色小石 1 個・4mm の淡橙色砂粒 1 個・3mm の半透明砂粒少量、 2mm の白・灰褐色砂粒少量、 白・灰色微細粒多量含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
101	318	3区Ⅱ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺 (口縁 ～体部)	(16.8)	残 8.7			(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y7/3 浅黄・10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 (径 4mm 以下の白・ 茶色の礫、径 2mm 以下の白・ 茶色・灰色の粗砂、雲母含む)	良好	口縁～体 部 50%	
102	317	3区Ⅳ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺 (口縁)	19.6	残 3.7			(内) 5YR6/6 橙・7.5YR5/2 灰褐 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 10YR8/2 灰白	粗、(2mm の灰色砂粒多量・ 1mm の白色砂粒少量、白・黒・ 灰色微細粒多量含む)	良好	小片	
103	318	3区Ⅴ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	加飾垂下 口縁壺	(16.2)	残 2.9			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 5YR6/6 橙	粗 (径 5mm 以下の白色の礫・ 径 2mm 以下の白色の粗砂を 多く含む、雲母をごく少量含 む)	良好	小片 (口縁部)	原 図 チェッ ク
104	318	3区Ⅴ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺 (口縁 ～頸部)	10.2	残 5.4			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 (径 3mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白・灰 の粗砂を多く含む・雲母も含 む)	良好	口縁～頸 部 70%	
105	291	3区Ⅴ	黒色シルト層	土師器	壺 (口縁)	8.6	残 6.6			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR8/2 灰白 (断) 10YR6/1 褐灰	粗 (3mm の黄橙 1 個、1mm の白・灰・褐色砂粒少量、白・ 灰・褐色微細粒多量含む)	良好	10%	土 器 集 中 部
106	392	3区Ⅳ	20 層 (取上 No. ㊸)	土師器	壺 (口縁部)	8.4	残 5.75			(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR4/1 褐灰	粗 (2.5mm の白、灰色砂粒、 雲母少量・1mm の白、灰色 砂粒少量、白・灰・黒・褐色、 微細粒多量含む)	良好	口縁部ほ ぼ完形	
107	304	3区Ⅴ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺	13.9	残 9.5			(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR7/6 橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい褐	やや密 (5mm 以下のチャ ート、長石を少量含む)	良	口縁部 20%	写真あり
108	368	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	細頸直口 壺?	(11.7)	残 6.3			(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 10YR6/1 褐灰 (断) 2.5Y5/1 黄灰	やや密 (径 3mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白色の 粗砂、雲母を含む)	良好	口縁部 50%	
109	368	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺 (口縁部)	(19.8)	残 5.4			(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰 (断) 10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 (径 7mm 以下の白色 の礫が 6 個、径 2mm 以下の 白色の粗砂を含む)	良好	口縁部 25%	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 O は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
110	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	広口壺?	(13.8)	残 10.0			(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰 黄 褐・ 10YR2/1 黒 (断) 10YR4/1 褐灰	やや密 (径 2mm 以下の白色 の粗砂、雲母を含む)	良好	口縁～体 部 20%	
111	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	壺		残 6.55		頸部径 (7.4) 体 部 最 大 径 (12.8)	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 5YR6/4 にぶい橙	やや密 (径 4mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白・こ げ茶の粗砂を含む)	良好	体部のみ 20%	
112	291	3 区V	黒色シルト層	土師器	壺		残 9.15		頸部径 6.4	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR2/1 黒 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙	粗 (6.5mm の灰・黒色砂粒少 量・4mm の灰・黒褐色砂粒 少量、2mm の白、灰褐、黒 褐色砂粒多量・1mm の白、黒、 灰色微細粒多量含む)	良好	70%	土器集中 部
113	317	3 区IV	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	壺 (底部)		4.4	底 径 5.9		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰 黄 褐・ 10YR6/1 褐灰 (断) 7.5YR5/2 灰褐	やや粗 (3～4mm の白色砂 粒少量・2mm の白・灰色砂 粒少量、白・黒色微細粒多量 含む)	良好	20%	
114	392	3 区IV	20 層 (取上 No. ㊸)	土師器	壺 (底部)		残 3.15	底 径 5.0		(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 5Y2/1 黒 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	粗 (3mm の白、灰色砂粒少量・ 2mm の灰、白色砂粒多量、白・ 黒・灰色、雲母微細粒多量含 む)	良好	10%	
115	304	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	壺		残 4.2	底 径 (4.1)		(内) 2.5Y3/1 黒褐 (外) 2.5Y3/1 黒褐・2.5Y7/1 灰白 (断) 2.5Y5/1 黄灰	粗 (2mm 以下のチャート、 長石を多く含む)	良	底部完形	写真あり
116	318	3 区V	黒色シルト層 (5 層)	土師器	壺 (底部)		残 4.1	底 径 (4.0)		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR8/2 灰白	密 (径 2mm 以下の白色の粗 砂、雲母を含む)	良好	底部のみ	
117	302	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	壺		残 3.9	底 径 4.0		(内) 2.5Y7/2 灰黄・N3/ 暗灰 (外) 2.5Y6/2 灰黄・2.5Y3/2 黒褐 (断) N5/ 灰	密 (4mm 以下の長石・チャート ・石英を少量含む、微細な 雲母を僅かに含む)	良	底部完形	
118	291	3 区V	黒色シルト層	土師器	甕	(16.9)	残 8.6			(内) 10YR7/4 にぶい橙・ 7.5YR8/2 灰白 (外) 7.5YR8/3 浅黄橙 (断) 7.5YR8/2 灰白	密 (2mm 以下のチャート、 長石、雲母、少量含む)	良	口縁部 25%	土器集中 部・写 真 あり
119	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(17.4)	残 5.7			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 (径 5mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白・灰 色の粗砂、雲母を含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
120	368	3 区III	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	弥生形甕	(16.0)	残 5.1			(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 5YR6/6 橙・7.5YR7/6 橙 (断) 7.5YR7/6 橙	やや粗 (径 3mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白色の 粗砂を含む)	良好	口縁部 20%	
121	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(16.6)	残 6.7			(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 5YR7/6 橙 (断) 7.5YR8/3 浅黄橙	やや粗 (径 3mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白色の 粗砂を多く含む、雲母を含む)	良好	口縁～頸 部 25%	
122	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	弥生形甕	(17.0)	残 7.55			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR5/1 褐灰	やや密 (径 5mm 以下の白・ 灰色の礫、径 2mm 以下の白・ 灰色の粗砂を含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
123	317	3 区IV	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(18.6)	残 4.1			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 2.5Y2/1 黒 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙	粗 (4mm の赤褐色砂粒 1 個・ 3mm の淡橙・灰色砂粒僅か、 2mm の黒色砂粒 1 個・1mm の白・灰色砂粒、雲母多量含 む)	良好	10%	
124	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(16.8)	残 7.7			(内) 5YR6/6 橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	粗 (径 5mm 以下の白色の礫、 径 2mm 以下の白色の粗砂を 多く含む、雲母も含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
125	291	3 区V	黒色シルト層	土師器	甕 (底部)		残 4.7	底 径 4.0		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR4/1 褐灰 (外) 2.5Y7/1 灰白・10YR4/1 褐灰・2.5YR6/6 橙 (底) (断) 10YR8/2 灰白	やや粗 (2mm の白・黒色砂 粒少量、1mm の白・灰・黒 色砂粒多量、白色微細粒多量 含む)	良好	15%	土器集中 部
126	365・ 363	3 区II	黄灰色シルト (第 4 層) ・黒色シルト (第 5 層)	土師器	弥生形甕	17.0	残 23.3		頸部径・14.4	(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 (径 5mm 以下の白・ 灰色の礫、径 2mm 以下の白・ 灰色の粗砂をやや多く含む)	良好	80% (口縁部、 底部欠損 あり)	
127	318	3 区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(17.8)	残 13.9			(内) (外) (断)	やや密 (径 5mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の粗砂を 含む、ごく少量の雲母含む)	良好	口縁～体 部・20%	
128	291	3 区V	黒色シルト層	土師器	甕	(18.4)	残 15.8			(内) 10YR4/1 褐灰・5YR8/3 淡橙 (外) 10YR4/1 褐灰・7.5YR8/3 浅黄橙 (断) 5YR8/3 淡橙	粗 (5mm 以下の長石・灰色 小石粒、2mm 以下の灰色砂 粒含む)	良	口縁部・ 25%	土器集中 部・写 真 あり
129	268	2 区II	第 5 層	土師器	弥生形甕 (底部)		残 12.0	底 径 5.3		(内) 5Y2/1 黒 (外) 2.5Y2/1 黒 (断) 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 (6～7mm の白色小 石 2 個・4mm の白、褐色砂 粒ごく少量、2.5mm の黒・褐 色砂粒、雲母少量、1mm の灰・ 褐色砂粒、雲母少量・灰、褐色、 雲母微細粒多量含む)	良好	25%	
130	291	3 区V	黒色シルト層	土師器	甕?	(14.4)	残 5.0			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 (1mm の白・褐色砂 粒少量、白・灰・黒色微細粒 多量含む)	良好	10%	土器集中 部

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
131	291・ 304	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕?	(14.2)	27.65	底 径 4.3		(内) 10YR7/4 にぶい黄橙・ (外) 5YR6/6 橙・7.5YR2/1 黒 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	粗 (7mm の白・灰色小石少量・ 4mm 弱の にぶい 橙色砂粒少 量、3mm の白・灰色砂粒少 量、2mm の白・灰色砂粒少量、 1mm の白・灰色砂粒少量、白・ 黒・灰色微細粒多量含む)	良好	60%	
132	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	弥生形甕	(13.8)	残 7.3			(内) 7.5YR6/3 にぶい褐 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 2.5YR5/6 明赤褐	やや密 (径 5mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白・こ げ茶の粗砂を含む、雲母も含 む)	良好	口縁～体 部・20%	
133	291	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(11.8)	残 8.6			(内) 10YR8/1 灰白 (外) 10YR8/1 灰白 (断) N4/ 灰	密 (3mm 以下のチャート、 長石を少量含む)	良	口縁部・ 6%	写真あり、 土器集中 部
134	291	3区V	黒色シルト層	土師器	甕	(14.8)	残 5.8			(内) 7.5YR8/4 浅 黄 橙・ 2.5YR6/6 橙・10YR5/1 褐灰 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 10YR5/1 褐灰	粗 (3mm の白・灰色砂粒こ く少量、2mm の白色砂粒少 量、1mm の白色砂粒少量・白・ 黒、褐、赤褐色微細粒多量含 む)	良好	10%	土器集中 部
135	302	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕		残 10.3	底 径 3.9		(内) 2.5Y7/3 浅黄・N3/ 暗灰 (外) 2.5Y7/3 浅黄・N3/ 暗灰・ 5YR6/3 にぶい橙 (断) 2.5Y5/1 黄灰	密 (2mm 以下の長石、チャ ートを少量含む)	良	底部完形	
136	291	3区V	黒色シルト層	土師器	弥生形甕	(12.3)	残 9.3			(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 10YR3/2 黒褐 (断) 2.5Y7/2 灰黄	粗 (1.5mm の白・灰・褐色砂粒・ 雲母多量、白・黒・灰色、雲 母微細粒多量含む)	良好	20%	土器集中 部
137	304	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(14.1)	残 10.9			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 7.5YR7/3 にぶい 橙・ 10YR5/2 灰 黄 褐・2.5YR6/4 にぶい橙・2.5Y2/1 黒 (口縁部) (断) 2.5YR7/3 淡赤橙	粗 (7.5mm の灰色小石 1 個・ 5mm の灰、灰褐・白色砂粒 少量、3mm の灰色砂粒少量・ 1mm の白、灰色砂粒少量、白・ 灰色微細粒多量含む)	良好	20%	
138	304	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(15.2)	17.7	底 径 3.7		(内) 10YR5/3 にぶい黄褐・ 10YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR5/3 にぶい 褐・ 7.5YR4/1 褐灰 (断) 10YR6/3 にぶい黄橙	密 (2mm 以下の長石、チャ ートを含み、微細な雲母を少量 含む)	良	口縁部・ 10%	写真あり
139	391	3区V	20 層 (取上 No. ㉔)	土師器	弥生形甕 (口縁)	(14.2)	残 4.9			(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR7/1 灰白・5YR5/4 にぶい赤褐 (断) 5YR5/3 にぶい赤褐	粗 (4.5mm の白色砂粒 1 個、 1.5mm の白・橙色砂粒少量、 白・灰色微細粒多量含む)	良好	15%	
140	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	小型鉢		残 7.6	底 径 3.4		(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 7.5YR5/6 明褐・2.5Y4/1 黄灰	やや密 (径 4mm 以下の白・ 灰色の礫、径 2mm 以下の白 色の粗砂を含む)	良好	底部～体 部	
141	302	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕か鉢		残 6.4	底 径 3.8		(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙 (断) 10YR5/2 灰黄褐	密 (2mm 以下のチャート、 長石を少量含む、微細な雲母 を多く含む)	良	底部完形	
142	369	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	小型鉢	(13.0)	残 5.8			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい褐 (断) 7.5YR6/4 にぶい褐	やや粗 (径 3mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白色の 粗砂を多く含む)	良好	口縁～頸 部・20%	
143	317	3区Ⅳ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	小型鉢	(12.4)	残 4.8			(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙・ 10YR5/2 灰黄褐 (断) 5YR5/3 にぶい赤褐	粗 (1.5mm の灰・黒・褐色砂 粒少量、白・黒色、雲母微細 粒多量含む)	良好	小片	
144	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	鉢		残 7.35	底 径 (4.0)		(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 10YR6/2 灰 黄 褐・ 10YR3/2 黒褐 (断) 5YR5/4 にぶい赤褐	粗 (7mm、6mm、3mm の白 色砂粒各 1 個、2mm の白色 砂粒、雲母少量、1mm の白・ 浅黄橙・灰色砂粒多量、白・ 黒色微細粒多量含む)	良好	20%	
145	304	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	鉢(底部)		残 3.4	底 径 4.8		(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) N2/ 黒・2.5Y6/2 灰黄 (断) 5Y5/1 灰	密 (2mm 以下の長石を少量 含む)	良	底部のみ	写真あり
146	368	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	小型鉢		残 3.0	底 径 4.6		(内) N5/0 灰 (外) 2.5Y6/2 灰黄 (断) 2.5Y7/3 浅黄	やや密 (径 2mm 以下の白・ 灰色の粗砂を含む)	良好	底 部 の み・ 100%	
147	384	3区Ⅳ	灰色シルト層 (第5層)	土師器	小型鉢		残 6.2	底 径 3.9		(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 7.5YR8/4 浅黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	粗 (3mm の淡橙、灰色砂粒 少量・2mm の白色砂粒少量、 1mm の白・灰色砂粒多量、白・ 灰・黒色微細粒多量含む)	やや不 良	50%	黒色シル ト層の下
148	391	3区V	20 層 (取上 No. ㉔)	土師器	小型鉢 (口縁)	(14.2)	残 4.9			(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR7/1 灰白・5YR5/4 にぶい赤褐 (断) 5YR5/3 にぶい赤褐	粗 (4.5mm の白色砂粒 1 個、 1.5mm の白・橙色砂粒少量、 白・灰色微細粒多量含む)	良好	15%	
149	384	3区Ⅳ	灰色シルト層 (第5層)	土師器	小型鉢 (底部)		残 3.5	底 径 4.8		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR6/1 褐灰 (外) 2.5Y7/2 灰黄・2.5Y6/1 黄灰 (断) 2.5Y7/2 灰黄	粗 (3mm の黒色砂粒 1 個・ 2mm の灰色砂粒少量、1mm の白・灰色砂粒少量、白・黒 色微細粒多量含む)	良好	底部のみ	黒色シル ト層の下
150	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	鉢? (底部)		残 2.65	底 径 5.3 ～ 5.7		(内) 2.5Y8/1 灰白 (外) 2.5Y7/2 灰黄 (断) 7.5YR6/6 橙	やや密 (径 5mm 以下の灰・ 白色の礫、径 2mm 以下の灰・ 白色粗砂を含む)	良好	底部のみ	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 〇 は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
151	391	3区V	20層 (取上No.㉔)	土師器	小型鉢 (底部)		残 5.0	底 径 3.7		(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	粗 (3mm の灰色砂粒 1 個、 2mm の白・灰・褐色砂粒多量、 1mm の白・黒色砂粒多量、白・ 黒・褐色、雲母微細粒多量含む)	良好	20%	
152	318	3区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	鉢?		残 5.05	底 部 径 3.9		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 7.5YR6/6 橙	やや粗 (径 5mm 以下の白・ 灰色の礫、径 2mm 以下の白・ 灰色の粗砂を多く含む)	良好	底部のみ	
153	302	3区V	黒色シルト (第 5 層)	土師器	有孔鉢		残 3.4	底 径 5.0		(内) 5YR7/4 にぶい橙 (外) 5YR7/6 橙・10YR7/1 灰 白 (断) 5YR6/3 にぶい橙	密 (1mm 以下のクサリ礫・ 長石・チャート・石英を僅かに 含む)	良	底部完形	
154	359	3区II	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	布留・庄 内甕 LL	(25.0)	残 6.45			(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR6/1 褐灰	密 (径 2mm 以下の白色の粗 砂、雲母を含む)	良好	口縁部 20%	
155	359	3区II	黒色シルト (第 5 層)	土師器	布留・庄 内甕 LL	(32.0)	残 5.9			(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 (断) 7.5YR7/3 にぶい橙	やや密 (径 2mm 以下の白色 の粗砂を含む)	良好	小片 (口縁部)	土器群東、 写真あり
156	302	3区V	黒色シルト (第 5 層)	土師器	鉢	(29.4)	残 8.2			(内) 2.5Y2/1 黒・2.5Y4/2 暗 灰黄 (外) 2.5Y5/3 黄褐 (断) 7.5YR5/3 にぶい褐	密 (2mm 以下のチャート・ 長石を少量含む)	良	口縁部 6%	
157	291	3区V	黒色シルト層	土師器	甕	(17.4)	残 6.5			(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y7/2 灰黄・2.5Y4/1 黄灰 (断) 2.5Y8/2 灰白	粗 (2.5mm の白・灰色砂粒少 量、1mm の灰・褐色砂粒少量、 白・黒色微細粒多量含む)	良好	10%	土器集中 部
158	318	3区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	弥生形甕	(17.0)	残 4.2			(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR8/4 浅黄橙 (断) 2.5Y5/1 黄灰	やや密 (径 5mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白・灰 色の粗砂を含む、雲母も含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
159	291	3区V	黒色シルト層	土師器	甕	(14.4)	残 5.0			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 (1mm の白・褐色砂 粒少量、白・灰・黒色微細粒 多量含む)	良好	10%	土器集中 部
160	368	3区III	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	庄内・甕	(14.8)	残 2.7			(内) 10YR7/1 灰白 (外) 10YR7/1 灰白 (断) 10YR6/1 褐灰	密 (径 2mm 以下の灰色の粗 砂、雲母含む)	良好	口縁部 25%	
161	304	3区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(14.8)	残 6.7			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙・ N2/ 黒 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	密 (3mm 以下のチャートを 僅かに含み、1mm 以下の チャート、長石を僅かに含む)	良	口縁部 30%	登録番号 291 と 同 じ・写 真 あり
162	304 ・ 318	3区V	黒色シルト (第 5 層)	土師器	甕	(16.0)	残 10.6			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 5YR7/2 明褐灰・N3/ 暗 灰 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 (2mm 以下の長石、 灰色、褐色砂粒含む)	良	口縁～頸 部 10% ～40%	
163	368	3区III	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(14.6)	残 13.0			(内) 2.5Y4/1 黄灰・2.5Y5/2 暗灰黄 (外) 2.5Y6/2 灰黄 (断) 2.5Y5/3 黄褐	やや粗 (2mm の白色砂粒少 量・1mm の白、黒色砂粒少量、 白・黒色、雲母、微細粒多量 含む)	良好	15%	
164	291	3区V	黒色シルト層	土師器	甕	(14.7)	11.5			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 7.5YR7/2 明褐灰 (断) 7.5YR7/1 明褐灰	密 (径 2mm 以下のチャート、 長石を少量含む)	良	口縁部 30%	土器集中 部・写 真 あり
165	359	3区II	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(14.0)	残 13.4			(内) 2.5Y5/2 暗灰黄 (外) 2.5Y5/2 暗灰黄 (断) 2.5Y4/1 黄灰	やや密 (3mm の橙色小石粒、 2mm 以下の長石・雲母含む)	良	口頸部 25%	
166	304	3区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕		残 4.1	底 径 3.6		(内) N2/ 黒・10YR6/2 灰黄 褐 (外) 2.5Y5/1 黄灰・2.5Y3/1 黒褐 (断) 2.5Y6/2 灰黄	密 (1mm 以下の長石を僅かに 含む)	良	底部のみ	写真あり
167	391	3区V	20層 (取上No.㉔)	土師器	甕		残 4.2	底 径 3.5		(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 7.5Y3/1 オリーブ黒 (断) 10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 (白・灰色、雲母微細 粒多量含む)	良好	15%	
168	318	3区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕		残 5.0	底 径 3.5		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 7.5YR5/3 にぶい褐 (断) 10YR6/2 灰黄褐	やや密 (径 4mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白・灰 色の粗砂を含む)	良好	底部～体 部	
169	368	3区III	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	12.5	残 15.9			(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 10YR5/1 褐 灰・ 10YR2/1 黒 (断) 記入なし	やや粗 (3mm 以下の長石、 角閃石、雲母含む)	良	70%	
170	368	3区III	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高坏 (杯部)	(17.6)	残 4.0			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 7.5YR5/6 明褐	粗 (3mm の白色砂粒 1 個・1.5 ～2mm の白、黒色砂粒、雲 母多量、白・黒・褐色、雲母、 微細粒多量含む)	良好	15%	
171	318	3区V	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高坏 (杯部)	(25.2)	残 5.1			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙・ 5YR7/6 橙 (断) 2.5Y8/2 灰白	粗 (5mm の灰、黒褐色砂粒 ごく少量・3.5mm の白、灰色 砂粒少量、1～2mm の白・灰・ 褐色砂粒多量、白・灰色微細 粒多量含む)	良好	坏部のみ 30%	
172	317	3区IV	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高坏		残 10.6		基部径 3.3	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙・ 10YR4/1 褐灰	やや粗 (2mm 以下 の 褐色・灰色砂粒・長 石・石英・雲母を含む)	良	基部完形	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
173	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	碗形高 環?		残3.1	底 径 (推)8.0		(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 5YR6/3 にぶい 橙 (断) 5YR5/3 にぶい 赤褐	密 (径5mmの白色の礫1個、 径2mm以下の白色の粗砂を 含む)	良好	底 部 の み・80%	
174	291	3区V	黒色シルト層	土師器	高環	(10.2)	残5.8			(内) 10YR4/1 褐 灰・ 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR5/3 にぶい黄褐・ 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	やや粗 (2mm以下の長石・ チャート・雲母を多く含む)	良	口縁部 40%	写真あり、 土器集中 部
175	317	3区IV	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高環 (杯部)	(13.8)	残6.7			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	粗、(2mmの白・灰色砂粒少 量・1mmの白・灰・黒色砂 粒多量、白・黒色微細粒多 量含む)	良好	25%	
176	304	3区V	黒色シルト (第5層)	土師器	高環 (脚部)		残7.6	底 径 12.2		(内) 5YR5/3 にぶい赤褐 (外) 5YR6/4 にぶい 橙 (断) 2.5YR6/3 にぶい 橙	やや粗 (3mmの橙色小石粒 1個、2mm以下の長石、角 閃石含む)	良	底部 50%	
177	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高環 (脚部)		残8.9	底 径 (14.2)		(内) 2.5Y5/2 暗灰黄 (坏部)・ 10YR5/3 にぶい黄褐 (底部) (外) 2.5YR6/6 橙・10YR4/1 褐灰 (断) 10YR5/6 黄 褐・ 10YR4/1 褐灰	粗 (4mm前後の白色砂粒少 量・2mmの白、淡褐色砂粒 多量、1mmの白色砂粒多量・ 白色微細粒多量含む)	やや不 良	40%	
178	317	3区IV	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高環 (底部)		残4.3	底 径 (23.7)		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 2.5Y7/2 灰黄	粗、(3mmの白色砂粒少量・ 2mmの白・黒・赤褐色砂粒、 雲母多量、1mmの白・灰色 砂粒多量、白・黒色微細粒 多量含む)	良好	小片	
179	368	3区III	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高環 (脚部)		残8.5	底 径 13.3		(内) 10YR6/3 にぶい黄橙・ 10YR2/1 黒 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR2/1 黒 (断) 10YR6/1 褐灰	やや粗 (3mmの白色砂粒少 量、1mmの淡褐色砂粒、雲 母少量、白、黒色、雲母微細 粒多量含む)	良好	脚部のみ ほぼ完形	
180	304	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高環 (底部)		残2.45	底 径 (12.7)		(内) 7.5YR7/2 明 褐 灰・ 7.5YR8/2 灰白 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 7.5YR8/3 浅黄橙 (断) 7.5YR7/3 にぶい 橙	やや粗 (2mm以下のチャー ト、長石、石英を多く含む)	良	底部 20%	写真あり
181	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高環 (脚部)		残2.4	底 径 (14.4)		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 7.5YR5/3 にぶい 褐	やや密 (径4mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂と雲母を含む)	良好	底部 25%	
182	318	3区V	黒色シルト層 (第5層)	土師器	碗形高環 (脚部)		残3.55	底 径 (19.6)		(内) 10YR4/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 5YR5/6 明赤褐	密 (径5mm以下の白色の礫 1個、径2mm以下の白色の 粗砂、白色の細砂を含む)	良好	底部 20%	
183	304	3区V	黒色シルト (第5層)	土師器	高環 (底部)		残3.3	底 径 (18.8)		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR8/3 浅黄橙 (断) 10YR7/1 灰白	密 (1mm以下 の 長 石・チャート少量含む)	良	底部 25%	写真あり
184	291	3区V	黒色シルト層	土師器	器台	10.5	10.1	底 径 9.65		(内) 10YR6/2 灰 黄 褐・ 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR6/1 褐灰・2.5YR7/6 橙 (断) 2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 (3mmの灰褐色砂粒 1個・2mmの白・灰褐色砂 粒少量・1mmの白・黄色砂 粒少量、白・黒色、雲母微細 粒多量含む)	良好	ほぼ完形	土器集中 部
185	359	3区II	黒色シルト層 (第5層)	土師器	複合口縁 壺		残22.7		頸部径(10.4) 体部最大径 26.9	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい 橙・ 5YR6/6 橙 (断) 5YR6/6 橙	やや密 (径4mm以下の白・茶・ 薄茶色の礫、径2mm以下の 白色の粗砂、雲母を含む)	良好	50%	
186	359	3区II	黒色シルト (第5層)	土師器	直口壺	(17.4)	残10.1			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 5YR6/6 橙・5YR3/1 黒 褐 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	粗 (2mmの白・灰・黒褐色 砂粒少量・1mmの白・灰色 粗砂、雲母多量、白・黒・赤 褐色微細粒多量含む)	良好	口縁部 60%	
187	363 ・361	3区II	黄灰色シルト (第4層) ・黒色シルト (第5層)	土師器	直口壺		残9.0		頸部 (10.4)	(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 7.5YR6/2 灰褐 (断) 10YR6/1 褐灰	やや密 (径7mmの白色、径 5mmの白色、径3mmの白色 の礫、径2mm以下の白・灰 色の粗砂を含む)	良好	頸部～体 部 20%	登録番号 361 (土器 群・写真 なし)
188	365 ・363 ・359	3区II	黄灰色シルト (第4層) ・黒色シルト (第5層)	土師器	壺	(19.2)	残15.5			(内) 7.5YR5/2 灰褐 (外) 7.5YR5/2 灰褐 (断) 2.5Y7/1 灰白	粗 (4mmの橙色砂粒1個・ 3mmの淡褐色砂粒少量・ 2mmの灰、淡褐色砂粒多量、 1mmの灰・白・橙色砂粒多量、 白・橙色微細粒多量含む)	良好	15%	
189	359	3区II	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(16.0)	残8.7			(内) 7.5YR7/2 明 褐 灰・ 7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR6/2 灰褐・7.5YR3/1 黒褐 (断) 7.5YR7/2 明褐灰	やや密 (2mm以下の石英・ 長石・褐色砂粒含む)	良	口縁部 40%	
190	359 ・363	3区II	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	15.0	残8.6			(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR5/2 灰 黄 褐・ 10YR2/1 黒 (断) 10YR5/2 灰黄褐	やや粗 (5mm以下の長石・ 褐色小石粒・2mm以下の石 英・角閃石含む)	良	口縁部 90%	土器群
191	359	3区II	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(16.2)	残13.9			(内) 7.5YR6/2 灰褐・7.5YR5/1 褐灰 (外) 7.5YR3/1 黒褐・7.5YR5/1 褐灰 (断) 7.5YR6/2 灰褐	やや密 (2mm以下の褐色砂 粒・灰色砂粒含む)	良	口縁部 25%	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 O は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
192	368	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	布留形 甕?	(14.6)	残 5.7			(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/3 にぶい橙 (断) 7.5YR7/2 明褐灰	密 (径3mm以下の白色の礫・ 径2mm以下の白色の粗砂を 含む)	良好	口縁～頸 部 40%	
193	368	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕 (口縁)	15.0	残 4.3			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 5Y2/1 黒 (断) 10YR8/2 灰白	粗、(3mmの灰褐色砂粒1個・ 2mmの白色砂粒少量・1mm の白・灰・赤褐色砂粒少量・白・ 黒色、雲母微細粒多量含む)	良好	口縁部の みはぼ完 形	
194	368	3区Ⅲ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	布留形甕	(16.6)	残 8.5			(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR6/2 灰黄褐	やや密 (径5mm白色1個、 径3mmピンクがかった白色 1個の礫、径2mm以下の、 白色の粗砂、少量の雲母を含 む)、	良好	口縁～頸 部 15%	
195	360	3区Ⅱ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高坏	16.9	残 5.7			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐・ 7.5YR5/2 灰褐・N3/ 暗灰 (断) 7.5YR8/2 灰白	密 (2mm以下の長石、チャー トを僅かに含む)	良	坏部 70%	写真あり、 土器群西
196	359	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	高坏 (坏部)	15.8	残 5.8			(内) 7.5YR6/2 灰褐 (外) 7.5YR6/2 灰褐・N2/ 黒 (断) 7.5YR6/2 灰褐・7.5YR5/1 褐灰	密 (3mmの灰色小石粒1個、 1mm以下の灰色・褐色砂粒 少量含む)	良	口縁部 20%	土器群東
197	359 ・361	3区Ⅱ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高坏B	(15.8)	残 13.5	底 径 (11.9)		(内) 10YR6/1 褐灰・2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y6/1 黄灰・10YR6/2 灰黄褐 (断) 7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 (径2mm以下の白・ 灰色の粗砂を含む)	良好	50%	土器群東
198	359	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	高坏	14.6	12.65	底 径 (10.8)		(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/3 にぶい橙・ 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR7/3 にぶい橙	密 (白色の細砂、極少量の雲 母を含む)	良好	70% (底 部 50%、 口 縁 部 70%)	土器群東
199	365 ・360 ・359	3区Ⅱ	黄灰色シルト (第4層) ・黒色シルト (第5層)	土師器	高坏	16.8	14.95 ～15.2	底 径 12.1		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR6/1 褐灰	密 (白色の細砂、極少量の雲 母を含む)	良好	80% (底 部 50%)	土器群西・ 土器群東
200	360	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	高坏	(14.8)	13.75	底 径 10.6		(内) 2.5YR7/3 淡 赤 橙・ 10YR6/1 褐灰 (外) 7.5YR7/3 にぶい橙 (断) 7.5YR8/3 浅黄橙	密 (2mm以下の灰色砂粒少 量含む)	良	口縁部 10% 底部 70%	土器群西
201	359 ・363 ・365	3区Ⅱ	黒色シルト層 (第5層) ・黄灰色シル ト (第4層)	土師器	高坏	(17.6)	15.75	(12.0)		(内) 10YR6/3 にぶい黄橙・ 5YR6/4 にぶい橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙・ 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR5/3 にぶい褐	密	良好	60% (裾 部 50%、坏 部 50%)	土器群東
202	365 ・360 ・361	3区Ⅱ	黄灰色シルト (第4層) ・黒色シルト (第5層)	土師器	高坏	16.1	14.7	底 径 11.6		(内) 7.5YR6/2 灰褐 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 (断) 7.5YR6/3 にぶい褐	密	良	80%	
203	359	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	小型丸底 土器		残 4.5		頸部径 (6.8)	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 2.5YR6/6 橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR4/1 褐灰	密 (3mm以下の長石含む)	良	頸部 20%	土器群東
204	360 ・361 ・365	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	小型丸底 土器	(11.0)	(8.0)			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙・ 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	密 (白色微細な砂粒少量含む)	良	口縁部 25%	土器群東
205	360	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	器台		残 2.9	底 径 8.35		(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) N3/ 暗灰・2.5Y6/2 灰黄 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	密 (4mm以下のチャー ト・長石を僅かに含む)	良	底部完形	土器群
206	359	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	器台	(13.5)	7.4	底 径 13.2		(内) 2.5YR6/4 にぶい橙・ 2.5YR4/1 赤灰 (外) 2.5YR6/4 にぶい橙 (断) 2.5YR6/4 にぶい橙	やや密 (2mm以下の石英、 長石・1mm以下の褐色砂粒、 クサリ礫を含む)	良	口縁部 10% 底部 50%	土器群東
207	359	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	器台	(13.6)	8.4	底 径 14.0		(内) 7.5YR6/2 灰褐・2.5YR6/4 にぶい橙・N2/ 黒 (外) 7.5YR6/2 灰褐・2.5YR5/3 にぶい赤褐 (断) 7.5YR6/2 灰褐	やや密 (1mm以下の褐色砂 粒、石英、雲母含む)	良	口縁部 25% 底部 70%	土器群東
208	359	3区Ⅱ	黒色シルト (第5層)	土師器	小型器台	(14.4)		底 径 14.95	頸部径 7.5	(内) 5YR7/6 橙 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 5YR6/4 にぶい橙	やや密 (径2mm以下の白・ 灰色の粗砂含む・雲母含む)	良好	70%	土器群東
209	363 ・360	3区Ⅱ ・3区Ⅱ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	小型器台 C	10.05	8.4	底 径 12.5		(内) 7.5YR6/4 にぶい橙・ 5YR6/4 にぶい橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙・ 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR8/2 灰白	密 (2mm以下の長石、チャー トを僅かに含む)	良	80%	土器群西
210	365	3区Ⅱ	黄灰色シルト (第4層)	土師器	有稜高坏	(22.4)	残 5.25			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 (径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂を含む、ごく少量の雲母 含む)	良好	坏部 15%	
211	365	3区Ⅱ	黄灰色シルト (第4層)	土師器	庄内形甕	(14.6)	残 3.05			(内) 10YR6/1 褐灰 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 10YR6/1 褐灰	密	良好	口縁部 25%	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
212	365	3 区Ⅱ	黄灰色シルト (第4層)	土師器	弥生形甕	(12.6)	残 8.0			(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 (断) 10YR5/1 褐灰	密(径3mmの灰色の礫1個、 径2mm以下の白色の粗砂を 含む)	良好	口縁～体 部 20%	
213	224	3 区Ⅰ	灰黄色砂質土 (第4層)の 下の錯層	土師器	甕 (口縁)	(18.0)	残 4.5			(内) 2.5Y7/1 灰白 (外) 7.5YR8/3 浅黄橙 (断) 7.5YR5/6 明褐	粗(1.5mmの黒・褐色砂粒少 量、白・黒・褐色微細粒多量 含む)	良好	小片	
214	119	3 区Ⅰ		土師器	高坏	(23.8)	残 5.8			(内) 5YR6/6 橙・10YR5/2 灰 黄褐 (外) 7.5YR6/3 にぶい褐・ 7.5YR4/1 褐灰 (断) 10YR5/2 灰黄褐	粗(3mmの白、灰、橙色砂 粒少量・1mmの灰色砂粒少 量、白・黒・灰色微細粒多量 含む)	良好	10%	
215	064	3 区Ⅰ	褐灰色砂質土	土師器	高坏	16.0	残 11.6			(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗(4mmの白色砂粒1個、 1mmの白・灰色砂粒少量、白・ 灰・褐色、雲母微細粒多量含 む)	良好	60%	側溝内
216	064	3 区Ⅰ	褐灰色砂質土	土師器	甕?		残 12.2			(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 5YR7/6 橙 (断) 5YR7/6 橙	粗(4mmの白色砂粒1個・ 3mmの白、灰色砂粒多量、 2mmの灰・褐色砂粒、雲母 多量、1mmの白・灰色砂粒、 雲母多量、白・黒・灰色、雲 母微細粒多量含む)	良好	15%	側溝内
217	276	3 区Ⅱ	4層掘り下げ	須恵器	坏蓋	(16.0)	残 4.35			(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰 (断) 2.5Y6/1 黄灰	やや粗(4mmの灰色砂粒1個、 白・黒色微細粒多量含む)	良好	10%	
218	262	3 区Ⅲ	4層掘り下げ	土師器	甕	(24.2)	残 7.3			(内) 7.5YR5/2 灰 褐・ 10YR8/3 浅黄橙 (外) 7.5YR8/4 浅黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	やや密(1mmの白色砂粒こ く僅か・白・褐色、雲母微細 粒少量含む)	良好	10%	掘り下げ 後、109 ～110 検 出
219	078	3 区Ⅱ	3層	瓦質	底部		残 5.9	底 径 (27.1)		(内) 5Y5/1 灰 (外) 2.5Y5/1 黄灰・5Y71 灰 白(底部) (断) 2.5Y8/1 灰白	やや粗(1mmの灰色砂粒少 量、白・灰・黒色、雲母微細 粒多量含む)	良好	10%	
220	317	3 区Ⅳ	黒色シルト層 (第5層)	石製品					残存長 6.9 残存幅 3.3	(内) (外) (断)				
221	326	3 区Ⅱ	黄色・灰色シル ト (第4層)	木製品	舷側板				残存長 78.6 残存幅 12.0 残存厚 3.8					スギ材
222	326	3 区Ⅱ	黄色・灰色シル ト (第4層)	木製品	樹皮									サクラ
223	326	3 区Ⅱ	黄色・灰色シル ト (第4層)	木製品	樹皮									サクラ
224	322	4 区Ⅰ	103	土師器	弥生形甕 (口縁部)	(17.0)	残 3.7			(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR8/3 浅黄橙	やや粗(径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂を多く含む)	良	口縁～頸 部・20%	
225	338	4 区Ⅲ	126	土師器	壺 (底部)		残 3.0	底 径 5.2		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR7/6 明黄褐 (外) 7.5YR6/2 灰褐・5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	密(径1mm以下の粗砂含む)	良	底部のみ	
226	334	4 区Ⅲ	128	土師器	鉢 (底部)		残 4.9	底 径 5.2		(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 2.5Y6/2 灰黄・10YR5/4 にぶい黄褐 (断) 2.5Y7/2 灰黄	やや密(径4mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂を含む)	良好	底部のみ	
227	333	4 区Ⅰ	138	土師器	壺	(13.0)	残 4.05			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 5YR7/6 橙	やや粗(径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂を多く含む、雲母含む)	良好	口縁～体 部・小片	
228	333	4 区Ⅰ	138	土師器	甕 (底部)		残 3.4	底 径 (4.0)		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR4/1 褐 灰・2.5 Y 6/2 灰黄 (断) 2.5 Y 7/1 灰白	密(径1mm以下の白色の粗 砂を含む)	良	底 部・ 50%	
229	292	4 区Ⅲ	灰色シルト層 (黒色シルト層 直上層)	土師器	加飾壺	(25.0)	残 6.4			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 2.5Y7/2 灰黄	密(径4mm以下の白色の礫、 径2mm以下の白・灰色の粗 砂を含む)	良	口縁部・ 30%	東側杭横、 写真あり
230	303	4 区Ⅰ	黒色シルト層 (第5層)	土師器	加飾壺 (口縁部)	(24.4)	残 5.1			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 2.5Y6/2 灰黄 (断) 2.5Y6/2 灰黄	粗(6mmの灰色砂粒1個・ 5mmの白、灰色砂粒少量、 2mmの白、灰色砂粒少量・ 1mm以下の白、灰色砂粒、 角閃石、多量含む)	良好	15%	
231	286	4 区Ⅰ	灰色シルト層 (黒色シルト砂 直上層)	土師器	加飾壺		残 5.7			(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 2.5Y7/3 浅黄 (断) 2.5Y6/1 黄灰	やや粗(3mmの白、黒色砂 粒少量・1mmの雲母少量、白、 黒色、雲母微細粒多量含む)	良好	小片	
232	286	4 区Ⅰ	灰色シルト層 (黒色シルト層 直上層)	土師器	壺 (底部)		残 2.9	底 径 5.2		(内) 2.5Y7/1 灰白 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 2.5Y3/1 黒褐	やや粗(2mmの黒、灰色砂 粒少量、白・黒褐・淡橙色微 細粒多量含む)	良好	底部のみ	
233	306	4 区Ⅲ	灰色シルト層 (第5層)	土師器	弥生形甕 (口縁部)	(14.0)	残 3.6			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙・ 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙		良好	口縁～頸 部 25%	南側溝、 黒色シル ト層の下

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 O は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
234	315	4区I	灰色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(13.6)	残 6.1			(内) N4/ 灰・2.5 Y 6/1 黄灰 (外) N4/ 灰・2.5Y6/1 黄灰 (断) 2.5Y7/1 灰白	密 (径2mm 以下の白色の粗砂を含む)	良好	口縁～頸部・25%	南側溝
235	303	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕		残 12.5	底 径 3.7	頸部径 (12.4)	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	やや粗 (2mm の白、褐色砂粒少量、白、黒、褐色、雲母微細粒多量含む)	良好	40%	
236	303	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(15.8)	残 3.7			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 10YR6/4 にぶい黄橙 (断) 10YR5/3 にぶい黄褐	粗 (2mm の灰色砂粒少量・1mm の白、灰色砂粒、雲母多量、白、灰色、雲母微細粒多量含む)	良好	10%	
237	303	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(16.4)	残 4.9			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙・10YR3/1 黒褐 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙・10YR3/1 黒褐 (断) 10YR5/1 褐灰	粗 (6mm の白色砂粒 1 個・4mm の白、褐色砂粒少量、3mm の白色砂粒 1 個・、2mm の白、灰色砂粒少量、1mm の黒色砂粒、雲母多量、白、黒色、雲母微細粒多量含む)	良好	10%	
238	286	4区I	灰色シルト層 (第5層直上層)	土師器	甕	(16.6)	残 5.1			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙・10YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR6/6 橙 (断) 10YR6/1 褐灰	粗 (7mm の白色小石 1 個・3mm の白色砂粒ごく少量、白、黒、灰色微細粒多量含む)	良好	小片	
239	314	4区I	灰色シルト (第5層)	土師器	甕 (底部)		残 3.7	底 径 5.5		(内) 5Y3/1 オリーブ黒 (外) 10YR4/1 褐灰・2.5Y6/2 灰黄 (断) 5Y3/1 オリーブ黒	粗、(3mm の白色砂粒、雲母少量・2mm の白、黒砂粒少量、1mm の白、黒、褐色砂粒多量、白・灰・黒色微細粒多量含む)	良好	底部のみ	
240	314	4区I	灰色シルト (第5層)	土師器	高坏 (脚部)		残 2.3	底 径 (13.4)		(内) 10YR5/1 褐灰 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 5YR7/6 橙	やや粗 (3mm の赤褐色砂粒 1 個・2mm の赤褐色砂粒、雲母少量、白、黒色、雲母微細粒多量含む)。	良好	20%	
241	303	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	高坏 (脚部)		残 3.9		基部径 2.8	(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙・10YR6/1 褐灰 (断) 2.5Y5/1 黄灰	やや密 (1mm の白色砂粒少量、白・黒色微細粒含む)	良好	脚部のみ	
242	279	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	小型丸底土器	(6.6)	残 5.4			(内) 5YR6/4 にぶい橙 (外) 5YR6/4 にぶい橙 (断) 5YR6/4 にぶい橙	やや密 (1mm 以下の褐色砂粒・長石、2mm の石英含む)	良	口縁部 60%	土器集中部・写真あり
243	314	4区I	灰色シルト (第5層)	土師器	有孔鉢		残 3.6	底 径 3.5		(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 10YR6/2 灰黄褐・5Y3/1 オリーブ黒 (断) 2.5Y6/2 灰黄	粗 (4mm の白と灰の斑砂粒 1 個・1mm の白・褐・淡橙色砂粒、雲母多量、白、黒色、雲母微細粒多量含む)	良好	底部のみ	
244	306	4区	灰色シルト (第5層)	土師器	鉢	20.0	残 6.8			(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙・5YR6/6 橙 (断) 10YR6/3 にぶい黄橙	密 (径5mm 以下の白色の礫、径2mm 以下の白色の粗砂を含む、雲母を含む)	良	口縁～杯部 70%	庄内、南側溝
245	279	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	大型鉢	(29.2)	残 4.1			(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR8/2 灰 白・10YR5/1 褐灰 (断) 2.5Y8/2 灰白	粗 (4mm の白色砂粒 1 個・2mm の白、淡黄、灰、褐色砂粒多量、1mm の白、黒、褐色砂粒多量、白、灰、赤褐色微細粒多量含む)	やや不良	小片	土器集中部・写真あり
246	303	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	鉢か甕	(21.0)	残 6.6			(内) 2.5Y7/3 浅黄・2.5Y3/1 黒褐 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 7.5YR4/6 褐	やや粗 (2mm の白・灰色砂粒ごく少量・1mm の白、灰、褐色砂粒、雲母、白、褐色、雲母微細粒少量含む)	良好	15%	
247	303	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	手焙型土器	16.0	残 7.8			(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・2.5Y3/1 黒褐 (断) 7.5YR4/4 褐	やや粗 (3～4mm の白色砂粒少量、2mm の白、黒、灰色砂粒少量含む)	良好	40%	
248	279	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	壺	8.8	14.2			(内) 5YR8/4 淡橙・7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR8/4 浅黄橙・10YR5/1 褐灰 (断) 10YR6/1 褐灰	粗 (5mm の白・灰色砂粒少量、1～2mm の白・灰・黒色砂粒多量、白・灰・黒・褐・赤褐色微細粒を多量含む)	やや不良	ほぼ完形	土器集中部・写真あり
249	290	4区I	黒色シルト層・砂層 (第5層)	土師器	壺		残 9.7		頸部 (9.0)	(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・N2/ 黒 (断) 10YR6/3 にぶい黄橙	粗 (3mm の灰色小石粒、2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む)	良	頸部 10%	南側溝・写真あり
250	286	4区I	灰色シルト層 (第5層直上層)	土師器	布留形甕	(15.0)	残 5.0			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR4/4 褐	粗 (4mm の白、黒色砂粒ごく僅か、1.5mm の白、黒、灰、褐色砂粒多量・白、灰、黒、赤褐色微細粒多量含む)	良好	小片	
251	279	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	15.0	残 11.3			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・10YR2/1 黒 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 (2mm 以下の長石・石英、灰色砂粒・角閃石・雲母を含む)	良	口縁部 60%	土器集中部・写真あり
252	279	4区I	黒色シルト層 (第5層)	土師器	甕	15.6	残 7.1			(内) N6/ 灰・N7/ 灰白 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙・7.5YR5/1 褐灰 (断) N7/ 灰白	密 (1mm 以下のチャート、長石を少量含む)	良	口縁部 60%	写真あり
253	315	4区I	灰色シルト層 (第5層)	土師器	甕	(14.0)	残 6.3			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR8/2 灰白	密 (径2mm の白色の粗砂数個、白色の細砂、雲母を含む)	良	口縁部 20%	南側溝

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
254	286	4 区 I	灰色シルト層 (第 5 層直上層)	土師器	甕 (庄内?)	(16.4)	残 5.8			(内) 7.5Y7/3 浅黄・7.5TR7/4 にぶい・橙・7.5YR5/1 褐灰 (外) 10YR7/2 にぶい黄・橙・ 10YR3/2 黒褐 (断) 2.5Y6/1 黄灰	やや粗(4mmの赤色砂粒 1 個・ 3mmの灰色砂粒 1 個、2mm の灰色砂粒少量・1mmの白、 灰色砂粒少量含む)	良好	10%	
255	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕 (口縁部)	16.2	残 3.9			(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR7/2 にぶい黄・橙・ 10YR3/1 黒褐 (断) 10YR7/2 にぶい黄・橙	やや密(1mm以下の褐色砂 粒、長石、角閃石?雲母含む)	良	口縁部 70%	土器集中 部、写真 あり
256	286	4 区 I	灰色シルト (第 5 層直上層)	土師器	甕	(13.3)	残 8.4			(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y7/2 灰黄・2.5Y3/1 黒褐 (断) 2.5Y6/1 黄灰	粗(4mmの灰、淡褐色砂粒 少量・3mmの白、灰色砂粒 少量、2mmの白、黒色砂粒 少量、1mmの白、黒色砂粒 多量、白・黒・褐色微細粒多 量含む)	良好	15%	
257	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	甕	(14.5)	残 19.1			(内) 10YR6/2 灰黄褐・ 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR2/1 黒 (断) 10YR6/2 灰黄褐	密(3mmの灰色小石粒 1 個、 1mm以下の角閃石、雲母含 む)	良	口縁部 30%	土器集中 部、写真 あり
258	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高環	(12.4)	残 11.2	底 径 9.95		(内) 10YR7/2 にぶい黄・橙・ 7.5YR7/3 にぶい・橙 (外) 7.5YR7/2 明褐灰 (断) 10YR5/1 褐灰	密(1mm以下のチャート、 長石を僅かに含む)	良	70%	土器集中 部・写真 あり
259	279・ 290・ 286	4 区 I	黒色シルト (第 5 層) ・黒色砂層	土師器	高環	(15.0)	15.2	底 径 11.6		(内) 5YR7/6 橙 (外) 5YR7/4 にぶい・橙 (断) 2.5Y6/1 黄灰	密	良好	坏部 50% 脚部 100%	南側溝・ 写真あり
260	279・ 290	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高環	(18.6)	16.1			(内) 7.5YR7/2 明褐灰・ 7.5YR6/4 にぶい・橙 (外) 7.5YR7/3 にぶい・橙・ 7.5YR6/4 にぶい・橙・N3/ 暗灰 (断) 7.5YR6/3 にぶい・褐	密(0.5mm以下の長石を僅か に含む)	良	60%	土器集中 部・写真 あり
261	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高環 (杯部)	(15.2)	残 5.15			(内)、5YR6/6 橙 (外)、5YR6/6 橙 (断)、5YR5/3 にぶい赤褐	やや密(白、褐色微細粒、雲 母少量含む)	良好	杯部のみ 25%	土器集中 部・写真 あり
262	290	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高環 (脚部)		残 8.7	底 径 11.5		(内) 10YR7/2 にぶい黄・橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄・橙 (断) 7.5YR4/3 褐	密(0.5mm以下、チャート、 長石を僅かに含む)	良	脚部 70%	南側溝・ 写真あり
263	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	高環	(15.9)	残 11.3			(内) 7.5YR7/3 にぶい・橙・ 5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/3 にぶい・褐 (断) 7.5YR7/6 橙	密	良	坏部 30%	土器集中 部・写真 あり
264	279・ 290	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層) 黒色砂層	土師器	高環 (脚部)		残 7.0		脚部径(10.9)	(内) 2.5YR7/4 浅黄 (外) 10YR7/3 にぶい黄・橙 (断) 10YR8/2 灰白	密(白・褐色微細粒少量含む)	良好	脚部のみ 55%	290 南側 溝、写真 あり
265	287	4 区 I	灰色シルト (第 5 層直上層)	土師器	小型丸底 土器	10.0	9.2		頸部径 6.0	(内) 5YR6/4 にぶい・橙・ 7.5YR7/4 にぶい・橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい・橙 (断) 7.5YR4/3 褐	密(径 2mm 以下の茶・白色 粗砂を含む)	良	ほぼ完形	写真あり
266	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	有段口縁 鉢	(14.3)	残 3.9			(内) 7.5YR6/4 にぶい・橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄・橙 (断) 記入なし	密(0.5mm以下の灰色砂粒、 雲母含む)	良	口縁部 20%	土器集中 部・写真 あり
267	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	有段口縁 鉢	(15.2)	残 5.2			(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR6/6 橙・N4/ 灰 (断) 5YR6/6 橙	密	良	口縁部 25%	土器集中 部・写真 あり
268	290	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層) ・黒色砂層	土師器	有段口縁 鉢	(16.0)	5.6			(内) 7.5YR7/3 にぶい・橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい・橙 (断) 7.5YR6/3 にぶい・褐	密(1mm以下の灰色砂粒少 量含む)	良	60%	南側溝・ 写真あり
269	302	3 区 V	黒色シルト (第 5 層)	土師器	有段口縁 鉢	(29.4)	残 8.2			(内) 2.5Y2/1 黒・2.5Y4/2 暗 灰黄 (外) 2.5Y5/3 黄褐 (断) 7.5YR5/3 にぶい・橙	密(2mm以下のチャート・ 長石を少量含む)	良	口縁部 6%	
270	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	有段口縁 鉢	(14.3)	残 3.4			(内) 7.5YR7/4 にぶい・橙 (外) 7.5YR7/4 にぶい・橙 (断) 7.5YR7/4 にぶい・橙	密(1mm以下の長石含む)	良	口縁部 25%	土器集中 部・写真 あり
271	279	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	有段口縁 鉢		5.3		口縁部? 径 (14.6)	(内) 7.5YR7/3 にぶい・橙 (外) 7.5YR7/3 にぶい・橙・ N3/ 暗灰 (断) 5YR5/4 にぶい赤褐	密(2mm以下の長石少量含 む)	良	60%	土器集中 部、写真 あり
272	303	4 区 I	黒色シルト層 (第 5 層)	土師器	ミニチュ ア鉢	6.3	3.9			(内) 10YR7/4 にぶい黄・橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄・橙・ 2.5Y3/1 黒褐 (断) 7.5YR5/3 にぶい・褐	やや粗(2mmの白、灰色砂 粒少量・1mmの褐灰、赤褐 色砂粒少量、白・黒色微細粒 多量含む)	良好	ほぼ完形	
273	221	4 区 III	遺構面 (第 4 層)	土師器	直口壺	10.6	残 11.7		頸部径 7.9	(内) 5YR5/6 明赤褐・7.5YR7/2 明褐灰 (外) 5YR6/6 橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄・橙	密(径 5mm 以下の白色の礫、 径 2mm 以下の白色の粗砂を 含む)	良	口縁部～ 体部 65%	写真あり、 直口壺
274	396 ・388	5 区 IV	140・139	土師器	壺 (口縁部)	17.0	残 5.6			(内) 10YR8/3 浅黄・2.5Y6/1 黄灰 (外) 10YR8/4 浅黄・橙・ 7.5YR8/6 浅黄・橙 (断) 10YR8/2 灰白	やや粗(3.5mmの黒色砂粒 1 個・2mmの白、黒色砂粒少量、 1mmの赤褐色砂粒少量、白・ 灰色微細粒多量含む)	良好	口縁部の み 80%	

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
275	395	5 区Ⅳ	140	土師器	壺	(12.0)	残 4.5			(内) N3/0 暗灰 (外) N3/0 暗灰 (断) 7.5YR4/3 褐	やや密(径4mmの薄茶色の 礫1個、径2mm以下の白色 の粗砂を含む)	良好	口縁～体 部 20%	
276	389	5 区Ⅳ	140	土師器	直口壺?		残 4.75		頸部径 (6.3)	(内) 5YR7/8 橙 (外) 5YR6/6 橙 (断) 5YR6/6 橙	密(径2mm以下の白色の粗 砂、雲母を含む)	良好	口縁～体 部 50%	他に 種あ り
277	389	5 区Ⅳ	140	土師器	甕	(17.8)	残 4.5			(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗(径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂、ごく少量の雲母を含む)	良好	口縁部 20%	別に 種あ り
278	389	5 区Ⅳ	140	土師器	甕	17.6	残 5.2			(内) 10YR6/2 灰黄褐・ 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) N4/ 灰	やや粗(8mm以下のチャート を僅かに含み、2mm以下 のチャート、長石を多く含む)	良	口縁部の み	他に 種あ り
279	389	5 区Ⅳ	140	土師器	甕	(18.0)	残 5.6			(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR8/4 浅黄橙 (断) 10YR8/4 浅黄橙	やや粗(径4mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白・灰 色の粗砂を多く含む)	良好	口縁～体 部 20%	他に 種あ り
280	417	5 区Ⅳ	140 取上 10	土師器	甕	(13.8)	残 4.8		頸部径(11.0)	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 5YR6/6 橙	粗(径3mm以下の白色の礫、 径2mm以下の白色の粗砂多 く含む)	良好	口縁～頸 部 40%	
281	389	5 区Ⅳ	140	土師器	甕	(17.0)	残 5.2			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗(径3mm以下の白・ 灰色の礫、径2mm以下の白・ 灰色の粗砂を多く含む(雲母 含む))	良好	口縁～頸 部 25%	種は別 にあり
282	389	5 区Ⅳ	140	土師器	甕(口縁)	18.7	残 4.2			(内) 2.5Y7/2 灰黄・2.5Y5/1 黄灰 (外) 2.5Y7/2 灰黄・N4/ 灰 (断) 5YR7/4 にぶい橙	密(1mm以下のチャート、 長石、雲母を少量含む)	良	口縁部 70%	別に 種あ り
283	424	5 区Ⅳ	140 (取上 No.17)	土師器	甕	(18.7)	残 7.1			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙・ 10YR8/2 灰白 (外) 10YR2/1 黒・7.5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR5/1 褐灰	やや密(2mm以下の長石、 チャート、雲母を含む)	良	口縁部 70%	
284	416	5 区Ⅳ	140 (取上 No.9)	土師器	小型甕	11.4	残 6.65			(内) 10YR6/2 灰黄褐・ 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR6/2 灰黄褐・ 10YR2/1 黒 (断) 10YR6/2 灰黄褐	粗(3mmの浅黄橙色砂粒1 個・2mmの白、灰色砂粒少 量、1mmの白色砂粒少量、白・ 黒色、雲母微細粒多量含む)	やや不 良	40%	
285	396	5 区Ⅳ	140	土師器	甕	(11.8)	残 6.0		頸部径(9.8)	(内) 7.5YR6/3 にぶい褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐 (断) 5YR6/6 橙	やや粗(径4mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂多く含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
286	423	5 区Ⅳ	140	土師器	甕	(16.0)	残 6.7			(内) 5YR6/6 橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 (断) 5YR6/6 橙	やや粗(径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂を多く含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
287	420	5 区Ⅳ	140 (取上 13)	土師器	甕	(20.6)	残 8.1			(内) 10YR6/1 褐灰・ 10YR5/1 褐灰 (外) 10YR5/2 灰黄褐 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗(径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の白色の 粗砂、白色の細砂を多く含む、 雲母含む)	良好	口縁～体 部 20%	木は別 にあり
288	419	5 区Ⅳ	140	土師器	鉢	11.1	8.9			(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) 2.5Y7/2 灰黄 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密(径4～6mmの白色 の礫5個、径2mm以下の白、 茶色の粗砂を含む)	良好	ほぼ完形	韓式系? 103 ①
289	389	5 区Ⅳ	140	土師器	鉢(底部)		残 4.5	底 径 (6.7)		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 2.5Y7/2 灰黄・2.5Y3/1 黒褐 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗(2mm以下の長石、 チャートを多く含む)	良	底部 50%	別に 種あ り
290	389	5 区Ⅳ	140	土師器	鉢		残 12.8	底 径 7.8	体 部 最大 径 (16.0)	(内) 10YR8/2 灰白・ 10YR3/1 黒褐 (外) 2.5YR6/3 にぶい橙・ 10YR3/1 黒褐 (断) 記入なし	粗(6mm以下の英石・2mm 以下灰色砂粒、長石、含む)	良	底部ほぼ 完形	別に 種あ り
291	389	5 区Ⅳ	140	土師器	壺	(12.8)	残 6.8			(内) 10YR5/2 灰黄褐・ 10YR3/1 黒褐 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 10YR4/1 褐灰・5YR6/4 にぶ い橙 (断) 10YR5/2 灰黄褐	やや粗(1mm以下の長石、 チャート、雲母を多く含む)	良	口縁部・ 30%	他に 種あ り
292	389	5 区Ⅳ	140	土師器	鉢	(12.6)	残 11.8		体 部 最大 径 (15.4)	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙・ 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 7.5YR5/1 褐灰・7.5YR7/4 にぶい橙・N3/ 暗灰 (断) 記入なし	やや密(2mm以下の石英、 1mm以下の長石、クサリ礫 含む)	良	口縁部 60%	別に 種あ り
293	396 ・ 389	5 区Ⅳ	140	土師器	鉢	(13.2)	4.5			(内) 10YR5/1 褐灰・7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR6/2 灰褐・ 10YR4/1 褐灰 (断) 10YR5/2 灰黄褐・ 10YR8/3 浅黄橙	粗(4.5mmの白色砂粒1個・ 2.5mmの白、灰色砂粒少量、 1.5mmの白・灰色砂粒、雲母 少量、白・黒色、雲母微細粒 多量含む)	良好	50%	
294	389	5 区Ⅳ	140	土師器	把手				最大長 7.7 最大幅 4.8	(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y7/2 灰黄 (断) 2.5Y8/2 灰白	密(径1mm以下の茶・白色 の粗砂を含む)	良好	把手のみ	別に 種あ り
295	389	5 区Ⅳ	140	韓式系 土器	鉢?				残長 7.9	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗(径3mm以下の白色 の礫、径2mm以下の粗砂多 く含む)	良好	小片	別に 種あ り

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・層位	種類	器種	法量 ○ は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
296	403	5 区Ⅳ	140 (取上 No.2)	土師器	壺		残 11.4		頸部径 7.0 体 部 最 大 径 10.9	(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 5YR6/4 にぶい橙	密(径 4mm 以下の白色の礫 数個、径 2mm 以下の白・こ げ茶の粗砂を含む)	良好	ほ ぼ 完 形、台が つく?	
297	389	5 区Ⅳ	140	漁具	土錘				最大長 8.6 最大幅 2.8 厚み 2.4	(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR8/2 灰白 (断) 10YR8/2 灰白	密(径 2mm の粗砂 1 個、径 2mm 以下の粗砂を含む)	良好	70%	
298	402	5 区Ⅳ	140	石製品	叩き石?				最大幅 6.45 最大長 6.9 厚み 3.9	記入なし		記 入 な し	記入なし	
299	413	5 区Ⅳ	140 (取上 NO.6)	土師器	甕	(19.2)	残 (26.7)		体部最大径 (23.4)	(内) 7.5YR5/2 灰 褐・ 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 7.5YR5/2 灰 褐・ 10YR3/1 黒褐 (断) 7.5YR8/1 灰 白・ 10YR7/2 にぶい黄橙	粗(4～5mm の橙色小石粒 1 個、褐色小石粒、2mm 以 下の長石、褐色砂粒、石英含 む)	良	口縁部 50% 底部 80%	
300	421	5 区Ⅳ	140 (取上 No.14)	木製品	さしぼ形 木製品				復元長 41.0 復元幅 23.0 残存厚 1.4					コウヤマ キ
301	422	5 区Ⅳ	140	土師器	高杯	(12.8)	残 3.4			(内) 7.5YR5/4 にぶい褐 (外) 7.5YR5/3 にぶい褐 (断) 2.5YR6/6 橙	やや粗(径 2mm 以下の白色 の粗砂、白色の細砂を多く含 む)	良好	20%	
302	396	5 区Ⅳ	140	土師器	高环	(13.4)	残 5.4			(内) 5YR7/6 橙 (外) 5YR6/6 橙 (断) 5YR7/6 橙	やや粗(径 3mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白色の 粗砂を含む)	良好	杯部 60%	
303	395	5 区Ⅳ	140	土師器	高环	(25.2)	残 8.4			(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙・ 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	密(径 1mm 以下の白色の粗 砂を多く含む)	良好	杯部 20%	
304	396	5 区Ⅳ	140	須恵器	环蓋	(13.2)	4.1			(内) N7/0 灰 (外) N6/0 灰 (断) N6/0 灰	密(径 2mm 以下の白色の粗 砂を含む)	硬質	35%	
305	411	5 区Ⅳ	140 (取上 NO.4)	須恵器	环蓋	13.0	4.45			(内) N7/0 灰白 (外) N7/0 灰白・N5/0 灰(自 然釉) (断) N7/0 灰白	密(径 2mm 以下の白色の粗 砂を含む)	硬質	ほぼ完形	
306	396	5 区Ⅳ	140	須恵器	环蓋	(11.4)	残 3.6			(内) N6/0 灰 (外) N6/0 灰 (断) N6/0 灰	密(白色の細砂を含む)	硬質	口縁～天 井部 20%	
307	389	5 区Ⅳ	140	須恵器	高环	(11.0)	残 4.1		立ち上がり高 1.8 受部径(13.4)	(内) N6/0 灰 (外) N6/0 灰・N5/0 灰 (断) N6/0 灰	密(径 1mm 以下の白色の粗 砂、白色の細砂を含む)	硬質	口縁～底 部 20%	別に種あ り
308	402	5 区Ⅳ	140	須恵器	高环	10.3	9.0	底 径 9.3	基部径 4.9	(内) N7/0 灰白 (外) N5/0 灰・10Y5/1 灰 (断) N6/0 灰	精良(径 2mm 以下の濃い灰 色の粗砂、白色の細砂を含む)	硬質	60%	
309	396	5 区Ⅳ	140	須恵器	高环		残 5.5	底 径 9.4	脚部高 4.8	(内) N7/0 灰白 (外) 5YR6/1 褐 灰・5YR5/1 褐灰 (断) 5YR6/1 褐灰	硬質(径 2mm 以下の白色の 粗砂を含む)	良好	脚部 50%	
310	389・ 422・ 396	5 区Ⅳ	140	須恵器	甕	17.9	27.5			(内) 10R6/2 灰赤・N5/ 灰 (外) 10R6/3 にぶい赤橙・ N5/ 灰 (断) 2.5Y6/3 にぶい橙	やや粗(5mm の白色砂粒 1 個・2.5mm の白色砂粒少量、 1mm の白色砂粒少量・白色 微細粒多量含む)	良好	60%	
311	388	5 区Ⅳ	139	須恵器	高环	12.4	残 8.4		立ち上がり高 2.2 受部径 14.8 基部径 5.2	(内) 7.5Y4/1 灰(自然釉)・ N7/0 灰白 (外) N5/0 灰(自然釉) (断) N7/0 灰白	密(径 2mm 以下の白色の粗 砂を数個含む)	硬質	杯部 70%	
312	401	5 区 Ⅰ・Ⅱ	146 (2 層)	土師器	杯	(推)	残 3.8 14.4			(内) 10YR7/4 にぶい黄橙(外) 10YR7/4 にぶい黄褐(断) 7.5YR5/4 にぶい褐	粗(径 1mm の茶色の粗砂 1 個・白色の細砂、雲母を含む)	良好	20%	
313	400	5 区Ⅱ	146 (第 1 遺構面)	須恵器	环 B	(13.8)	4.15	高台径 (8.8)	高台高 0.7	(内) 7.5Y7/1 灰白 (外) 5Y6/1 灰 (断) 5Y7/1 灰白	密(径 1mm 以下の白・灰色 の粗砂、雲母を含む)	軟質	口縁～底 部 20%	
314	401	5 区 Ⅰ・Ⅱ	146 (2 層)	土師器	环	(21.8)	残 5.5			(内) 7.5YR7/3 にぶい橙 (外) 10YR8/3 浅 黄 橙・ 5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR7/3 にぶい橙	密(径 3mm の白色の礫 1 個)	良好	20%	
315	401	5 区 Ⅰ・Ⅱ	146 (2 層)	土師器	鈐付羽釜	(26.4)	残 8.3		鈐径 (30.0)	(内) 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR5/3 にぶい黄褐・ 10YR4/1 褐灰 (断) 10YR5/2 灰黄褐	やや密、(径 5mm 以下の白色 の礫、径 2mm 以下の白色の 粗砂・雲母を含む、角閃石含 む)	良好	口縁～鈐 部 30%	
316	385	5 区Ⅱ	灰褐色質土 (第 1 検出面 下)	土師器	甕	(12.8)	残 4.4			(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR8/3 浅黄橙 (断) 10YR6/1 褐 灰・ 10YR8/3 浅黄橙・5YR5/6 明 赤褐	密(径 2mm 以下の白色の粗 砂を含む)	良好	口縁～頸 部 25%	ツボ掘り、 攪乱遺物 混入
317	352	5 区Ⅳ	灰褐色層 (第 1 遺構面)	土師器	环	(11.0)	残 5.3			(内) 10YR6/3 にぶい黄橙・ 5YR6/6 橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙・ 5YR6/6 橙 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	密(白色の細砂を含む)	良好	25%	掘削中

掲載 No.	登録 No.	地区名	遺構 ・ 層位	種類	器種	法量 O は復元値 cm				色調	胎土	焼成	残存率	備考
						口径	器高	底・ 高台径	その他					
318	352	5 区IV	灰褐色層 (第 1 遺構面)	土師器	高坏		残 6.4	底 径 (9.2)		(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 5YR7/4 にぶい橙 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	密 (径 3mm の白色の礫、径 2mm 以下の白色の粗砂を含 む)	良好	脚部 60%	掘削中
319	349	5 区IV	側溝中検出	土師器	鉢	9.4	残 9.6			(内) 5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 (径 2mm 以下の白色 の粗砂を多く含む)	良好	ほぼ完形	103 ㊦
320	355	5 区IV	灰褐色層 (第 1 遺構面)	須恵器	高坏 (蓋)	12.0	残 4.35		つまみ径 2.4 つまみ高 残 0.35	(内) N6/0 灰 (外) N6/0 灰 (断) N5/0 灰	密 (径 4mm 以下の白色の礫 数個、径 2mm 以下の白色の 粗砂を含む)	硬質	ほぼ完形	つまみ上 部も欠損、 写真あり
321	352	5 区IV	灰褐色層 (第 1 遺構面)	須恵器	坏蓋	(11.7)	残 4.1			(内) N7/0 灰白 (外) N7/0 灰白 (断) N7/0 灰白	密 (径 2mm 以下の礫含む)	硬質	口縁～天 井部 20%	掘削中
322	380	5 区II		土師器	杯	(15.0)	残 4.1			(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 5YR5/6 明赤褐	密 (径 0.5mm 以下の白・茶 色の粗砂、白色の細砂を含む)	良好	35%	
323	394	5 区I	灰色砂質土 (鉄分多く混じ る)	土師器	不明		残 1.6	高台径 (14.0)	高台高 1.1	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙 (断) 7.5YR6/6 橙	密	記入な し	小片 (高台部)	近世 or 中 世耕作土
324	347	6 区IV	131	土師器	羽釜	(25.6)	残 6.5			(内) 7.5YR5/4 にぶい褐 (外) 7.5YR5/4 にぶい褐 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	粗 (5mm 以下、長石、1mm 以下の角閃石、雲母、含む)	良	口縁部 10%以下	
325	347	6 区IV	131	土師器	羽釜 (口縁部)	(25.0)	残 3.6			(内) 7.5YR5/3 にぶい褐 (外) 7.5YR5/4 にぶい褐 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	粗 (3mm 以下、長石、2mm 砂粒、角閃石、雲母、含む)	良	10%以下	
326	347	6 区IV	131	土師器	羽釜 (鐏部)		残 3.1		鐏部径 (27.4)	(内) 7.5YR5/3 にぶい褐 (外) 7.5YR5/4 にぶい褐 (断) 7.5YR5/4 にぶい褐	粗 (3mm 以下、長石、角閃石、 雲母、含む)	良	10%以下	
327	346	6 区IV	第 1 面精査	須恵器	坏身	(9.6)	残 3.3		受部径 (11.6) 立ち上がり高 1.9	(内) N6/ 灰 (外) N6/ 灰 (断) 5P5/1 紫灰	密 (径 1mm の白色の粗砂・ 白色の細砂含む)	良	口縁部～ 受部 15%	
328	325	6 区I 側溝中		土師器	甕	(19.0)	残 5.1		頸部径 (15.8)	(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR5/2 灰黄褐 (断) 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 (径 2mm 以下の白色 の粗砂・雲母を含む)	良好	口縁～頸 部 20%	
329	274	3 区III	110	平瓦					残存長 27.4 残存幅 13.5 残存高 6.0	(内) N6/ 灰 (外) N6/ 灰 (断) N7/ 灰白	粗 (径 5mm 以下の長石、 灰色砂粒含む)	良	60%	
330	428	5 区IV	140	須恵器	甕				残存長 10.2 残存幅 9.4	(内) N6/ 灰 (外) N6/ 灰 (断) 5R5/1/ 赤灰	密 (径 1mm 以下の白色の細 砂含む)	良	体部のみ	

版 圖



井戸110（北から）



3区舷側板出土状況（北西から）



2区北壁土層断面（南西から）



3区北壁土層断面（南東から）



4区北壁土層断面（西から）



5区東壁土層断面（南西から）





1区南壁土層断面（北西から）



6区東壁土層断面（南西から）



1区全景（西から）



2区全景（西から）



3区全景（北西から）



4区全景（北西から）



4区下層全景（南東から）



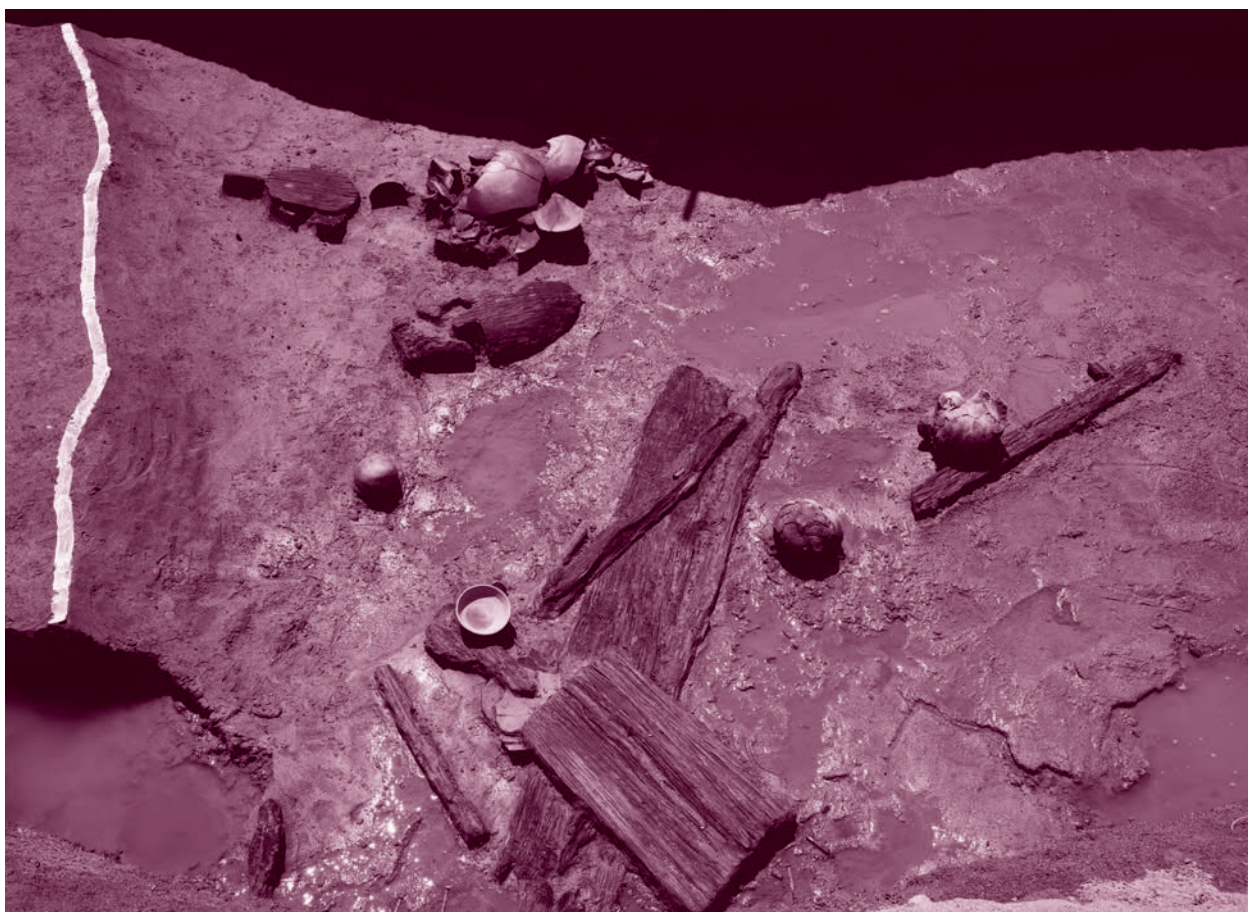
6区全景（南から）



5区ピット出土状況（南から）



土坑 101 (北東から)



溝 140 遺物出土状況 (東から)

土坑023(南から)



土坑019(南から)

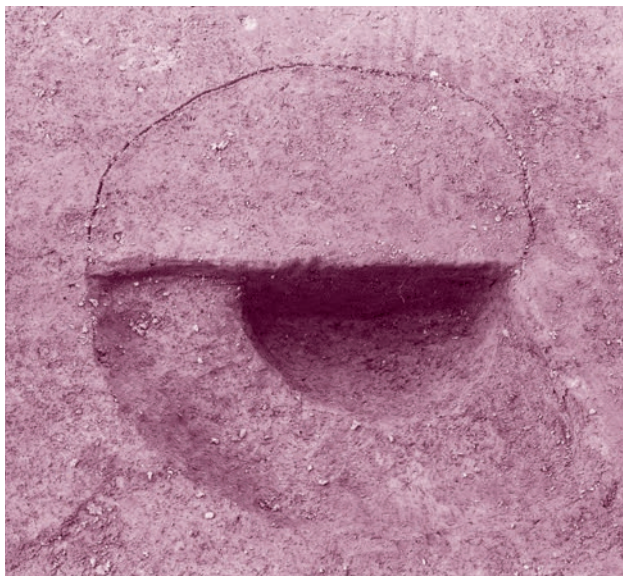


土坑064(東から)

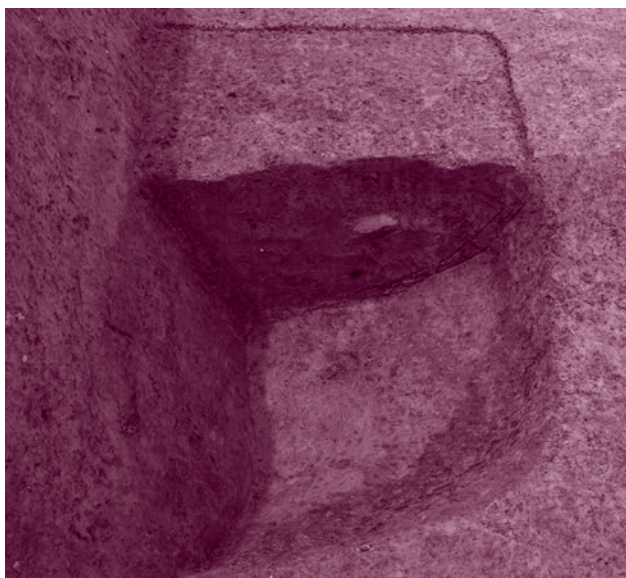




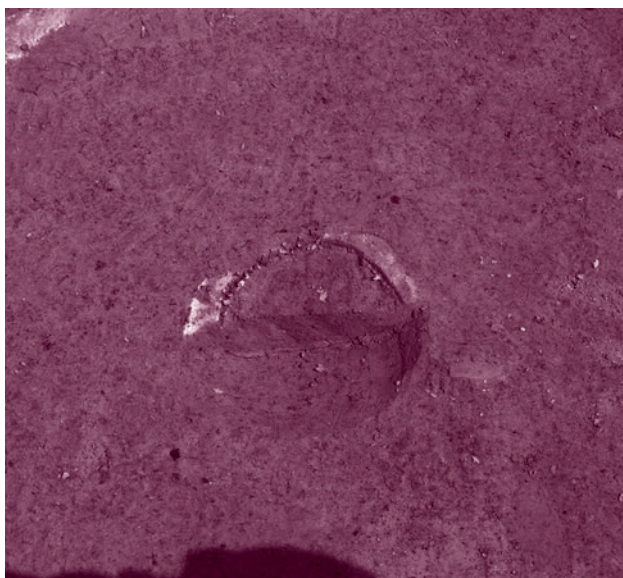
土坑 059 (東から)



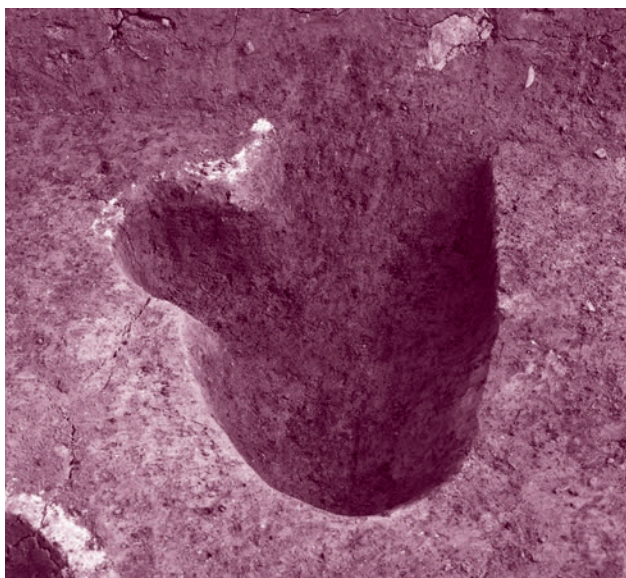
土坑 056 (南から)



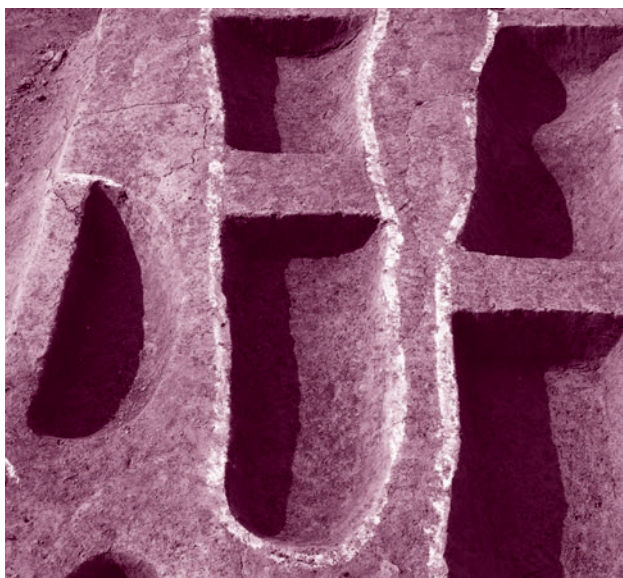
ピット 060 (東から)



ピット 068 (南から)



ピット 080 (北から)

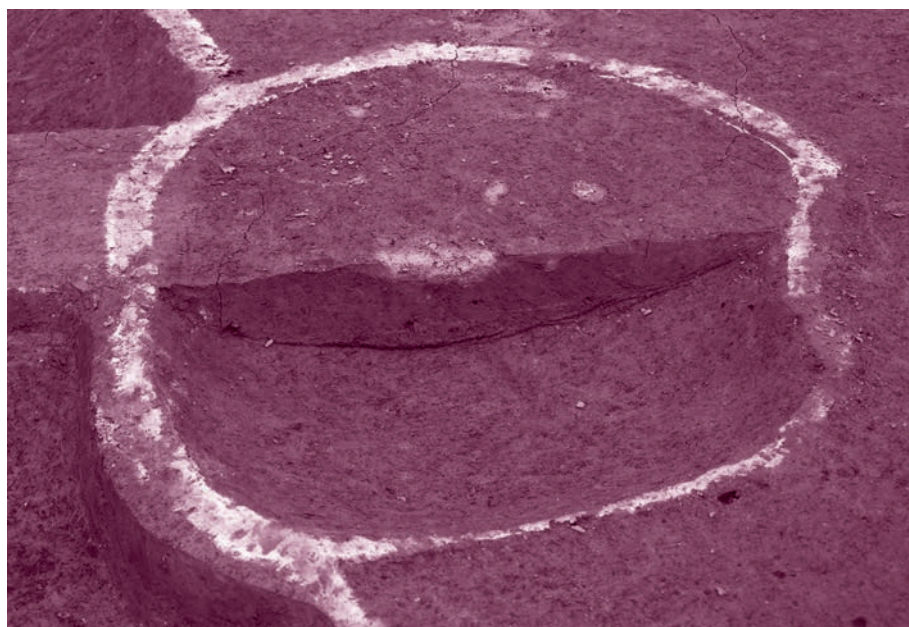


溝 081 (南から)

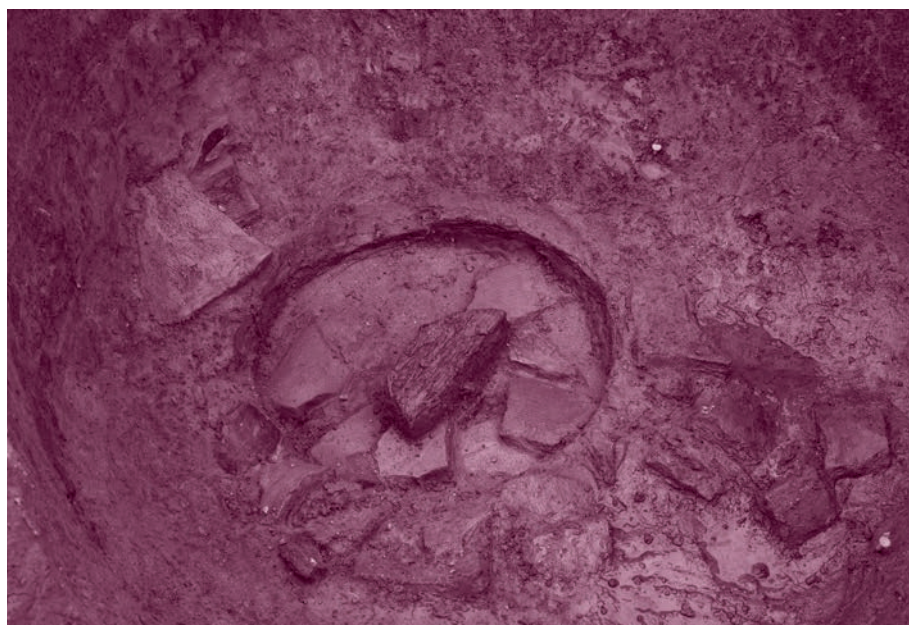
井戸 116 (西から)

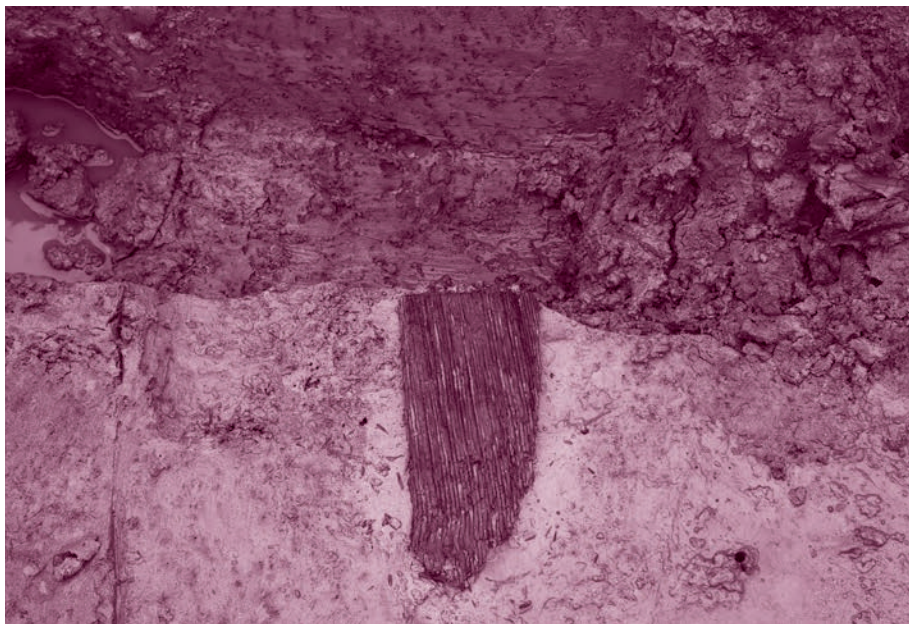


ピット 069 (西から)



井戸 110 曲物検出状況
(北から)





3区Ⅳ地区板材出土状況
(南から)

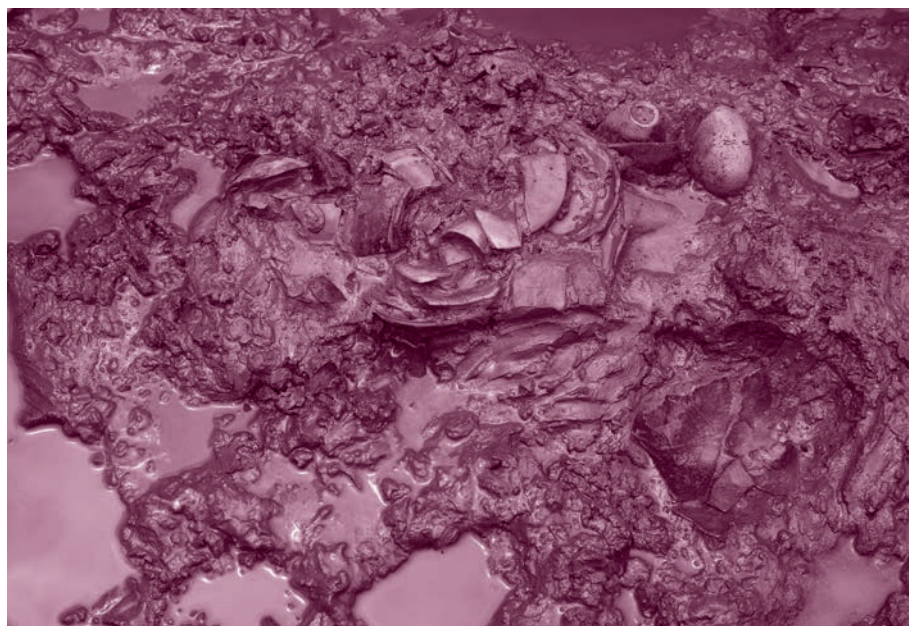


3区Ⅴ地区土器出土状況
(南から)



井戸 103 (北から)

4区Ⅰ地区土器出土状況
(北から)

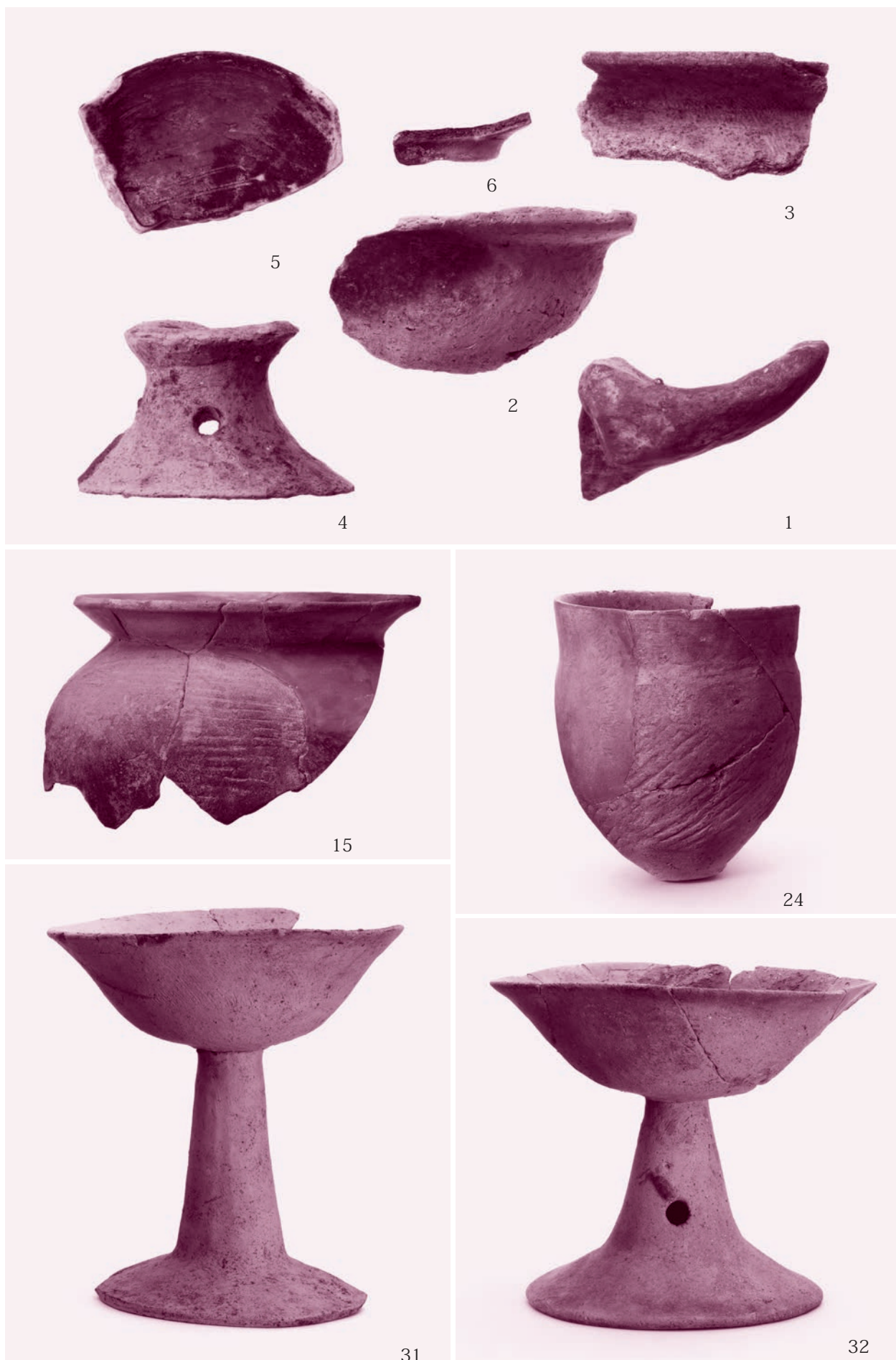


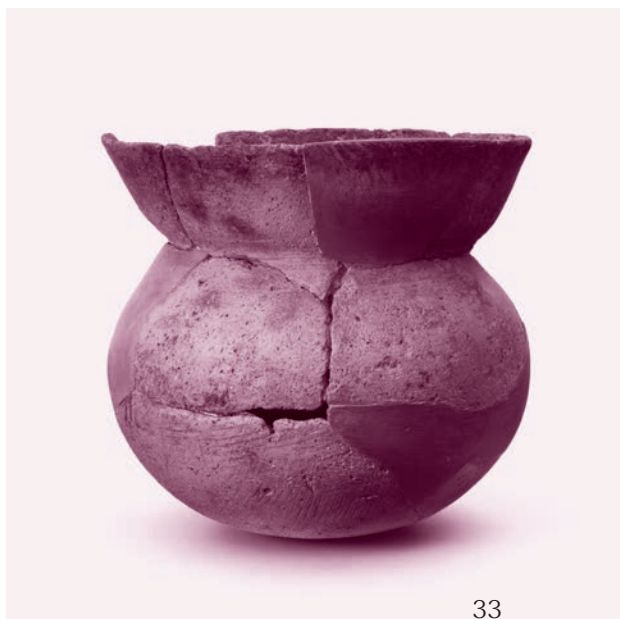
土坑 146 (南東から)

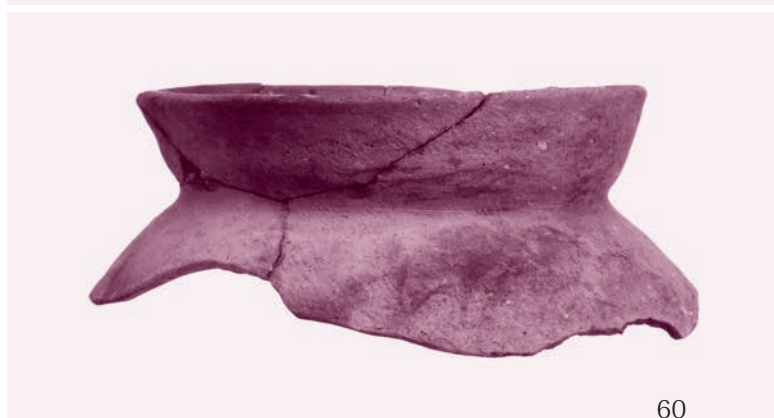
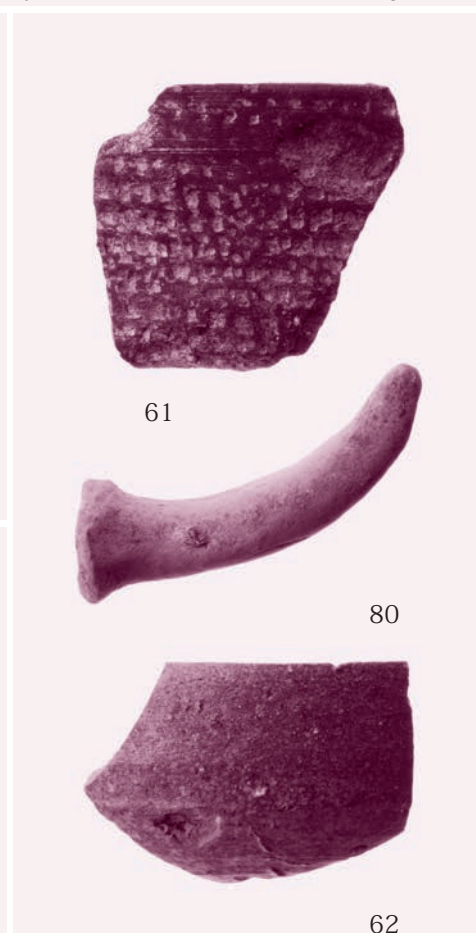
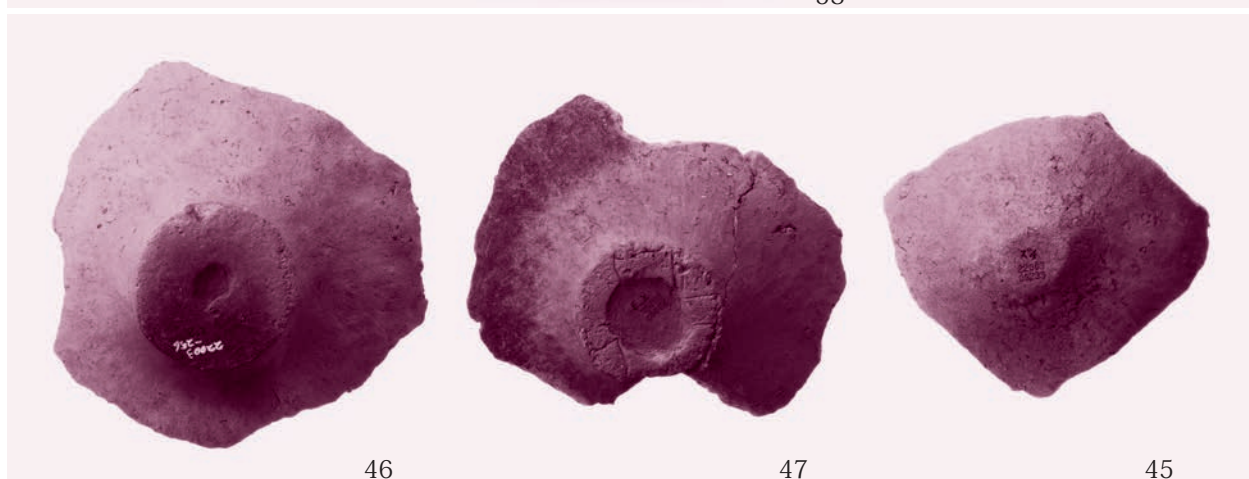


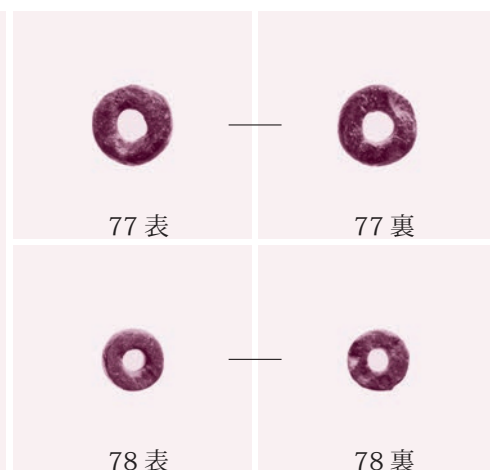
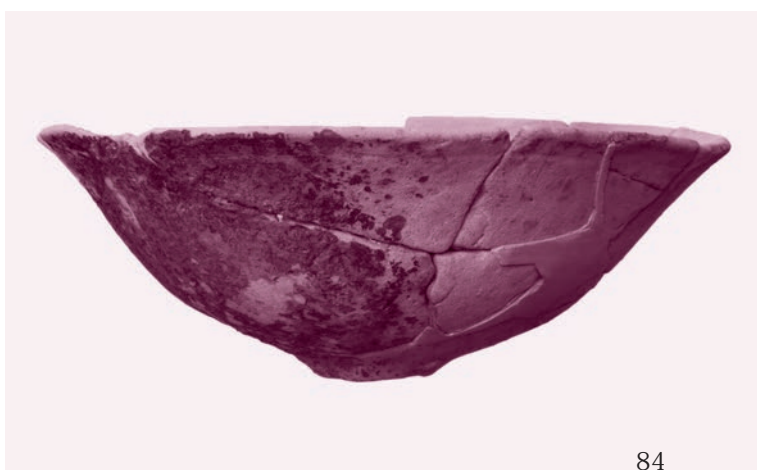
溝 140 (北から)









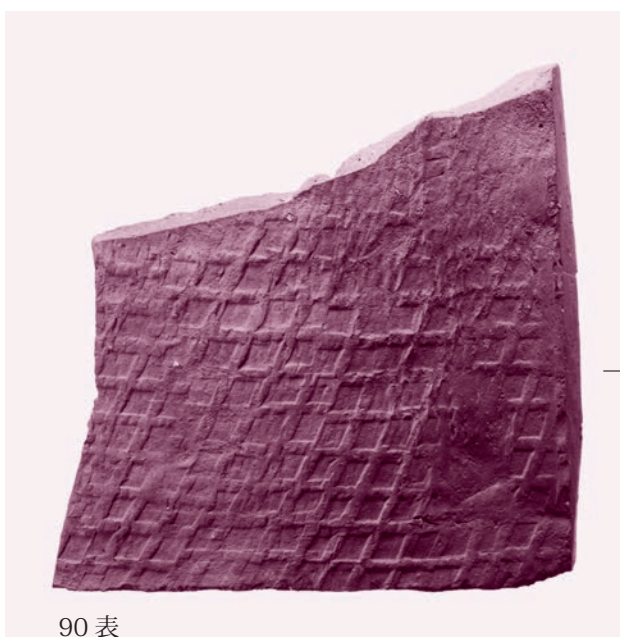




89 表



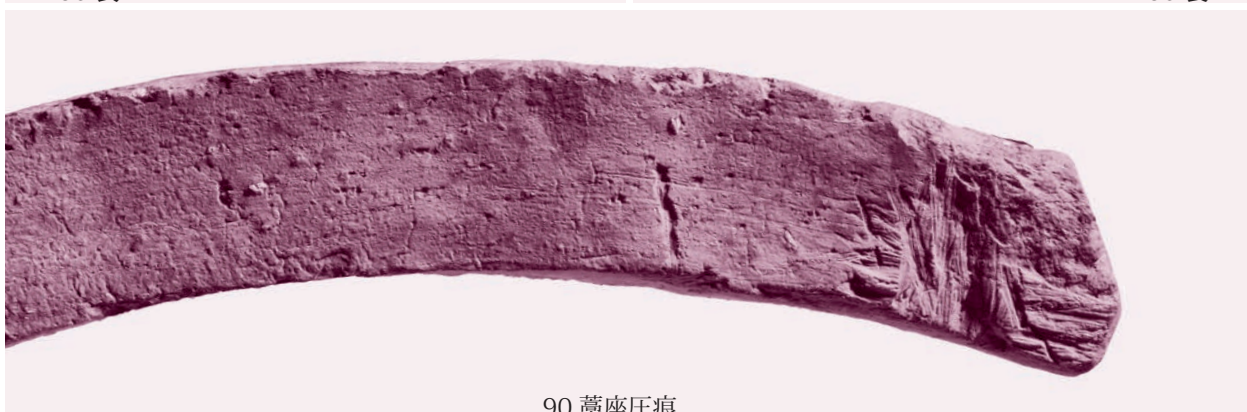
89 文字



90 表

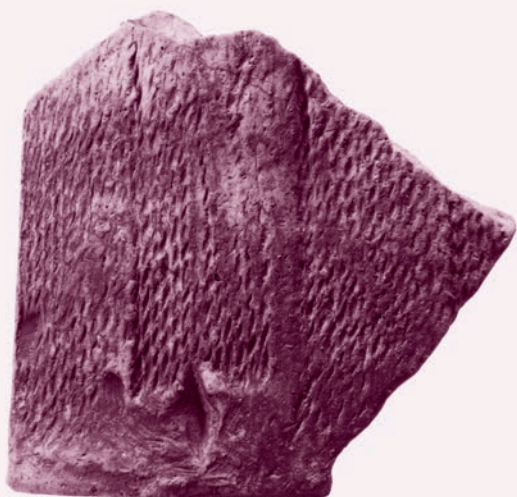


90 裏

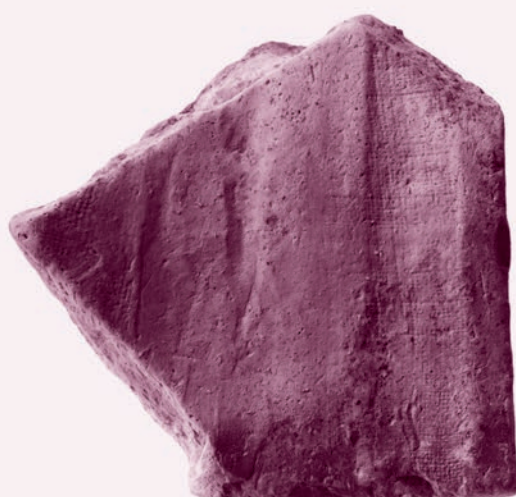


90 葎座圧痕

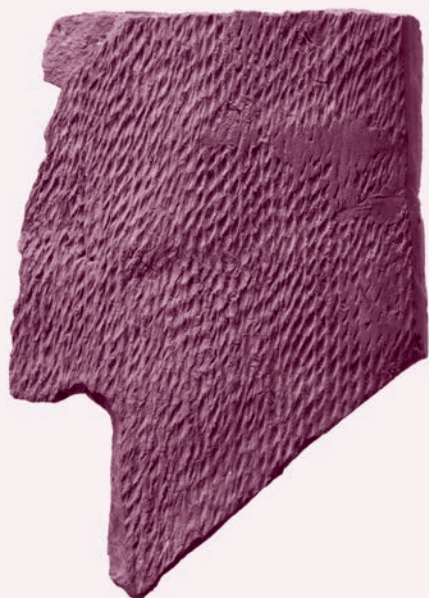




95 表



95 裏



94 表



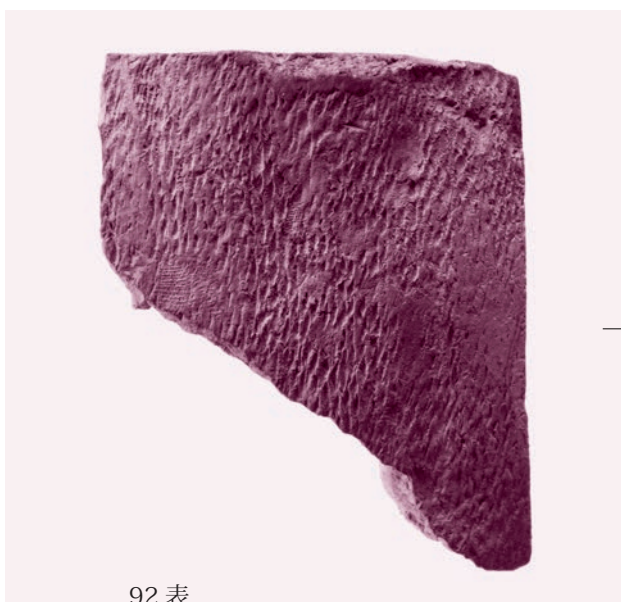
94 裏



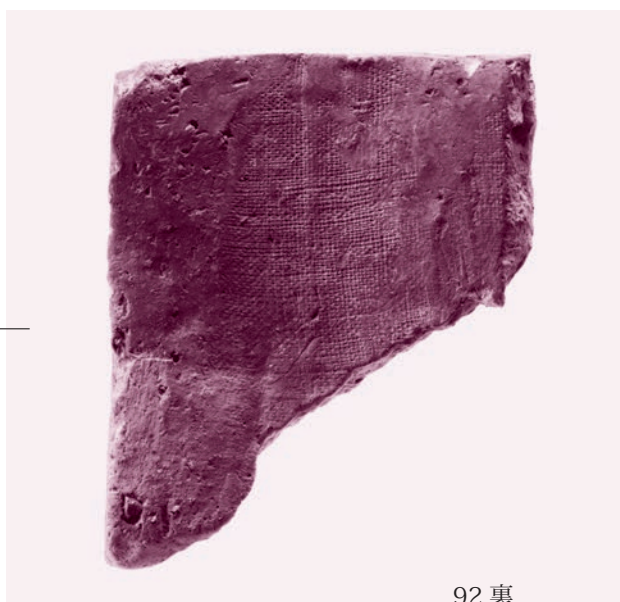
93 表



93 裏



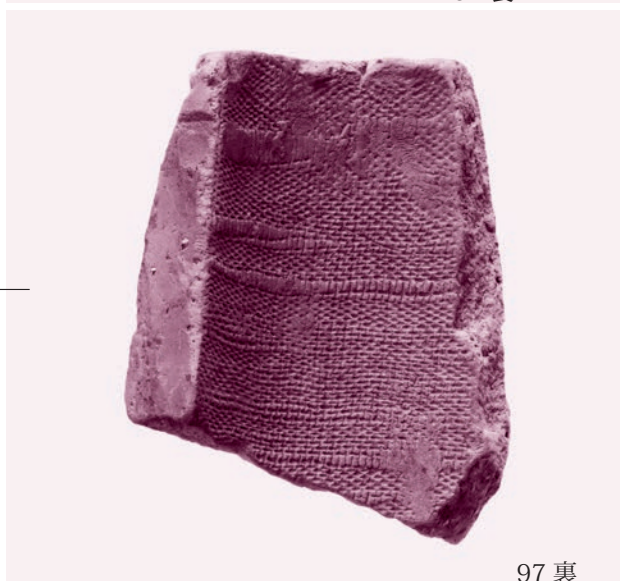
92 表



92 裏



97 表



97 裏



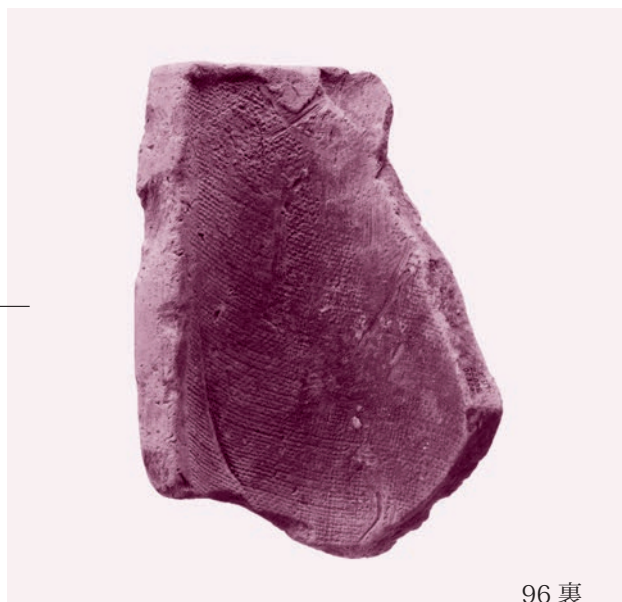
98 表



98 裏



96 表



96 裏



99



100



101



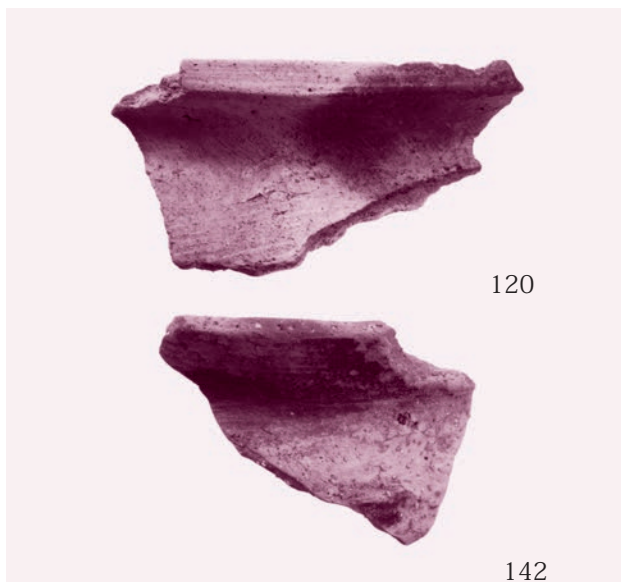
102



112

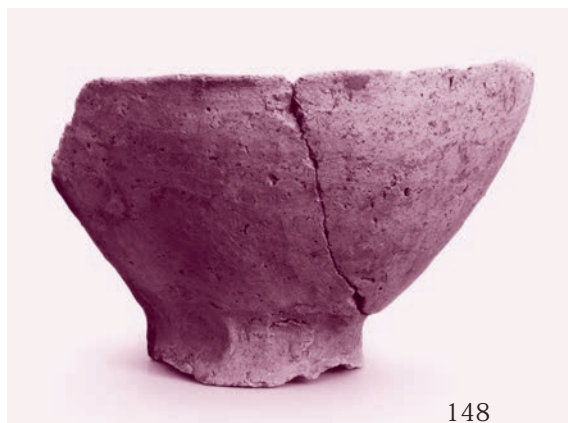


110

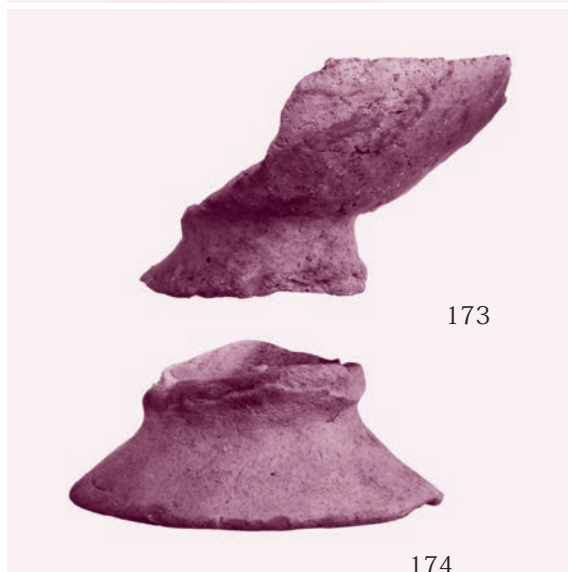




128



148



173

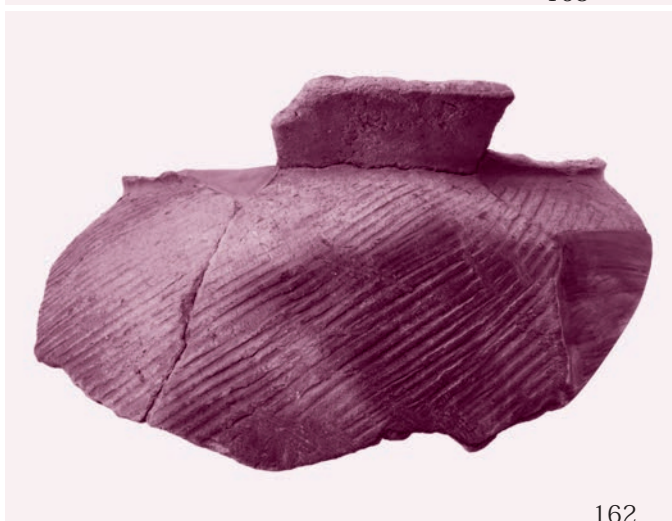
174



163



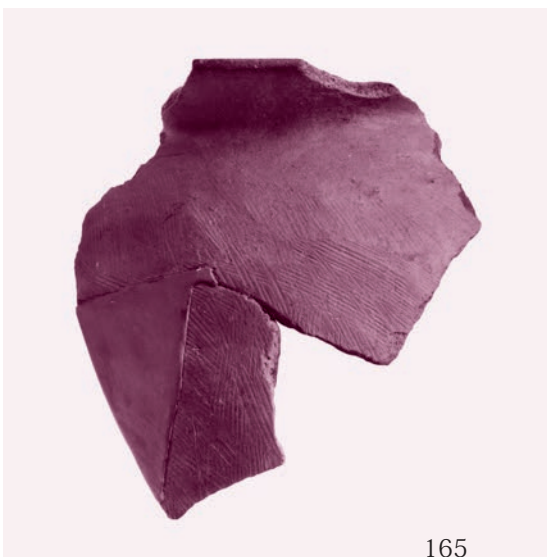
153



162



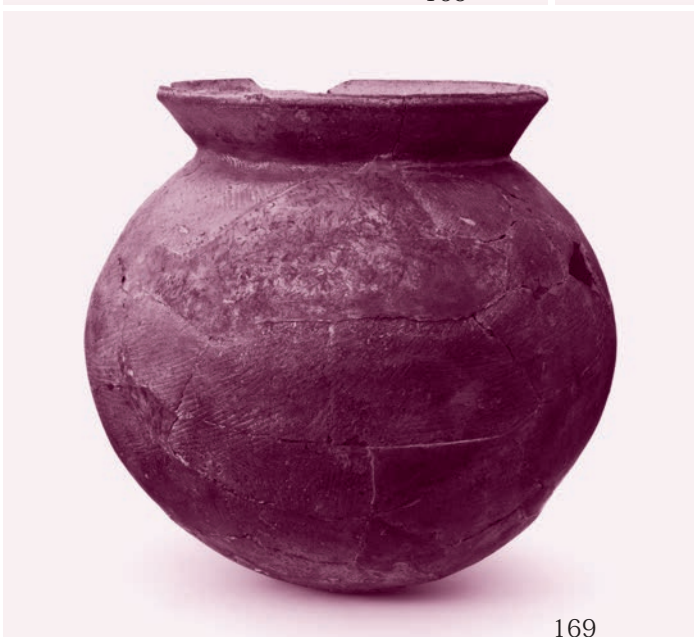
168



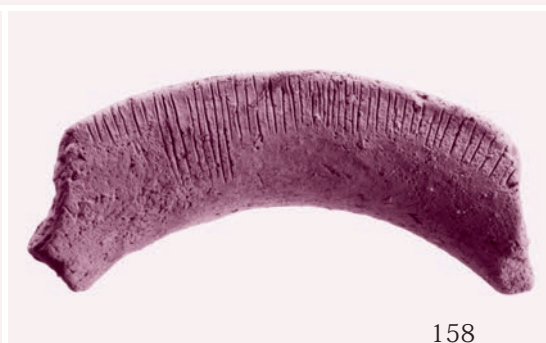
165



190



169



158



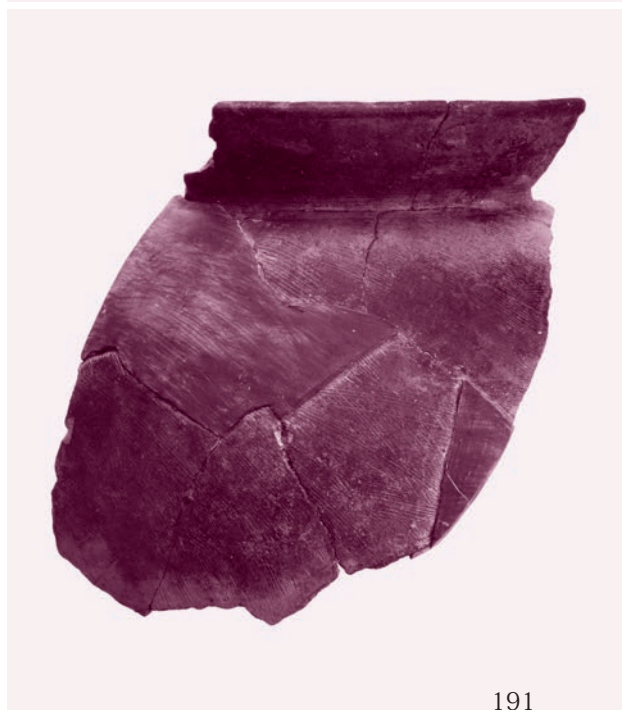
184



185



175





199



201



202



220



220 使用面



217

212

219

216

215



221 表



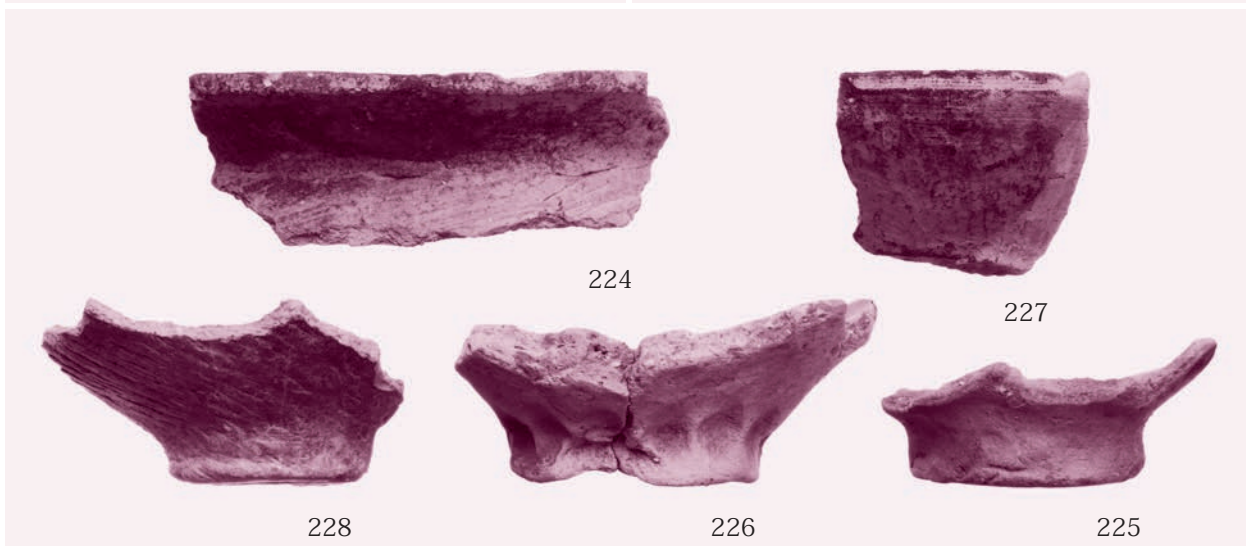
221 裏



221 ほぞ穴1 樹皮出土状況復元



221 ほぞ穴2





242



243



244



247



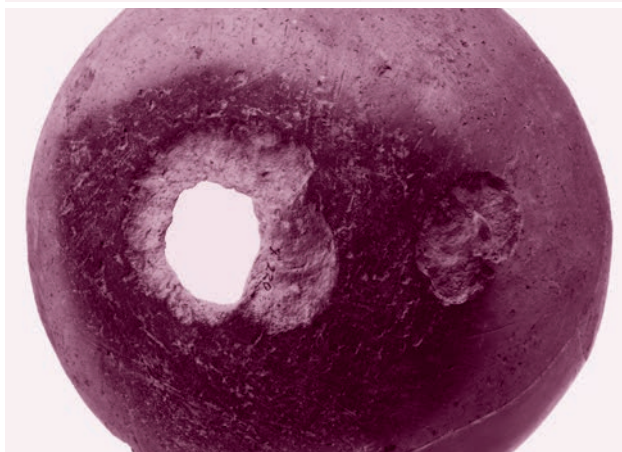
248



249



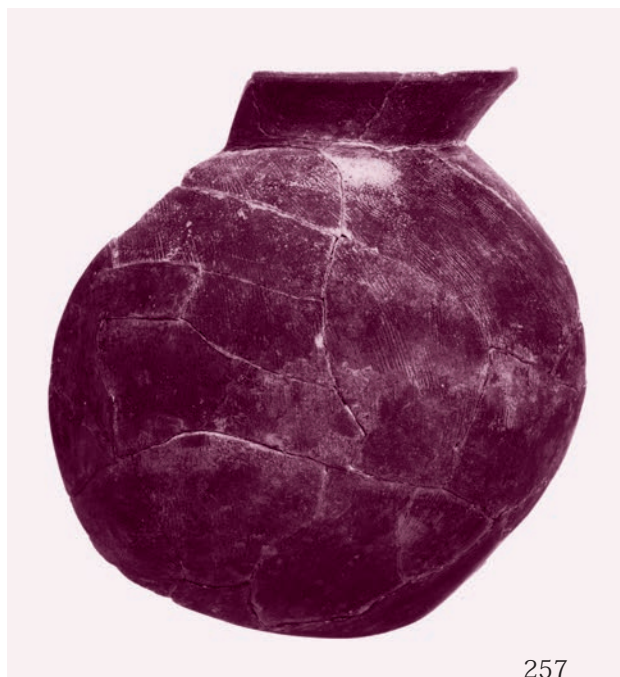
251



249 穿孔部



273



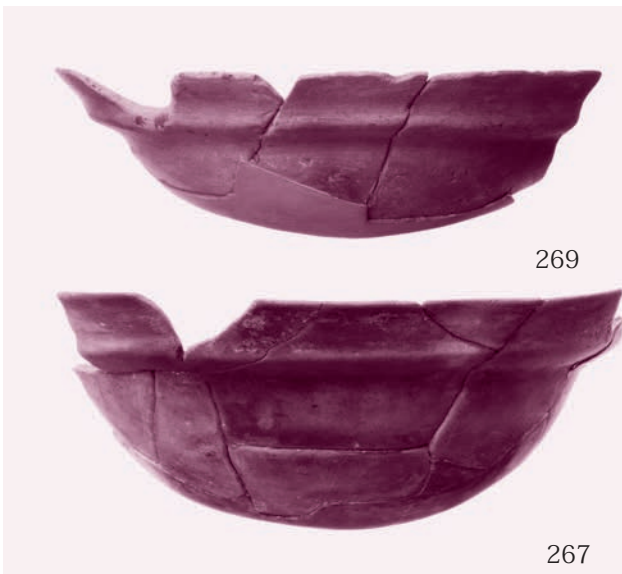
257



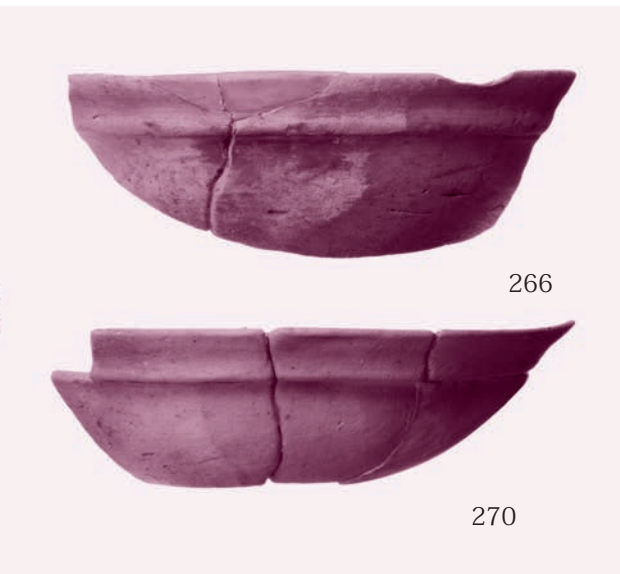
260



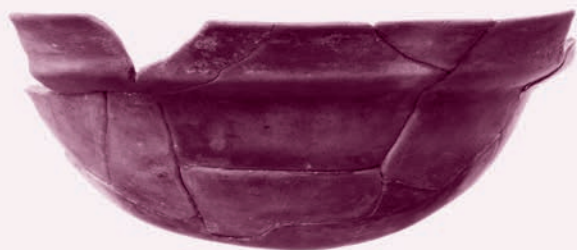
259



269



266



267



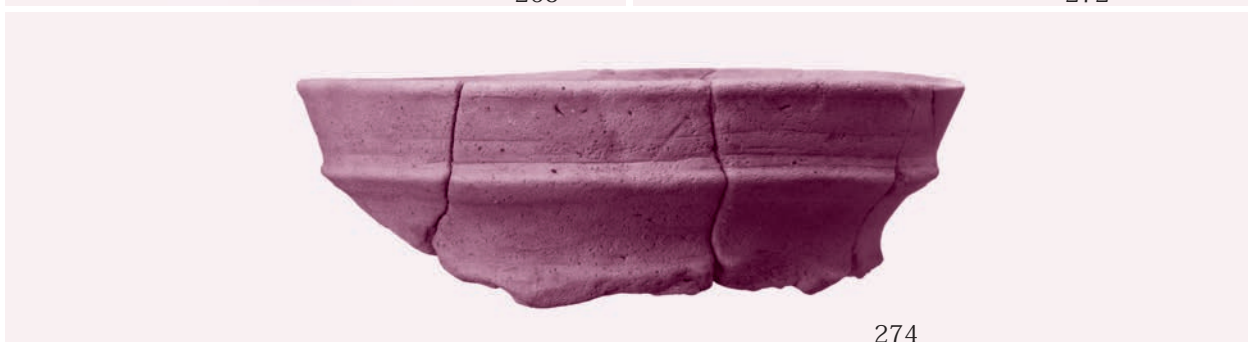
270



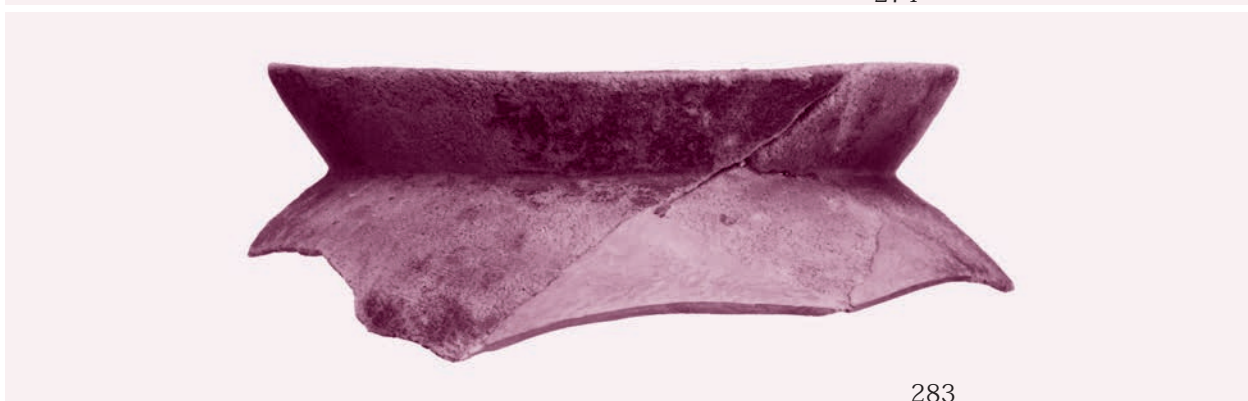
265



272



274



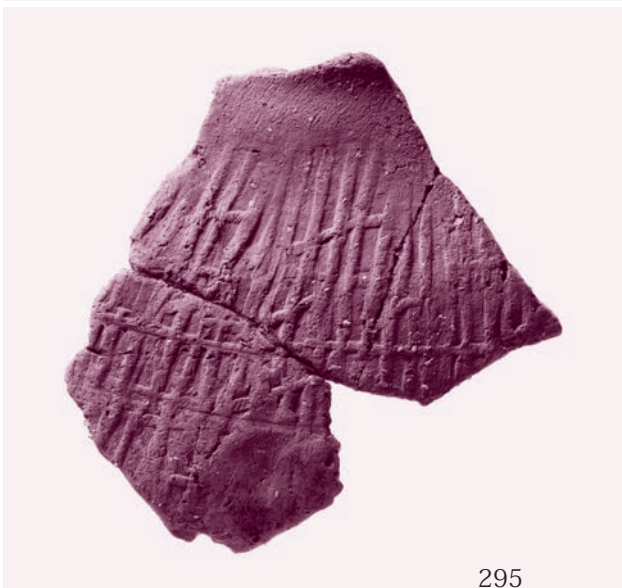
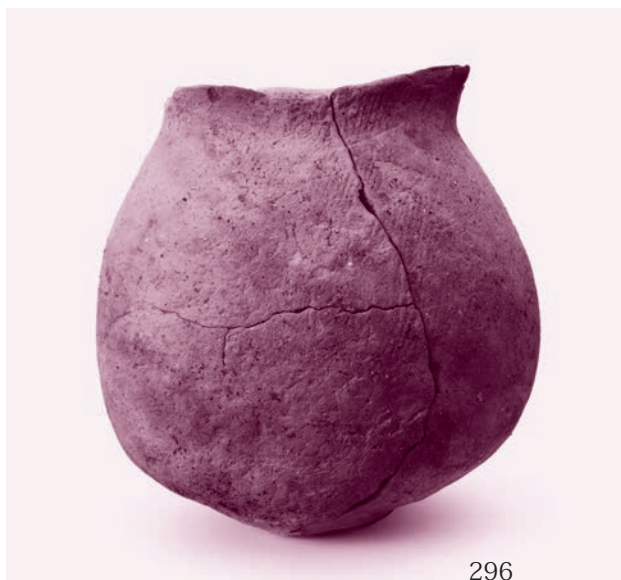
283



293

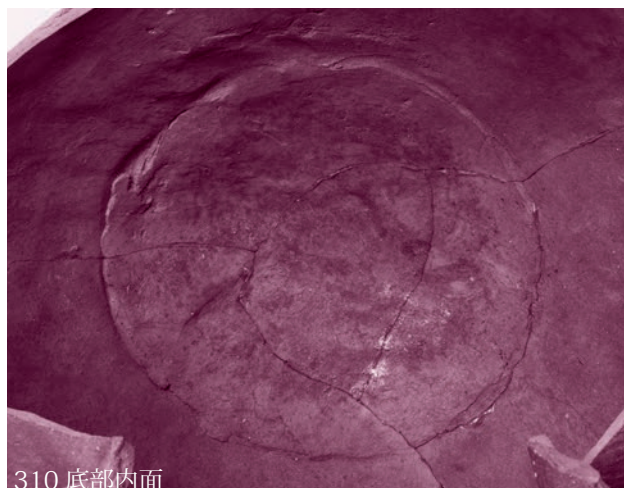


292

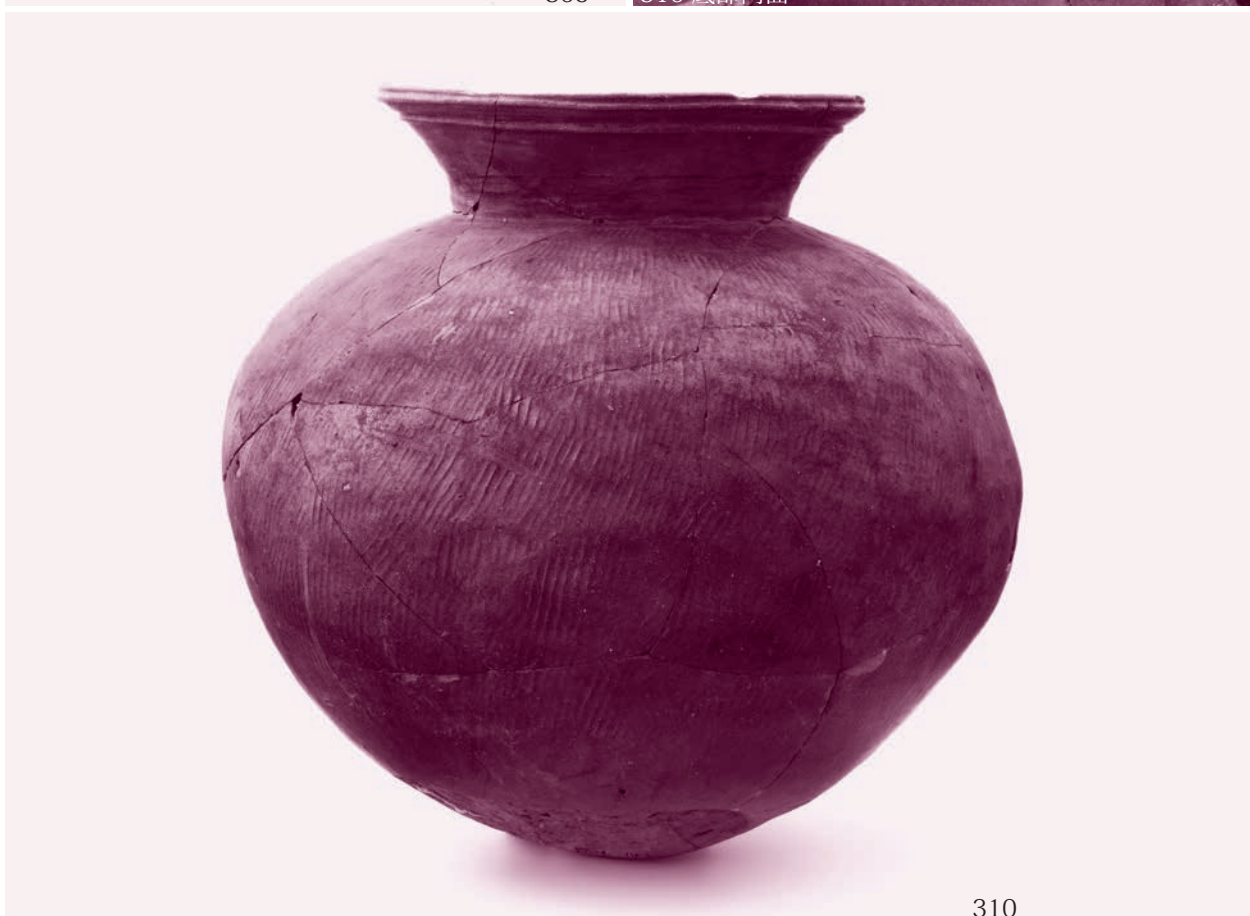




305



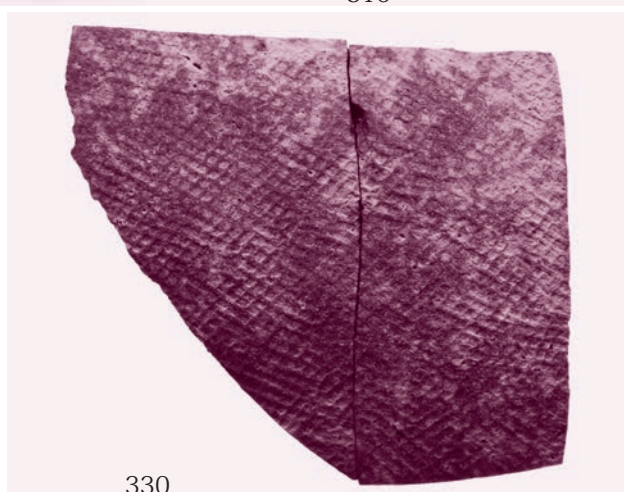
310 底部内面



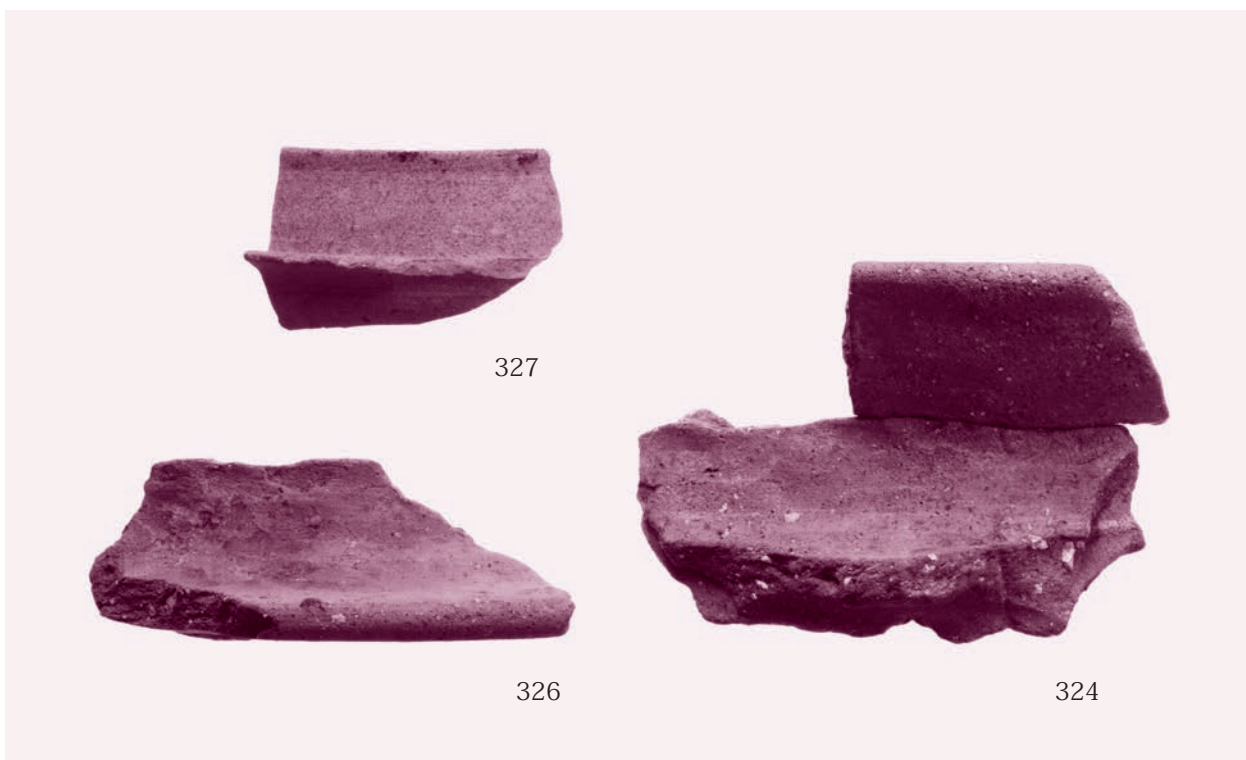
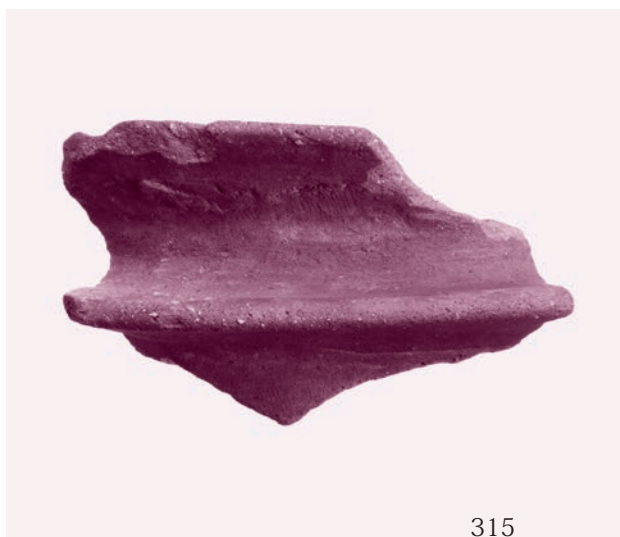
310



311



330



報告書抄録

ふりがな	きゅうほうじいせき さん							
書名	久宝寺遺跡Ⅲ							
副書名	久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2024― 1							
編著者名	大澤 嶺							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒 540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2025 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡 番号					
久宝寺遺跡	大阪府 八尾市 西久宝寺	27212	23	34° 62′ 82″	135° 58′ 25″	20220401 ～ 20220630	760	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
久宝寺遺跡	集落跡など	古墳時代 奈良時代	ピット、土坑、井戸 井戸		庄内式土器、 布留式土器、 須恵器、土 師器、瓦、 木製品等	古墳時代前期の砂層から準構造船の舷側板が出土。 井戸枠に転用された古代の瓦に「神亀五年」と記された文字瓦が含まれる。		
要約	調査区全体で古墳時代前期から中世までの遺構を検出した。主な遺構は古墳時代中期から後期にかけてのピット、土坑、溝である。 3区で検出した古代の井戸 110 には瓦が井戸枠として転用されており、「神亀五年」と記された平瓦が出土した。 5区で検出した溝 140 からは古墳時代中期の土師器、須恵器のほか、さしば形の木製品が出土した。 また古墳時代前期の包含層からは舷側板が出土しているほか、下層からは古墳時代初頭の土器が大量に出土している。							

大阪府埋蔵文化財調査報告 2024 - 1

久宝寺遺跡

－久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査－

発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和7年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号